高松市埋蔵文化財調査報告第37集

讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ

第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書

平成11年3月

高松市教育委員会

『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』正誤表

頁	行	誤	正
4	29	の子字で	の小字で
8	24	笶原	笶原
30	28	水滴テ	水溜テ
30	29	曳用道路	現用道路
30	30	③ＷⅠ・Ⅱ区，④ＥⅠ・Ⅱ区	③ＷⅠ・Ⅱ区，④ＥⅠ・Ⅱ区
33	27	（牧田郷）	（坂田郷）
33	31	市城の東隣	市域の東隣
36	19	観輿寺（牧田	観興寺（坂田
36	20	（牧田郷）	（坂田郷）
38	4	祭良時代	奈良時代
39	19	の北岸に	の南岸に
43	15	比定地の東辺	比定地の西辺
43	27	順導絵図	順道絵図
70	10	掘り込み意外	掘り込み以外
87	8	依存した	遺存した
87	36	4は土師質	5は土師質
88	1	5は白磁碗	4は白磁碗
89	15	後円端部	口縁端部
91		91頁本文は，92頁の最終行（3は…）の前へ移動。	
92		92頁本文は，最終行（3は…）のみを残して，91頁へ移動。	
93	16	背部及び…。53の脚端部	杯部及び…。3の脚端部
97	13	うち4点を	うち6点を
99	36	方向を点ずる	方向を転ずる
103	上端	表題脱落	（4）F調査区
103	2	最終以降面	最終遺構面
121	5	第8層黄褐色シルト質細砂層	第8層黄灰色シルト質極細砂層
121	6	第11層にぶい黄褐色	第11層にぶい黄色
121	17	第3層黄灰色シルト質	第3層灰黄色シルト質
124		分層№の位置ずれと土層注記漏れ	裏面のとおり
130	28	砂岩砂は	砂岩礫は
191	13	適宜搭載	適宜登載
191	15	搭載して	登載して
224	第90図注	木田町木太村	木田郡木太村
224	第90図注	池が台地	池が池台池
234	1	直米丗一石	直米册一石
237	第95図注	（1000分の1）	（10000分の1）
260	第34表	正保2年の合計 1273	正保2年の合計 1327
260	第34表	貞享3年の山田郡 147	貞享3年の山田郡 179
260	第34表	貞享3年の仲郡 96	貞享3年の仲郡 90
260	22	高松蒲は	高松藩は
295	15～16	年代半ばにの	年代半ばの
336	第126図	免場の大まかな位置	免場の大まかな境
348	10～11	明らかできる。	明らかにできる。
348	37	そのた「定	そのため「比定
349	1	比較，的都市化	比較的，都市化
356	12～13	「高野」が川島町	「高野」が川島本町
377	11	(1992)『香川県	(1998)『香川県
404	5	班拾したる	班給したる
415	21	九十一〇世紀	九－一〇世紀

高松市埋蔵文化財調査報告第37集

讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ

第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書

平成11年3月

高松市教育委員会

はじめに

日々，新聞等を賑わす考古学の新発見にはあいもかわらずめざましいものがございます。中でも最近では奈良県の吉備池廃寺，飛鳥池遺跡の発見などによって，飛鳥時代の仏教文化や律令国家の整備に関する定説が次々に覆っておるやに聞いております。

さて，本書に名を冠する「弘福寺」も天智朝から奈良時代にかけて興隆をきわめた大和屈指の官大寺でございます。「弘福寺領讃岐国山田郡田図」は，この弘福寺が讃岐の国に領有した荘園の様子を描いた絵図で，わが国最古のものとして重要文化財の指定も受けている貴重なものでございます。そして，本事業はこの田図の故地が高松市木太町，林町付近に推定されていることから，この比定地の調査を通して当時の都と讃岐の政治，経済，文化の交流を考えてまいろうとしたものでございます。

飛鳥白鳳時代の官寺の領地が高松のような地方に所在していたと聞かされますと，意外な感がございますが，中国朝鮮半島はもとより，国内の津々浦々から有用な技術，習俗，物産を集めてそれらを全て稼働することによって国家としての成長を遂げてきたというのがいわゆる大和朝廷と呼ばれる政府の実際のところであったようでございます。また，このたびの一連の調査の中で確認されました古代南海道にいたしましても，そうした国家戦略を押し進める舞台装置のひとつになるもので，弘福寺領調査事業の大きな成果の一つでございます。これまで，いわゆる教科書や小説の中のこととしてのみ理解してきた飛鳥白鳳・奈良といった古代文化の空気は，私どもの郷土にも分け隔てなく流れ来ていたわけで，高松もこうした大きな歴史の波の中で現在に至っていることが実感できた次第でございます。

最後になりましたが，調査にあたりご指導ご助言をいただいた文化庁ならびに香川県教育委員会，弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会委員各位，発掘調査土地所有者ほか関係資料等をご提供いただいた方々，発掘調査に従事いただいた作業員等多くの関係者に厚く感謝申しあげます。

平成11年　3月

高松市教育委員会
教育長　山　口　寮　弐

凡　　例

1．本書は，高松市教育委員会が国庫補助事業（県費補助を含む）として平成６年度から平成１０年度で実施した「第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査事業」の調査報告である。

2．本事業に関しては，これまでに年度毎の概要報告として「弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報」Ⅰ～Ⅲを刊行している。本書ではこれらの内容を包括するとともに，高松市教育委員会が「第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査事業」以前に国庫補助事業（県費補助を含む）として実施した，「太田地区周辺詳細遺跡分布調査事業」ならびに「弘福寺領山田郡田図関係調査事業」の成果にも必要に応じて言及している。

3．本事業の計画および実施にあたっては，文化庁文化財保護部記念物課文化財調査官　服部英雄，伊藤正義，井上和人，坂井秀弥，小林克各氏の御指導をいただいた。

4．本事業の実施にあたって「弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会」を組織した。委員会の構成は，下記のとおりである。

弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会委員等名簿（平成10年度）

	氏　名	職　名	選攻等
委員長	木原　溥幸	香川大学教育学部教授	日本近世史
委員	石上　英一	東京大学史料編さん所教授	日本古代史
委員	稲田　道彦	香川大学経済学部教授	人文地理
委員	内田　忠賢	お茶の水女子大学文教育学部助教授	地理・民俗
委員	金田　章裕	京都大学大学院文学研究科教授	歴史地理
委員	工楽　善通	奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター長	考古学
委員	権藤　典明	高松工業高等専門学校教授	地理・水利
委員	新見　治	香川大学教育学部教授	自然地理
委員	高橋　学	立命館大学文学部教授	地形変遷
委員	田中　健二	香川大学教育学部教授	日本中世史
委員	棚橋久美子	鳴門教育大学学校教育学部助手	日本近代史
委員	外山　秀一	皇学館大学文学部助教授	地理・分析
委員	丹羽　佑一	香川大学経済学部教授	考古学
委員	山中　敏史	奈良国立文化財研究所集落遺跡研究室長	考古学
調査員	山本　英之	高松市教育委員会文化財専門員	

5．調査にあたっては，香川県教育委員会の指導を得た。

6．発掘調査を実施した土地と所有者は次のとおりである。

平成６年度	高松市林町42番地5	植原　俊照
	高松市林町42番地6	植原　　弘
	高松市林町42番地7・8	大熊　俊雄
	高松市林町42番地9	喜岡　孝子，喜岡　義博
平成７年度	高松市三谷町1060番地・1089番地	村上　辰雄
	高松市多肥上町1374番地1・1375番地1・1376番地1	島田　潤子
	高松市多肥上町1385番地・1386番地1・1387番地1	穴吹アサ子
平成８年度	高松市林町6番地34	野田　新一
	高松市林町6番地35	渡辺　梁正
	高松市林町30番地・31番地・32番地・33番地1	穴吹　幸男
	高松市三谷町1071番地	松本　寿好
平成９年度	高松市木太町188番地	高松市木太町新池土地改良区
	高松市林町4番地1・高松市多肥上町1391番地	穴吹　アサ子
	高松市林町42番地7・8	大熊　俊雄

7．事業は教育委員会文化部文化振興課が担当して実施した。

8．本書の執筆は，第1部第1・3章を山本調査員が担当した他は各調査担当者による。文責については文頭または文末に示した。

9．本書の編集は，山本調査員が行った。

10．本書第1図「周辺遺跡分布地図」の作成にあたり，国土地理院発行1/50,000地形図「高松」「高松南部」「玉野」「丸亀」を使用した。

11．本事業の実施にあたり，地権者・委員各位に別して多くの地元関係者，関係機関にお世話になりました。記して謝意を表します。
山脇女子短期大学専任講師　漆原　徹，鎌田　照雄，古代交通研究会会長　木下　良，東京大学史料編さん所写真室技術官　針生　邦男，静岡県史編さん室　佐藤　達雄，高松市木太町新池土地改良区　中條　勝，馬場　直明，熊野神社氏子総代　早川　秀雄，福井県教育委員会文化課，福井県立若狭歴史民俗資料館，福井県史編さん課，松岡　弘泰，六車　恵一，森口　裕子，香川用水記念館ため池史編さん室，香川県文書館，（財）香川県埋蔵文化財調査センター，高松市都市開発部太田第２土地区画整理事務所，高松市市民部三谷出張所

讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ～第２次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～　目次

第１部　調査報告編

第１章　調査に至る経緯

第１節　調査の経緯 …… 1

第２節　調査の経過 …… 3

第２章　高松平野の地理的歴史的環境

第１節　地理的・歴史的環境 …… 7

第２節　比定地周辺部の遺跡調査 …… 12

第３節　高松市内の古代寺院 …… 33

第３章　発掘調査の成果

第１節　田図南地区の調査 …… 43

第２節　南海道推定地の調査 …… 118

第３節　田図北地区の調査 …… 134

第２部　考察編

第１章　考古学から見た高松平野

第１節　高松平野の発掘調査で検出された溝状遺構と推定条里地割との関係 …… 191
（丹羽　佑一・山本　英之）

第２章　古代中世の高松平野

第１節　高松平野における条里地割の形成（金田　章裕） …… 223

第２節　高松平野における荘園公領制の展開（田中　健二） …… 252

第３章　高松平野の水利

第１節　史料紹介　「高松藩領山田郡上林村・下林村池帳」（木原　溥幸・棚橋久美子） … 259

第２節　高松平野の伝統的地下水潅漑システム「出水」（新見　　治） …… 294

第４章　高松平野の民俗

第１節　高松平野東部の墓地と火葬場の変化（稲田　道彦） …… 313

第２節　ムラの空間構成：高松平野の民俗的ランドマーク調査（内田　忠賢） …… 327

第３節　高松平野におけるムラの空間構成（内田　忠賢） …… 348

第５章　自然科学から見た高松平野

第１節　弘福寺領山田郡田図比定地周辺の遺跡の立地環境Ⅱ（外山　秀一） …… 367

付　編　古代弘福寺編年史料（石上　英一） …… 379

付　図　高松平野条里遺構分布図

挿　表　目　次

第１表　弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地周辺の遺跡(地名表)
第２表　高松市内所在寺院の寺伝等一覧
第３表　Ａ調査区出土遺物観察表
第４表　Ｃ調査区SD05出土遺物観察表
第５表　Ｃ調査区客土層・SD06出土遺物観察表
第６表　SE01出土遺物観察表
第７表　SX01出土遺物観察表
第８表　SH01出土遺物観察表
第９表　SH02出土遺物観察表
第10表　SH03出土遺物観察表
第11表　SX04出土遺物観察表
第12表　SK01(西)出土遺物観察表
第13表　SK02(西)出土遺物観察表
第14表　SK04(東)出土遺物実測図
第15表　Ｂ調査区出土石器観察表
第16表　Ｆ調査区SD01第１トレンチ出土遺物観察表
第17表　Ｆ調査区SD01第２トレンチ出土遺物観察表
第18表　Ｆ調査区SD03石組中出土遺物観察表
第19表　Ｆ調査区SD03出土遺物観察表
第20表　SD01・SD02出土遺物観察表
第21表　南海道推定地第３調査区出土遺物観察表
第22表　田図北地区SD02出土遺物観察表
第23表　田図北地区SD02下層出土遺物観察表
第24表　田図北地区SD02周辺表採・SR01出土遺物観察表
第25表　高松平野の条里遺構一覧表
第26表　発掘調査検出溝の方向と復元条里の関係
第27表　発掘調査検出溝の種類
第28表　高松平野における条里プランの方位(東傾斜角度)
第29表　山田郡および香川郡東部の１条分の東西幅
第30表　南海道沿いの条里地割別のサイズと推定道幅
第31表　山田郡田図南地区の記載と天平宝字７年校出田
第32表　地表の条里地割坪界線との距離別個数
第33表　生駒藩寛永年間の大池と池守
第34表　高松藩正保２年・貞享３年のため池数
第35表　「池泉合符録」中の上林村・下林村の池と出水
第36表　上林村・下林村の水掛かりため池と出水
第37表　農業集落における出水の生活面での利用
第38表　出水の管理と現状
第39表　人間活動と出水を取り巻く水循環系・地下水環境の変化
第40表　地層の対比
第41表　試料採取地点の環境の変化(第１地点)
第42表　試料採取地点の環境の変化(第２地点)
第43表　瀬戸内海沿岸地域におけるイネ資料と水田址の出土状況

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図１（高松平野西半）
第２図　周辺遺跡分布図２（高松平野東半）
第３図　古代寺院関係文化財分布図
第４図　第２次弘福寺領田図調査事業発掘調査地点位置図
第５図　ＡＣ調査区位置図
第６図　Ｂ調査区配置図
第７図　Ｄ調査区配置図
第８図　Ｅ調査区配置図
第９図　Ｆ調査区配置図
第10図　Ａ調査区第１トレンチ基本土層図
第11図　Ａ調査区第２トレンチ基本土層図
第12図　Ａ調査区第３トレンチ基本土層図
第13図　Ａ調査区第４トレンチ基本土層図
第14図　Ａ調査区第５トレンチ基本土層図
第15図　Ｂ調査区基本土層図
第16図　Ｄ調査区基本土層図
第17図　Ｅ調査区第１トレンチ基本土層図
第18図　Ｅ調査区第２第３トレンチ基本土層図
第19図　Ｅ調査区第４第５トレンチ基本土層図
第20図　Ｆ調査区基本土層図
第21図　Ａ調査区遺構配置図
第22図　Ａ調査区出土遺物実測図
第23図　Ｃ調査区遺構配置図
第24図　Ｃ調査区東壁面土層図
第25図　Ｃ調査区 SD05 出土遺物実測図
第26図　Ｃ調査区客土層・ D06出土遺物実測図
第27図　Ｂ調査区西区画遺構配置図
第28図　Ｂ調査区東区画遺構配置図
第29図　三谷幹線水路土層断面図
第30図　SD03 土層断面図
第31図　SD03・SX03 遺構図
第32図　SX03 土層断面図
第33図　SE01 遺構図
第34図　SE01 出土遺物実測図
第35図　SX01 遺構図・土層断面図
第36図　SX01 出土遺物実測図
第37図　SH01・SH03 遺構図・土層断面図
第38図　SH01 出土遺物実測図

第39図　SH02遺構図・土層断面図
第40図　SH02出土遺物実測図
第41図　SH03出土遺物実測図
第42図　SX04遺構図
第43図　SX04出土遺物実測図
第44図　SK01(西)出土遺物実測図
第45図　SK02(西)出土遺物実測図
第46図　SK04(東)出土遺物実測図
第47図　SK04(東)出土遺物実測図
第48図　B調査区出土石器実測図
第49図　D調査区遺構配置図
第50図　昭和62年度弘福寺領田図比定地第Ⅲ地点土層図
第51図　F調査区遺構配置図
第52図　F調査区第1トレンチ遺構図
第53図　F調査区第2トレンチ遺構図
第54図　F調査区SD01第1トレンチ出土遺物実測図①
第55図　F調査区SD01第1トレンチ出土遺物実測図②
第56図　F調査区SD01第1トレンチ出土遺物実測図③
第57図　F調査区SD01第2トレンチ出土遺物実測図①
第58図　F調査区SD01第2トレンチ出土遺物実測図②
第59図　F調査区SD01第2トレンチ出土遺物実測図③
第60図　F調査区SD03石組中出土遺物実測図①
第61図　F調査区SD03石組中出土遺物実測図②
第62図　F調査区SD03出土遺物実測図
第63図　三谷南海道推定地周辺地形図
第64図　南海道推定地調査区第1・第2トレンチ配置図
第65図　南海道推定地第3調査区配置図
第66図　南海道推定地調査区第1トレンチ土層図
第67図　南海道推定地調査区第2トレンチ土層図
第68図　南海道推定地第3調査区土層図
第69図　南海道推定地調査区第1・第2トレンチ遺構図
第70図　南海道推定地第3調査区遺構図（上層）
第71図　SD01・SD02出土遺物実測図
第72図　南海道推定地第3調査区遺構図（下層）
第73図　南海道推定地第3調査区出土遺物実測図
第74図　田図北地区調査区設定図
第75図　田図北地区調査区基本土層図
第76図　田図北地区調査区遺構配置図
第77図　田図北地区SD02出土遺物実測図①
第78図　田図北地区SD02出土遺物実測図②

第79図　田図北地区SD02出土遺物実測図③
第80図　田図北地区 SD02 下層出土遺物実測図①
第81図　田図北地区 SD02 下層出土遺物実測図②
第82図　田図北地区 SD02 下層出土遺物実測図③
第83図　田図北地区 SD02 下層出土遺物実測図④
第84図　田図北地区 SD02 下層出土遺物実測図⑤
第85図　田図北地区SD02周辺表採・SR01出土遺物実測図
第86図　空港跡地遺跡条里遺構配置図（奈良・平安時代）
第87図　空港跡地遺跡条里遺構配置図（鎌倉・室町時代）
第88図　空港跡地遺跡条里遺構配置図(江戸時代以降)
第89図　旧三木、山田郡境
第90図　旧山田・香川郡境
第91図　高松平野西部の条里プラン
第92図　山田香川郡境付近における古代と近世の南海道
第93図　空中写真に見られる道路痕跡
第94図　山田郡田図南地区の表現概要
第95図　山田郡田図南地区比定地付近の地割形態
第96図　山田郡田図南地区の推定地目・地種
第97図　山田郡田図南地区比定地付近の各種遺構と地形条件
第98図　松縄下所遺跡
第99図　小山・南谷遺跡
第100図　正箱遺跡・薬王寺遺跡の溝遺構図
第101図　井出東Ⅰ遺跡SD01遺構図
第102図　空港跡地遺跡SD45・SD46遺構図
第103図　西打遺跡
第104図　香東条と香西条
第105図　旧版1:25,000地形図「高松」図幅に見られる出水
第106図　高松平野の出水分布
第107図　出水の湧出量と地下水位の変化
第108図　高松平野南部地域の水田分布の変化
第109図　出水の水文学的模式図
第110図　上井出水の湧出部と生活用水の利用
第111図　香川県の火葬率の変化
第112図　高松平野の墓地分布図（その１）
第113図　高松平野の墓地分布図（その２）
第114図　洲端墓地
第115図　高松市斎場公園
第116図　乾墓地（木太町９区）
第117図　乾墓地の火葬場跡
第118図　林町下所の墓地

第119図　火葬場
第120図　春日川河口墓地（木太町）にある立て札
第121図　調査地区
第122図　檀紙町
第123図　川部町
第124図　一宮町・寺井町
第125図　春日町
第126図　新田町
第127図　前田西町
第128図　六条町・下田井町
第129図　上林町
第130図　十川西町
第131図　フィールド
第132図－１　小字(前田西町)
第132図－２　メンバ(前田西町)
第132図－３　自治会(前田西町)
第132図－４　免(西前田村)
第133図－１　小字(前田東町)
第133図－２　メンバ(前田東町)
第133図－３　自治会(前田東町)
第133図－４　前田古図
第133図－５　免(東前田村)
第134図－１　小字(川島校区)
第134図－２　メンバ(川島校区)
第134図－３　昭和20年頃の集落(川島校区)
第134図－４　自治会(川島校区)
第134図－５　免(坂元村，高野村，上田井村および池田村の一部)
第135図－１　小字(御厩村)
第135図－２　地神祭の範囲(御厩村)
第135図－３　自治会(御厩村)
第135図－４　免(御厩村)
第136図　田図南地区比定地
第137図　第１地点地層断面図
第138図　第２地点地層断面図
第139図　プラント・オパール分析結果(第１地点)
第140図　プラント・オパール分析結果(第２地点)

図　版　目　次

図版１－１　田図南地区Ａ調査区第１トレンチ全景
図版１－２　田図南地区Ａ調査区第２トレンチ全景
図版２－１　田図南地区Ａ調査区第３トレンチ全景
図版２－２　田図南地区Ａ調査区第４トレンチ全景
図版３－１　田図南地区Ａ調査区第５トレンチ全景
図版３－２　田図南地区Ａ調査区第３トレンチ SD05 及び松根株列
図版４－１　田図南地区Ａ調査区第５トレンチ段差状遺構
図版４－２　田図南地区Ｃ調査区全景
図版５－１　田図南地区Ｃ調査区 SD05・06・SE01 全景
図版５－２　田図南地区Ｃ調査区 SD05 完掘及び土層状況
図版６－１　田図南地区Ｂ調査区調査前全景（北西より）
図版６－２　田図南地区Ｂ調査区西区画北壁土層
図版７－１　田図南地区Ｂ調査区東区画北壁土層
図版７－２　田図南地区Ｂ調査区西区画南壁土層
図版８－１　田図南地区Ｂ調査区西区画全景
図版８－２　田図南地区Ｂ調査区東区画全景
図版９－１　三谷幹線水路土層断面
図版９－２　SD03 完掘全景（西より）
図版 10－１　SD03 護岸列石検出状況
図版 10－２　SX03 完掘状況
図版 11－１　SE01 完掘状況
図版 11－２　SE01 井側検出状況
図版 12－１　SX01 完掘状況及び土層
図版 12－２　SH01･03 完掘状況
図版 13－１　SH02 完掘状況
図版 13－２　SX04 完掘状況
図版 14－１　SK02（西）遺物出土状況
図版 14－２　SK04（東）遺物出土状況
図版 15－１　田図南地区Ｄ調査区完掘全景
図版 15－２　田図南地区Ｄ調査区土層図（SD01）
図版 16－１　田図南地区Ｄ調査区土層図（畦畔断面）
図版 16－２　田図南地区Ｄ調査区土層図（SD03）
図版 17－１　田図南地区Ｄ調査区確認トレンチ全景
図版 17－２　田図南地区Ｆ調査区第１トレンチ遺構検出全景
図版 18－１　田図南地区Ｆ調査区第２トレンチ全景
図版 18－２　田図南地区Ｆ調査区第３トレンチ全景及び土層
図版 19－１　田図南地区Ｆ調査区第４トレンチ全景
図版 19－２　第１トレンチ基本土層（東半）

図版20－1　第1トレンチ基本土層(西半)
図版20－2　第1トレンチSD01遺物出土状況全景
図版21－1　第1トレンチ遺物出土状況（部分拡大1）
図版21－2　第1トレンチ遺物出土状況（部分拡大2）
図版22－1　第2トレンチSD02遺物出土状況（部分拡大2）全景
図版22－2　SD02・SD03検出状況
図版23－1　SD03石組検出状況
図版23－2　SD03完掘状況
図版24－1　SD03五輪塔空輪石出土状況
図版24－2　SD03盃状穴石出土状況
図版25－1　南海道推定地第1トレンチ全景
図版25－2　南海道推定地第1トレンチ土層
図版26－1　南海道推定地第2トレンチ全景
図版26－2　南海道推定地第2トレンチ土層（北半）
図版27－1　南海道推定地第2トレンチ土層（南半）
図版27－2　溝状遺構完掘全景
図版28－1　南海道推定地第3調査区東壁土層
図版28－2　南海道推定地第3調査区東壁土層拡大(1)
図版29－1　南海道推定地第3調査区東壁土層拡大(2)
図版29－2　南海道推定地第3調査区東壁土層拡大(3)
図版30－1　南海道推定地第3調査区全景
図版30－2　南海道推定地第3調査区完掘全景
図版31－1　南海道推定地第3調査区西側集石の状況
図版31－2　南海道推定地第3調査区東側集石の状況
図版32－1　田図北地区（大池遺跡）基本土層断面
図版32－2　SD02検出状況
図版33－1　SD02完掘状況
図版33－2　SD02遺物出土状況(1)
図版34－1　SD02遺物出土状況(2)
図版34－2　SD02須恵器片出土状況
図版35－1　水田畦畔検出状況
図版35－2　水田畦畔完掘状況
図版36－1　水田畦畔脇水路の足跡検出状況
図版36－2　SD01完掘状況
図版37－1　SR01完掘状況
図版37－2　SR01土層断面

写　真　目　次

写真１　上井出水の湧出部(1984年10月撮影)
写真２　上井出水の湧出部(1998年12月撮影)
写真３　竹林出水の湧出部(1998年12月撮影)
写真４　竹林出水下流の水路(1998年12月撮影)
写真５　林に囲まれた古水出水の遠景(1984年10月撮影)
写真６　古水出水の石積みの湧出部(1985年３月撮影)
写真７　暗渠の途中に設けられた洗い場(1984年10月撮影)
写真８　林が伐採されたあとの古水出水の遠景(1998年12月撮影)
写真９　暗渠化された古水出水(1998年12月撮影)
写真10　古水出水の暗渠開口部(1998年12月撮影)
写真11　池状の湧出部を持つ下井出水①(1998年７月撮影)
写真12　池状の湧出部を持つ下井出水②(1998年７月撮影)
写真13　標注のたてられた袂井出水(1998年12月撮影)
写真14　排水が流入する墓井出水(1998年12月撮影)
写真15　荒廃する上所井出水の湧出部(1998年12月撮影)
写真16　水量豊かな上所井出水の水路(1998年12月撮影)

第1部　調査報告編

第1章　調査に至る経緯

第1節　調査の経緯

高松市教育委員会では，弘福寺領讃岐国山田郡田図に関してこれまでに，高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査事業（昭和61年度）ならびに弘福寺領田図関係遺跡発掘調査事業（昭和62～平成3年度）を文化庁ならびに香川県教育委員会の理解と指導の下に実施してきた。これは，高松市が昭和63年度から進めている太田第2土地区画整理事業地内の遺跡の分布状況を確認する中で，同じく当該範囲に存在が予想されていた弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地の調査を深めてきたものである。

本事業の主題となった「弘福寺領讃岐国山田郡田図」は，天平7（735）年の記年を有するわが国最古の荘園絵図であり，当時弘福寺（川原寺）が讃岐国山田郡に領有した荘園の領域と土地利用の様子が条里地割の方格を基本として描かれている。現在，香川県大川郡志度町の多和文庫（松岡弘泰氏）の所蔵になる「弘福寺領讃岐国山田郡田図」は，鎌倉時代の写本で奈良時代から伝えられたものではないものの，原本の内容を忠実に模写して当時の荘園の様子をよく表し，資料的な価値は計り知れないとして，本事業終了後の平成3年6月に重要文化財の指定を受けている。

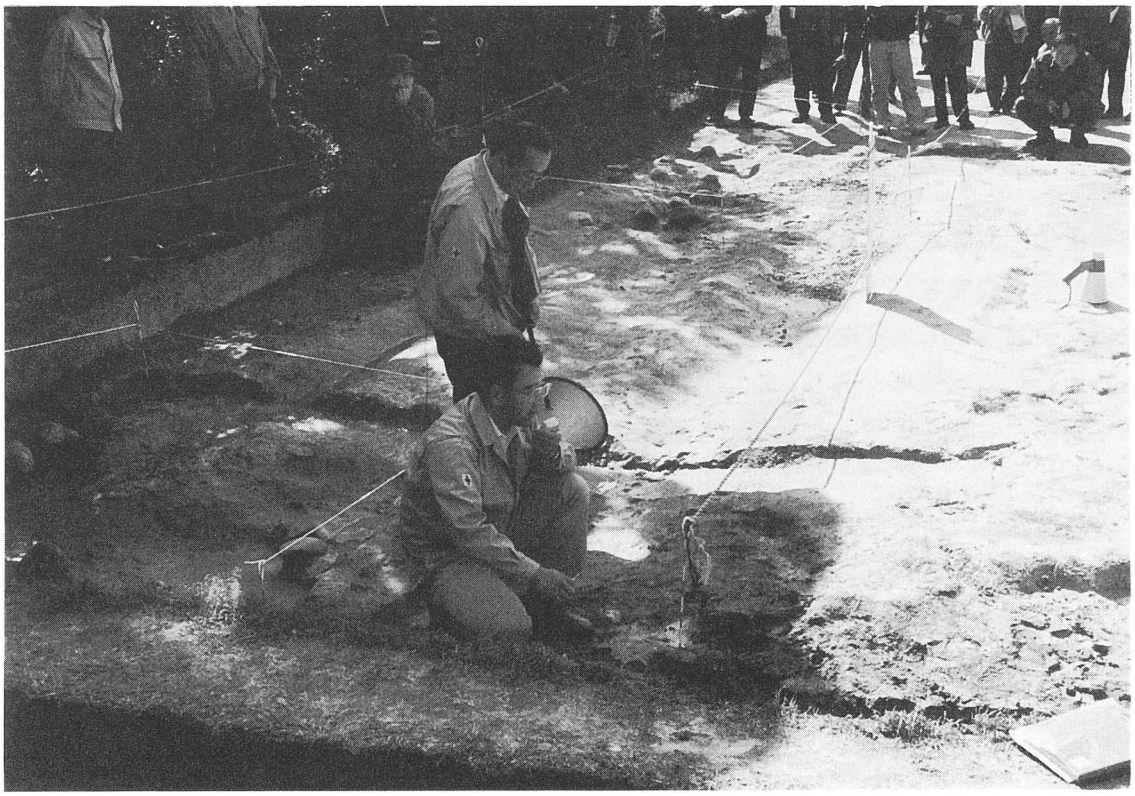
以上の調査事業（以下，第1次調査事業とする）では，弘福寺領荘園に関係する具体的な遺構の確認を見ることはできなかったものの，主に調査に際して組織した「弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会」の方々のご苦労によって，弘福寺領田図の南北両地区比定地がそれぞれ木太町大池南半から南側の一帯，旧高松空港滑走路の西半分からその北側一帯に存在する可能性が高いことが推測されるに至った。そして，何より大きな収穫はそれまで埋蔵文化財包蔵地としては殆ど空白地帯であった高松平野の全域にわたる条里地割，埋没微地形の分布状況が明らかにされたことである。これら第1次調査事業の成果は，ほぼ同時期に本格化した高松東道路建設事業，太田第2土地区画整理事業等による遺跡調査事例の増加と相俟って，現在の埋蔵文化財調査を進めてゆくうえで不可欠な基本資料となっている。

一方，弘福寺領田図南地区比定地では，平成2年の新高松空港の開港に伴い跡地再開発事業が始まり，周辺部でも県立高校新設等による工事が計画されてこれらに先立つ埋蔵文化財調査が平成3年から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって実施されてきた。

高松市教育委員会及び旧「弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会」委員の中では，これらの開発計画によって弘福寺領田図北地区比定地のみならず南地区周辺までもが歴史的景観の急激な消滅を余儀なくされることに危機感が募り，文化庁ならびに香川県教育委員会に南地区周辺の関連遺跡確認調査の補助事業採択を強く要望した結果，平成6年度から第2次弘福寺領田図調査事業として着手することが認められた。

第2次弘福寺領田図調査事業の実施にあたっては，前回と同様に文献，地理，民俗，自然分析等学識経験者等による調査委員会を中心とした総合調査を計画した。調査委員会には，第1次調査事業に参加いただいた委員10名に4名の委員を新たに加え，前回の調査で手薄であったとされた民俗等聞き取り調査，考古古代，文献中世の分野の補強を図った。そして，事業開始に先立つ平成5年度から準備委員会として組織することで事業の計画的で円滑な遂行をめざした。

平成8年度南海道推定地調査に伴う現地説明会風景（その1）



同　　上　　（その1）

第２節　調査の経過

１．平成５年度準備委員会の記録

第2次弘福寺領田図調査事業の実質的な活動の始まりは平成5年6月24日の弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会委員等の委嘱に続く同年7月23日の第1回調査委員会である。

第1回調査委員会では，前回調査事業の反省を踏まえつつ活発な議論の中から調査の目的，手法，項目等にわたって多くの提言がなされた。

まず，第1次調査事業の反省点として概ね以下の3点が指摘された。

①　比定地をとりまく地域で区画整理等の開発事業が急速に進行する中，発掘地点の選定や調査区，分析試料採取地点等の設定に十全の考慮の余地がなかったこと。

②　広大な荘園という対象に見合う事業予算，調査面積，調査組織が十分に確保できなかったこと。

③　調査上での制約があったにせよ，調査データを安易に現地比定に結びつける嫌いがあったこと。

④　太田地区周辺の急激な開発事業に対応するあまり，地神，塚等のランドマークの分布調査に終始した感があり，地元住民を対象とした聞き取り調査が手薄になったこと等である。

①は，高度成長期以降の大規模開発を被っていない地域であるといえども，近世の水田開発（地下げ）や戦後の瓦粘土採取等によって予想外の削平が及んでいたという事例に対しての，②は，荘園遺跡を実証する手段としてどのような遺構の存在が期待でき，それによってどのような成果が見込めるかという見通しが計画段階で不十分であったことに対する反省であったとはいえ，図らずも大規模開発に追われた，荘園遺跡という広大な範囲を対象とする調査の困難さがうかがわれることとなった。

また，これらに加えて文化庁からは比定地周辺地域の古文書等関連資料の収集と聞き取り調査の充実を図ること，香川県教育委員会からは発掘調査主導の調査運営をすること等の助言も得られた。

これらの反省と第１次調査事業で得られた知見を踏まえて，第2次調査事業の調査方針が次のように打ち出された。

(1)　発掘調査によって弘福寺領田図そのものに関わる遺構の発見及び土地利用，歴史景観の復原をめざし，弘福寺領山田郡田図（南地区）の現地比定を確定する。

(2)　弘福寺領山田郡田図の現地比定を考古学的に補強しうる資料として，高松平野全体に視野を広げて南海道，山田香川郡界線，条里遺構等に関する遺構の調査を加える。

(3)　弘福寺領山田郡荘園成立の背景を考察しうる資料として高松平野一円の白鳳から奈良時代の遺跡の資料調査と検討を行う。

(4)　土地利用と歴史環境の変遷を復原するという観点から，比定地周辺については古代から中近世を経て現代に至るまでの時代を調査の対象とし，それぞれの時代についての考古データ，文献史料，地方文書，民俗（聞き取り）資料等の収集を図る。

(5)　田図関連史料および荘園経営等に関する文献史料の調査を行う。

(6)　調査期間，費用の制約を補完して最大限の成果を得る手段として，周辺部の事前調査のデータを，調査機関の垣根を取り払って相互自由に検討しうるような調査協力体制を模索する。

そして，これらの方向性を実現するために次のような調査項目が候補として挙げられたが，このうち発掘調査，測量調査に関わるものでは，調査期間と費用の制約の中で補助事業の主題である弘福寺領讃岐国山田郡田図との関連がより具体的で緊急的なもの（下記中太字）から順次進めてゆくこととし，その他の調査についてはそれぞれの調査委員が専門のテーマを受け持つこととなった。

第2次弘福寺領田図調査事業で想定される調査項目

(1) 田図比定地の確定のための考古学的調査

ア. 比定地（特に南地区比定地）周辺の発掘調査

イ. 発掘調査に付随する地形分析，花粉等分析

(2) 古代南海道・郡界線，条里プランに関わる調査

ウ. 南海道・山田香川郡界線推定地の関連遺構確認調査

(3) 古代関係遺跡資料調査

エ. 三谷駅家，山田香川郡衙の探索

オ. 古代寺院跡の測量調査（下司廃寺，高野廃寺，拝師廃寺，宝寿寺跡）

カ. 古代寺院，出土瓦等の既往資料の整理分析

(4) 比定地周辺の地域誌的調査

キ. 上林城，吉国寺，岩田神社等の確認調査 注1

ク. 飛行場接収前の耕地，水利等の復原調査

ケ. 中世多肥郷文書等関連中世文書の分析調査 注2

コ. 王子院，今吉土居，多肥城の確認調査 注3

サ. 漆原文書等関連近世文書の分析調査 注4

シ. 香東川右岸を対象とした水利調査

ス. 太田地区南部以南を対象とした民俗地名，年中行事，習俗儀礼等の聞き取り調査

(5) 田図および荘園経営資料等分析調査

セ. 関連資料集成作業

ソ. 荘園経営の比較調査（東寺末寺化以前と以後）

注1 章末参考文献6，第4章第2節2「弘福寺領山田郡田図の史料学的分析」石上，345～354頁

注2 章末参考文献8，第4章第3節「熊野神社所蔵大般若経紙背文書の多配郷関係文書について」 田中

注3 章末参考文献6，第4章第2節1「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田図」金田，249頁
章末参考文献8，第4章第3節「熊野神社所蔵大般若経紙背文書の多配郷関係文書について」 田中

注4 漆原家は，本家伝来の「系譜」及び「漆原氏由緒書」によると，藤原鎌足の流れを組む家系とされ，もとは生駒家に仕えたが，松平氏になってからは牢人となって山田郡三谷村に移った。

現在の通谷漆原家を総本家とし，18世紀末の宝暦年間に6代目弥惣左衛門の次男弥義右衛門，三男勘太夫（男木太）がそれぞれ西三谷，大満（三谷村北部の字で上林村に接する）に分家し，西三谷からは文化から文政年間にかけて勘太夫，柳左衛門の二代にわたって大政所を輩出している。西三谷漆原家は現在に至るが，大満漆原家は大正年間に大阪へ転出している。

以上のようなことから，漆原家には近世文書，明治以降の大土地所有制に関する史料等が多く所蔵されており，これらのうち総本家の史料については平成元年に瀬戸内海歴史民俗資料館に寄贈され，平成2年に同資料館によって文献目録が作成されている。

一方，西三谷漆原家においても同様な史料が所蔵されており，その点数は約7,000点といわれている。その内容は現在の段階ではまだ明らかでないが，弘福寺領田図比定地が所在した林村に関係するものも含まれていると予想され，南地区比定地周辺の近世の様子を解明する重要な手がかりと考えられる。

これらのうち，平成6年度の発掘調査予定地としては，弘福寺領田図南地区に比定される高松空港跡地の北西部付近のうち，山田香川郡界線と比定地西辺の条里界が重なる分ヶ池北側または下池南側の付近，田図南地区東辺の坪界線で近世寺院である吉国寺の推定地にもあたる，現特養老人ホームさくら荘の北側付近が挙げられた。そして，さらに詳細な絞り込みについては土地所有者の意向や遺構

の遺存状況をさらに検討した上で次回の会合で決定することで了解を得た。

また，同年9月24日には，同委員会委員の中で民俗水利関係の担当者が改めて会合し，役割分担と調査要領の再確認を行った。

2　平成6年度以降の調査経過

第2次弘福寺領田図調査事業の公式の初年度となる平成6年度は，同年7月15日付けで国庫補助事業申請を行い，続いて8月26日に第1回調査委員会を開催した。そして，教育委員会が主体となって進める調査項目に関する議決事項として，

① 発掘調査地点として，南地区比定地の東境界付近にあたるとともに近世後期の耕地絵図等の存在によって現代からの土地区画の変化が時代を追って古代近くまで遡及しうる可能性のある林町42-9付近の水田を第1候補として調査準備を進めること。

② 発掘調査成果を検証するための検討会を1～2月頃に設定し，調査概報の編集刊行は翌年度に送ること。

③ 成果が見込めるだけの発掘面積を確保し（1000㎡程度），検討会の予定等も考慮のうえ9～10月頃の現場着手をめざすこと。

④ 関連資料収集の一環として，古代寺院遺跡推定地の２，３ヶ所で測量調査（500分の1平板測量）を実施すること。

等が確認された。

しかし，事業費の点から調査面積等は現実的には制約をうけることとなった。この背景には，平成7年1月の阪神大震災による罹災文化財修復の事情も存在するが，一方で田図位置比定のための調査手段として，発掘調査に重きを置く意見と高松平野の古代史全般の中で弘福寺領田図を理解しようする意見の間に格差を生じた面もあり，今後に向けて大きな反省点となった。発掘調査は平成７年１月19日に着手，同年３月８日に調査検討会を開催した。

平成7年度の調査事業は，6月15日付けで補助事業申請を提出，7月27日に第1回調査委員会を開催し，発掘地点としては南海道と山田香川郡界線の遺構確認に主力を置くことが決定した。そして，これにしたがって用地交渉を進めた結果，南海道推定地については三谷町1060番地他，郡界線については多肥上町1386番地1他の水田を発掘調査地として借り上げ，11月22日付け提出の変更申請を待って12月14日から順次発掘調査を進めた。そして，平成8年3月1日に調査検討会を開催。南海道推定地については，調査終了の3月31日に市民を対象として現地説明会を開催した。

平成8年度調査事業は，6月10日付けで補助事業申請を提出。8月9日に第1回調査委員会を開催し，発掘調査地点として，前年度に引き続き南海道の延伸部分と南地区比定地他の3ヶ所を調査候補地点と定めた。最終的には南海道地区では三谷町1071番地，南地区比定地では林町6番地34他の水田に決定して11月1日から順次調査を進め，３月11日に調査検討委員会を開催。調査終了に先立つ３月30日に市民を対象として現地説明会を開催した。

平成９年度は，前年度と同様６月10日付けで補助事業申請を提出。７月２日に調査地を決めるための検討会を開催した。そして発掘調査地点として，北地区比定地の大池底と郡界線推定地の「分ヶ池」北側，さらに南地区比定地内の数カ所を候補とし，最終的には大池底（木太町188番地），山田香川郡界線推定地（多肥上町1391番地他），南地区比定地（林町42番地7他）を決定した。発掘調査は12月8日から順次実施し，平成10年3月9日に調査検討のため第1回調査委員会を開催した。なお，この年度をもって第2次弘福寺領田図調査事業にかかる発掘調査を完了した。

平成10年度は，5月7日付けで補助事業申請を提出。7月2日に調査委員会を開催した。10年度の調査事業の主体はこれまで継続してきた発掘調査の総まとめとしての調査報告書の刊行にあり，委員会では調査報告書の内容構成と執筆分担について協議し，この後調査報告書原稿の執筆作業が本格化することとなった。そして，平成11年1月6日にそれぞれの執筆成果を持ち寄って内容調整の最終検討会を開催し，3月31日付けの調査報告書の刊行をもって全ての事業が終了した。

参考文献

1.『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』　高松市教育委員会　1987年

2.『讃岐国山田郡三谷村漆原家文書目録』歴史収蔵資料目録14
瀬戸内海歴史民俗資料館　1990年

3.『福井県史』資料編9　中・近世7　福井県　1990年

第1次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査事業関係文献

4.『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報』Ⅰ　高松市教育委員会　1988年

5.『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報』Ⅱ　高松市教育委員会　1989年

6.『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報』Ⅲ　高松市教育委員会　1990年

7.『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報』Ⅳ　高松市教育委員会　1993年

8.『讃岐国弘福寺領の調査』　高松市教育委員会　1992年

第2次弘福寺領讃岐国山田郡田図調査事業関係文献

9.『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報』Ⅰ　高松市教育委員会　1996年

10.『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報』Ⅱ　高松市教育委員会　1997年

11.『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報』Ⅲ　高松市教育委員会　1998年

第２章　高松平野の地理的歴史的環境

第１節　地理的・歴史的環境

1　地理的環境

高松平野は，香川県のほぼ中央部で瀬戸内海沿岸に位置する沖積平野で，西を五色台山塊，南を日山，上佐山，東を立石山，雲附山等に遮られており，南北約20㎞，東西約16㎞を測る。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島，紫雲山等の島状の独立丘陵は，侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成された，メサ，またはビュートと呼ばれるもので，讃岐ののどかな田園風景の象徴のひとつである。

高松平野には，西から本津川，香東川，春日川，新川といった河川が北流しているが，なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており，現在の春日川以西の大部分は香東川によって形成された沖積平野といわれている。

現在石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は，17世紀はじめの河川改修によって人工的に開削されたもので，それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後，石清尾山塊の南側を回り込んで平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は，現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっている。一方，古い時代に埋没したものとして，空中写真等では，林から木太地区にかけての分ヶ池，下池，長池，大池，ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が見られ，発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお，17世紀の廃川直前の流路は，御坊川として今でもその名残をとどめている。

これらのため池は，年間1000㎜前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠のものであるが，林，多肥地区周辺では扇状地末端部にあたることから，ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで，両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし，昭和50年の香川用水の通水によって，この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ，農業用水確保の不安が払拭された反面，大池，長池等のため池が三郎池の子池となり，地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに，ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

2　歴史的環境

現在のところ，高松平野で最古の遺跡は後期旧石器時代にまでさかのぼる。平野縁辺部または独立低丘陵部の麓で久米池南遺跡，雨山南遺跡などが古くから知られていたが，近年中間西井坪遺跡から良好なユニットの資料が得られている。

縄文時代になると，平野中央部では大池遺跡の有舌尖頭器の表採資料2点が最古の部類に属し（縄文時代草創期），井手東Ⅰ遺跡，蛙股遺跡では遺物の確認はなかったものの赤ホヤ火山灰の降灰面を確認している。その他縄文後期までの遺跡は佐料遺跡，下司遺跡など数カ所が旧石器散布地と同様に平野縁辺部の丘陵部に点在している。

縄文晩期から弥生時代にかけての遺跡は香東川の旧河道を軸として展開している。この中で仏生山付近から林町域の分ヶ池，下池，長池，大池等をたどって木太町付近に流れ下る河脈は，高松平野の形成にも大きく関与していると考えられ，さこ・長池遺跡，林坊城遺跡，井手東Ⅱ遺跡等では旧河道の河床部に縄文晩期の遺物を包含している。これらの多くは同一包含層中に弥生前期の土器をも混在しており，縄文晩期から弥生前期への過渡期の様相を示すものと思われる。ただ，これらと旧河道の河脈を異にする居石遺跡のみは旧河道支流の埋土に晩期前半，突帯文出現直前期と見られる土器群を単独資料として

包含しており，他の遺跡とは異なった様相を呈する。

旧河道の周辺部では，さこ・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡，天満・宮西遺跡，空港跡地遺跡および周辺部の遺跡などに前期の住居跡，周溝墓，土坑等が断片的に見られるが，集落としてまとまった在り方は見られない。一方，この時期に導入されたと思われる水田耕作の痕跡は確認例が増加し，先述のさこ・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡のほか弘福寺領田図北地区，上西原遺跡などで旧河道の自然堤防上から後背湿地に至るまで多くの遺跡が確認されており，旧河道周辺の開発の早さが伺える。旧河道内部での水田開発はやや時期が遅れて弥生時代後期から見られ始める。河川機能が衰えて次第に埋没を始める時期に当たっているようで，さこ・長池遺跡，さこ・松ノ木遺跡では以降古代から中世前半を経て近世に至る水田層が河道堆積層中に連綿と確認できる。ところがこれより西側の，居石遺跡を貫いて野田池，蓮池に向かう河脈では古墳時代初頭の遺物を包含し，有機物の分解が充分に進行していない泥炭質のシルト層で一気に埋まっており，河川機能の衰退していく時期が周辺部の開発の早さに少なからぬ影響を及ぼしている。

古墳時代にはいると，平野中心部では鶴尾神社4号墳を嚆矢とする石清尾山積石塚群が，平野周辺丘陵部でも高松市茶臼山古墳をはじめ多くの古墳が築造される。しかし，これら古墳の造営主体となった集落等の存在は未だ明確ではなく，太田下須川遺跡，六条上所遺跡，日暮・松林遺跡等で当該期の遺物や若干の遺構を検出しているにすぎない。鶴尾神社4号墳など発生期の古墳に関して見れば，あるいは上天神遺跡等平野中央部の弥生時代終末期の集落が造営母胎の候補となってくることも考えられるが，今後の課題である。

古代にはいると，高松平野の遺跡は条里遺構と集落遺跡，寺院跡に集約される感がある。

和名類聚抄によれば，讃岐の国は大内，寒川，三木，山田，香川，阿野，鵜足，那珂，多度，三野，刈田の11郡で構成されており，これらの郡境は南海道と直交する直線によって計画的に分割されている。このため讃岐国の郡域はいずれもが海岸線と平野と山岳部を等しく分有するという特徴的な郡構成をとっている。現在の高松市にはこのうち山田，香川2郡が相当し，山田郡については高松，喜多，本山，田中，宮処，拝師，三谷，坂本，蘇甲，池田，殖田の11郷に，香川郡には笶原，坂田，大田，飯田，成相，多配，百相，井原，河辺，大野の10郷により構成されていたとされる。これら郡郷の中心となる郡衙および官衙の遺跡はこれまでの調査では確認されていないが，古代の大型建物を含む集落を出土した遺跡として前田東中村遺跡（山田郡宮処郷），松縄下所遺跡（香川郡大田郷），正箱・薬王寺遺跡（香川郡中間郷）が知られている。

古代寺院については後段で詳しく述べられているので個々の概要については割愛するが，古代寺院の立地はその多くが後期群集墳に近接して所在するとともに，これまでに知られている古代寺院9遺跡は1郷に1寺ずつがまんべんなく分布しており，早いものでは白鳳期の瓦を出土する宝寿寺跡，勝賀廃寺等も見られる。また，日本霊異記には讃岐を舞台にした仏教説話3編が収められており，うち2編は「身寄りのない老人に施すことを嫌いながら，一方で釣人に放生を勧めた男が地獄で飢渇の報を受けた後に救われた話（第16話，讃岐国山田郡坂田郷）」「同姓同名の女子が代わって閻羅王庁に召し出されたことから生じた奇譚（第25話，讃岐国山田郡）」と山田香川郡域に関わるものであることから，高松平野への仏教文化の受容が在地の氏族を担い手として早い時期から行われていたことが伺える。仏教文化に関して続けると，8世紀末から10世紀にかけて真言宗の空海（佐伯氏）が讃岐から輩出したことはよく知られているが，以後西讃では実恵（佐伯氏），円珍（和気氏）等高僧が続出し，東讃でも道昌（秦氏），観賢（秦氏）等の名前を確認することができる。一方，明法道の方面でも讃岐永直・永成（凡直氏），惟宗直宗・直本兄弟（秦氏）等が東讃から輩出しており，当時の讃岐は仏教文化と律令法制の一大先進地で

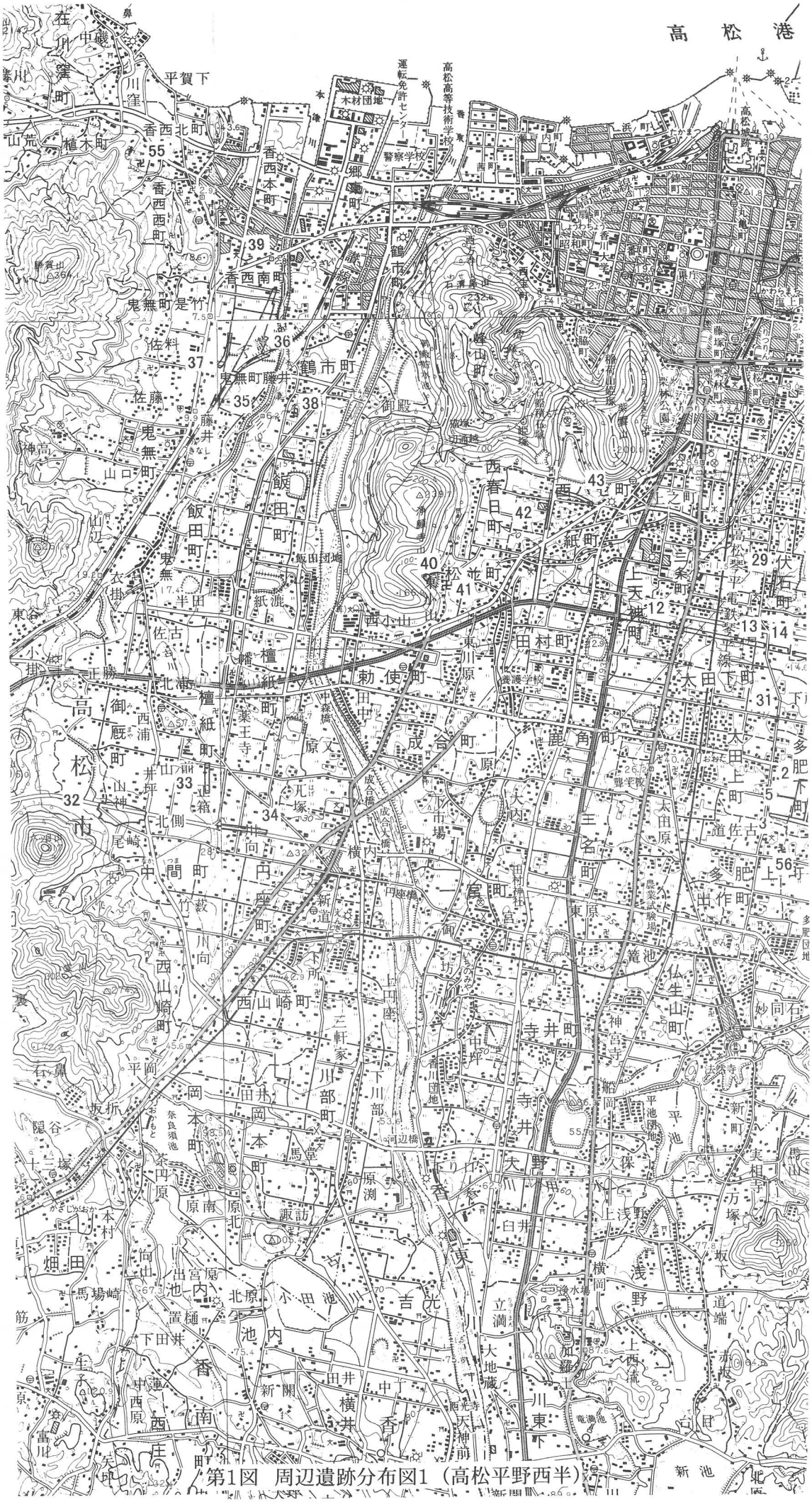
あったといえる。

高松平野の条里地割は,現在の土地境や用水,里道などに顕著にその痕跡をとどめており,市街地・埋め立て地や現在の河川氾濫原を除く平野部に一様に分布している。讃岐の条里地割の特徴として讃岐平野を東西に貫く南海道と,南海道に直交して極めて高い計画性でもって測設されたと考えられる郡界線を縦横の基準として敷設されたことが知られている。この南海道は,高松市域では現三木町の白山南麓と中間町の六つ目山北麓を結ぶ直線として想定されており,当該線上には道路敷きの余剰帯と見られる東西に帯地となった地割りが断続的に認められる。この帯地の幅は10m内外の幅員を有し,余剰帯を持たない部分に関しては南海道推定線に隣接する南北いずれかの坪の南北辺長が約10m分長くなっていることから,南海道の測設と同時またはそれ以降に条里方格の区画が設定されたものと考えられる。このことは,郡界線に関しても同様である。

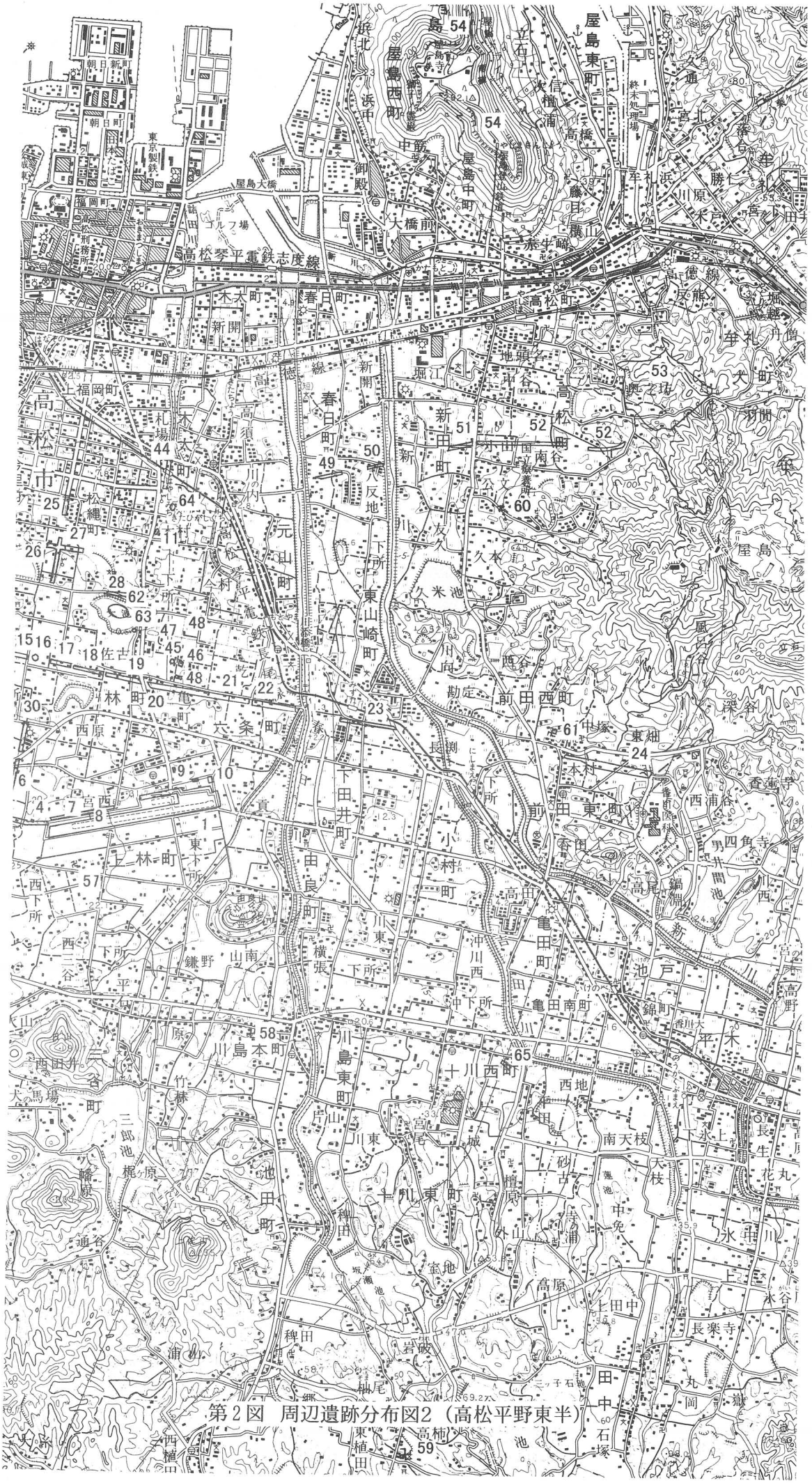
郡界線や南海道とは直接には関係ないものの,直線道路敷きが余剰帯として隣接の条里坪と別個に敷設されている可能性のある遺跡として松縄下所遺跡を挙げることができる。松縄下所遺跡では条界方向の現況坪界線に平行して道路幅員2.8mの両側溝を延長200m余りにわたって確認した。遺構の位置関係は現況坪界線からは12mほど西へずれているものの,方位は平行関係にあり遺構を含む坪の東西辺長は約115mと通常の1町の109mよりも長くなっている。また,出土遺物の時期が7世紀後半まで遡る可能性があることから,高松平野の条里地割の初源を示すものかまたは先駆的な位置づけになる遺跡の可能性がある。

これまでの知見から見る限り,高松平野の条里分布では他地域のような重層条里,違方向条里などの確認は公式にはされておらず,旧河川氾濫原などで比較的開発の新しいと思われる地域で遺構の年代も中近世に限られるような遺跡(川南西遺跡,木太中村遺跡など)であっても,条里区画の方位はN10°Eの前後に統一されている。ただ1ヶ所の例外的な地域として屋島南部の高松町・新田町の一部にはほぼ正方位を基本とする異方向条里区画の存在が指摘されてはいるものの,それ以外では極めて高い統一性を示している。古代の条里遺構が同位置で維持または再掘削されてきた結果として古代の遺物が残存する余地がなかったとも考えられるが,新たな開発に際して隣接する既成の区画が徐々に延長されて現在のような条里分布が完成したとする見方も考慮の余地があろう。

こうした条里方格の土地区画は中世以降も連綿と踏襲されて現代にまで至っているが,その中で注目されるのは13～16世紀頃にかけての城館跡の方形区画である。キモンドー遺跡,空港跡地遺跡,西打遺跡,香西南西打遺跡,西ハゼ土居遺跡でこうした方格状の溝(堀)跡が確認されている。いずれも現況条里地割にのっとって区画されているものの,方形区画の辺長が80m,30m,40mなど必ずしも1町または半町を単位としていないうえ,長方形に想定せざるを得ない平面プランも見られるなど,条里地割の規制が薄れている一面も見られる。(山本)



第1図　周辺遺跡分布図1（高松平野西半）



第2図　周辺遺跡分布図2（高松平野東半）

第２節　比定地周辺部の遺跡調査

はじめに

弘福寺領讃岐国山田郡田図では，南北二地区に総面積二十町余の寺領荘園が条里地割を基準として表現されている。この田図の記載内容から田図の位置を特定する際に得られる情報としては，位置関係を示す東西南北の方位と「(山) 田郡〇郷舩椅里」・「山田香河二郡境」の書き込み，「倉」・「屋」・「井」・「人夫家」等の存在位置，田畑等の耕作地目，「津田」・「佐布田」等の土地条件，「壟」等の自然地形などが挙げられるが，これらのうち「倉」・「屋」・「井」・「人夫家」等の構築物の遺構が検出の状況によっては比較的容易に田図との関係を想像できるのに対し，その他の要素が通常の発掘調査によって山田郡田図に関係する遺構として認定できる可能性はきわめて少ないと考えられる。こうした中で，肝心の「倉」・「屋」・「井」の比定地は大池（木太新池）の水底にあたる蓋然性が高いから，発掘調査による田図関連遺構の確認作業として当面可能な方法は，南海道，山田香川郡界線を含む条里関連遺構の確認によって奈良時代にできるだけ近接した時期の条里地割のアウトラインを確定することと，比定地内外の当時の地形環境，土地利用状況をできるだけ広範に確認して田図の記載に該当するポイントを探し当てることの2点が想定できる。しかし，二十町余の広大な対象地の内外で地形環境や土地利用を復原しうる資料（土層堆積資料，水田等の面的資料）を必要量収集するには膨大な作業量が必要となる。広大な対象地と関連遺構の認定の困難さ。ある意味ではこの二点が1，2次を通じての本事業の発掘調査の最大の命題であった。

一方，高松市域の平野部では大規模開発事業に伴って概ね昭和63年度以来平野部での発掘調査が本格化し，以来日を追って遺跡数が増加の一途をたどる傾向が続いている。これらの調査の特徴は，単件の調査面積が大きく，特に道路建設に伴う調査では長い距離にわたる地形の変化が容易に把握できるため，これらの知見は承前の山田郡田図の位置比定作業を補足する資料としてたいへん有益と考えられる。このため本節では，これらの遺跡から弘福寺領田図調査に関係するものとして，4つの要素を基準に総数65遺跡を抽出し，以下に遺跡ごとの概要を記した。

遺跡抽出の基準とした4要素とは次のとおりで，各遺跡の抽出基準については比定地周辺遺跡一覧表の末尾に記号で示した。(山本)

Ａ：弘福寺領比定地の周辺に所在する遺跡（概ね室町新田線を北限，コトデン琴平線を西限，春日川～古川を東限，多肥公民館から古川橋市道を南限とする範囲）

Ｂ：条里関係遺構を含む遺跡

Ｃ：古代（奈良・平安時代）の遺構を含む遺跡

Ｄ：その他の関連を有する遺跡

第1表　弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地周辺の遺跡(地名表)

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
1	空港跡地遺跡	高松市林町	S63～H8	ｲﾝﾃﾘｼﾞｪﾝﾄﾊﾟｰｸ整備 四国工業試験場建設 香大理工学部建設	香川県埋蔵文化財調査センター	空港跡地遺跡発掘調査概報 H3～H8 1992.3～1997.3　香川県教育委員会 空港跡地遺跡Ⅰ　1996.12 香川県教育委員会 空港跡地遺跡II　1997.9 香川県教育委員会 空港跡地遺跡III　1998.10 香川県教育委員会	ABC
2	多肥松林遺跡	高松市多肥上町 多肥下町	H5～H6	県立高校建設 高松土木事務所建設	香川県埋蔵文化財調査センター	高松新設に伴う埋蔵文化財調査概報　多肥松林遺跡 H6.3　香川県教育委員会 高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　多肥松林遺跡　H7.3　香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財調査年報　平成6年度 1995.3　香川県教育委員会	AB
3	多肥松林遺跡	高松市多肥上町	H9～	県道太田上町 志度線建設	香川県埋蔵文化財調査センター	県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成9年	AB
4	多肥宮尻遺跡	高松市多肥上町	H9	県道太田上町 志度線建設	香川県埋蔵文化財調査センター	県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成9年	AB
5	松林遺跡	高松市多肥上町	H7	県立高等学校 周辺通学路建設	高松市教育委員会	香川県立桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡 1996.3 高松市教育委員	ABC
6	日暮・松林遺跡	高松市多肥上町 多肥下町	H5～H7	都市計画道路 福岡多肥上町線	高松市教育委員会	都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 日暮・松林遺跡 1997.3 高松市教育委員	AB
7	宮西・一角遺跡	高松市林町	H6～H10	市道林町47号線建設	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成6･7年度 1995.3･1996.3　香川県教育委員会 弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報 Ⅰ・Ⅲ　H8.3･H10.3　高松市教育委員会	ABC
8	一角遺跡	高松市林町	H5 ・ H10	特別養護老人施設建設	高松市教育委員会	弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報 Ⅰ　H8.3　高松市教育委員会 香川県埋蔵文化財調査年報　平成5年度　1994.3 香川県教育委員会	AB
9	空港跡地遺跡 (亀の町Ⅰ)	高松市林町	H6	NTT通信機器設置	高松市教育委員会	空港跡地遺跡(亀の町地区Ⅰ)　1995.1 高松市教育委員会	A

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
10	空港跡地遺跡 (亀の町II)	高松市林町	H6	農協支所建設	高松市教育委員会	空港跡地遺跡(亀の町地区II) 1995.3 高松市教育委員会	A B
11	木太本村II遺跡	高松市木太町	H9	宮川河川改修	香川県教育委員会	埋蔵文化財試堀調査報告XI 1998.3 香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度 1992.2	A C
12	上天神遺跡	高松市上天神町 三条町	S62・63 H3・4	一般国道11号 高松東道路建設	香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財 調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 上天神遺跡 1995.12 香川県教育委員会他 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9年度 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 1998.3	A B C
13	太田下・須川 遺跡	高松市三条町 太田下町	H元	一般国道11号 高松東道路建設	香川県埋蔵文化財 調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 太田下須川遺跡 1995.3 香川県教育委員会他	A C
14	蛙股遺跡	高松市太田下町 伏石町	H3.4	一般国道11号 高松東道路建設	高松市教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第6冊 蛙股遺跡 1995.10 高松市教育委員会他	A B C
15	居石遺跡	高松市伏石町	H3.4	一般国道11号 高松東道路建設	高松市教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 居石遺跡 1995.10 高松市教育委員会他	A C
16	井手東II遺跡	高松市伏石町	H3	一般国道11号 高松東道路建設	高松市教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊 井手東II遺跡 1995.10 高松市教育委員会他	A
17	井手東I遺跡	高松市伏石町	H3	一般国道11号 高松東道路建設	高松市教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第4冊 井手東I遺跡 1995.3 高松市教育委員会他	A B C
18	さこ・長池II 遺跡	高松市林町	H2	一般国道11号 高松東道路建設	高松市教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 さこ・長池II遺跡 1994.3 高松市教育委員会他	A B C

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
19	さこ・長池遺跡	高松市林町	H元	一般国道11号 高松東道路建設	高松市教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　さこ・長池遺跡　1993.3　高松市教育委員会他	ABC
20	さこ・松ノ木遺跡	高松市林町	H2	一般国道11号 高松東道路建設	香川県教育委員会	一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　さこ・松ノ木遺跡　1994.3 高松市教育委員会他	AB
21	林・坊城遺跡	高松市林町 六条町	S63, H9・10	一般国道11号 高松東道路建設	香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　林・坊城遺跡　1993.11　香川県教育委員会他 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9年度　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1998.3	ABC
22	六条上所遺跡	高松市六条町 元山町	S63・H3	一般国道11号 高松東道路建設	香川県埋蔵文化財調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第5冊　六条・上所遺跡　1995.10　香川県教育委員会	A
23	東山崎水田遺跡	高松市東山崎町	S63	一般国道11号 高松東道路建設	香川県埋蔵文化財調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊　東山崎・水田遺跡　1992.11　香川県教育委員会	D
24	前田東中村遺跡	高松市前田東町	S63～H3 ・H5	一般国道11号 高松東道路建設	香川県埋蔵文化財調査センター	高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊　前田東・中村遺跡　1995.3　香川県教育委員会 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成9年度　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1998.3	C
25	天満宮西遺跡	高松市松縄町	H元	太田第2土地区画整理事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成元年度　香川県教育委員会　1990.3 讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～　高松市教育委員会　1992.3	ABC
26	松縄下所遺跡	高松市松縄町	H3・4	太田第2土地区画整理事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成4年度　香川県教育委員会　1993.3 讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～　高松市教育委員会　1992.3 むかしの高松　第4号　1994.3	ABC

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
27	境目下西原遺跡	高松市松縄町 木太町	H6	太田第２土地区画整理事業	高松市教育委員会	太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１冊　境目・下西原遺跡　高松市教育委員会　1998.3	ＡＣ
28	上西原遺跡	高松市木太町	H7	太田第２土地区画整理事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成７年度　香川県教育委員会　1996.3	Ａ
29	キモンドー遺跡	高松市伏石町	H5･7	太田第２土地区画整理事業	高松市教育委員会	太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊　キモンドー遺跡　高松市教育委員会　1999.3	ＡＢ
30	凹原遺跡	高松市多肥下町	H2	太田第２土地区画整理事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成２年度　香川県教育委員会　1991.3 讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～　高松市教育委員会　1992.3	ＡＢ
31	汲仏遺跡	高松市多肥下町	H9	太田第２土地区画整理事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3	ＡＣ
32	中間西井坪遺跡	高松市中間町	H元～3	四国横断自動車道建設	香川県埋蔵文化財調査センター	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成元年度　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1990.4 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成２年度　香川県教育委員会他　1991.8 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成３年度　香川県教育委員会他　1992.2 四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第２５冊　中間西井坪遺跡１　香川県教育委員会他　1996.11	ＢＣ
33	正箱遺跡・ 薬王寺遺跡	高松市檀紙町	H3	県道山崎御厩線道路改良工事	香川県教育委員会 香川県埋蔵文化財調査センター	県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡　香川県教育委員会他　1994.3	ＢＣ
34	兀塚遺跡	高松市檀紙町 円座町	H7･8	県道三木国分寺線改良工事	香川県埋蔵文化財調査センター	県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成７年度　香川県教育委員会他　1996.3 県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成８年度　香川県教育委員会他 1997.3 県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度　香川県教育委員会他　1998.3	ＢＣ
35	鬼無藤井遺跡	高松市鬼無町	H8～10	貨物ヤード移転関連事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1997.3 香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3	ＢＣ

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
36	西打遺跡	高松市香西南町	H8～9	貨物ヤード移転関連事業	香川県埋蔵文化財調査センター	高松港頭土地区画整理事業平成８年度埋蔵文化財発掘調査概報　高松城跡（西の丸町）・西打遺跡　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997.3 高松港頭土地区画整理事業平成９年度埋蔵文化財発掘調査概報　西打遺跡・高松城跡（西の丸町）　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1998.3	B C
37	香西南西打遺跡	高松市香西南町	H8～9	貨物ヤード移転関連事業	高松教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1997.3 香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3	C
38	筑城城跡	高松市鶴市町	H9	市立弦打公民館建設事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3 中世の城館跡筑城城を探る　発掘調査現地説明会資料　高松市教育委員会　1997.8	B
39	香西南西打遺跡	高松市香西南町	H9	地域老人福祉センター建設事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3	B
40	片山池１号窯跡	高松市西春日町	H6	個人宅地造成	高松市教育委員会	「香川郡坂田の廃寺址」史蹟名勝天然記念物調査報告(下巻)　香川県文化財保護協会 1975.2 香川県埋蔵文化財調査年報　平成６年度　香川県教育委員会　1995.3 片山池１号窯跡現地説明会資料　高松市教育委員会　1996.10	C
41	坂田廃寺	高松市西春日町				「香川郡坂田の廃寺址」史蹟名勝天然記念物調査報告(下巻)　香川県文化財保護協会 1975.2	C
42	松並中所遺跡	高松市松並町	H9･10	都市計画道路錦町綾南国分寺線建設事業	香川県埋蔵文化財調査センター	都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報平成９年度　松並・中所遺跡　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1998.3	B C
43	西ハゼ土居遺跡	高松市西ハゼ町	H9･10	都市計画道路木太鬼無線建設事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3 西ハゼ土居遺跡現地説明会資料　高松市教育委員会　1998.8	B
44	木太中村遺跡	高松市木太町	H10･11	都市計画道路福岡三谷線建設事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3	B

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
45	林・さこ遺跡	高松市林町	H8	四国横断自動車道建設	香川県埋蔵文化財調査センター	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997.3	A
46	林・下所遺跡	高松市林町	H8	県道中徳三谷線緊急整備事業	香川県埋蔵文化財調査センター	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1997.3	A
47	林・さこ遺跡	高松市林町	H8	四国横断自動車道周辺整備事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1997.3	AB
48	林・下所遺跡	高松市林町	H8～9	四国横断自動車道周辺整備事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1997.3	AB
49	川南・西遺跡	高松市春日町	H8	都市計画道路室町新田線建設事業	高松市教育委員会	都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書第１冊　川南・西遺跡　高松市教育委員会 1999.3	B
50	川南・東遺跡	高松市春日町	H8	都市計画道路室町新田線建設事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1997.3	D
51	新田本村遺跡	高松市新田町	H8～9	都市計画道路室町新田線建設事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1997.3 香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　199.3	B
52	小山南谷遺跡	高松市新田町 高松町	H5～7	県道高松志度線改良工事	香川県埋蔵文化財調査センター	県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　小山・南谷遺跡　平成５年度　香川県教育委員会他　1994.3 県道関係埋蔵文化財発掘調査概報平成６年度　香川県教育委員会他　1995.3 県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山・南谷遺跡Ⅰ　香川県教育委員会他　1997.8 「高松市新田町小山・南谷遺跡の発掘調査」条里制研究　第12号　条里制研究会　1996	BC
53	奥の坊遺跡群	高松市高松町	H8～	高松市東部運動公園(仮称)建設事業	高松市教育委員会	香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1998.3 香川県埋蔵文化財調査年報　平成９年度　香川県教育委員会　1999.3 奥の坊権現前遺跡　現地説明会資料　高松市教育委員会　1998.2	C

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
54	屋島城跡	高松市屋島中町 屋島東町	S55	遺跡確認調査	高松市教育委員会	屋島城跡　高松市教育委員会　1981.3 香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度　香川県教育委員会　1998.3	C
55	勝賀廃寺	高松市香西西町	H4	堤防改修工事	高松市教育委員会	高松市内埋蔵文化財発掘調査概報（平成３年度・４年度）高松市教育委員会　1993.3 第１１回特別展　讃岐の古瓦展　高松市歴史資料館　1996.1	C
56	多肥廃寺	高松市多肥上町				多肥郷土史　多肥郷土史編集委員会　1981.8	C
57	拝師廃寺	高松市上林町				第１１回特別展　讃岐の古瓦展　高松市歴史資料館　1996.1	C
58	高野廃寺	高松市川島本町				第１１回特別展　讃岐の古瓦展　高松市歴史資料館　1996.1	C
59	下司廃寺	高松市東植田町				「下司廃寺出土の磚仏片について」瀬戸内海歴史民俗資料館だより　第１号　瀬戸内海歴史民俗資料館　1996.1	C
60	山下廃寺	高松市新田町				古高松郷土誌　古高松郷土誌編集委員会　1977.2 第１１回特別展　讃岐の古瓦展　高松市歴史資料館　1996.1	C
61	宝寿寺跡	高松市前田東町				第１１回特別展　讃岐の古瓦展　高松市歴史資料館　1996.1	C
62	大池遺跡	高松市木太町				香川県史１　原始・古代　第３節　香川県　1989.3 弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅰ　高松市教育委員会　1988.3 濱田重人「高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器」香川考古第２号　香川考古刊行会　1993.12	A
63	弘福寺領田図北地区比定地	高松市木太町 林町	S62～H3	遺跡確認調査	高松市教育委員会	讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～　高松市教育委員会　1992.3 弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅳ　高松市教育委員会　1993.1	AB

	遺跡名	所在地	調査年度	原因となる事業	調査機関	参考文献等	分類区分
64	白山神社古墳	高松市木太町	S60	社殿改修工事	高松市教育委員会	香川考古第３号　特集：香川の中期古墳　香川考古刊行会　1994.12	A
65	西尾遺跡	高松市十川西町	H4	県道高松長尾大内線建設	香川県教育委員会	香川県埋蔵文化財発掘調査報告　平成５年度　香川県教育委員会　1994.3	B C

分類区分凡例　A　弘福寺領比定地の周辺に所在する遺跡
（概ね室町新田線を北限，コトデン琴平線を西限，春日川～古川を東限，多肥公民館～古川橋市道を南限とする範囲）
B　条里関係遺構を含む遺跡
C　古代（奈良・平安時代）の遺構を含む遺跡
D　その他関係が認められる遺跡

1　空港跡地遺跡（林町）

高松平野中央部南方に位置し，香東川によって形成された扇状地に立地する。高松空港移転に伴う跡地利用による諸施設の建設に先立つ発掘調査が実施され，弥生時代前期から江戸時代に至る大規模遺跡が埋没していたことがわかった。

調査は空港跡地全域に及ぶため調査区は広大である。そのため，例えば弥生時代中期後半から古墳時代後期の遺構では，複数の集落および墓域を確認しており，原始古代の高松平野の景観を復元するうえで恰好の材料となっている。さらに，弥生時代末から古墳時代初頭にかけての墳墓群は，円形・方形・前方後円形・前方後方形の周溝墓が見られ，古墳出現期における墓制を考えるうえで貴重な資料となった。また，弥生時代後期に属する出水状遺構を確認しており，高松平野の用水確保が古くから行われていたことが明らかになっている。

古代においても，掘立柱建物跡・溝などを検出しており，複数の集落が存在したことが明らかになつている。また，生産域である水田も確認されている。

中世の集落も検出しており，溝で区画された掘立柱建物群や墓が確認され，中世集落の構造変遷を知る資料となっている。また，備前焼壷・土師器皿・古銭を一緒に埋納した珍しい土坑も見つかっている。

出土遺物のうち珍しいものでは，鹿の線刻がある弥生土器，銅剣から転用された青銅器，弥生時代後期から古墳時代前期と推定される人形土製品，古代の彩釉陶器などがあげられる。(川畑)

2　多肥松林遺跡（多肥上町・多肥下町）

高松平野中央部南方に位置し，香東川によって形成された扇状地に立地する。県立高松桜井高校建設に伴う発掘調査によって，初めて確認された遺跡である。

発掘調査では，南北に蛇行して流れていた旧河道と，その東岸から弥生時代中期の建物跡を10数棟確認している。川の中からは多量の弥生土器や木器が出土した。出土した木器の中には，剣形木製品など祭祀道具も見ることができる。(川畑)

5　松林遺跡（多肥上町）

香川県立桜井高校の周辺通学路整備に伴って調査を実施した。調査面積は約1，000㎡で，幅１～５m，長さ250mと細長いトレンチ調査であった。扇状地形の末端部に位置し，東側には多肥松林遺跡が隣接する。

遺構はほぼ全域で検出しており，縄文時代晩期～近世にかけて断続的ではあるが長期間にわたって土地利用がなされている。縄文晩期では自然河道，弥生前期では集石遺構等が見られる。中心となる時期は弥生時代中期中葉である。竪穴住居４棟をはじめ，溝，土坑等の遺構を検出した。特筆すべきものとしては地震の痕跡である噴礫があげられる。この噴礫上には弥生中期中葉の土器が供献されていることから，この時期のものと考えられ，時期的に南海地震による液状化であった可能性が高い。地震に対する祭祀行為としても注目される。弥生後期になると，幅3．8mの大溝等が見られる。以後，遺跡は断絶し，中世から近世にかけての条里遺構が見られる。

条里遺構としてはＳＤ－101～ＳＤ－105の５条の溝がある。このうちＳＤ－102は幅１m，深さ30cmを測り，香川郡の一条と二条の条界にあたると考えられる。溝底では足跡も検出した。これに直交する溝ＳＤ－101は坪界溝と考えられ，東の多肥松林，日暮・松林遺跡にまで続くものである。この他，ＳＤ－101に平行し，半町東側に所在するＳＤ－103，ＳＤ－102に平行するように約３m南側で

検出したＳＤ－104がある。これらの溝の時期としては，埋土下層では９世紀の遺物が見られるが，14世紀に最終埋没したと考えられる。これらの溝の埋没後，ＳＤ－102に平行するように約３ｍ南側でＳＤ－105が掘削されている。ＳＤ－105は，幅1.６ｍ，深さ50㎝を測り，溝の両肩には径10～20㎝のピットが並んでおり，護岸施設と考えられる。18世紀の遺物が出土している。現代の水路も条里遺構に近接して掘削されている。(大嶋)

６　日暮・松林遺跡（多肥上町・多肥下町）

本遺跡は都市計画道福岡多肥上線の建設に伴って調査された。遺跡は旧高松空港の北西方向に位置し，条里地割の遺存する水田地域に立地する。多肥松林遺跡が西側に隣接する。調査区は現有水路や農道によって５工区に区分され，平成５年～７年にかけて数次の調査が実施された。

検出された遺構は弥生時代中期～近世に至る長期間にわたるが，中心的な存在をなすのは弥生時代である。遺構の分布は，北・南端部分ではやや希薄であるが，全体としては遺構の検出密度は高い。特に，弥生時代の遺構は中央から北側に集中している。

弥生時代の遺構は，時期的に大きく２期に分けられる。中期の遺構としては，18棟の掘立柱建物跡と溝等である。掘立柱建物跡は長軸が東西方向を示し，その位置関係より規画性が考えられる。柱穴の規模は深さ70ｃｍを測るものもあり，埋土中に土器が多量に検出されたものもある。後期の遺構としては，竪穴住居跡10棟・方形周溝墓１基・井戸１基・溝・土坑・ピット等がある。竪穴住居跡は円形と方形の平面形を呈し，最大規模のSH02は直径10ｍを測る円形の住居であり，多量の土器が出土した。方形周溝墓は7×5ｍの長方形を呈し，周溝内より土器が出土した。井戸は検出面で直径６ｍ，深さ1.２ｍを測る。住居跡群の北側では中期～後期の土器を河床直上より出土する旧河道が流れている。

13世紀初め頃の遺構には溝，旧河道がある。溝は調査区南側を不規則に走っており，上面及び埋土中より完形の瓦器椀が数点出土した。旧河道は，調査区南側を北東方向に蛇行しており，幅約８ｍ，深さ1.２ｍを測る。上層から13世紀初の土器，下層からは古墳時代後期の須恵器が出土した。

近世の遺構は，掘立柱建物・溝・木樋がある。溝は約110ｍ間隔で東西方向に延びる３本が検出され，条里制の坪境と考えられる。木樋は「ロ」字状に板材を組んでいる。(中西)

12　上天神遺跡（上天神町・三条町）

昭和62，63，平成３，４年度の足掛け４年にわたり発掘調査を行った縄文時代から中世にかけての遺跡である。東道路建設に伴い発掘調査を行った遺跡の西端にあたる。

弥生時代後期初頭の遺構は調査区全体で確認されており，遺構のまとまりから調査区内で４つの単位が認められている。遺跡は調査区中央部の３～５区で微高地が広がり，弥生時代後期初頭の掘立柱建物跡，竪穴住居跡などの集落域を確認しているが，確認した集落は竪穴住居跡に比べて掘立柱建物跡の数が多い集落構成をする。溝，土坑等から同時期の土器が多量に出土しているが，このうち大形鉢，把手付広片口皿には内面に赤色顔料(水銀朱を主成分)が付着しているものが多量に確認された。これらの土器は，付着状況から液状化した赤色顔料の使用に関わる用具と考えられており，特に把手付広片口皿は赤色顔料専用具であるとする。顔料の製造工程の初めには石杵，石皿が必要であるが，上天神遺跡例には全く伴わないことから，上天神遺跡では製造過程の最終段階もしくは，利用形態に合わせた調合工程，それ以降の顔料使用（消費）過程を想定している。

古代に関する遺構は調査区中央部の４区で確認した南北溝ＳＤ02，東西溝04，掘立柱建物跡ＳＢ06などがある。出土遺物からＳＤ02は奈良時代，ＳＤ04は12世紀頃の埋没と考えられる。ＳＤ02は

香川郡条里４条16里14坪と15坪の界線上にほぼ位置し，ＳＤ04は香川郡条里４条16里11坪14坪界に相当する。(山元)

13　大田下・須川遺跡（太田下町・三条町）

平成元年度，２年度に調査を行った弥生時代中期後半から鎌倉時代にかけての遺跡である。

弥生時代中期後半から後期にかけての遺構は調査区西部のＣ区に竪穴住居，掘立柱建物が集中する。Ｃ区の西側に所在するＳＲ02からは同時期の土器が多量に出土している。このうちの一点には胴部に鹿の線刻を施した壷が確認されている。

古墳時代中期から後期の遺構は調査区中央部のＥ～Ｇで竪穴住居跡や掘立柱建物跡が集中している。竪穴住居跡は出土した須恵器から５世紀後半の時期と考えられる。集落が存在する東側で確認された溝からも多量の須恵器が出土しているが，中でも樽形はそうは県下でも出土の少ないものとして注目される。

奈良から平安時代にかけての遺構は調査区西部及び中央部で認められるが遺構密度は希薄である。調査区西部で確認されたＳＲ０５からは同時期の土器と共に祭祀具と考えられる斎串をはじめとして木製品が出土している。同時期の集落は調査区内に認められないことから，近くに同時期の集落(公的機関？)の祓所から流れてきたものと想定できる。

調査区中央部のＥ区からＧ区にかけて確認した溝は，現在の条里地割に合うもので，南から一旦，北に流れ調査区中央部付近で東側へ約１町(104m)流れた後，北に屈曲し調査区外に逃げる溝である。出土遺物から10世紀頃に埋没したと考えられるものである。クランク状を呈する特異な溝である。(山元)

14　蛙股遺跡（伏石町・太田下町）

平成３，４年度に調査を行った弥生時代後期から近世にかけての遺構である。県道中徳・三谷・高松線（県道158号線）を挟み西側に１，２区，東側に３，４区を設定し調査を行った。

１区では旧河道の堆積層から弥生時代後期初頭と後期末の二時期の土器群が出土している。また旧河道の西岸には３基の土器棺が確認された。土地条件からすれば軟弱な地盤につくられており，当遺跡出土の土器棺の特徴として土器棺の周辺に河原石を配置している。

２区では２期の水田遺構と，それに関連する現在の高松平野の条里方向に合う溝，大畦畔（道）が確認された。

第Ⅱ期水田では畝状遺構が確認された。畝の幅は一律に30cmを測り，わずかに湾曲しながら東西に並列する。

第Ⅰ期水田では大畦畔と4.5m西側を平行して延びる小畦畔，小畦畔から直行して大畦畔に延びる小畦畔で構成される。耕作痕である畝状遺構の確認状況から４面の水田が区画されていたことがわかった。また大畦畔の西側に平行するＳＤ01も確認している。出土遺物から11世紀の半ば頃には埋没しているものと考えられる。このことから確認した２期の水田の時期はＳＤ01とほぼ同時期の遺構と考えられる

３区では弥生時代の溝，中世と考えられる水田土壌層を確認したが遺構密度は極めて希薄である。今回調査で確認した遺構に直接関係ないが，縄文時代以降の遺構面となる層より30cm下で鬼界・アカホヤ火山灰の純層を10cmの厚さで確認した。

４区でも３区同様遺構密度は希薄である。調査区東端で弥生時代後期末以降と考えられる溝を確認

した他は近世の土坑，塚を確認したにとどまる。(山元)

15　居石遺跡（伏石町）

平成３年度に調査を行った縄文時代晩期から近世の遺跡である。調査区の西端，中央部，東端の３箇所で旧河道を確認した。東端で確認したＳＲ03からは縄文時代晩期前半の体部外面に爪形文を施す深鉢，口縁部内面に玉縁状の肥厚をみる浅鉢などが多量に出土した。土器とともに打製石斧(石鍬)，石斧柄未製品を含む一定の大きさにカットされた加工木なども出土していることから，加工木を一時貯蔵していた施設の可能性も考えられる。

調査区西端のＳＲ01では分岐する水路(ＳＤ01)の取水口から古墳時代前期の小型¼製鏡３面が出土している。小型¼製鏡の形式は珠文鏡，重圏文鏡，素文鏡である。鏡が出土した位置から，水の安定供給を願い置かれたものと考えられる。ＳＲ01では堆積が進んだ３，４層で斎串の他，椅子，舟材などが出土している。同時に出土した土器から古代から中世の時期が考えられる。

一方，微高地上では旧河道と同時期の遺構は確認されているものの，溝，土坑などであり集落などの遺構は確認できなかった。居石遺跡の微高地はＳＲ01と02の分岐部分のすぐ南側であることから集落を営むには土地条件が悪かったものと考えられる。(山元)

17　井手東Ⅰ遺跡（伏石町）

平成３年度に調査を行った弥生時代中期から近世にかけての遺構である。ＳＤ10，11と呼称している弥生時代中期中葉の溝からは多量の土器とともに，鉄斧柄，農具（広鍬，狭鍬，平鍬，又鍬），臼，竪杵，弓，容器，祭祀具（琴，鳥形，陽物形，舟形），箱材，編物等の木製品が多量に出土した。

古代から中世にかけての遺構として調査区西端で確認した南北溝ＳＤ01がある。坪界水路より西5.6ｍの位置で確認した。溝の中には２本の流路が存在し東側の流路が西側に比べ10cm高い。出土遺物から12世紀後半の時期が考えられる。

近世の遺構は調査区中央部に集中し，東西溝，南北溝の他，溝に接するように土坑を多く確認した。確認した土坑の内，寛永通宝が出土したものや人骨，たが状の竹が出土したものなどがあり，墓である可能性がある。(山元)

18　さこ・長池Ⅱ遺跡（林町）

平成２，３年度に調査を行った弥生時代前期から近世にかけての遺跡である。調査区東半部は微凹地，西半部は微高地である。東半部の微凹地には弥生時代前期末と考えられる不定形小区画水田を約2,000㎡確認した。水田が洪水砂で埋没した微高地に竪穴住居跡，掘立柱建物跡を確認している。出土遺物から弥生時代中期のものと考えられる。西半部では，近世頃と考えられる掘立柱建物跡５棟を確認した。位置関係からＳＤ03，04はこの建物群に伴うものであると考えられる。調査区西端では，旧郡界線に重複する形の南北溝(ＳＤ01)とそれから東へ７ｍ離れ平行に走る南北溝(ＳＤ02)を確認した。両溝とも出土遺物はないが，ＳＤ02に隣接するＳＰ11から須恵器の甕が出土しており，ＳＰ11の埋土とＳＤ01，02の埋土が同様であることから同じ時期であると考えられる。(山元)

19　さこ・長池遺跡（林町）

平成元年に調査を行った縄文時代晩期から中世にかけての遺跡である。

調査区の東半部は旧河道，西半部は微高地(弥生前期以前は旧河道)という地形環境になっている。

東半部はさこ・松ノ木遺跡西半部の遺構状況と同じであり，旧河道は弥生時代前期には埋没が始まり古代末の段階では川としての機能を失っている。旧河道が堆積していく段階で西側微高地から投棄された弥生時代から古代にかけての遺物が多く出土している。堆積がほぼ終了した段階で古代～中世の水田が造られており，いずれの水田も不定形小区画水田である。

西側微高地では，弥生時代中期と考えられる竪穴住居跡，掘立柱建物跡，周溝墓等が確認されている。旧河道のすぐ西側の微凹地には弥生時代前期末頃と考えられる不定形小区画水田が確認された。

古代～中世に関する遺構は，前述の水田遺構の他，ＳＤ01，02，03などがあり，条里関係の遺構と考えられる。ＳＤ01，02は６ｍの間隔をおく平行溝である。坪界線からの距離は，ＳＤ01が６ｍ，ＳＤ02が約12ｍである。時期は上部の包含層から９世紀以前の時期が想定できる。ＳＤ03は坪界から26.5m離れた南北溝で出土遺物はないが，古代から中世の時期を考えている。(山元)

20　さこ・松ノ木遺跡（林町）

平成２年度に調査を行った弥生時代から中世にかけての遺構である。

調査区の大半が旧河道で，東端に微高地が存在する。旧河道は先述したさこ・長池遺跡で確認している旧河道と同一のものである。旧河道の堆積層からは弥生前期以降の遺物を確認しているが，第１層と呼んでいる砂層以下では多量の植物遺体，弥生土器とともに櫂状木製品が出土している。最も遺物が多く包含されていたのは，古代末と考えられる不定形小区画水田の土壌層からである。水田遺構を平面で確認したのは，古代末以降の水田２面の他，古墳時代（５世紀末～６世紀初頭）の水田１面である。古墳時代の水田遺構では調査区の北側で河原石を積み上げた畦畔を確認し，南側では小区画に区切られた畦畔を確認した。同時期と考えられるＳＤ11からは廃棄された木樋を確認した。

微高地においては，潅漑用と考えられる水路ＳＤ02がある。土層堆積，出土遺物から弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が出土していることから，この水路は旧河道から微高地上に水を潅漑するための水路と考えられる。同様の水路は調査区東端でも確認しているが（ＳＤ06，07），これらは弥生時代後期の遺物しか含まないことから短期間に廃絶したものと考えられる。

微高地での古代から中世の遺構は，ＳＤ01，03，05を確認しているが，奈良時代の溝ＳＤ03は高松平野の条里方向に合い坪界に相当する。ＳＤ01は条里方向に合うが，坪界から15mほど東にずれるうえに出土遺物がなく時期が不明であるが，埋土の状況から中世以降であると考えられる。(山元)

21　林・坊城遺跡（林町・六条町）

昭和63年度国道11号高松東道路建設に伴う調査で，縄文時代晩期から中世にかけての遺構・遺物を確認している。縄文時代晩期の遺構は調査区中央部で検出したＳＲ01流路Ａの川底から縄文時代晩期後半の突帯文を施した多量の土器とともに鍬，鋤状木製品などの木製農耕具が出土した。このうちほぼ完形の諸手鍬は，出土した当時，水田耕作を示す最古級の農耕具出土として注目された。

弥生時代後期後半の遺構として，旧河道ＳＲ01流路Ａが埋没した段階で旧河道の西岸に円形周溝墓が確認された。この円形周溝墓は平成９，10年度の四国横断自動車道建設に伴う同遺跡の発掘調査で国道の南北の調査それぞれで１基ずつ確認されている。円形周溝墓の確認位置は旧河道の西岸に約20ｍの間隔をもち，規則的な配置が認められる。

古代の遺構は少ないが，条里関係の遺構として平成10年度調査地で現在の地割に合う南北方向の坪界線が３本確認されている。このうち２本の溝は出土遺物から８世紀の時代が考えられている。また東西方向の坪界線と想定されるものも確認されており，こちらは中世頃の時期としている。なお，確

認した東西方向の坪界線は現在の地割も周辺に比べやや乱れており，確認した坪界線も乱れていることから，この乱れは中世頃まで遡ると考えられている。(山元)

24　前田東・中村遺跡（前田東町）

前田東・中村遺跡では縄文時代後期前半から近世にわたる各時代の遺構・遺物が確認されている。このうち最も注目される時期は，古代（7～12世紀）の遺構・遺物である。

縄文時代のものとしては遺跡中央部の旧河道から出土した縄文時代後期前半の多量の土器，遺跡東部では晩期の土坑，ピットなどを確認しており，後期前半の土器群は高松平野の土器編年の基準資料となり，晩期の遺構は高松平野での確認例が少ないだけに当時の生活を考える上での資料となろう。

弥生時代では中期に遺跡の東部で竪穴住居，土坑などが確認され，後期では遺跡の中央部から東部にかけて竪穴住居や掘立柱建物が確認されている。また，旧河道からは多量の土器が確認されていることから周囲に大規模な集落が存在している可能性がある。

古墳時代では旧河道から古墳時代中期の土器とともに木樋や櫂などの大型品や農具，工具の柄などの木製品が出土している。

古代前半では遺跡の西部と中央部に掘立柱建物が集中している。遺跡の西側の掘立柱建物群は出土遺物から8世紀中葉～9世紀初頭の時期のもので計画的な建物配置が見られる。一方，遺跡の中央部では8世紀頃の大型の建物が多く認められ，作業小屋と考えられる同時期の竪穴住居も確認されている。包含層の出土ではあるが，同時期の瓦も多く出土している。遺跡の東部では，落ち込み状遺構ＳＸ02から7世紀後半の軒丸瓦と土器が出土している。遺跡の東端部の旧河道からは斎串・人形・刀形などの木製模造品が出土している。これらの遺構・遺物に加え，帯金具や墨書土器の出土もあり，古代前半に該当するこれらの遺構・遺物から，報告者は古代前半の時期に前田東・中村遺跡を含む付近に公的施設が存在していた可能性と，それに伴う遺跡東端部の旧河道を祓所と想定している。

古代後半では遺跡中央部の2箇所を中心に掘立柱建物群が存在し，このうち東側のＥ区では，建物群の中央部に存在する10世紀後半代の南北溝を境にして掘立柱建物が建てられている。建物群は2次期に分かれ建物群の西側には建物群に対応するように，地鎮遺構と考えられる土坑がそれぞれともなう。

以上のとおり前田東・中村遺跡では各時代のものが確認されているが，7世紀から8世紀の瓦についてはその出土状態から，前田東・中村遺跡の北200mに存在する宝寿寺との関係が指摘されており，遺跡自体が寺域に取り込まれる可能性があり，遺跡内で確認された同時期の建物群はそれに付随するものとしている。

また，古代後半の10世紀の建物群についても公的な建物の可能性が考えられる。(山元)

25　天満・宮西遺跡（松縄町）

都市計画道路福岡多肥上町線の建設に先立ち，南北200m幅平均20mの長さにわたって発掘調査を行った。当遺跡は南北600m東西200mの規模で，南々東一北々西に走る微高地にのっており，標高は5～6mである。調査区は，この微高地を斜めに横断する形で設定されたことになるが，調査区北側では微高地北側の谷とともに，さらに当微高地の北東にある別の微高地の縁辺も確認した。調査区において検出された遺構は，大きく弥生時代前期中頃，弥生時代後期，8世紀，中近世の4時期に分かれる。

弥生時代前期中頃の遺構としては，微高地上から直径約65mの環濠に復元可能な溝と，土坑を検出

した。溝が囲む範囲内に土坑が集中することから，その範囲内に集落があったと想定されるが，後世の削平が著しく，竪穴住居址は確認されなかった。溝内からは多くの土器が出土したが，上層と下層の２時期に分かれる。土器には木葉文をあしらったものがあり，土器以外に磨製石庖丁，土製紡錘車が出土している。

弥生時代後期の遺構は，微高地上から竪穴住居址16棟以上，井戸２基，多数の溝，柱穴，土坑を検出した。竪穴住居址の平面形態には，円形13棟以上と方形３基の２つがあり，円形のものにはその外側に溝を巡らすものもある。現在整理中であるので，遺構の細かい時期差は述べることはできないが，集落構造の変遷を知る資料になると考えられる。遺物としては土坑から土器が一括で出土しており，鉄斧柄等の木製品，管玉・ガラス玉の装飾品が出土している。

微高地北側の谷には，弥生時代前期から後期にかけての遺物を大量に包含した自然流路がある。流路内からは弥生時代中期の土器も出土しているが，同時期の遺構が微高地上に存在しないことから，上流にその時期の集落が存在する可能性がある。また流路からは木製の舟形模造品，線刻のある板石も出土している。

７～８世紀の遺構は，微高地上で柱穴，溝があり，５棟以上の掘立柱建物が復元できる。またこの時期，微高地北側の谷では不定形な水田が営まれており，谷を東西に横断する畦畔の一つには石が大量に埋め込まれたものがあり，谷を横断する際の道として機能していたと考えられる。

中近世の遺構は，集落に伴うと考えられるものは確認されておらず，水田に伴うと考えられる溝や牛の足跡，鋤跡を検出しており，この時期には調査区付近は全面水田化されたと推定される。溝には条里の坪界線と一致するものもある。(川畑)

26　松縄下所遺跡（松縄町）

太田第２土地区画整理事業の都市計画道路，福岡多肥下町線の建設に伴って平成３年９月から12月にかけて調査を実施したものである。

位置は，弘福寺領田図北地区比定地から北西に約1kmの地点で，野田池の東側堤防裾部に当たる。野田池は，周辺に存在する大池・長池等旧河道を利用した溜池と異なり，条里地割の阡陌に堤防の西と南を規制された皿池で，微高地上に構築されているものである。従って松縄下所遺跡も同一の微高地の縁辺部を占めており，調査区の東と南で，現地表からも明確な高低差をもって旧河道に移行する。調査は，道路の予定線内を東西約16m，南北約210mにわたって実施した。遺構面は現水田耕作土直下のごく浅い部分に存在する黄褐色シルト質極細砂～細砂層で標高8.5m前後を測る。

遺構は，調査区のほぼ中央部を南北に貫流する２本の直線平行溝（SD01～03・08）と，これに一定の間隔をもって，同様に２本一組となって直交する直線溝をはじめとする多くの溝状遺構や南北直線溝に沿う掘立柱建物跡，またこれらの遺構にともなって８世紀前半を中心とする多量の須恵器片等が出土した。

南北の平行溝は，灰褐色シルト質極細砂埋土の上層溝（SD01・02）と黒褐色シルト質極細砂埋土の下層溝（SD03・08）がほぼ重層しており，下層溝の埋没後に上層溝が改めて掘削されたものと見られる。SD01・02はともに幅70cm～1m，深さは最も残りがよい場所でも10cm足らずで，遺構面はかなり後世の削平が及んでいると考えられる。一方，SD03・08には，同様に２本が平行して東西方向に直交する交差点状の部分が２箇所にみられ，これらの中心間距離は約52mである。SD03・08も含めて溝底の高低差にはかなりの凹凸があり，SD03・08は北側の交差点でそのまま北へ延びずに東，西へと屈曲させている。方格の土地区画に主目的をおきながら雨水等の雑排水を集積して河道に流すような施設

であったと考えられる。

SD03・08に沿って6棟の掘立柱建物跡が確認された。このうちSB04は柱間約1．5m，３間×４間以上で1辺約80cmの隅丸方形の柱穴が並ぶ総柱のもので，南側は柵列状のピット列を挟んで東西溝に面している。時期を明確に示す遺物は出土していない。そのほかの５棟についてもSD03・08に梁間を面した配置になっているが，柱穴に切り合いが認められ，厳密に眺めると微妙に溝と斜行しているものもあるため溝の築造時期も含めていくらかの時期差が考えられる。

出土遺物は，須恵器を中心に7世紀中頃から8世紀後半にさしかかる頃までのものが大部分を占め，中でも高台を付し，器壁が直線状に立ち上がる杯身や短脚で裾部がラッパ状に開き脚端部をつまみ上げる高杯の脚部片が目を引く。これらの遺物は時期的なまとまりをもたず，時期幅をもった遺物が雑然と遺構に包含されているため，遺構相互の時期差を示すというよりはむしろ遺構存続の期間を示すものと把えた方が妥当と考えられる。最終的な判断は今後の整理作業の結果を待ちたい。

この調査で検出された平行溝は，①幅２m前後の間隔で200m以上にも及んでいる点，②沿線に掘立柱建物跡が規則的に配置されており，その内の１棟は柱穴・建物ともに現時点では市下有数の規模を持つこと，③遺物の年代観から7世紀半ばから8世紀後半までの時期が考えられること等の理由により，足跡・轍等の決定的な根拠には欠けるものの，計画的な幹線道路状の遺構と考えられる。SD03・08の東約12mに溝と平行して延びる里道(福岡多肥下町線建設により消滅)は復原条里坪界線に比定されており，東西２箇所の平行溝も52m前後の間隔で，概ね東西の坪界線に重複している。またこの調査区を含む坪並の南北列が南北幅約115mを測り，条里プランの標準的な1町＝109mよりも長いことも指摘されている。現地調査終了直後で，全般にわたって細部までの検討に至っていない段階ではあるが，高松平野の条里施行に何らかの形で関わっている遺跡であると考えられる。(山本)

29　キモンドー遺跡(伏石町)

遺跡は都市計画道路朝日町仏生山線の建設に伴って調査が実施された。調査は平成５年と８年の２次に分かれて実施された。調査区は現有の水路・道路によって４工区に分けられている。遺構は全域に検出され弥生時代・中世・近世の３時期に比定される。

北側の１工区では，弥生時代の溝・井戸・旧河道と近世の土坑，近代の井戸が検出された。旧河道は西岸付近のみ検出され，規模・方向は不明である。埋土中より中期～後期の土器を出土した。４本の溝は，旧河道の埋没後に掘削されたもので，井戸状の落ち込みを持つ。近代の井戸は3×2mの長方形を呈し，四方は石組みであり，下方は立板と横木によって補強されていた。

中央の２・４工区では，16世紀末頃の堀跡，土坑と近世の溝，土坑が検出された。中世の堀跡は南側の３工区で検出された堀跡と同一であり，工区の南端と北端では石垣を検出し，全域にわたって裏込めの礫群が見られた。

南側の３工区では，弥生時代・中世（16世紀末）・近世の遺構が検出された。弥生時代は竪穴住居跡・溝がある。中世の遺構は逆Ｌ字形を呈する堀跡と溝・集石遺構がある。堀跡は南東コーナーを境に東西方向と南北方向に直角に曲がっている。検出面で幅は約４m，底部約1．7m，深さは１～1．8mを測る。東西方向の堀跡は，両側に一段ないし二段の石垣が残存し，間仕切りの石垣が２ヶ所ある。南北方向の堀跡にも一段の石垣があり，４工区に延びている。堀の中から16世紀末～18世紀の遺物が出土した。堀跡の内側は大規模な埋め立てが行われており，漆塗り椀や下駄が出土した。この堀跡は佐藤城に関連していると考えられる。江戸時代になると，堀跡は完全に埋め立てられ，掘立柱建物跡や蔵跡・石塁が築かれていた。(中西)

30　凹原遺跡（多肥下町）

都市計画道路福岡多肥上町線の建設に先立ち，南北約200m幅平均15mの長さにわたって，発掘調査を行った結果，旧地形は北と南に微高地があり，その間には幅10mほどの南西－北東方向の谷が存在することが明らかになった。また南の微高地の南側には，さこ・長池及びさこ・松ノ木遺跡において確認された旧河道の続きが存在する。

微高地及び谷において確認された遺構は，弥生時代前期末から近世に及ぶ。弥生時代前期末の遺構は，微高地で土坑1基，谷では幅4m深さ70cmの溝を確認したが，この遺跡の主体をなすものではない。溝は粗砂により埋まっており，洪水により機能が停止した可能性が考えられる。

次の時期の弥生時代中期中頃には，直径6～7mの不整円形の竪穴住居址が1棟ある。炭化材並びに炭化物が散乱していることから，いわゆる焼失家屋と考えられる。またこの竪穴住居址の特徴としては，中央ピット付近の床面及び中央ピット埋土からサヌカイトのチップが大量に出土したことである。このことは，この住居址が石器製作の場として利用されたことを示すものである。

当遺跡の主体を成すのは，弥生時代後期後半から古墳時代初頭であり，調査区全体にわたって当該期の遺構が検出された。微高地上では，竪穴住居址14棟，井戸1基の他，溝，土坑，壷棺墓を確認している。また谷底を掘削し，そのまま溝として利用しており，谷埋土中には微高地上の集落から廃棄された土器片を大量に包含していた。

竪穴住居址の平面形態は，円形２棟，方形10棟，不明２棟であり，方形のものにはベッド状遺構を付設するものや，間仕切板をもつものがある。この遺跡の竪穴住居址の一つの特徴として，中央ピットの掘方の形態があげられ，掘方上面は方形だが，途中に段をもち，下段は円形である。また焼失家屋も見られ，柱材・屋板材の炭化材等が良好に残存しているものがある。この弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての集落址は，周辺の地形分析，遺物の散布状況等から考えて，今回の調査区を東限として西に広がることが想定される。弥生時代に比べ，古墳時代以降の遺構の数は少なくなる。谷には，埋没する途中で，古墳時代後期の溝状遺構が存在する。また微高地上には，時期不明の条里坪界線にのった東西の溝や近世に属すると推定される土坑が存在する。他には，噴砂も確認しており，遺構との切合関係から古墳時代から中世後半にかけての時期を想定している。(川畑)

32　中間西井坪遺跡（中間町）

高松平野西縁にそびえる六ツ目山北東裾に位置する。遺跡は，東側の扇状地扇端部と西側の丘陵部の２つに分かれる。

東側では，弥生時代後期の集落と中近世の集落が見つかっている。とくに弥生時代では，旧河道底から鍬などの木製品を貯蔵したと思われる円形土坑が確認されている。

一方西側では，旧石器が大量に出土するとともに，その下位よりAT火山灰が見つかっている。旧石器とAT火山灰との層序が確認されたことは評価できるとともに，高松平野では初の旧石器大量出土となった。

さらに，古墳時代の重要な遺構も見つかっている。埴輪焼成土坑とこれに関連する竪穴住居，さらに前方後円墳を含む3基の前期古墳である。埴輪焼成土坑は，いびつな五角形をした浅い掘り込みで，おそらく天井をもたない野焼き方式の施設と推測されている。この土坑前面の谷からは，焼成に失敗した埴輪や日常雑器の土器類が大量に出土している。竪穴住居は，一辺８mを越える大型のもので，埴輪などの破片が出土し，埴輪焼成土坑に伴う工房と推測されている。出土遺物より，両方とも古墳時代前期後半のものである。さらに，土製の棺桶である陶棺がそれぞれより出土しており，類似した陶

棺を出土した市内鬼無町の今岡古墳との関係が注目される。

前期の古墳群は,埴輪焼成土坑などよりやや古いもので,周溝からは円筒埴輪や舟などの形象埴輪が出土している。(川畑)

43　西ハゼ土居遺跡（西ハゼ町）

都市計画道路木太鬼無線の整備に伴い調査を実施した。遺跡の東側は香東川の氾濫原であり,遺跡内にも流路が認められる。約5,800㎡の調査地の西半は弥生～中世前半,東半は中世後半～近世の遺構・遺物を検出した。

弥生時代前期～後期にかけて自然河道を検出しており,その埋没過程の後期前半頃に小区画水田が営まれていたことがうかがえた。後期では自然河道の中洲上で若干の土坑,柱穴等を検出した。また,地震による液状化現象である噴砂が認められ,弥生前期以前のものと推定できる。

中世末では堀で周囲を区画された屋敷跡を３棟検出した。いずれも一部しか検出していないため,正確な規模は不明であるが,一番大きいもので約44m四方,次に大きいもので約33m四方,一番小さいもので約22m四方の規模と考えられる。屋敷の規模は一町の十分の一(約10.9m)を基準としていることがうかがえる。堀の埋土中からは16世紀の遺物が出土しており,一番最後に埋没したと思われる33mの屋敷の最終埋没が肥前系の胎土目積み段階である。屋敷を囲む堀を取り込んだ形で側溝が掘削された東西に伸びる道路状の遺構を基準とし,その両側に建物が配置されている。井戸もこの道路の両側に限られて検出されている。出土遺物中に瓦や鉄滓を含むこと,堀や塀を巡らし防御的機能を備えていること,「土居」の地名が残っていることから武士の居館あるいはそれに付随する施設であった可能性が高い。1854年梶原景昭著の「讃岐國名勝図会」によると16世紀後半の坂田郷には太田兼久・兼氏を城主とする坂田城が存在していたとされており,その候補地として考えられる。さらに遺跡北方の室山には室山城が所在しており,平時の居館と山城との関係も想定できる。

条里遺構としては,遺跡中に香川郡の十七里と十八里の里界が位置しているが,養魚池が所在し,削平を受け検出できなかった。中世末の屋敷は条里地割の一坪内に全て所在し,坪内の土地利用を考える上で参考になる。(大嶋)

49　川南西遺跡（春日町）

本遺跡は,高松平野北東隅の三角洲帯沖積面に形成された中～近世にわたる集落及びこれに接した農耕地から成っている。この地域は,西嶋八兵衛による17世紀前半代の干拓事業が行われたとされて,『南海通記』では,16世紀中頃に「水滴テ…其潮先山田郡小山ト云フ所迄サシ込」等と伝えられる。

東西に細長く伸びた道路予定地であったが,曳用道路等未調査部分を挟んで西から①噴砂検出区,②WI拡張区,③W工・Ⅱ区,④E工・Ⅱ区の４調査区を設定して,幅約20m,延長約200m,面積2540㎡を発掘し,土師質土器・陶磁器を中心とする遺物や下記の遺構を確認した。

出土遺物からみれば集落の存続期間は概ね15世紀中葉～17世紀中葉ではないかと考えられる。

①は,人為的な遺構は皆無であるが,旧河道の汀線付近とみられる位置で17世紀頃の地震に伴う噴砂跡を検出している。「ヒゲ」状に蛇行して南から北西方向に断続する噴砂(液状化)痕跡である。

②は,③と同じく集落域であるが③よりもやや早く廃絶し農耕域に変わったとみられる。ここでは当該集落の開発地主としての可能性も考えられる火葬人骨を遺存した土壙墓を検出している。

③は,本遺跡の中核をなすと考えられる集落・居住域であり,旧山田郡条里に則った可能性も皆無とはいえないらしい南北・東西方向の直線の溝遺構が開削・改削されている(同条里を地図上で延長

して仮に推定した坪付は５条15里29坪である)。また，径3．4mの擂鉢状の素掘自噴井戸を持ち，方形の環壕状溝で組まれた住居域もみられた。数世代の間の居住域であろう。ここでは八方木瓜形の鏡目・無文，鉄地銅張の鍔が出土しており「一領具足」程度のやや富裕な農民層の存在も考えられる。

④は，③と同時に併存した農耕域であると考えて特段矛盾はないが，③区とは，その東端寄り南北溝・道路遺構を境界に明確に区分され，建物遺構は一切検出されず農耕関連とみられる「溝状遺構」のみが錯雑に設けられた区域である。③，④の機能分担を前提とした占地が行われたものであろう。

（末光）

51　新田本村遺跡（新田町）

本遺跡は都市計画道路室町新田線の建設に伴って調査された。調査区の面積は約4900m²を測り，現有の水路・道路によって６区画に区割りされる。遺跡の西側は新川の氾濫地域であり，西から東へゆるやかな傾斜で高くなっている。

遺構の検出密度は西端部を除いて非常に密であり，その時期は弥生時代終末～近世までの長期間にわたっているが，その中心となるのは９～13世紀である。

弥生時代の遺構は，非常に少なく，東側付近で検出された溝・土坑のみである。溝は南北・東西方向に延び，底面直上より完形に近い壺・甕が出土した。

９～13世紀の遺構は非常に多く，掘立柱建物跡25棟以上，井戸２基，多数の溝，土坑，ピット等が調査区全域で検出された。掘立柱建物は２×３間ないし２×２間の規模を測るものが大部分であり，総柱建物のものもある。東端で検出されたSB3001は5×2間の総柱建物であり，主軸を東西方向に持つ。柱坑は方形を呈し，柱痕が明瞭に残存する。柱穴内には柱材や根石を残存するものもある。溝は多数検出されるが，西端近くにあるSD106と東端のSD3002は規模が大きく，東西方向に直線的に延びており，条里地割と何らかの関係があると考えられる。SD106は幅 5m，深さ１mを測り，須恵器，瓦器，土師器，青磁，瓦等が出土した。SD3002は幅５m，深さ1．6mを測る。調査区西端にもやや不整形であるが南北方向に平行して走る２本の溝がある。

近世の遺構は掘立柱建物跡・土坑・溝・水田３面がある。掘立柱建物跡の柱穴は小規模で灰白色土を充填する。３面の水田は調査区西側にのみ検出され，条里地割に基づく南北・東西方向の溝を伴っており，水田上には多数の犂跡が見られる。(中西)

53　奥の坊遺跡群（高松町）

高松市東部運動公園(仮称)整備に伴い平成７年度から順次調査を実施している遺跡群で，奥の坊遺跡，奥の坊権現前遺跡，奥の坊奥池西遺跡，大空北遺跡の４集落遺跡と，大空古墳，金川渕古墳，奥ノ坊２号墳の３基の後期古墳から構成され，全体面積は計30，000m²にのぼる。平成10年度までに遺跡群全体の約40％の調査が完了している。試掘調査において縄文後期から近世にいたる遺構・遺物を検出した。

奥の坊権現前遺跡では弥生時代後期としては県内最大級の掘立柱建物が検出され，またその南側には製塩土器を多量に出土した土坑が見られた。これらを囲うように方形区画と考えられる溝が検出されており，さらにそのまわりに竪穴住居が円形に巡るような配置が見られた。集落の内部構造がよく分かる例と言える。また，遺跡の南東約400mの位置には後期初頭の標識土器を出土した遺跡として知られる大空遺跡が所在することから関係が注目される。

奥の坊遺跡では弥生時代中期前半の集落を検出している。遺構としては竪穴住居，溝，土坑等を検

出しており，遺物では石器およびサヌカイトの剥片が非常に目立つ。

条里関係遺構としては奥の坊遺跡から奥の坊権現前遺跡にかけて直線的に検出した検出長約200mの溝があげられる。溝はほぼ東西方向で，一部N－5°－Eに傾く。大局的に見れば約2km離れた新田本村遺跡で確認された条里地割（N－5°－E）と一致する。山田郡に広く分布する条里地割と方位が異なり，先行するものと考えられている。また，この溝に平行する掘立柱建物を数棟検出している。これらの遺構からの遺物は極めて少量であるため，整理作業を待たなければ詳細な時期は不明であるが，包含層の遺物から7世紀末～8世紀前半の年代観が考えられる。（大嶋）

第３節　高松市内の古代寺院

1　高松市内の古代寺院

(1)　はじめに

讃岐平野のほぼ中央を北流する香東川(上流部でコトガワ,下流部でゴウトウガワと呼ばれる。)を,主たる営力として形成された平野を高松平野と呼ぶ。この高松平野においては,条里制が平野のほぼ全域に見られる。古墳時代においては,石清尾山古墳群等の著名な古墳群が存在し,また,弥生時代の遺跡についても,近年市内の各所で新たに発見されている。以上から,高松平野においてはかなり早い時期から開発が進んだことが考えられる。

今回テーマとする古代寺院についても,高松平野の各所に確認されており,仏教文化が早い時期から取り入れられていることが知られる。その事例として,よくとりあげられるのが,久本古墳(新田町所在)出土の承台付銅鋺である。久本古墳は市内屈指の横穴式石室墳であり,玄室奥に石棚を持つことでも知られている。この銅鋺は追葬者に伴うものとされているが,仏教用具としての銅鋺が副葬されていることは,古墳時代末期の高松平野に仏教文化が存在したことの傍証といえるのではないか。

さて,本稿では,久本古墳以降の高松平野(正確には,現在の高松市域)における仏教文化の展開について,古代寺院に焦点をあて,少しばかりの調査を試みてみたい。なお,ここでいう古代とは単純に,奈良時代および平安時代を指すものとする。

(2)　高松平野における古代寺院の概要

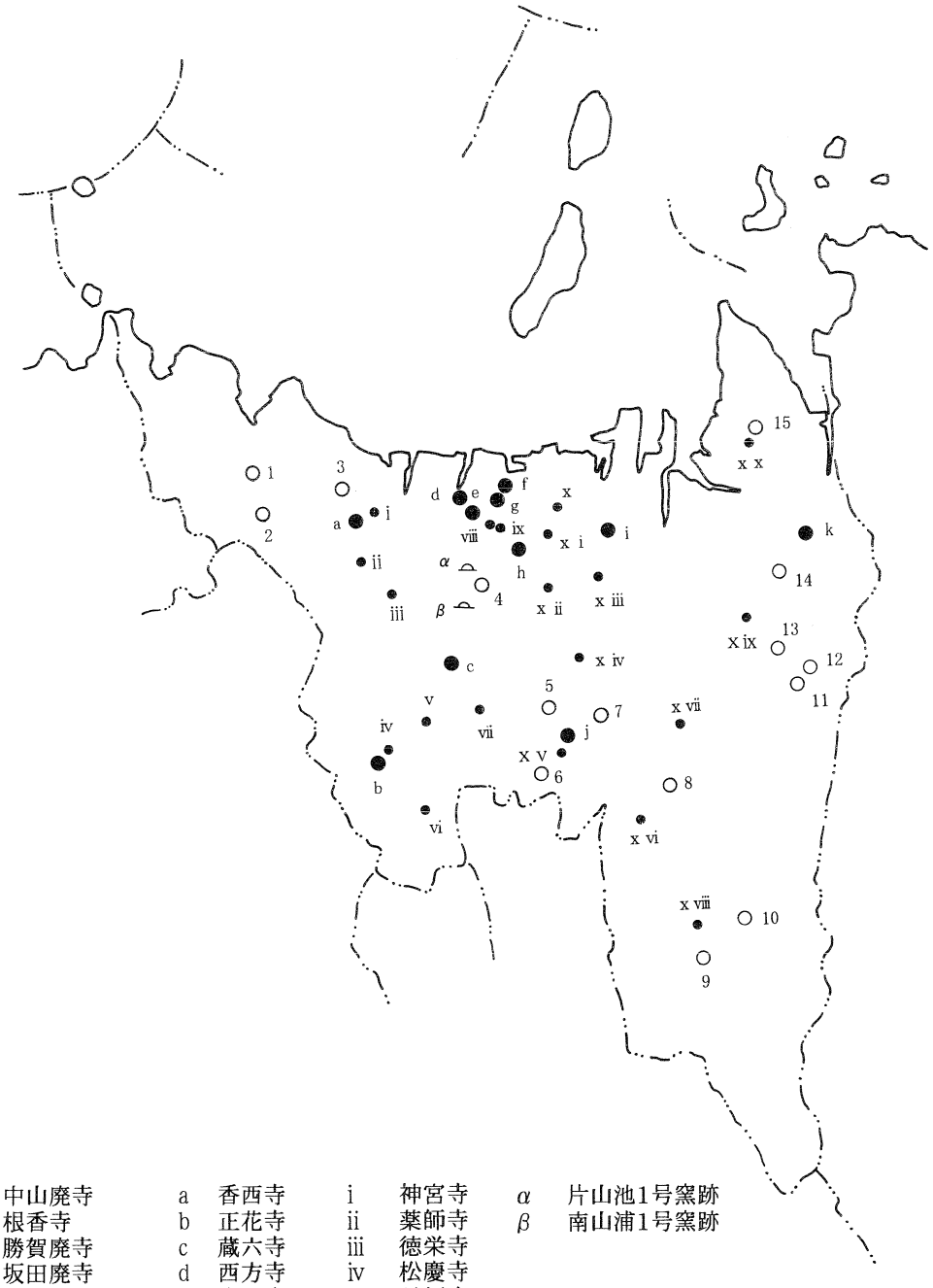
高松平野は古代においては,山田郡と香川郡に分割される。和名抄によれば,このうち,山田郡11郷(殖田・池田・坂本・蘇甲・三谷・拝師・田井・本山・高松・宮処・喜多／山田郡海郷の記載のある木簡の出土も知られている。)があげられている。また,香川郡は12郷(大野・井原・多配・太田・笶原・坂田・成相・河辺・中間・飯田・百相・笠居／原里・尺田郷の記載のある木簡等が確認されている。)があげられている。

さて,高松平野において,古代寺院として,その存在が知られている遺跡は,次の通りである。

東側から列挙すると,前田廃寺,前田平尾庵,滝本神社周辺(以上,宮処郷),山下廃寺,屋島寺(以上,高松郷),下司廃寺,松尾廃寺(以上,植田郷),高野廃寺(池田郷),拝師廃寺(林郷),百相廃寺(百相郷),多肥廃寺(多肥郷),坂田廃寺(牧田郷),勝賀廃寺,中山廃寺,根香寺(以上,笠居郷)があげられる。これらのうちほとんどが廃絶している寺院であるが,わずかに屋島寺と根香寺が,現在までその宝燈を伝えている。

前記した遺跡のうち,奈良時代にまで遡る瓦を出土しているのが,前田廃寺,山下廃寺,下司廃寺,高野廃寺,百相廃寺,坂田廃寺,勝賀廃寺の7寺院である。なお,参考までに,市城の東隣では,日本霊異記に三木寺の名前で知られている始覚寺(三木町)が,西隣には,国分尼寺,国分寺(以上,国分寺町)が所在する。

続いて,これらの寺院のうち,礎石もしくは基壇等の存在が確認されるのが,前田廃寺,下司廃寺,百相廃寺,坂田廃寺である。前田廃寺では,堂床と呼ばれる基壇が存在し,また,坂田廃寺でも同様に堂床と呼ばれる基壇が存在した。下司廃寺では,塔跡とされる基壇が市指定史跡となっている。百相廃寺では,鐘撞堂の礎石と称されている礎石群が民家の脇にみられる。一方,拝師廃寺



1 中山廃寺
2 根香寺
3 勝賀廃寺
4 坂田廃寺
5 多肥廃寺
6 百相廃寺
7 拝師廃寺
8 高野廃寺
9 松尾廃寺
10 下司廃寺
11 前田廃寺
12 前田平尾庵
13 瀧本神社
14 山下廃寺
15 屋島寺

a 香西寺
b 正花寺
c 蔵六寺
d 西方寺
e 克軍寺
f 弘憲寺
g 吉祥寺
h 観興寺
i 長福寺
j 円成庵
k 延命寺

i 神宮寺
ii 薬師寺
iii 徳栄寺
iv 松慶寺
v 長福寺
vi 覚光院
vii 一宮寺
viii 観音寺
ix 円満寺
x 随願寺
xi 長久庵
xii 専興寺
xiii 光明寺
xiv 正大寺
xv 西蓮寺
xvi 三渓寺
xvii 自性院
xviii 吉国寺
xix 久米寺
xx 南泉寺

α 片山池1号窯跡
β 南山浦1号窯跡

第3図 古代寺院関係文化財分布図

第2表　高松市内所在寺院の寺伝等一覧

寺院名	所在地	年代	開基者名	中興者名	備考
南泉寺	屋島西町	810～824/弘仁年間	空海		廃寺、屋島寺塔願
地蔵寺	屋島西町	1592/文録元年	行基 良印	空海	上段、讃岐國名勝図会 下段、全讃史より
薬師寺	鬼無町	832/天長9年	円珍		
吉国寺	林町	729～749/天平時代頃 697/文武天皇元年	行基 行基		廃寺、上段全讃史 下段、讃岐國名勝図会、西植田より移転
自性院	上田井町	1574/天正2年 808/大同3年	植田美濃守 伊予親王勅願		上段全讃史、下段讃岐國名勝図会
真福寺	木太町		道昌法弟円阿	目代国宗 上総介修補	修補は天仁年中(1108～1110)
久米寺	春日町	739/天平11年	行基		
観音寺	石清尾八幡馬場筋		観賢		廃寺、某所より移転
円満寺	石清尾八幡馬場筋		行基		廃寺
長久庵	上之町	1040～1044/長久時代			
光明寺	松縄町	848～851/嘉祥年中	円珍		廃寺
西蓮寺	上多肥町	885～889/仁和年中	桜井権督資連建立		
覚光院	川辺地区	1128/大治3年			
長福寺	円座町	1177～1181/治承年中	梶尾仁明右馬充		
徳栄寺	飯田町	811(弘仁2年)	実慧		
一宮寺	一宮町	701～703/太宝年間	義淵	行基・空海	
観興寺	室町	899/昌泰2年	観賢		観賢は坂田郷出身東寺長者 木造阿弥陀仏立像等所蔵
専興寺	三条町		観賢		廃寺、観賢は坂田郷出身東寺長者
克軍寺	宮脇町	832/天長9年	円珍		
香西寺	香西本町	729～749/天平時代	行基	空海	勝賀廃寺と関係 木造毘　文天立像所蔵
正花寺/松慶寺	西山崎町	729～749/天平時代	行基		木造菩薩立像所蔵
正大寺	林町	812/弘仁3年	空海		
神宮寺	香西本町	810～824/弘仁年間	空海		廃寺
随願寺	御坊町	奈良時代	行基	空海	坂田廃寺と関係、坂田郷より移転
根香寺	中山町		円珍		
宝寿寺 押光寺	前田地区	824～834/天長年中 936/承平6年	空海		上段・下段両説有り、前田廃寺と関係
三渓寺	三谷町	947～957/天暦年間	空性 (宇多天皇弟)		廃寺
屋島寺	屋島西町	754/天平勝宝6年	鑑真	空海	

では「ヒチクドー」と呼ばれた地点が存在していたと伝えられ，拝師廃寺に関する何らかの基壇ではなかったかとする提案がある。また，多肥廃寺では，「ドウ」と呼ばれる基壇が存在したことを伝える江戸時代の文書が存在する。

礎石については，拝師廃寺，多肥廃寺は別として，前田廃寺以下では礎石の存在が確認されている。なかでも，坂田廃寺では円形柱座をつくりだした礎石が知られている。また，勝賀廃寺では周辺に礎石らしき石材が埋没しているとの証言があり，高野廃寺では石燈等の基壇に，礎石材として適当な石材が使用されている。

なお，国分寺では，金堂，塔跡，講堂跡，僧坊，鐘楼跡が確認されており，国分尼寺では金堂の礎石が，また，始覚寺では，心礎が確認されている。

この他に，古代寺院に関連した遺跡として，瓦窯跡が，坂田廃寺周辺で2ケ所確認されている。南山浦1号窯は，坂田廃寺の南方において確認された登り窯である。出土遺物は，ほとんどが平瓦で，平安時代を中心とするものと推察されている。坂田廃寺の西方向に位置するのが，片山池1号窯跡で，ロストルを持つ平窯である。出土遺物の大部分は，平瓦であるが，窯壁に鴟尾片が混入しており，注目される。なお，本瓦窯跡の繰業は，11世紀ころと想定されている。

(3) 有形文化財（仏像を中心に）

次に古代における讃岐の文化的・宗教的側面を知るために，有形文化財，特に仏像に注目したい。

市内に所在する仏像の中で，古代に属するとして知られている例は，東から，屋島寺（高松郷）木造千手観音坐像「国指定重要文化財」・木造薬師如来坐像，延命寺（高松郷）木造薬師如来立像，長福寺（喜田郷）木造愛染明王坐像，円成庵（多配郷）六字明王立像「市指定有形文化財」，観興寺（牧田郷）木造阿弥陀如来立像，坂田廃寺周辺出土（牧田郷）銅造釈迦誕生仏「県指定有形文化財」，弘憲寺（野原郷）不動明王立像「国指定重要文化財」・木造地蔵菩薩立像「県指定有形文化財」，吉祥寺（野原郷）木造十一面観音立像・木造阿弥陀如来立像，克軍寺（野原郷）木造薬師如来立像，西方寺（野原郷）銅造釈迦誕生仏「市指定有形文化財，蔵六寺（成合郷）木造阿弥陀如来坐像，正花寺（中間郷）木造菩薩立像「国指定重要文化財」，香西寺（笠居郷）木造毘沙門天立像「国指定重要文化財，根香寺（笠居郷）木造千手観音立像「国指定重要文化財」が，各々あげられる。

これらのうち，最古の事例が，坂田廃寺周辺出土の銅造釈迦誕生仏で，7世紀末の製作とされている。西方寺事例の銅造釈迦誕生仏も，8世紀初頭頃のいずれも，仏教美術史でいう白鳳時代に造られたものと考えられている。

次いで，製作年代がさかのぼれるものとして，正花寺の木造菩薩立像があげられる。中央の作風を感じるもので，唐招提寺の獅子吼菩薩や衆宝王菩薩等と酷似する。奈良時代末から平安時代初頭の8～9世紀の年代観が与えられている。なお，天平勝宝4年10月25日の造東大寺司牒によれば，宮処郷とともに，中間郷にも，東大寺の封戸50戸が設置されたとみえ，本像の存在の理由を，そこにもとめる考え方もある。

10世紀に下れば，屋島寺の木造千観音坐像や，香西寺の毘沙門天立像が知られ，11世紀には，弘憲寺の木造不動明王立像，延命寺の木造薬師如来立像，克軍寺の木造薬師如来立像，十一面観音立像と順次，その遺品の数が増え，12世紀になるとその数はきわめて多く，かつ，多様化する。

なお，弘憲寺や西方寺は，藩主生駒氏や松平氏に縁の寺で，江戸時代の造営であり，所蔵の仏像も移動して，現在地に安置されたと考えるのが，妥当であろう。また，円成庵の六字明王立像と，克軍寺の薬師如来立像は，他からの移動を伝えている。これらのことからも，仏像は移動するという

問題点があることを，指摘しておきたい。

(4) 市内寺院寺伝から

現在，高松市内には，多くの寺院が所在し，様々な宗教活動を行っているがこれらの寺院の大部分が，各々，寺の開基から現在にいたるまでの歴史を持っている。そのうち，記録が残されているものは，新しい寺院は別として，さほど多くはない。大部分は，寺伝という伝承の世界にあるが，何らかの事実の反映である可能性も捨てきれない。そのような観点に立って，現在の寺院の中（すでに，廃寺となっている事例も含めた。）から，建立の起源を古代にまでさかのぼる伝承を持つ事例を・別表のとおり収集した。なお，基本とした資料は「全讃史」，「讃岐名勝図会」，「新修高松市史」で，各町史を補完資料とした。

それによると，市内の寺院のうちで，古代にまでさかのぼる寺伝を持つ事例は，意外と少ない。あえていうならば，江戸時代から政治の中心地となった野原郷等は例外で，郷単位で見れば一ヵ寺～数ヵ寺しかない。田井郷のように，存在しない例もある。さらに解釈を進めるならば，古代からの寺伝を持てるような寺は，地域において，特別な地位を占める，あるいは，占めた寺とは考えられないだろうか。寺の歴史の古さを語れる資格がある。ゆえに，周囲からも暗黙の了解が与えられていたとも推定される。

さて，寺伝の内容についてであるが，寺伝の中枢であるところの開基伝説に注目してみたい　これについて分類すると・行基（668～749）が開基とされる事例が最も多く，次いで空海（774～835），円珍（814～891）の名が並ぶ。さらに，観賢（853～925）の名も決して少なくない。実慧（786～847）も含めて，空海，円珍，観賢は，いずれも讃岐出身の高僧で高松における開基伝説の特徴の一とすべきかもしれない。また，鑑真（688～763）開基を伝えるのが，屋島寺であり，きわめて特色のある事例である。

なお，観賢は坂田郷の秦氏の出身とされており，坂田郷付近に観賢を開基とする寺が集中して存在することは，決して違和感のあるものではない。

また，空海が，屋島寺をはじめ，中興の祖として，多くあげられている。空海伝説を考えるとき，当然との感もあるが，あわせて，特徴の一として指摘しておきたい。

寺伝の中で注目されるのが，香西寺が勝賀廃寺を，随願寺が坂田廃寺をそれぞれ前身と伝えていることである。これに，すでに廃寺となった宝寿寺・押光寺の前身と伝えられる前田廃寺を考慮すればこれらの勝賀廃寺をはじめとした寺院遺跡が早くから人々に認識されていたことが判明する。例えば，前述したように，坂田廃寺，前田廃寺の両遺跡では，堂床と呼ばれる箇所が存在していた。そして，勝賀廃寺では，奥ノ堂と呼ばれる地名が今に残っており，江戸時代の絵図にも奥ノ堂の記載はあることから，そこが香西寺のかって所在していた場所として，はやくから認識されていたことがわかる。

続いて，時代別におって考察してみよう。平安時代の9世紀創立の寺伝を持つ事例が圧倒的に多い。空海，円珍・実慧，観賢等，讃岐の高僧の活躍した時代と重複し，当然の結果と考えられる。10世紀～12世紀にかけては事例が少なく，1～2例にすぎない。ただし，この時代にいたって，はじめて空白地帯が埋められ，高松平野全体に寺院が登場したこととなる。

(5) まとめ

高松平野の古代における仏教文化の状況を知るために、三つの方法で資料を収集し、その時代の概略を措いてみた。いずれも，十分とはいえないものの，当時の状況を部分的に反映しているもの

と考えておきたい。ただし，遺跡の分布状況と，寺伝のように，その反映度には大きな違いがあることは明らかである。

ところで，いわゆる奈良時代に開基されたとの伝承を持つ寺は，行基開基・鑑真開基と伝える一群の寺である。これらの寺と，奈良時代の寺院遺跡について，考察を加えてみたい。前者に属するグループは，一宮寺，香西寺，松慶寺，随願寺，地蔵寺，吉国寺，久米寺，円満寺，屋島寺の8ヵ寺があげられる。後者に属するグループは，前田廃寺，山下廃寺，下司廃寺，高野廃寺，百相廃寺，坂田廃寺，勝賀廃寺の7ヵ寺があげられる。この双方のグループ間において「同一郷にあるか否か，もしくは，あったか否か」という関係を設定することができる場合が存在する。香西寺と勝賀廃寺，随願寺と坂田廃寺，吉国寺と下司廃寺，久米寺と山下廃寺の関係がそれで，さらに，周辺の郷を含めて考慮すると，一宮寺と百相廃寺の対比も可能である。

一方，県内屈指の古仏菩薩立像を所蔵する正花寺は，松慶寺とも関係が深く注目に値する。ところで，遺跡のグループからは，前田廃寺は，空海開基としてやや新しい伝承を持つ。ただし，東大寺の封戸が中間郷にも設けられたように，ここ，宮処郷にも設けられていることは，注目に値しよう。なお，高野廃寺はペアを設定できないが，所在する土地の字名が「高野（koya）」で，神社が「丹生」であることは注目に値する。

また，寺伝から見れば，地蔵寺，円満院は，遺跡あるいは文化財側からのアプローチができないこととなるが，円満院は廃寺となっており，城下町に所在する寺から，当初から野原郷にあったとは考えがたい。また，屋島寺は寺伝によれば，鑑真開基の寺を千間堂といい，屋島北嶺にあったとされている。その存在は明らかでなく，現在のところ，天智朝における屋島城築域とは無関係であるが，付近に古代の重要な遺跡が存在することは事実である。一方，地蔵寺は屋島寺の直下に位置し，屋島寺の末寺ともされる。

以上の結果から，すなわち，奈良時代に属する寺院遺跡・および文化財と，行基開基の寺の一対一の相関を想定できる事例が四例（範囲を拡大したとすれば六例）あり，想定できない事例が2例ある。また，行基開基の寺と，寺院遺跡・文化財との相関は四例もしくは六例と考えられるが，想定できない例は，二例もしくは一例と考えられる。

こうした場合，両グループは，強い相関にあるとはいえないまでも，ある程度の相関を想定してよいであろう。

次に，9世紀以降においては，拝師廃寺は，空海開基の正大寺との相関を指摘でき，また，屋島寺（南嶺の現在屋島寺）の中興は空海であり，根香寺の開基は円珍であるように，海岸線に近い地域の寺が，これらの人々によって造られたとされる事例が多いようである。わずかに，正大寺や宝寿寺が内陸域に所在する。いずれにしても，平安時代の初期・9世紀において，空海に代表される讃岐出身の高僧達によって，盛んに造寺が行われたとされるのである。その後，10世紀には一ヵ寺，11世紀には一ヵ寺，12世紀には二ヵ寺と，造寺活動はあまり盛んではない様子が，指摘できる。

ところが，仏像を省みれば，正花寺の地蔵菩薩に引き続く事例は，10世紀頃の作といわれる屋島寺所蔵の木造千手観音坐像をあげるしかない。その後，11世紀，12世紀作の仏像が急増してくるのである。もちろん，当時の仏像がすべて遺存しているわけでなく，古い時代ほど，遺存が難しいのが当然であるので，簡単に結論つけることはできないものの，寺伝から導き出した年代と，今なお残された文化財の示す年代観に若干のずれが生じていることは，注目されることである。（藤井）

讃岐の仏像（上）武田和昭著　株式会社美巧社刊1983
讃岐の仏像（下）武田和昭著　株式会社美巧社刊1986

2　古代寺院と出土瓦について

市内に所在し，奈良時代までに創建された寺院は７遺跡ある。しかしながら，発掘調査のメスが入れられた遺跡は数カ所しかない。このため，過去に表採された軒瓦を含め，概観したい。

市内最古の古代寺院といえるのは，前田西町に所在する前田廃寺（宝寿寺跡）である。高松平野東縁の丘陵上に立地する。現在は，土壇と花崗岩の礎石を残すのみで，堂床と呼ばれる地名が残る。寺跡そのものは未調査だが，丘陵南側の谷部が昭和63年～平成５年に国道建設に伴い発掘された。前田東・中村遺跡と呼ばれるこの遺跡では，７～８世紀の遺構・遺物とともに，前田廃寺から表採される軒瓦と同笵のものが出土し，前田廃寺に関連する遺跡と想定できる。ここから出土している六葉素弁蓮華文軒丸瓦は，いわゆる古新羅系の系譜を引くもので，供伴遺物から７世紀後半の年代観が与えられており，市内でもっとも古い瓦の一つといえる。以後，製作時期が奈良時代と推定される軒丸瓦まで確認でき，白鳳期から奈良時代まで存続していたと推定できる。また，白鳳期末から奈良時代初頭の製作時期が推定される軒丸瓦には，隣の三木郡にある始覚寺と同笵で，同じ製作技法をもつものがあり，両寺に密接な関係があったと推定されている。

山下廃寺（新田町所在）は，前田廃寺と同じ高松平野東縁に立地する。現地は，西に面した緩斜面であり，ここから瓦が表採されることから寺跡といわれているが，それを立証する遺構はなく，未調査でもある。藤原宮式の軒平瓦や，讃岐国分尼寺創建期の軒丸瓦と同文のものが出土しており，白鳳期末から奈良時代に寺が存在した可能性が指摘できる。

下司廃寺（東植田町所在）は，高松平野奥座敷とも呼ぶべき，春日川上流域の小盆地に所在する。春日川の支流である朝倉川の北岸に位置し，吉光神社から清光神社一帯にかけて瓦が表採されている。現在，吉光神社が鎮座する８×11mの方形土壇と礎石が残されている。発掘調査は行われていないが，讃岐で唯一の三尊仏のせん仏が表採されている点は注目できる。表採されている瓦は，製作時期が白鳳期と平安時代中～後期のものだけで，時間的隙間を埋める資料がなく，白鳳期に創建された後，平安時代に再建された可能性がある。白鳳期の瓦は，川原寺式に分類できる八葉複弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦である。この軒丸瓦は，中房蓮子に周環をまわし，周縁に面違鋸歯文をもつなど，川原寺式の原型式に近い様相をもっている。一方，軒平瓦は線引きの二重弧文と型挽きの四重弧文の２種がある。このように，せん仏が表採され，川原寺式の原型式に比較的近い軒丸瓦や線引き二重弧文軒平瓦が存在するなど，畿内文化が色濃く見られることは，下司廃寺を建立した氏族が畿内と強い繋がりをもっていたことを連想させる。

高松平野南部においては，平野中央部では埋没している起伏がそのまま見られるが，高野廃寺（川島本町所在）もそういった小高い丘陵の一つに立地する。春日川中流域の西岸に位置する。現在，丘陵上には丹生明神が祭られており，瓦や土器が明神周辺で表採されている。また，丘陵の東と南側斜面が方形に整形されたようになっており，丘陵に対する人為的造作を想定させる。一方，高野廃寺が所在する地域は，「和名類聚抄」でいう山田郡三谷郷に属するが，この地は主要官道である南海道が通り，「延喜式」に示された「三谿」の駅家が置かれた推定地である。出土する軒瓦のうち創建期と考えられるものは，十一葉素弁蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦で，白鳳期末から奈良時代前半の製作時期が推定されている。十一葉素弁蓮華文は，細く先の尖った素弁に同形態の間弁をもつ文様で，県内では他に類例がない。四重弧文は，型挽き重弧文で深い段顎をもつなど，古い様相を残している。ほかに奈良時代から平安時代後期に至るまでの軒瓦が多種類表採されており，少なくとも平安時代後期頃まで寺院が存続していたようである。さらに，平安時代中期と推定される九葉単弁蓮華文軒丸瓦は，淡路国分寺出土のものと同文であり，南海道に近接し付近に駅家が置かれたことを考えると，高野廃寺と

官が深く関わっていた可能性も指摘できる。

以上４ヶ寺は，山田郡に属する寺院であったが，次に香川郡に所在する古代寺院を紹介したい。

坂田廃寺（西春日町所在）は，高松平野北部中央に独立丘陵としてそびえる石清尾山塊のうち，南側の浄願寺山東麓の谷部出口に立地する。昭和39年に奈良時代の金銅製釈迦誕生仏立像が表採され一躍注目をあび，昭和42年には開発に伴う事前の発掘調査が実施された。この時に，寺院遺構として基壇が検出されるとともに，円形柱座を造り出した礎石や瓦片が出土している。未報告であるため詳細不明であり，伽藍配置の復元は行われていない。平成６年には，坂田廃寺裏側つまり西側斜面に立地する片山池瓦窯跡群のうち，１号窯跡が発掘調査され，平安時代中期のロストル式瓦窯であることが判明するとともに，平安時代の瓦に混じって，白鳳期の鴟尾片も出土している。出土・表採されている軒瓦を概観すると，白鳳期後半から室町時代のものまで多種類あり，しかも各時代のものが揃っていることから，長期間寺院が存続していたと推定できる。出土した瓦のうち，創建期のものである八葉複弁蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦は，川原寺式に属し，しかも原型式にかなり近い特徴を有する。それは，周環をもつ中房蓮子が①＋⑤＋⑨個あり，蓮弁が強く反転して彫りが深く，三角縁の周縁をもつからである。しかしながら，周縁文様は面違鋸歯文ではなく＊印をめぐらしている。この軒丸瓦と同文のものが，隣の阿野郡に所在する開法寺跡および鴨廃寺から出土・表採されている。この両寺は，古代讃岐の豪族である綾氏の本拠地に位置することから，造営したのは綾氏と考えられている。一方，坂田廃寺が所在する香川郡坂田郷は，「日本霊異記」に綾氏と名のる裕福な人物が住んでいたと書かれており，坂田廃寺造営の氏族として綾氏を候補にあげることができる。

勝賀廃寺（香西西町所在）は，高松平野北西部にある勝賀山から北に派生する尾根の終端近くの谷間に位置する。北東700ｍには現在の海岸線があり，瀬戸内海を一望することができる。奥ノ堂池・新池と呼ばれる溜池周辺から瓦が表採されることから寺跡と推定されており，さらに奥ノ堂の地名から近くにある香西寺に関係する堂宇があったとも伝えている。平成３年度に高松市教育委員会によって，奥ノ堂池堤防改修工事に伴う試掘調査が実施されたが，寺院に関わる遺構は確認されておらず，伽藍配置は不明である。表採されている軒瓦は，白鳳期から平安時代後期のものまで見られ，長期間寺院が存続していたようである。もっとも古い軒瓦は，八葉複弁蓮華文軒丸瓦と五重弧文軒平瓦の組み合わせである。八葉複弁蓮華文軒丸瓦は，やや反転して彫りの深い八葉複弁に，三角縁の周縁には線鋸歯文を施しており，川原寺式の影響を受けたものである。ただし，中房径は小さく，蓮子は周環をまわすものの数が①＋⑧個に減少しているなど退化が認められる。

百相廃寺（仏生山町所在）は，香東川中流域の東側に位置する。独立丘陵である船岡山北東にある船山神社境内より瓦が表採されることから寺跡と推定されているが，未調査であり伽藍配置は不明である。表採されている軒瓦は，奈良時代から平安時代に製作時期が推定できる。このうち，奈良時代に属する変形扁行唐草文軒平瓦は，上段に線鋸歯文，中段に珠文，下段に変形扁行唐草文をおくという特異なもので，勝賀廃寺から同文違笵のものが表採されている。また，高野廃寺からも，この変形扁行唐草文軒平瓦の影響を受けた軒平瓦が表採されている。

以上，奈良時代までに創建された古代寺院を概観してきた。高松平野では，ほかに平安時代に創建されたと推定されている寺跡が存在する。ここでは，弘福寺領周辺の２寺跡を紹介する。

拝師廃寺（林町所在）は，弘福寺領南地区比定地に近接する場所にある。拝師神社周辺から瓦が表採されることから寺跡と推定されている。また，神社東100ｍには，戦前まで相撲場として用いられていた一辺20ｍでほぼ円形状に削られたヒクチドーと呼ばれる土壇があり，「ひくち堂」と解することができることから寺院の基壇とも推定できる。平安時代中期と推定される軒丸瓦が表採されている。こ

のうち，七葉複弁蓮華文軒丸瓦は，同文のものが讃岐国分寺（綾歌郡国分寺町），府中山内瓦窯（坂出市），長尾寺（大川郡長尾町）から出土または表採されている。

多肥廃寺（多肥下町所在）は，弘福寺領南地区比定地より西へ約1．3Km離れた地に所在する。小さな林から瓦が出土しており，この林が見性寺林と呼ばれていること，文政10年（1827）の古文書に３～４間の土壇があったと記されていることから，多肥廃寺と呼ばれている。出土している瓦は，十葉複弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦で，平安時代中～後期と推定される。百相廃寺から出土するものと同文である。現在確認されている軒瓦はこれのみで，寺の存続期間は短かったものと推定できる。
（川畑）

第3章　発掘調査の成果

第1節　田図南地区の調査

1　調査区の位置

弘福寺領讃岐国山田郡田図南地区として発掘調査を進めてきた，林町の高松空港跡地西詰め北側の付近は，推定条里地割の呼称にしたがうと山田郡8条10里，同郡9条5里に含まれる。このうち，田図比定地に該当するのは山田郡8条10里6～9坪，16～20坪，9条5里1坪・12坪の計11坪である。田図南地区は，弘福寺領南地区比定地に含まれるとともに空港跡地再開発を核とする一連の開発の中心的な区域であることに加えて，調査地点を設定するのに好都合な諸条件を備えていた。

①旧空港用地を含む周辺一帯が昭和19年に陸軍飛行場用地として接収された後，戦後に一部が区画整理されて払い下げられているため，現用の道路，水路，畦畔等が条里推定線と重複していない。したがって現用の構造物を切断することなしに条里遺構の検出が可能である。

②陸軍飛行場用地接収前の一帯の地割を示す更正図（明治21～24年頃），文化年間の耕地絵図（順道絵図／1818年）が存在しており，近世遺構に関していえば検出遺構の位置関係や土地利用の時期が容易に特定できる。

③南地区比定地の東辺にあたる旧山田香川郡界線（現在の林町・多肥上町境）を取り込むことが可能な位置関係にあり，条里施工に関する調査が同時に実施できる。

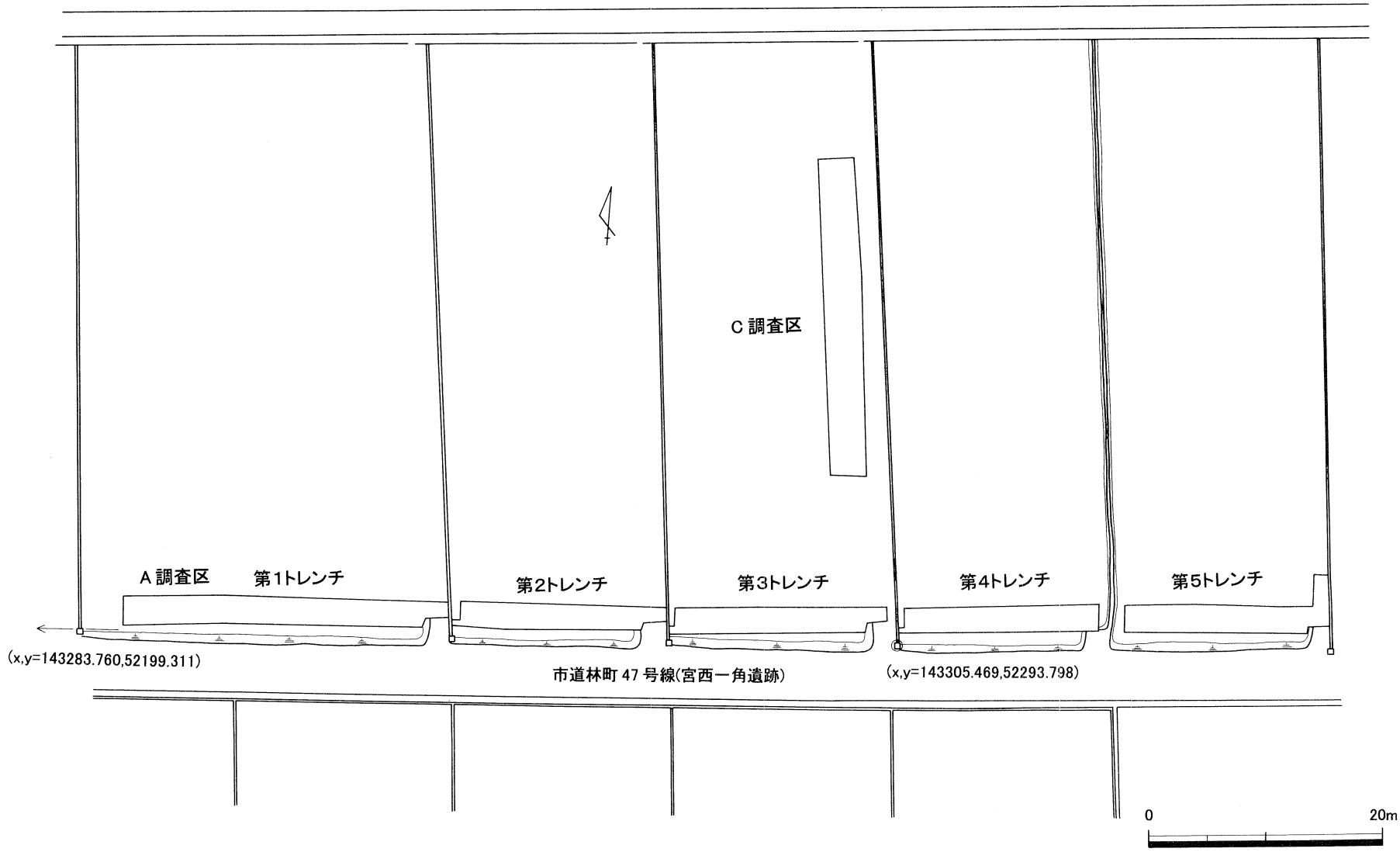
等々である。

以上のことから，当該地区では平成6～9年度の調査年次全般にわたって計6ヶ所の調査区を設定した。これらは大きく分類するとⅠ：南地区比定地内部または周辺で関係遺跡及び土地利用状況を確認しようとしたもの，Ⅱ：山田香川郡界線を初めとして比定地の範囲確認を目的としたものの2つに分けられる。Ⅰとしては平成6年度調査区（A調査区），平成8年度第1調査区（B調査区），平成9年度第2調査区（C調査区）が，Ⅱには平成7年度調査区（D調査区），平成8年度第2調査区（E調査区），平成9年度第1調査区（F調査区）がそれぞれ該当する。

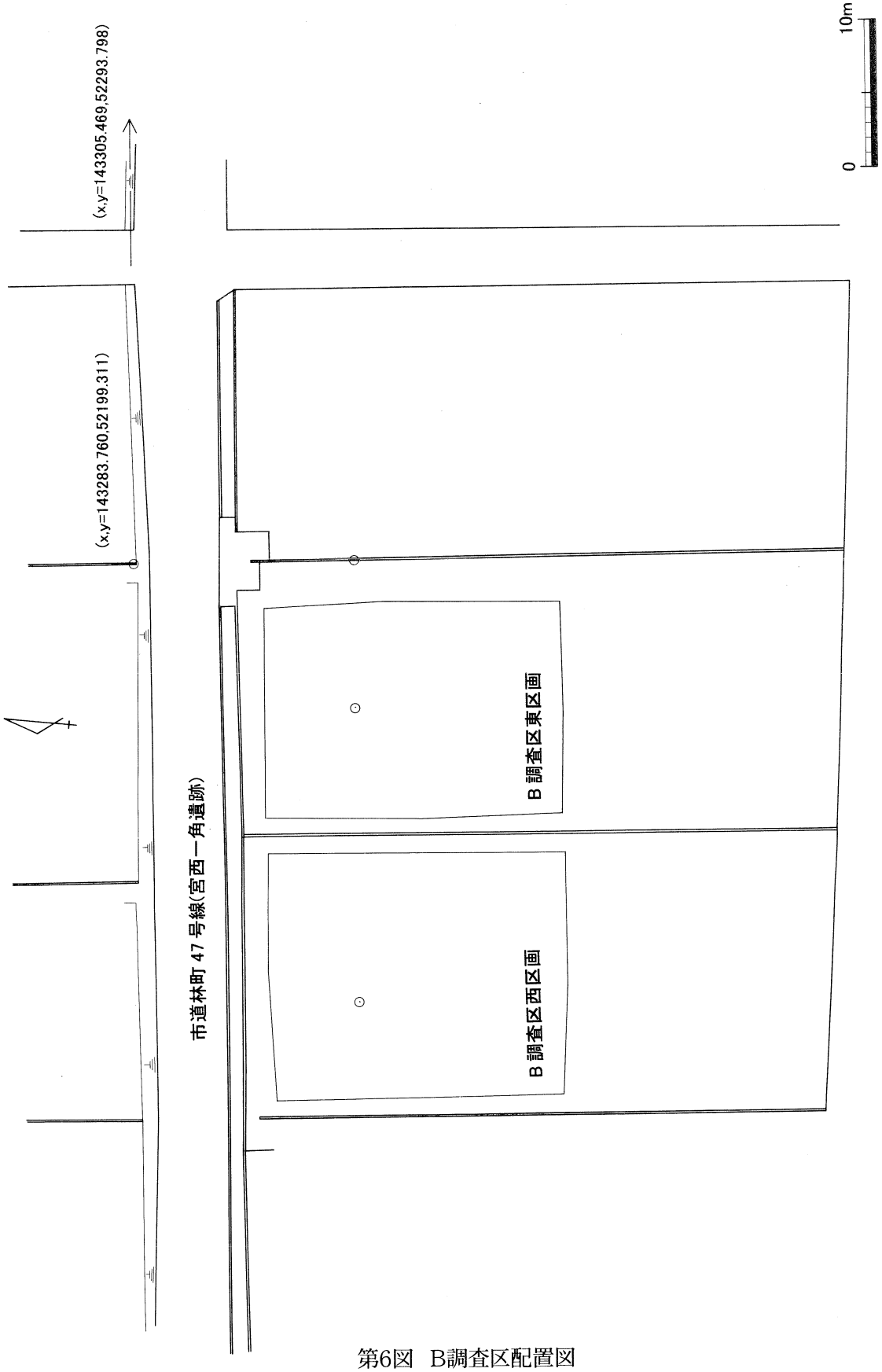
各調査区の弘福寺領讃岐国山田郡田図南地区における位置関係を概観すると，A，F調査区は山田郡8条10里15・16坪に当たる。15坪は田図比定地に含まれ，16坪は15坪の東側に隣接はするものの比定地外である。当該地点は平成6年当時，南側と東側の50m内外に開発に伴う調査の知見が得られており，もっとも考古学的手がかりが濃密な地点であるとともに，順導絵図の記載によると岩田神社，吉国寺の所在から条里遺構の位置関係の判別も容易と考えられたうえ，田図の記載でも「今墾」，「壟」など多様な土地利用が集中した箇所でもあった。このためA地点を初年次の調査地点として，東西方向道路に沿って5本のトレンチを縦一列に配置し，西から順に1～5トレンチとした。そして後年，平成9年度になって，遺構の広がりを確認する目的でA地点第3トレンチ西端から北方向にC地点のトレンチ調査を実施したものである。

B調査区は，山田郡8条10里8・9・16・17坪にまたがる位置にあり，田図の記載上では剥落の激しい部分にかろうじて「津田」，「今（墾）」などが読みとれる程度で田図から得られる情報はさほど多いとはいえない。しかし，平成7年度に当該地に隣接する北側で市道拡幅工事に伴う事前調査を実施したところ古墳時代後期から奈良時代の遺物を含む谷状の凹地（当初は旧河道と予想していた）がみられたため，この遺構の性格と広がりを確認するために平成8年度調査地点として設定したものである。調査区は，ほぼ20m四方の調査範囲（水田1筆単位）を東西に2筆並べた設定としそれぞれ西区画，東区各と称した。

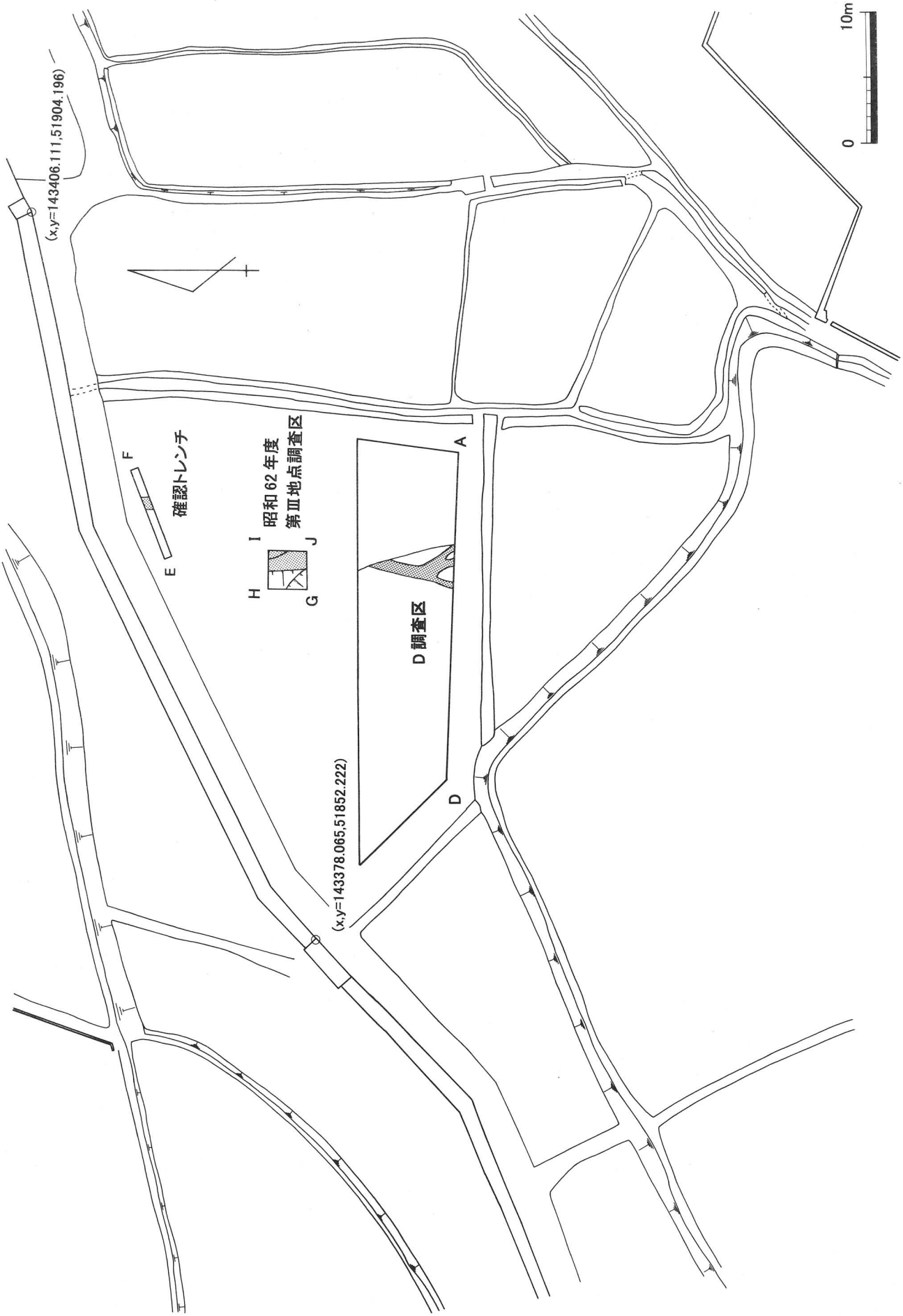
第4図　第2次弘福寺領田図調査事業発掘調査地点位置図



第5図　AC調査区位置図


(x,y=143305.469,52293.798)
(x,y=143283.760,52199.311)
市道林町47号線(宮西一角遺跡)
B調査区東区画
B調査区西区画
0
10m

第6図　B調査区配置図


(x,y=143406.111,51904.196)
10m
0
確認トレンチ
F
E
昭和62年度
第Ⅲ地点調査区
I
J
H
G
D調査区
A
D
(x,y=143378.065,51852.222)

第7図　D調査区配置図

続くD～F調査区は山田香川郡界線の確認を主たる目的として設定したものである。

弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地は南北地区ともに田図西側の境界線を山田香川郡界線に一致させているため,田図の位置比定の際の東西の振れは郡界線の位置確定によって固定することができる。しかし,現時点で山田香川郡界線と認められる林,多肥上町境線は記録的には近世まで遡れるにすぎず,古代の郡界線の確定までには至っていない。一方,南地区比定地付近に認められる現在の表層条里から見た郡界線の状況は,郡界線東側に隣接する山田郡最西端の坪並が北から南へ向かって僅かずつ東西幅を減じており,条里呼称の上でもこの南北列のみが山田郡9条として半端になっているほか,里数の呼称は8条以東の山田郡とも西接する香川郡とも異なっている。しかもこのような複雑さに加えて,旧河道やその名残として現存しているため池などによる条里方格の乱れが条里分布を一層読み取りにくくしている。このため一見迂遠とも考えられたが,郡界線の位置確定が田図比定地確定の絶対条件と考えて3ヶ所の確認トレンチを設定したものである。

このうちD調査区は,当初は下池取水口附近の西隣の水田に予定していたが,調査着手の早い段階で瓦粘土の採掘によって地下遺構の堆積層が失われていることが判明したため,急遽調査地を変更して下池取水口の南側としたものである。

この地点は,分が池の西側から下池,長池と続いて行く旧香東川が埋没して形成された浅い谷地形の中に位置しており,第1次の調査の際にも遺構確認の小規模のグリッドで水田畦畔の一部を確認している。しかし,水田という遺構の性格と狭隘な調査面積の故をもって遺構の時期を示す遺物や遺構の広がり(延伸方向)を十分に確認するに至らなかったため,それらの再確認をという思惑もあった。

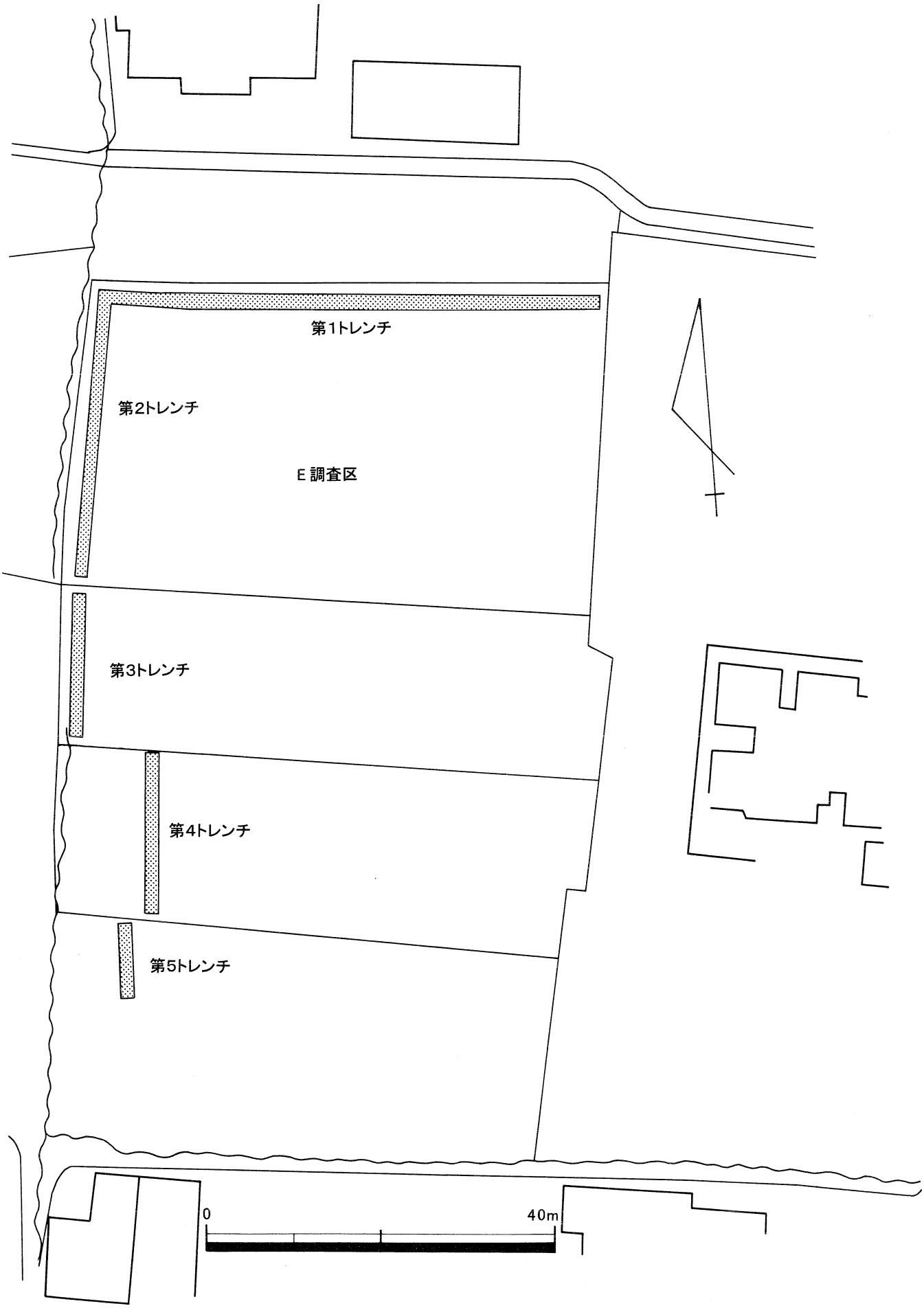
調査範囲は,水田南辺の境界に沿って北に開く台形状に設定した。調査区南辺長25m,同北辺長32.3m,南北幅約7mである。また,調査の後段で遺構の延長確認のために北側に別途トレンチを設けた。

E調査区も,当初は西方の下池東堤まで延伸して郡界線も併せて截断する予定であったが,地権者の意向や植付作物等の関係で果たせず,結果的には条里坪の外郭線または内分線となる溝状遺構等の確認にとどまらざるを得なくなった。E調査区の調査トレンチは水田地境に沿って北側と西側に鍵形に設定し,北辺を第1トレンチ,西辺の4本を北から2～5トレンチとした。E調査区の条里区画上の位置は山田郡8条10里19坪に相当し,田図上では墨線による方格中に「□□□時除百五十／□□□未給」,「□□□□五十束代」の記載が見られ,おそらくは水田であったと考えられる。

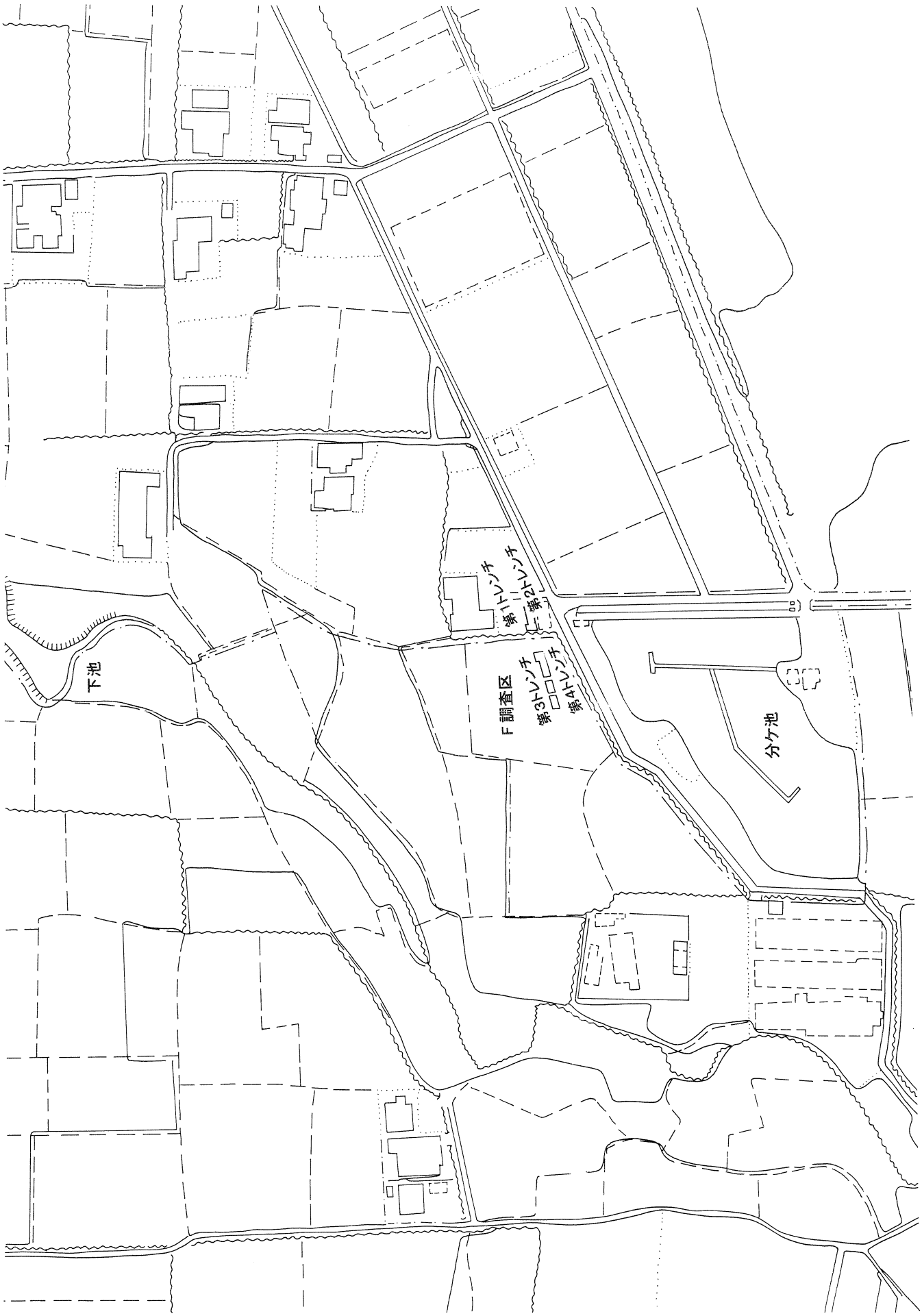
F地点も郡界線の截断を予定しての設定であったが,これまでより位置を南にとって,田図比定地の境界をも取り込める分が池北側の水田に設定した。現在の林,多肥上町境に直交する東西方向に総延長42.5m,幅3m,都合4本のトレンチを縦一列に設定した。但し,第1トレンチと第2トレンチの間約7m分は現在の町境となる用水路や植え付け作物の関係で未調査となっている。調査区の条里区画上の位置は山田郡9条5里1坪の西坪界線付近に相当し,当該界線は山田香川郡界線としても認識されている。田図上では「直米」「□□束代」といった収穫高に関すると思われるものとともに「津田」の記載が見られるが,紙面の剥落が著しく不明瞭な部分である。

以上調査区の地図上での位置決めは,A,D調査区については発掘調査にともなう測量委託によって4級国土座標点基準点を打設した。すなわち,A地点では調査地周辺に国土座標第Ⅳ座標系上で基準点1(X:143283.760, Y:52199.311)および基準点2(X:143305.469, Y:52293.711)を,D地点でも同座標系上で基準点1(X:143378.065, Y:51852.222)および基準点2(X:143406.111, Y:51904.196)を設定した。

また,B,F調査区ではそれぞれ過年次に打設したA,D調査区の座標点を基準点に引照し,C,F調査区については基準杭の打設はせずに周辺の地界構造物を位置および仮標高の基準とした。



第8図　E調査区配置図



第9図　F調査区配置図

2　基本土層

Ⅰ：田図南地区比定地関係の調査として，A調査区トレンチ南壁，B調査区北壁を，Ⅱ：山田香川郡界線関係調査としてD調査区南壁，E調査区トレンチ西および北壁，F調査区トレンチ南壁を基本土層として図示した。

(1)　A調査区

第1～第5トレンチの南壁土層，総延長約105mを基本土層として掲げた。

全てのトレンチに共通に見られる第1，2層は黄灰色シルト質極細砂の耕土層である。前者は現在の，後者は戦後に旧陸軍飛行場用地から民間に払い下げられた際の水田復旧によるものと考えられる。

第1トレンチ西半では，第3層黄褐色粗砂礫層以下，第4，5トレンチでは第29層灰黄色砂礫層以下の砂礫堆積層が地表から30cm近くの浅い部分まで上がっており，微高地の様相を呈する。いずれのトレンチも礫層上面から第1，2層間の20cm程度は近世から第二次大戦前後までの整地層と考えられ，昭和19年の旧陸軍飛行場接収から戦後の民間払い下げによる耕地整理に伴うものであろう。

第1トレンチ東半から第3トレンチにかけては層厚10cm未満の薄いシルト層を中心とした布状の堆積がみられ，旧河道にあたると思われる。第1から第2トレンチに移る付近が最深部で，深さ1.5m，およそ10層の河川性の堆積が確認できた。

以下，トレンチごとに土層の堆積状況を概観すると，第1トレンチでは，第3層は黄褐色粗砂礫層である。19世紀頃の宅地造成等に関わる整地層と考えられる。第4～6層，第8層は灰黄色，またはオリーブ褐色の砂礫層である。微高地を構成する自然堆積層である。第7層は灰黄色砂礫層である。第3層と同時期または後世の人為的な整地層である。第7'層も第7層と同様に灰黄色砂礫層であるが，時期的には第7'層の方が古いと考えられる。第5層と第15層の微高地砂礫層の凹地を充填するように堆積しているため，客土層とも考えられるが，最終的な判断材料に欠ける。

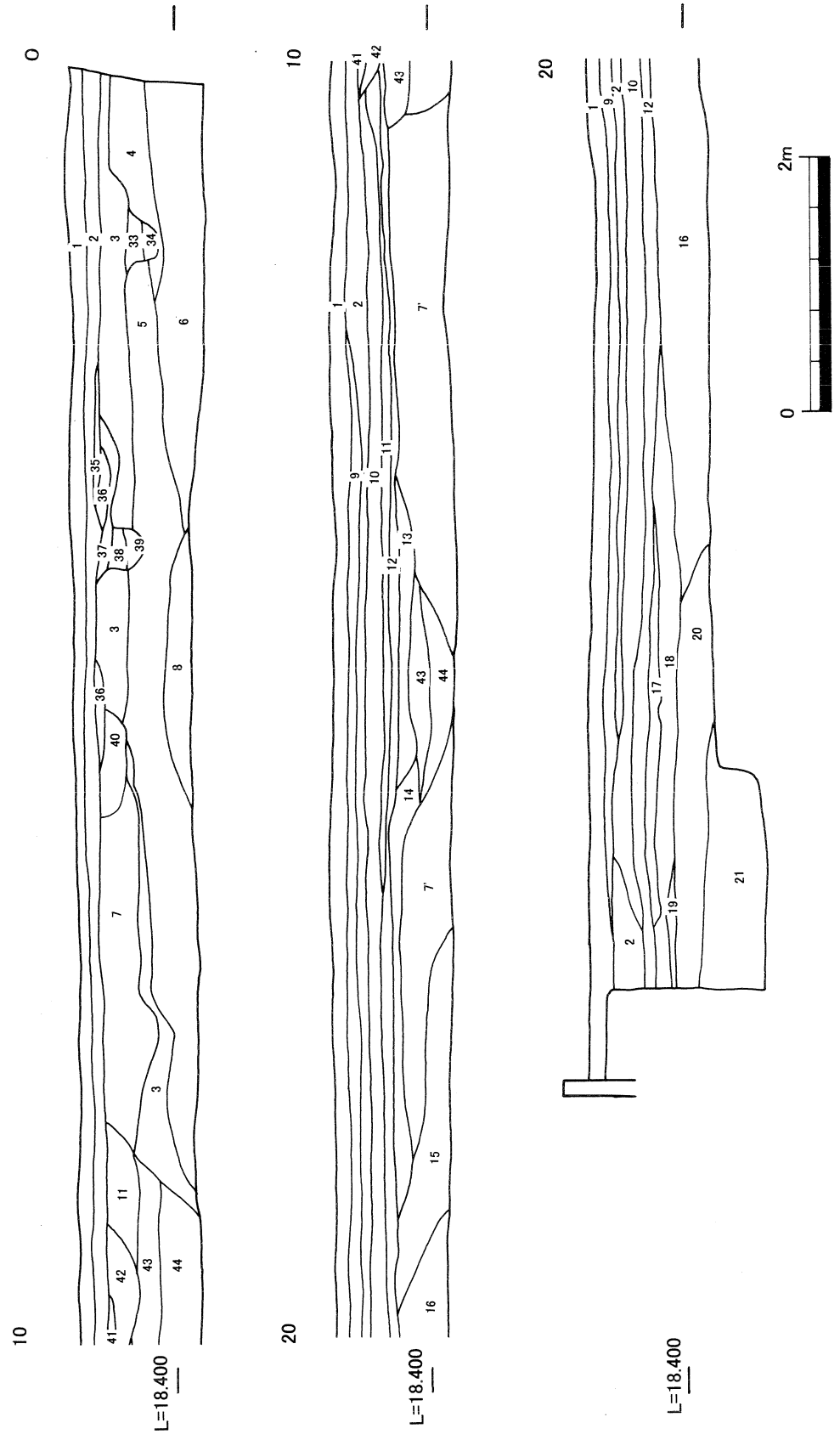
第9～13層，第10'層は，暗灰色または褐色系のシルト質極細砂層である。遺物は確認されていないが，近世以降の水田耕作層と考えられる。15，16層は，黄褐色，暗灰黄色の砂礫層である。20，21層は，黒褐色細砂質シルト層である。旧河道のほぼ最下層の埋土である。

第2トレンチでは，第22層，第23層は第2次大戦以降の客土層および耕作層，第18，18'，19，24層は，灰黄褐色または暗オリーブの色調のシルト質極細砂層である。18層には，第2トレンチから第3トレンチにかけて水田畦畔が明瞭に確認でき水田層と認められるが，遺物がないため時期は不確定である。

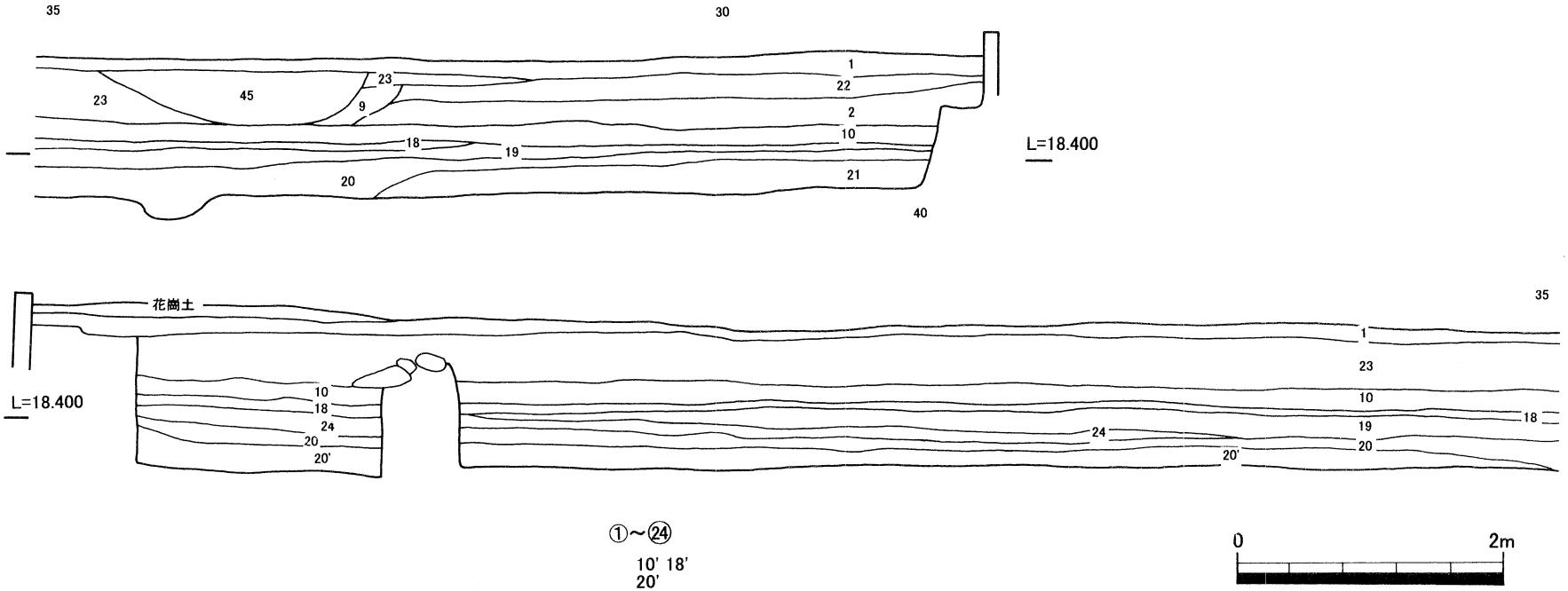
第3トレンチから第5トレンチは，第2トレンチの旧河道東岸にあたり，地形的なまとまりをもっている。第26，26'層は黒褐色の砂礫層である。旧河道東岸の微高地上面を被覆する客土層となっており，順道図絵等で岩田神社参道・吉国寺境内の地表層にほぼ相当すると考えられる。27は，暗褐色のシルト質極細砂層，28～30は，微高地を形成する灰黄色砂礫層である。

第3トレンチ中央部東寄りで第26層黒褐色砂礫層他を充填する溝状の落ち込みはSD05であり，第26層によって当初の幅員の半分ほどに東半を埋め立てられていることがわかる。第47～49層によってSD05が完全に消滅してしまうのはさらに後世のことで，おそらくは昭和19年のことであろう。また，SD05は，文化15(1818)年の順道図絵との対照によると岩田神社の参道松並木西側の溝に相当すると考えられる。SD05埋土の東側に低い土手状に盛り上がる第27層暗褐色シルト質極細砂層には松根株の痕跡が見られ，これが松並木に相当する部分と考えられる。

なお，旧河道の東肩は第3トレンチの溝状遺構（SD04）によって明瞭になっており，西の肩についても第1トレンチ東端付近で微高地砂礫層との切り合い関係が若干不整合になっているものの第20層，第16層の境目付近に求められる。

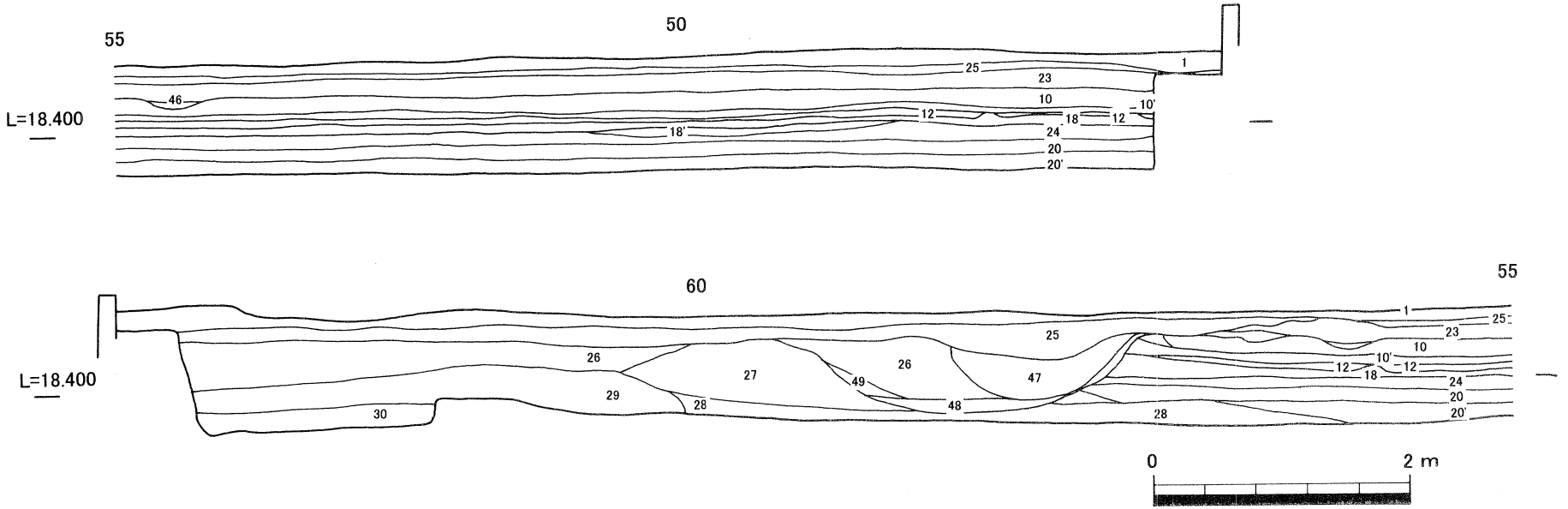


第10図　A調査区第1トレンチ基本土層図



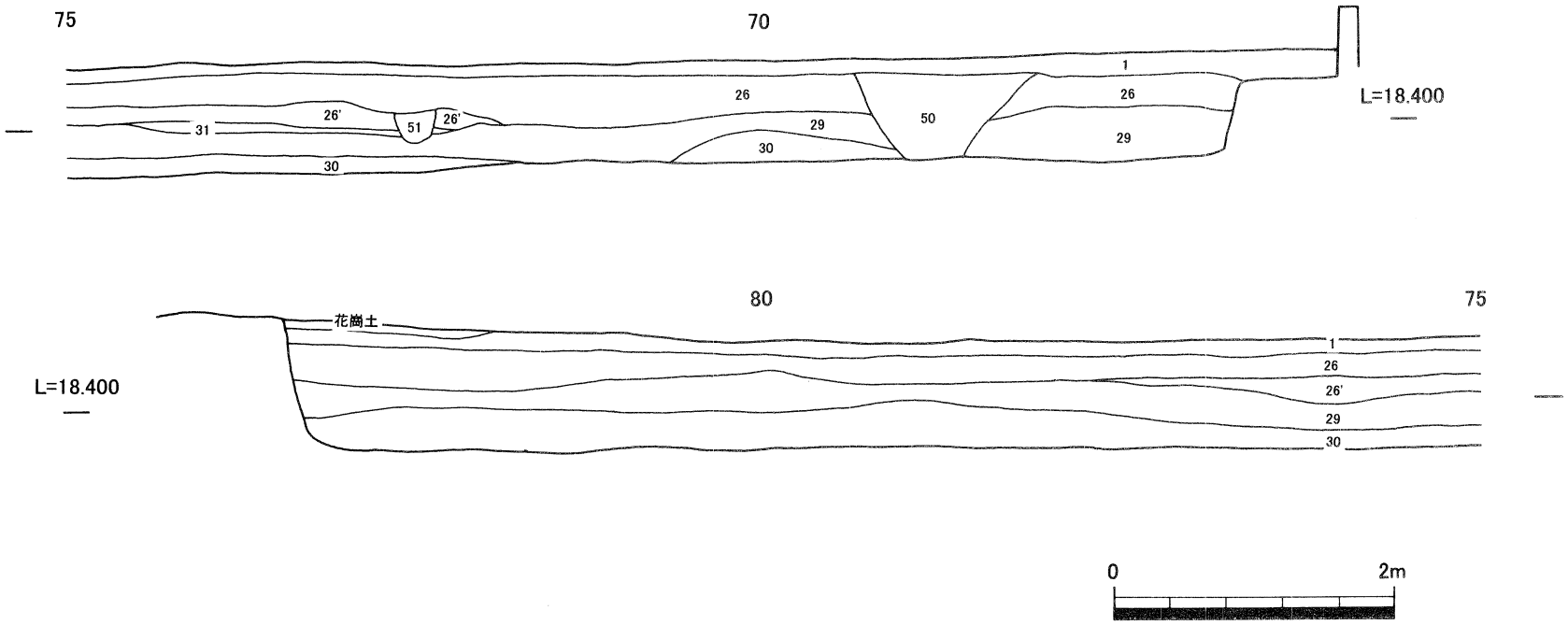
第11図　A調査区第2トレンチ基本土層図

1	黄灰色シルト質極細砂	Hue2.5Y 5/1	10'	暗灰色シルト質極細砂	〃 4/2
2	〃	〃 6/1	11	黄褐色シルト質極細砂	〃 5/3
3	黄褐色粗砂レキ	〃 6/3	12	オリーブ褐色シルト質極細砂	〃 4/6
4	灰黄色粗砂レキ	〃 6/2	13	黄褐色シルト質極細砂	〃 5/3
5	オリーブ褐色粗砂	〃 4/4	14	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR 5/4
6	オリーブ褐色粗砂レキ	〃 4/3	15	黄褐色粗砂レキ	Hue2.5Y 5/3
7	灰黄色砂レキ	〃 6/2	16	暗灰黄色砂レキ	〃 5/2
7'	灰黄色砂レキ	〃 6/2	17	にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR 5/3
8	暗オリーブ褐色砂レキ	〃 3/3	18	灰黄褐色シルト質極細砂	〃 5/2
9	オリーブ褐色シルト質極細砂	〃 4/3	18'	灰黄褐色シルト質極細砂	〃 5/2
10	暗灰色シルト質極細砂	〃 4/2	19	暗オリーブシルト質極細砂	Hue5Y 4/3



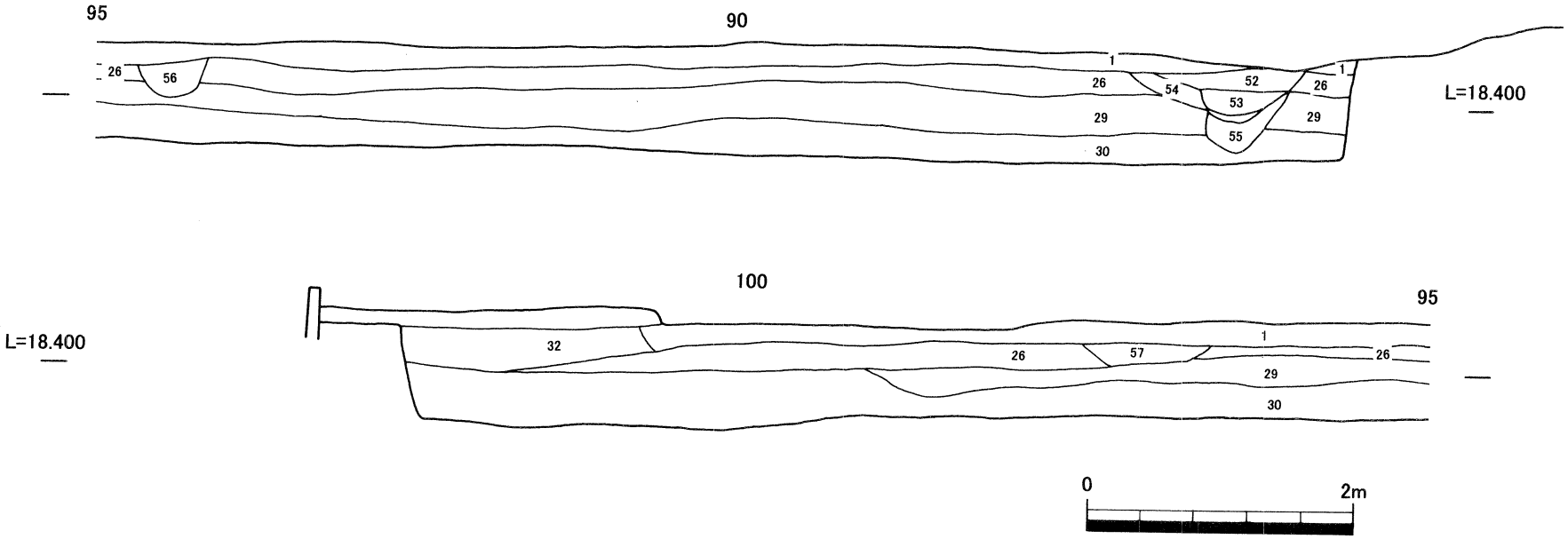
20	黒褐色極細砂質シルト(レキ混り)	Hue10YR 3/2
20'	黒褐色極細砂質シルト	〃 3/2
21	オリーブ黒色粘質中砂	Hue5Y 3/2
22	黄褐色シルト質極細砂(客土層)	Hue2.5Y 5/3
23	灰オリーブシルト質極細砂	Hue5Y 5/2
24	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5 Y4/3
25	1、23の混淆土	
26	黒褐色砂レキ(客土層)	Hue10YR 2/2
26'	黒褐色砂レキ(和泉砂岩レキ含む)	〃 2/2
27	暗褐色シルト質極細砂	〃 3/3
28	灰黄色粗砂	〃 3/3
29	灰黄色砂レキ	〃 4/2
30	灰黄色砂レキ	〃 5/2
31	オリーブ褐色粗砂	Hue2.5Y 4/4
32	暗灰黄色砂レキ	〃 4/2

第12図　A調査区第3トレンチ基本土層図



第13図　A調査区第4トレンチ基本土層図

33	黄褐色砂レキ	Hue2.5Y	5/4
34	黄褐色粗砂	〃	5/4
35	暗灰黄色シルト質極細砂	〃	5/2
36	にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR	4/3
37	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y	4/3
38	オリーブ褐色シルト質極細砂(砂岩大レキ含む)	Hue2.5Y	4/3
39	にぶい黄色シルト質極細砂	〃	6/3
40	暗灰黄色砂レキ	〃	4/2
41	黒色シルト	Hue7.5YR	2/1
42	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y	4/2
43	オリーブ褐色シルト質極細砂(細レキ含む)	〃	4/4
44	暗オリーブ褐色シルト質極細砂	〃	3/3



45	暗灰黄色砂岩大レキ	Hue25Y 4/2
46	灰黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR 5/2
47	黒褐色シルト質極細砂	〃 3/2
48	にぶい黄褐色シルト質極細砂	〃 5/3
49	26、27の混淆土	
50	暗オリーブ褐色大レキ	Hue2.5Y 3/3
51	にぶい黄褐色粗砂(大レキ含む)	Hue10YR 5/3
52	にぶい黄褐色シルト質極細砂(中レキ含む)	〃 4/3
53	灰黄褐色シルト質極細砂	〃 5/2
54	黒褐色シルト質極細砂	〃 3/2
55	暗褐色シルト質極細砂(中レキ含む)	〃 3/3
56	黒褐色シルト質極細砂(中小レキ含む)	〃 3/2
57	暗灰黄色シルト質極細砂(中小レキ含む)	Hue2.5Y 4/2

第14図　A調査区第5トレンチ基本土層図

(2) B調査区

東西両区画の調査区北辺側溝ならびに西区画の調査区南辺側溝を基本土層として図示した。

西区画の北辺側溝では，現耕作土層から地山砂礫層までの計8層が確認できた。最深部は区画東半のSX01の断面にかかる部分で，現地表下1.2mまでを側溝掘削により確認し，それ以下についてはボーリングステッキによって，現地表下1.8mで砂礫層を確認した。

層序は上位から，第1層現耕作土，第2，3層現代（第2次大戦後）の堆積層，第4層近現代溝状遺構，第5，6層須恵器（6世紀後半）包含層，第7層洪水砂礫層，第8層弥生後期包含層となっている。

第4層は遺物の出土は希薄であるが，南北に延びる溝状遺構（SD01，SD02）の埋土で，これらが現在のコンクリート畦畔に沿って南北流の平面プランを示すことから，SD01，SD02自体が第2次大戦後の所産と考えられる。したがって，第4層以上は現代のものと判断される。

第5・6層は，SX01の上半層を形成する砂質シルト質の埋土で，須恵器，弥生土器を包含する。平成7年度の宮西・一角遺跡でも土質・埋土ともに同様に確認されており，一連のものと判断できるが，このすぐ上位にあったとされる8世紀の包含層については今回の調査では確認できなかった。第7層は西区画のほぼ北西半を被覆する砂礫層で，北東流した洪水による堆積と考えられる。セクション部分で約20cmの層厚を測り，遺物の包含は見られなかったが，第6層（古墳時代後期）と第8層（弥生時代後期）の包含層に挟まれており，SE01（14世紀頃）が7層以上から掘り込まれていることもあわせると，弥生時代末から古墳時代後期の間の堆積と考えられる。第8層は，弥生時代後期の土器を包含する暗オリーブ褐色砂質シルト層で，セクション部分で40～50cmの層厚を測る。SX01の下半層を形成するとともに，さらに南へ延びてSX04に連続して浅い谷状の地形を形成するものと思われるが，全掘には至らなかった。第9層は地山遺構面を形成する褐色細砂層である。

西区画南側では，土層観察と排水を目的とした側溝を利用して土層確認を行った。側溝は調査区南辺のほぼ全域にわたって平均50cmの深度で掘り下げ，現耕作土以下7層の堆積を確認した。

層序は上位から，第1層現耕作土，第2，3層現代（第2次大戦後）の堆積層，第4層遺構掘り込み面形成層，第5層洪水砂礫層，第6層地山層，第7層近現代溝状遺構（SD04）埋土となっている。

このうち第1，3，5層は，若干の色調の相違はあるものの，それぞれ北側溝の第1，2，7層と対応するものと思われる。また，第4層上面から第6層を裁断して黄褐色系の砂脈が3ヶ所見られる。砂脈の基根部を確認していないが，地震の液状化現象による噴砂の可能性もある。

東区画北側溝では，主に東半部の竪穴住居跡を断裁する部分の土層を図示した。

層序は，上位から第1層現耕作土，第2，3層現代耕土層，第4層竪穴住居（SH01）埋土，第5層竪穴住居（SH03）埋土，第6，7層遺構面形成層など8層である。

第1～3層は，西区画北側溝土層と同一のもので，第2次大戦後の堆積になるものである。第4，5層は側溝付近で切りあう2棟の竪穴住居埋土層で，第5層を埋土とするSH03の埋没後に改めてSH01が掘り込まれ，これら廃絶後の堆積が第4層と考えられる。第5層はSH03の中央ピットをも断裁しており，ピットの底付近には焦土層も確認されている。本遺跡の北約1mの宮西・一角遺跡の調査においても土層堆積に若干の相違が見られるものの，一連の状況が確認されている。

(3) D調査区

基本土層として調査区南側溝の南壁の土層図を示した。第1層現耕作土に続く第2～第8層はいずれも灰黄色から黄灰色を呈するシルト質極細砂で，遺物の出土が希薄なため時期が明確でないものの，概ね中世から近世以降の耕土層と考えられる。このうち，第7層の上面では水田畦畔が確認できた。

第10～第16層は弥生時代後期の自然流路の埋土で，黒色シルト系と灰色粗砂系の埋土がほぼ交互に堆積している。位置的には調査区東端の段丘直下（SD01・02）と調査区中程やや西寄り（SD03）の2ヶ所に3本の流れとして見られる。SD01・02が谷地形の東斜面中位から下端付近に沿って伸びるのに対しSD03は谷部中央部を脊梁状に延びると考えられ，位置関係に若干の相違があるものの，いずれも地形に沿って北東に延びていることなどから人為的な遺構というよりはむしろ旧河道内の自然流路的な溝であると考えられる。一方，中近世耕土層第2～第8層中第7層水田層を含む第5～第8層は，谷地形内部ではSD03埋土の上層に堆積しているが，東肩付近ではSD02の掘り方の一部を削平して堆積している。このことから，当該水田層の形成時期に谷内部で相当規模の土地造成が行われており，以降，度重なる洪水と相前後しながら水田耕作が営まれてきたことが想像される。

水田畦畔と自然流路の方向を確認するために，調査区から北へ約20mの地点に東西約7mのサブトレンチを設定して土層観察を行った。ほとんどの層が調査区南側溝の土層と対応関係を示し，7層に分層されたうちの最下層のみが弥生後期の自然流路の埋土と対応したほかは，いずれも中近世以降のものと考えられた。また，すべての層が比較的に起伏のない平坦な堆積をしており，畦畔の隆起や流路の切り込みが明瞭に見られなかったこともあって地形の細かい変化までは十分に把握できなかった。

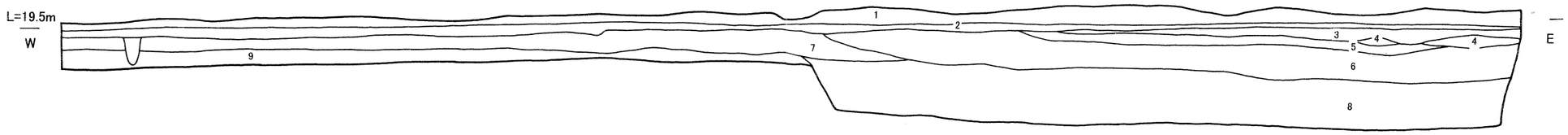
(4) E調査区

第1トレンチにあっては側溝北壁，第2から第4トレンチでは側溝西壁の土層断面図を基本土層として図示した。基本土層から見た土地条件は，E調査区全体が安定した微高地の上に立地しているが，第1～第3トレンチでは最終遺構面としてオリーブ褐色細砂層（第16層）が広く見られるのに対し，南側の第4，第5トレンチでは南に向かうに従って同層が次第に浅い位置で薄くなってゆくものと思われ，第5トレンチ中程で途切れて下層の黄灰色砂礫層が露出してくる。このため，水田開発前の原地形としては南側が相対的に高まっていたと予想することができる。なお，E調査区の土層注記は第7層にぶい黄褐色シルト質極細砂層など一部共通するものもあるが，基本的には第1～第3層と第4，第5層で別途に付した。これは，最終遺構面までの堆積の深度や（ある意味ではこれに起因してくるが）第1から第3トレンチの周囲が水田であるのに対し，第4，第5層が一部畑として利用されているという土地利用の相違等で土層の状況に若干の変化が見られることによる。

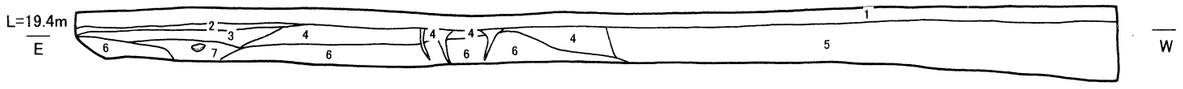
以下，第1～3トレンチから土層の堆積状況を見ると，第1層オリーブ褐色シルト質極細砂層から第7層にぶい黄褐色シルト質極細砂層は，部分的に断絶も見られるものの，調査トレンチ全体にわたってまんべんなく分布している。このうち，第1層は現耕作土層，第2～第6層はおおむね近世以降の耕土層と考えられる。第1トレンチ東端付近の第3層，第8層掘削中に近世染付細片等が出土しており，年代の指標となる。第7層にぶい黄褐色シルト質極細砂層は，部分的に堆積の厚薄はあるものの，第1～第5トレンチまでE調査区の全域にわたって見られる。総体に遺物の包含が希薄であるが，須恵器杯蓋片，土師器細片，弥生土器細片など若干が出土しており，8世紀にもっとも近い層準と考えられるが，遺物の摩耗が激しく限定には至らなかった。第1トレンチ中程で本層を埋土にもつ南北方向の溝状遺構を分断しているが，第1トレンチ西端から約11.5mの距離にあたり，E調査区西界の坪界線からの距離としても適当ではない。なお，第7層上面には水田畦畔等の痕跡も確認できなかった。

第9層暗褐色砂質シルトは，第16層オリーブ褐色細砂層を掘り込み面として部分的に旧河道埋土状に厚く堆積をしており，深い部分では層厚は40cm近くにおよんでいる。トレンチ調査のため全体的な状況は不明であるが，おおむね南北方向または南西から北東方向の溝または旧河道状の遺構になるものと考えられる。内部から弥生土器片を出土しているが，細片で表面の摩耗も著しいため限定的な時期決定には至らなかった。

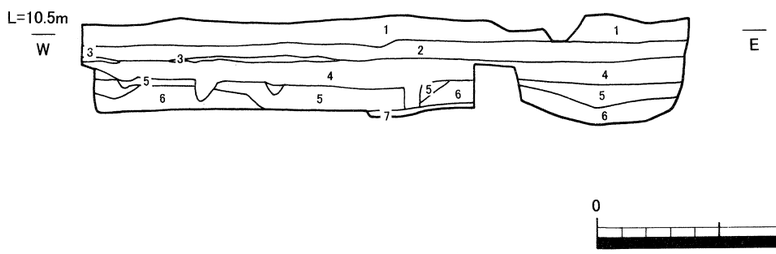
第1調査区西区画北側溝



第1調査区西区画南側溝



第1調査区東区画北側溝



第15図　B調査区基本土層図

第1調査区西区画北側溝

1	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2(現耕作土)
2	褐色細砂	Hue10YR4/4
3	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y5/3
4	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y5/2(SD01,02埋土)
5	黒褐色シルト質細砂	Hue7.5YR3/2(SX01埋土)
6	黒褐色砂質シルト	Hue10YR3/2(SX01埋土)
7	オリーブ褐色砂礫	Hue2.5Y4/3
8	暗オリーブ褐色砂質シルト	Hue2.5Y3/3(SX01埋土)
9	褐色細砂	Hue7.5YR4/3(地山)

第1調査区西区画南側溝

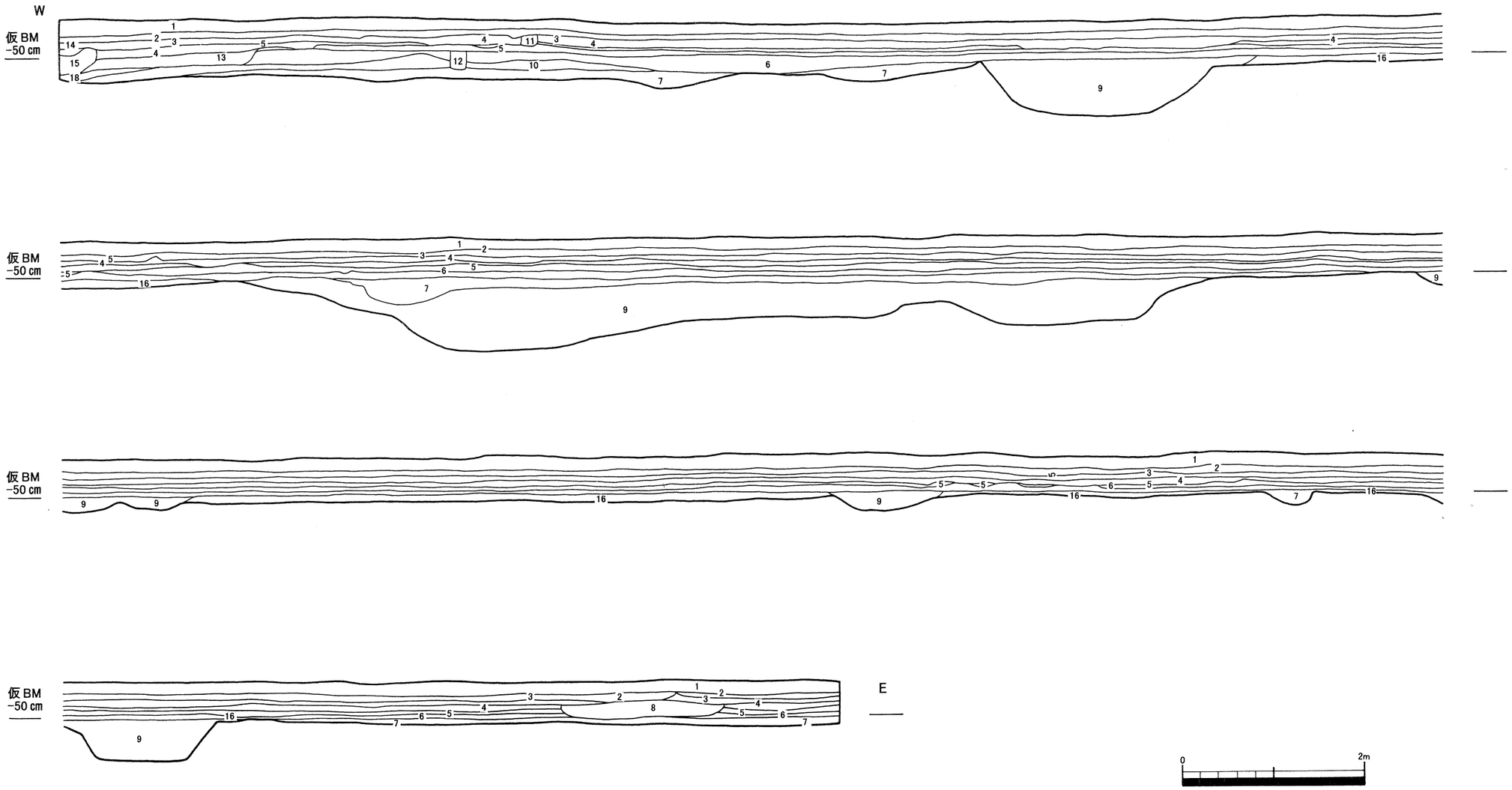
1	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/2(現耕作土)
2	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3(中～粗砂粒多い)
3	にぶい黄褐色砂混りシルト	Hue10YR4/3(マンガン沈着顕著)
4	オリーブ褐色粗砂	Hue2.5Y4/4(マンガン沈着顕著)
5	褐色粗砂礫	Hue10YR4/4(洪水)
6	にぶい黄褐色砂混りシルト	Hue10YR4/3
7	灰黄褐色砂質シルト	Hue10YR4/2(SD04埋土)

第1調査区東区画北側溝

1	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/4(現耕作土)
2	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/3
3	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/3(褐鉄鉱沈着強い)
4	黒褐色砂質シルト	Hue10YR3/2(SH01埋土)
5	オリーブ褐色中砂	Hue2.5Y4/4(SH03埋土)
6	灰黄色中砂	Hue10YR4/2(SH03掘込層)
7	褐色粗砂礫	Hue10YR4/4
8	褐色砂質シルト	Hue7.5YR4/3

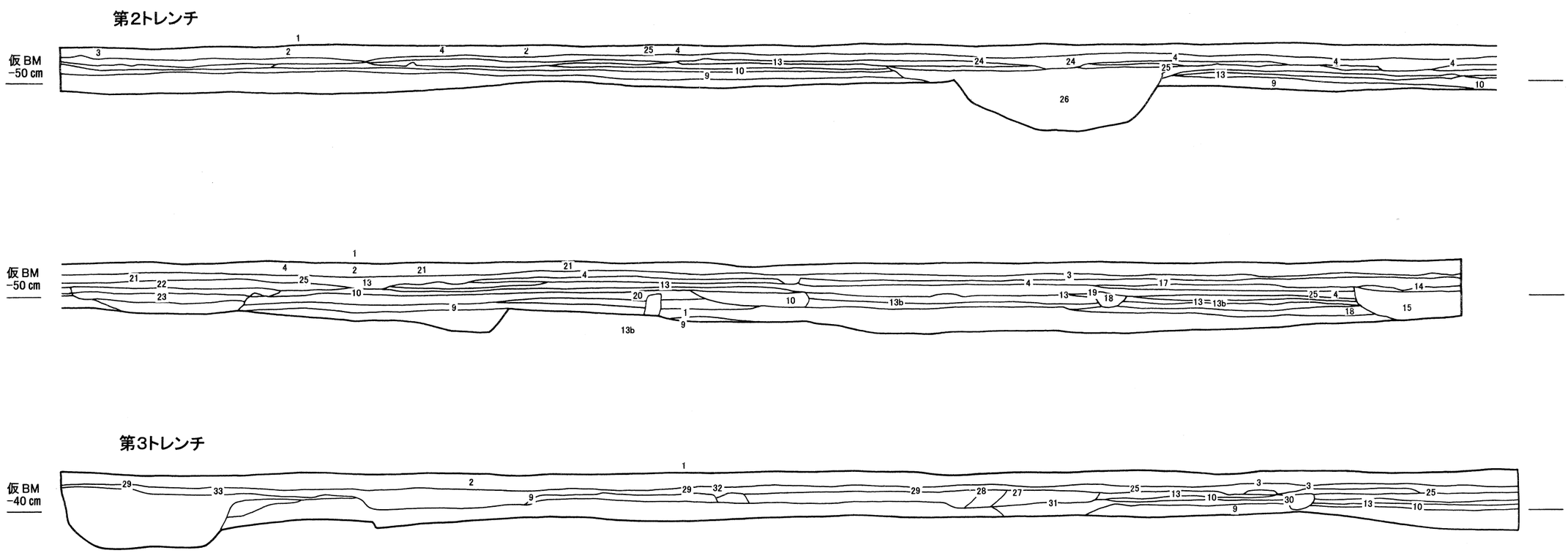
第16図　D調査区基本土層図

1　現耕作土
2　暗灰黄色シルト質細砂(Hue2.5Y4/2)
3　暗灰黄色シルト質細砂(Hue2.5Y5/2)
4　にぶい黄色シルト質細砂(Hue2.5Y6/3)(砂質強い)
5　暗灰黄色シルト質極細砂(Hue2.5Y5/2)(砂質強い)
6　黄灰色シルト質細砂(Hue2.5Y6/1)
7　黄灰色シルト質細砂(Hue2.5Y5/1)
8　黄灰色シルト質細砂(Hue2.5Y5/1)
9　暗灰黄色砂質シルト(Hue2.5Y5/2)
10　黒色シルト(Hue7.5Y2/1)　SD埋土
11　黒褐色粗砂(Hue10YR3/1)と12との混淆土
12　黒色砂質シルト(Hue7.5YR2/1)
13　褐灰色粗砂レキ(Hue7.5YR4/1)
14　12と同じ
15　暗褐色粗砂レキ(Hue10YR3/3)
16　オリーブ黒色シルト(Hue5Y3/1)
17　12と9の混淆土



第17図　E調査区第1トレンチ基本土層図

1	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3(現耕作土)	10	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3	19	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	28	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/2
2	にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR5/3(現耕非常耕土)	11	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	20	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y5/2	29	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
3	黄褐色細砂	Hue2.5YR5/4	12	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	21	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR5/3	30	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3
4	にぶい黄色細砂	Hue2.5YR6/3	13	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3	22	灰黄褐色	Hue10YR5/2	31	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
5	黄褐色細砂	Hue2.5YR5/4	14	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	23	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR5/3	32	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
6	黄褐色細砂	Hue2.5YR5/3	15	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/3	24	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR5/4	33	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
7	にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR5/3	16	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3(地山)	25	にぶい黄色細砂	Hue2.5YR6/3			
8	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	17	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y4/2	26	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5YR5/3			
9	暗褐色砂質シルト	Hue10YR3/3	18	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	27	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2			

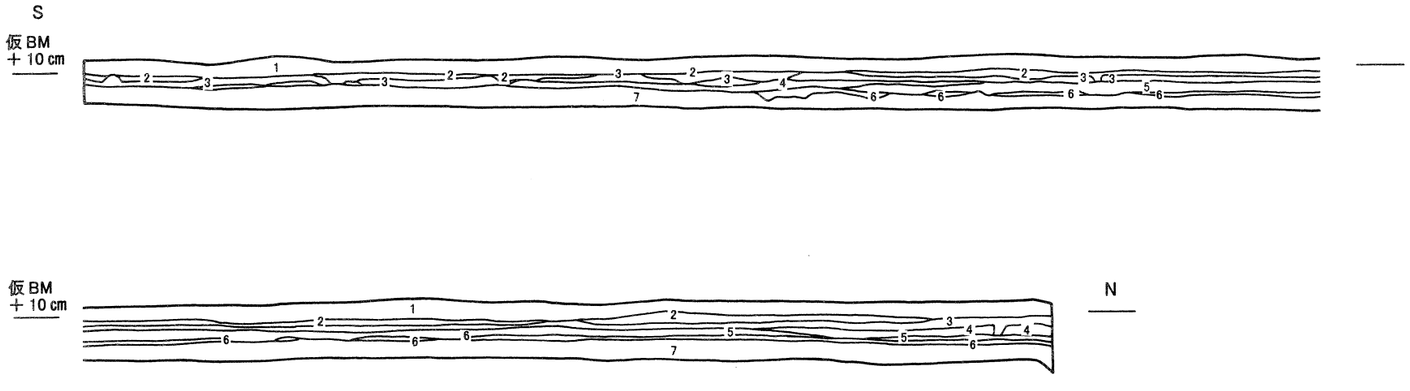


第18図　E調査区第2第3トレンチ基本土層図

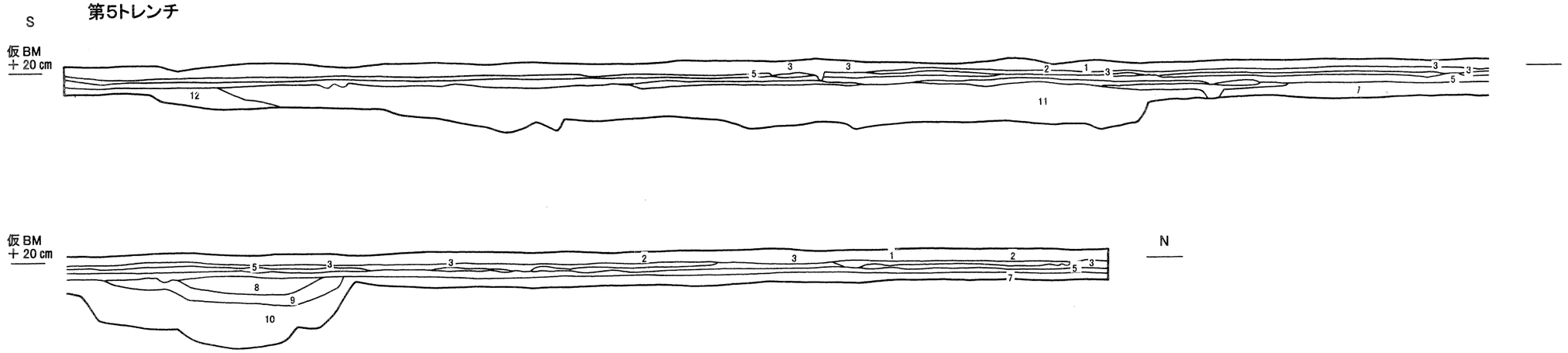
0　2m

1	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3(現耕作土)	10	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3	19	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	28	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/2
2	にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR5/3(現耕非常耕土)	11	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	20	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y5/2	29	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
3	黄褐色細砂	Hue2.5YR5/4	12	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	21	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR5/3	30	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3
4	にぶい黄色細砂	Hue2.5YR6/3	13	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3	22	灰黄褐色細砂	Hue10YR5/2	31	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
5	黄褐色細砂	Hue2.5YR5/4	14	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	23	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR5/3	32	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
6	黄褐色細砂	Hue2.5YR5/3	15	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/3	24	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR5/4	33	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2
7	にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR5/3	16	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3(地山)	25	にぶい黄色細砂	Hue2.5YR6/3			
8	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	17	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y4/2	26	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5YR5/3			
9	暗褐色砂質シルト	Hue10YR3/3	18	黄褐色細砂	Hue2.5Y5/3	27	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/2			

第4トレンチ



第5トレンチ



1	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3(現耕作土)	5	にぶい黄色細砂	Hue2.5Y6/3	9	黒褐色砂質シルト	Hue10YR3/1
2	黄灰色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/1	6	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y5/2	10	褐灰色細砂	Hue10YR4/1
3	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y5/2	7	にぶい黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR5/3	11	黄灰色砂礫	Hue2.5Y4/1(小礫)
4	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/4	8	褐灰色砂質シルト	Hue10YR4/1	12	黄灰色砂礫	Hue2.5Y4/1(中～大礫)

第19図　E調査区第4・第5トレンチ基本土層図

第10層オリーブ褐色シルト質極細砂は，第1トレンチ中程から第7層の直上に出現し，第2トレンチから南へ移るにつれて次第に第7層と入れ替わってゆく。第7層と共に8世紀にもっとも近い層序と考えられるが，遺物の確認がなく時代は未定で，水田畦畔等も確認できなかった。

第8層，第11層～第15層，第17～第25層，第30層は，第6層以上の堆積に関係する間層またはピットおよび土坑の埋土層である。第26層も第25層上面から掘り込む土坑状の埋土で，用途や性格は不明であるが近世以降の所産であろう。

第27層～第29層，第31層～第33層は，第3トレンチの南端付近の土層で，いずれも暗灰黄色系のシルト質極細砂の土質である。これらは，第1トレンチから第3トレンチの直前までの層位が基本的に水平堆積層であったのに比べて，そうした意味での規則性が失われているように見受けられる。時期的には近世以降の堆積と思われるが，水田耕作と畑作等の土地利用の違いを反映しているのかもしれない。

Ｅ調査区の南半となる第4，第5地点も第1層～第6層は近世から現代の耕土層と考えられるが，畑作と水田耕作の違いによるものか，第1から第3トレンチよりも全体的に土色が黄褐色がかっており，各層上面の乱れも目立っている。

第7層は第1から第3トレンチと同様でにぶい黄褐色シルト質極細砂層である。第7層上面のレベルを第1トレンチと比較すると，第1トレンチでは仮ベンチマークとほぼ同レベルにあるのに対し，第5トレンチでは仮ベンチマーク-10cm付近に層上面が位置し，南側の方が低くなっている。層上面の状況をみると第5トレンチの方が起伏が多く，上層からの掘削等により乱されたような状況にあるため，当時の高低差の比較をする場合には後世の削平も考慮に入れる必要があるかもしれない。なお，現地表面の高低差では第5トレンチの方が第1トレンチよりも5cmほど高くなっており，本段冒頭の原地形の推定とも沿ったかたちとなっている。

第8～第10層は，第7層上面を掘り込み面とする土坑の埋土である。出土遺物がないため時期等は明らかでない。

第11層，第12層の黄灰色砂礫層は，第1～第3トレンチで第16層とした最終遺構面オリーブ褐色細砂質層の基盤層となるものと考えられる。

(5)　Ｆ調査区

現林・多肥上町境（推定旧山田香川郡界線）に跨って4本のトレンチを東西縦列方向に設定した。東端に位置する第1トレンチが林町域（旧山田郡域）に，以下，西へ順に第2，3，4トレンチが多肥上町域（旧香川郡域）に位置する。

いずれも現耕作土下20～40cmで最終遺構面に到達し，土地条件としては安定的な微高地の様相を呈するが，調査区南側に10m程隔てた分ヶ池が旧河道の谷地形を利用した溜池で，北側120m付近にも桜木出水付近から下池に続く旧河道（谷地形）が存在することを考えると，当時は不安定な小河川に囲まれた孤島のような存在であったかとも想像される。

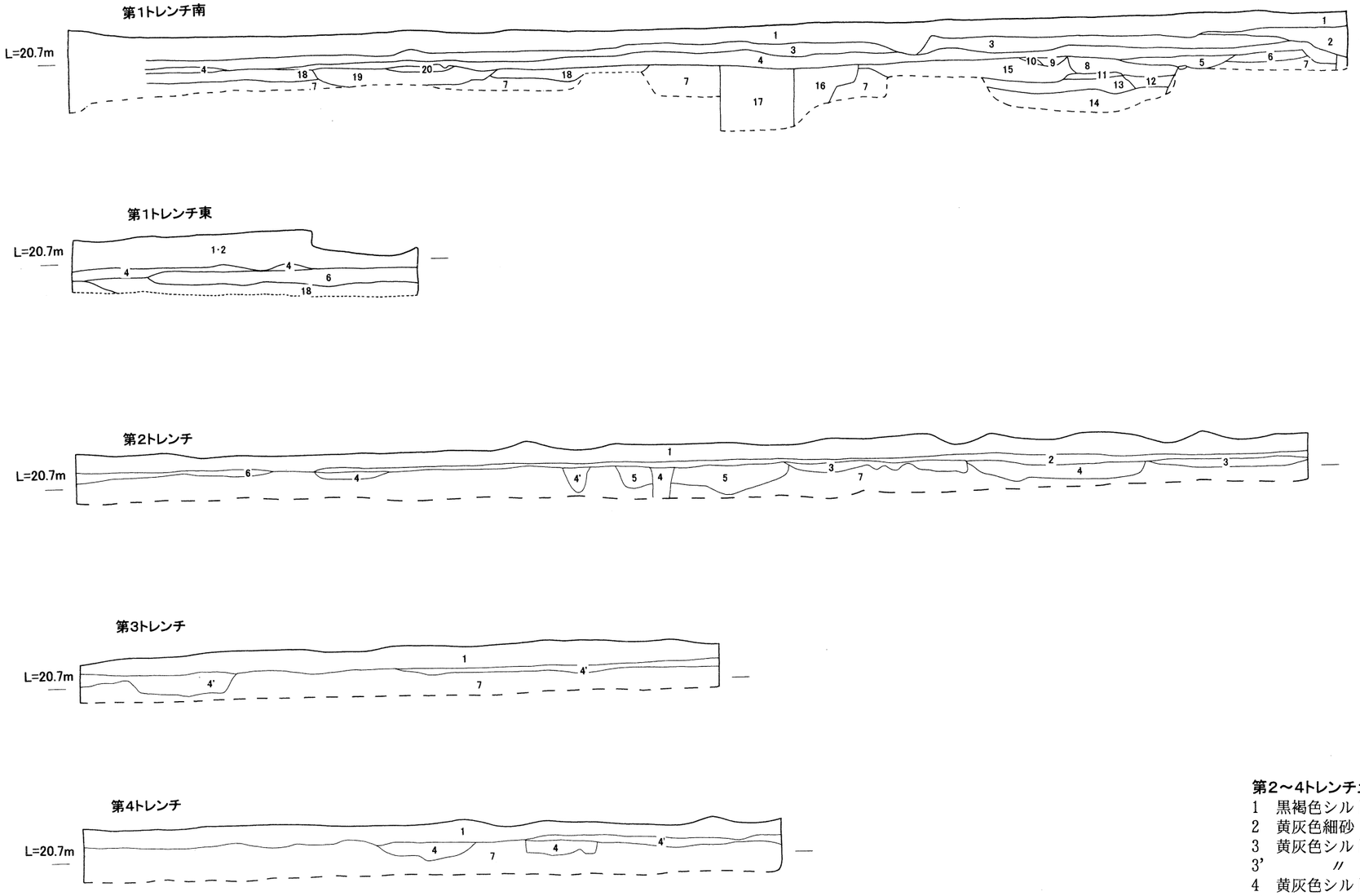
調査区南辺を基本土層として掲げた。

第1トレンチでは，ほぼトレンチ全面を占めて西流の後第2トレンチの南東端をかすめて北西流するSD01（弥生時代中後期），トレンチ西辺に沿って北流し調査区外で西に向かうSD03（近世）の存在によって土層に若干の変化が見られるが，第2トレンチ以西では近世以降の浅い溝跡や地下げの痕跡のみで目立った堆積はなかった。

以下各トレンチの土層について概観すると，第1トレンチでは現耕作土である第1層灰黄褐色シル

ト質極細砂を最上位として,第3層暗オリーブ褐色シルト質極細砂,第4層灰黄褐色シルト質極細砂の近現代耕土層が続く。調査区西端で錯綜する第5層～第14層は南北流する近世溝状遺構の堆積である。第8層灰黄褐色細砂はSD02の埋土である。第12層褐灰色シルト質極細砂,第13灰黄褐色シルト質極細砂,第14層灰黄褐色細砂はSD03の埋土と考えられる。第16層灰黄褐色細砂は井戸の控え部分の埋め戻し土,第17層暗灰黄色砂礫は同井戸廃棄の際の埋め土である。出土遺物がなかったが,周囲の状況や地権者からの聞き取りによって近代頃の廃絶になるものと考えられる。第18層灰黄褐色シルト質極細砂は弥生中期から後期の土器を包含するSD01の埋土である。第19層灰黄褐色シルト質極細砂も同様な埋土であるが,遺構完掘後に南北のセクションで溝断面状の落ち込みを確認したものである。そして最下層（最終遺構面）が第7層にぶい黄褐色細砂であった。

第2～第4トレンチは近世以降の浅い掘り込み意外で目立った遺構は見られない。第1層黒褐色シルト質極細砂は現耕作土層で第2～第4トレンチに共通に見られる。色調に若干の相違があるものの第1トレンチと同質のものであろう。第2層黄褐色細砂は第2トレンチのみに第1層の下位層として認められる。現耕作土の床土である。第3層,第3'層,第4層の黄灰色シルト質極細砂,第4'層暗灰黄色シルト質極細砂,第5層黒褐色細砂はいずれも近世の遺構である。ピット状,溝状,土坑状,地下げ状と多様な平面形態をとり,性格的にも不明瞭な遺構である。遺構の切り合いから第4層→第3層→第5層の掘削順が復元できるがいずれ近接した時期の産物であろう。



第20図　F調査区基本土層図

第1トレンチ土層注記

1	灰黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR 4/2(現耕作土)
2	褐色花崗土砂礫	Hue10YR 4/4(用水路工事控埋土)
3	暗オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y 3/3
4	灰黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR 3/2
5	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR 4/4
6	黒褐色細砂	Hue7.5YR3/2
7	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR 4/3(地山)
8	灰黄褐色細砂	HueYR 4/2
9	〃	〃
10	にぶい黄褐色細砂	Hue10YR 4/3
11	褐色細砂	Hue10YR 4/4
12	褐灰色シルト質極細砂	Hue10YR 4/1
13	灰黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR 4/2
14	灰黄褐色細砂	Hue10YR 5/2
15	灰黄褐色細砂	Hue10YR 4/2
16	灰黄褐色細砂	Hue10YR 5/2(SE01控掘)
17	暗灰黄色砂礫	Hue2.5Y 4/2(SE01埋土)
18	灰黄褐色シルト質極細砂	Hue10YR 4/2(SE01埋土)
19	〃	〃
20	黄灰色細砂	Hue2.5Y 4/1

第2～4トレンチ土層注記

1	黒褐色シルト質極細砂	Hue2.5YR 3/1(現耕作土)
2	黄灰色細砂	〃 5/1(床土)
3	黄灰色シルト質極細砂	〃 4/1
3'	〃	〃 〃(褐鉄鉱やや多い)
4	黄灰色シルト質極細砂	〃 5/1
4'	暗灰黄色シルト質極細砂	〃 4/2
5	黒褐色細砂	〃 3/2
6	暗灰黄色細砂	〃 5/2(床土)
7	〃	〃 4/2(地山)

3　遺構と遺物

(1)　A・C調査区

A調査では，遺構として4本の溝状遺構（うち2本は断面確認のみ）と松並木の根株跡，褐色砂礫の客土整地層の段差，および旧河道埋土中の水田層（断面観察のみ）を検出した。溝状遺構の遺構番号については，第1トレンチから東へ順にSD01～SD05とした。また，A調査区第3トレンチの東端から北方向に拡張したC調査区でも3本の溝状遺構と井戸跡1基が認められたが，このうち2本の溝状遺構はA調査区第3トレンチのSD05の北方延伸部分と西への直曲部分であることを確認した。

ＳＤ０１

SD01は，第1トレンチ西端から東へ約10mで確認された。検出面は第2層現代耕作土層の直下で，ほぼ南北流し，検出幅1.2m，深さ30cmを測る。埋土は，草木灰様の黒色シルト（上層）と暗灰黄色シルト質極細砂（下層）の2層に分けることができる。

第1トレンチ出土遺物はすべてSD01より出土している。1は軒平瓦である。唐草文の変形と考えており，米印の中心から波形の枝をつけている。2は陶器底部である。内面及び外面下部にナデを施す。器種は不明である。3は玉縁式丸瓦である。玉縁の付け根付近に穿孔を有する。また，凹面には布目圧痕がみられる。

ＳＤ０２

SD02は，SD01の直下に重なって検出され，SD01同様ほぼ南北流する。第3，第7層を掘込面とし，検出幅約2m，深さ約50cmを測る。埋土は，細礫を含むオリーブ褐色シルト質極細砂（上層），暗オリーブ褐色シルト質極細砂（下層）の2層に分かれる。

SD01・02の位置は，順道図絵および明治期の地籍図でも水路として表現され，方向も条里地割にほぼ沿っているため，条里に規制された古くからの地割であると考えられる。

ＳＤ０３

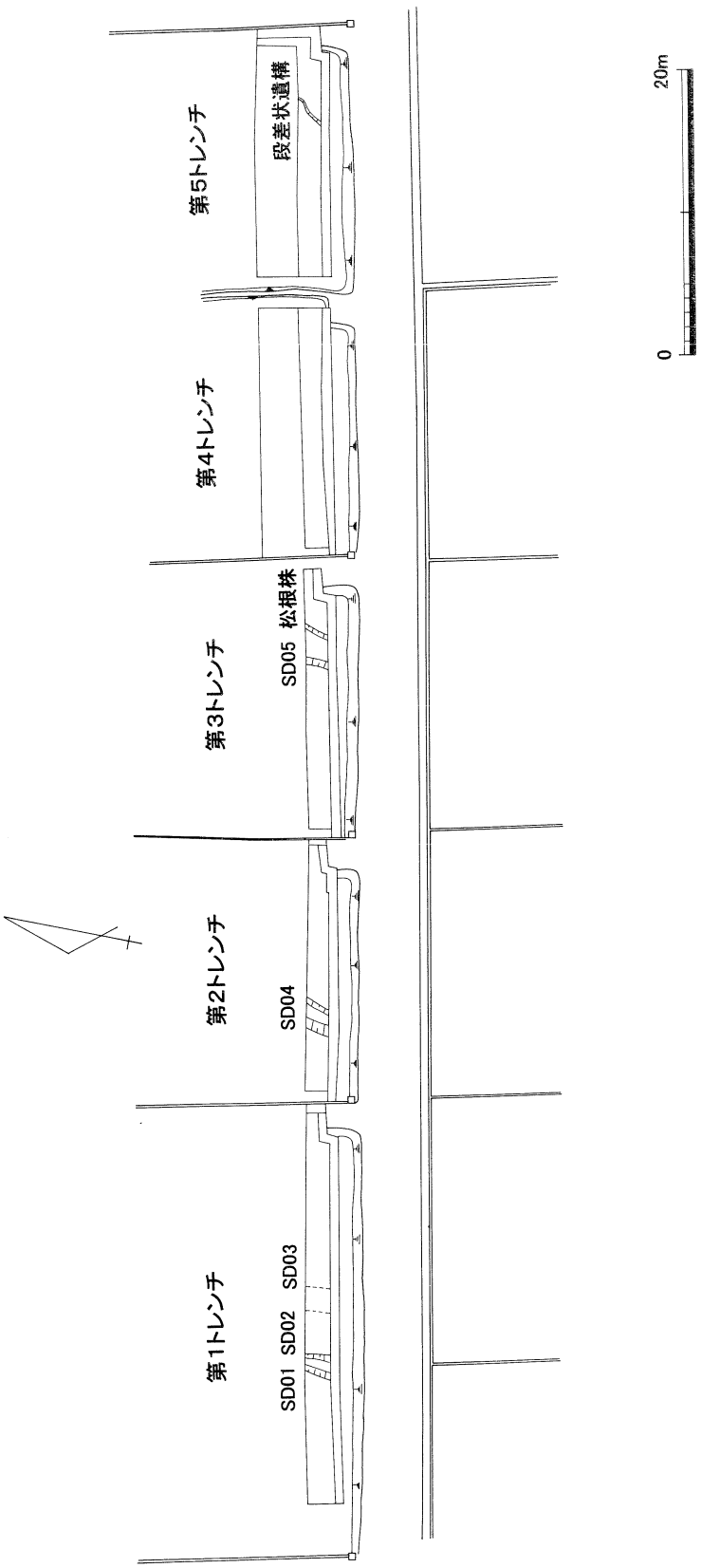
SD01・SD02から東へ約5m隔てた地点でSD03を確認した。土層断面による観察に限られたため流れの方向は確定的ではないが，SD01・02同様南北流するものと思われる。第7層灰黄色砂礫層から掘込み，幅3m，深さ約50cmを測る。埋土はSD02とほぼ同様で，中位に細礫を含むオリーブ褐色シルト質極細砂，最下層に暗オリーブ褐色シルト質極細砂を充填するが，埋没の最終段階，最上層に黄褐色シルト質極細砂，にぶい黄褐色細砂の2層がかぶっている。掘込面，埋土から見てSD02と同時期のものと考えられる。

ＳＤ０４

SD04は，第2トレンチ西端から5m東寄りの地点で確認された。第22層上面（現耕水田層）より掘込み，検出幅2m，深さ20cmで北流する。埋土は，暗灰黄色砂岩大礫の単一層である。

順道図絵上では，該当する位置は水田として表現されていて溝など土地を区画する遺構は確認できず，また明治期の地籍図でもほぼ同位置に水路はあるものの方位が違っている。このため，方位としては条里方向にほぼ従うものの，明治中頃以降に新しく設定されたものと推定できる。

第2トレンチ出土の主な遺物を一括して掲げた。4は軒平瓦である。右半及び左端部を欠損している。中央に囲み線で表現された現存4弁の花文を配し，その下から2本の枝を出している。枝は内側のものが右，外側のものが左にそれぞれ2回ずつ巻いている。5は軒丸瓦である。下半部を欠損するため現存9葉であるが，推定16葉の花弁をもつ菊文であったと思われる。6は上半部を欠損しているが，石灯篭の一部であると考えている。花崗岩系の石材を使用し，中心付近に穿孔を有する。



第21図　A調査区遺構配置図

穿孔の形状は別として，おそらくこのような石材が全4枚と屋根及び底部で家形をなし，それに脚がついて現在でも寺院で見かけるような姿に復原されるのであろう。

ＳＤ０５・松並木跡

SD05は第3トレンチ東寄りからＣ調査区南東隅をかすめるN10°E方向（磁北）に検出された。屈曲部分をトレンチに含んでいないものの，Ｃ調査区のほぼ中央付近で西直角に方向を転じて検出遺構につながっていくものと考えられる。南北方向の検出延長18.8m。このうちＡ調査区部分では検出幅2.5m，第26層黒褐色砂礫層（客土層）および第10層上面より掘込んで深さ20cmを測り，Ｃ調査区での計測値は検出幅1.65cm以上，深さ50cm（いずれも最大値）である。一方，東西方向では検出延長

第22図　Ａ調査区出土遺物実測図

第3表　A調査区出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外面	内面	
1	均整 唐草文軒平瓦	(巾) 7.2	(長さ) 3.4		唐草文の変形で米印の中心から波形の枝をつけている			
2	陶器底部		9.6	(5.8)	外面　ナデ 内面　ナデ			
3	玉縁式丸瓦	(瓦当径) 10.4	(長さ) 8.2		玉縁の付け根付近に穿孔 内面　布目圧痕			
4	均整 唐草文軒平瓦	(巾) 12.4	(長さ) 2.2		現存　4升の花文、その下から2本の枝を出し内側のものが右外側のものが左に2回ずつ巻いている			
5	菊花文軒丸瓦	(瓦当径) 13.2	(長さ) 6.0		下半部欠損のため現存9葉であるが推定16葉の花弁をもつ菊文と思われる			
6	石灯籠	(巾) 30.6	(高さ) 6.0		中央付近に穿孔			花崗岩系の石材
7	輪違い瓦	(瓦当径) 9.0	(長さ) 9.2		縦断面　ほぼ三角形 下部面取りを行っている 平面図　逆台形			
8	文字軒丸瓦	(瓦当径) 13.4	(長さ) 10.8		吉田寺の「吉」字の型上半			
9	文字軒丸瓦	(瓦当径) 11.4	(長さ) 7.4		吉田寺の「吉」字の型の一部			

3.8m,検出幅2.7m,深さは,SD05を境として南北側の掘り込み面に互いに30cmの高低差を有しているため,南側検出面から50cm,北側検出面からは20cmを測る。

A調査区基本土層によると埋土は下層に灰黄褐色シルト質極細砂,上層は現耕水田耕土と灰オリーブシルト質極細砂の混淆土が遺構検出面も含めて広く覆っており,周辺部の客土整地に伴って人為的に埋め立てられたものと観察される。さらにこれより先には,SD05の東半分は遺構東半の検出面を構成する第26層黒褐色砂礫(客土層)による埋め立てで,もとの水路幅の半分ほどに縮小されていた。

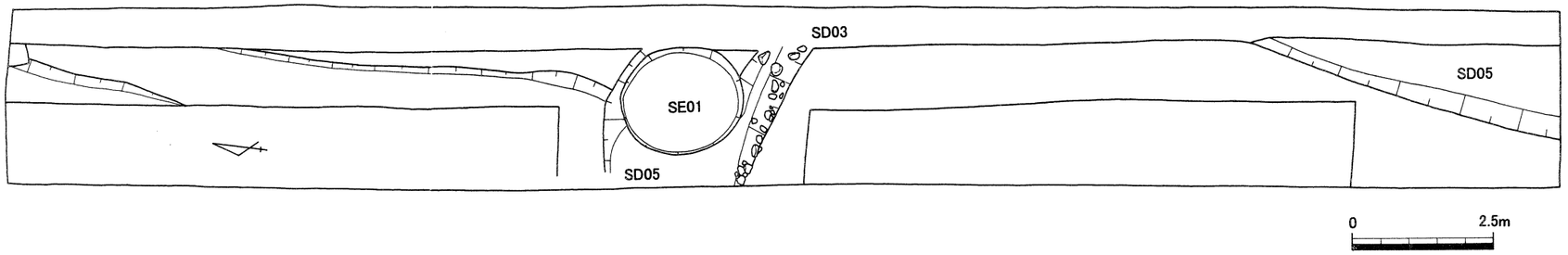
こうした土層の状況は,E調査区トレンチ第3層黄褐色シルト質極細砂,第4層暗オリーブ褐色礫混じり粗砂,第9層黄褐色砂礫といったSD05の埋土と,細部の土層表記では相違するものの,おおむね対応すると思われる。また,SD05東西流では第10層黒褐色シルト,第11層黒褐色シルト質極細砂,第12層黄褐色シルト質極細砂,第15層黒褐色粗砂礫が当該の層位である。第15層黒褐色粗砂礫以外についてはトレンチ東壁付近でSD05東西流埋土に切り込む素掘り井戸の埋土等の攪乱が影響しているものと思われる。

一方,A調査区第3トレンチのSD05の東岸は,第26層に被覆されているが,暗褐色シルト質極細砂層が幅約1.5m,高さ50cmで遺構に沿って土手状に延びていると思われ,ここに松の根株数本が列状に検出されている。順道図絵によると,この付近は岩田神社参道および吉国寺の境内地に対応するため,SD05は参道西縁の境界をなす用水路と松並木,第26層は神社参道と吉国寺境内の整地層と考えられる。

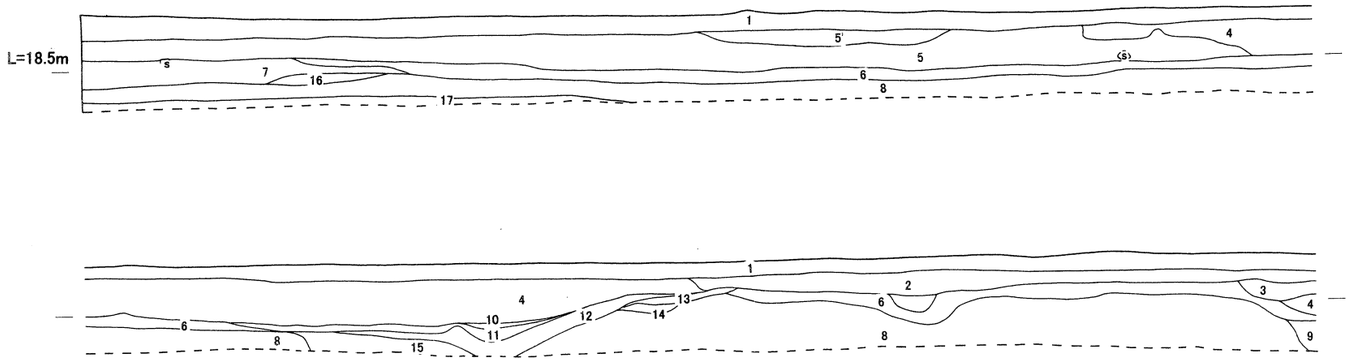
SD05は,順道図絵上では岩田神社参道西路縁と位置的に適合しているが,明治24年の地籍図では当該箇所は水田筆界となっており,用水路の記述は見られない。したがって遺構としては近代以降の所産と推定されるが,筆界東側の水田が神社参道(相撲場)部分と同様の平面形をなしていることから,神社参道(相撲場)が後世に水田に転用されたものと考えられ,従って土地区画としては古いものであろう。

SD05出土遺物の主なものを第22・25図に掲げた。第22図はA調査区第3トレンチ出土のもので7は輪違い瓦である。縦断面はほぼ三角形であり,またそれを意識して下部の面取りを行っている。平面形は逆台形を呈する。8・9は軒丸瓦である。8は下半部を,9は左半及び下半部を欠損するが,ともに吉国寺の「吉」字を型どったものであろう。

第25図は,C調査区出土のものである。12平瓦片に刻印された「(林)善右衛門」の刻印等から遺構の埋没年代としては現代(終戦以前)が考えられる(「18～19世紀の土器・瓦について」空港跡地遺跡発掘調査概報　平成5年度)。

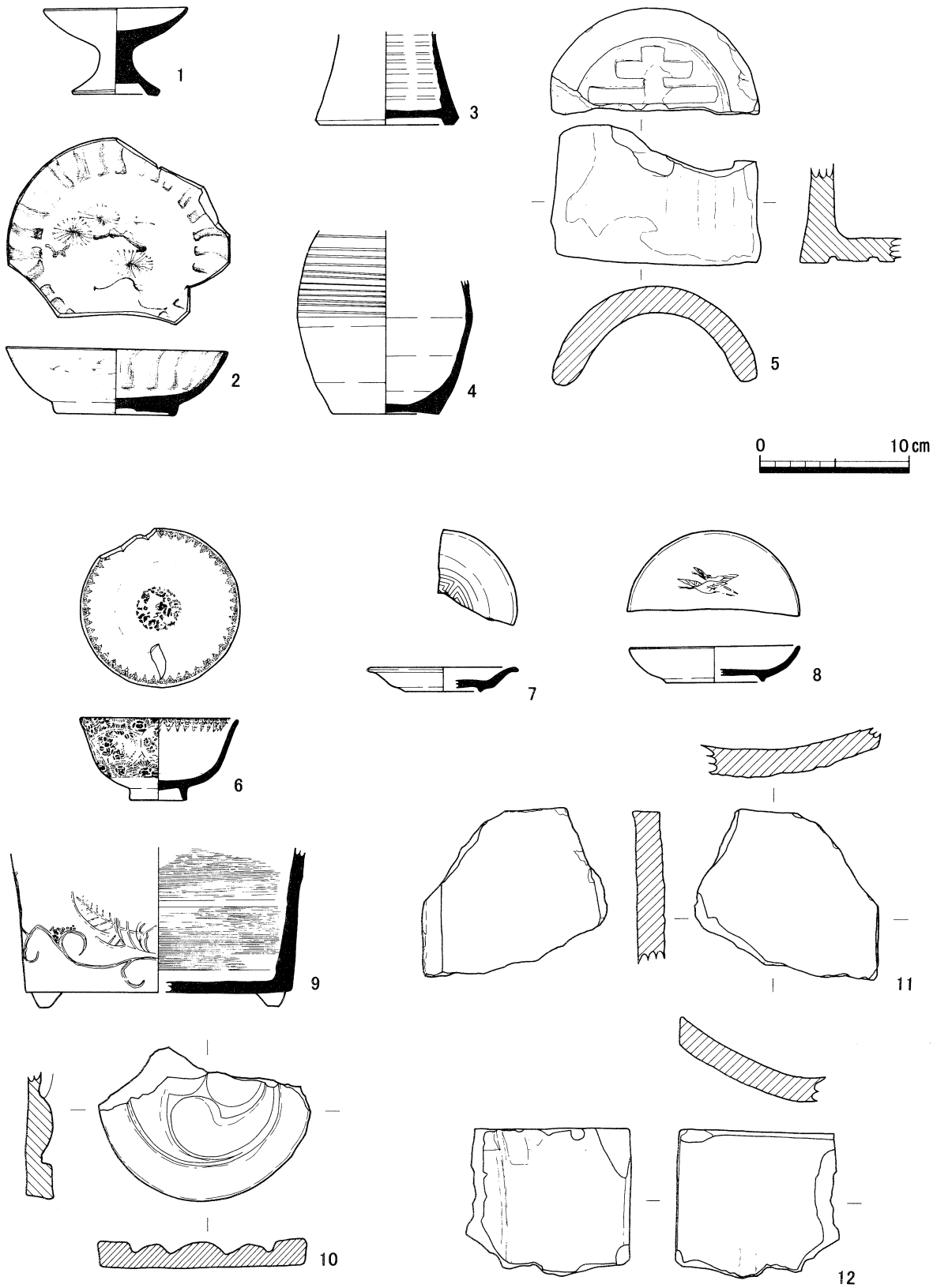


第23図　C調査区遺構配置図



第24図　C調査区東壁面土層図

1	オリーブ褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/3	(小砂レキ多く含む)　現耕作土
2	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/4	(小砂レキ多く含む)　現床土
3	黄褐色シルト質極細砂	Hue2.5Y5/3	(小砂レキ多く含む)　S19の客土
4	暗オリーブ褐色レキ混り粗砂	Hue2.5Y3/3	S19の溝の埋土(埋立土)
5	暗灰黄色砂質シルト	Hue2.5Y5/2	(黄褐色の地山砂質シルトブロック含む)　戦後の埋立土
5'	暗灰黄色砂質シルト	Hue2.5Y4/2	
6	黄灰色中砂～細砂	Hue2.5Y4/1	戦前の耕作土
7	暗灰黄色シルト質細砂	Hue2.5Y4/2	〃
8	〃	〃	
9	黄灰色砂レキ	Hue2.5Y4/1	
10	黒褐色シルト	Hue2.5Y3/2	細レキ含む締まりが悪く腐葉土状
11	黒褐色シルト質極細砂	〃	細レキ混り
12	黄灰色シルト質細砂	Hue2.5Y4/1	
13	オリーブ褐色細砂	Hue2.5Y4/3	
14	黒色細レキ	Hue2.5Y2/1	石炭　ガラス等の燃えカス状
15	黒褐色粗砂レキ	Hue2.5Y3/2	
16	暗灰黄色シルト質極細砂	Hue2.5Y4/2	
17	〃　シルト質細砂	〃	地山
18	黒褐色小レキ混り細砂	Hue10YR3/2	炭多く含む



第25図　C調査区SD05出土遺物実測図

第4表　C調査区 SD05 出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	陶器　高杯	9.5	5.6	5.7	杯部外面ナデ:内面ナデ 脚部外面ナデ:内面ナデ	灰白 5Y7/1	灰白 5Y8/1	密
2	染付　小鉢	14.8	8.0	4.4	体部外面ナデ:内面ナデ	(素地) 灰白 7.5Y8/1	(染付) 紺色	精良
3	陶器		9.0	(6.2)	外面ナデ:内面:ナデ	(素地) 灰白 2.5GY8/1		〃
4	〃　壷		7.0	(12.3)	外面ナデ:内面ナデ	(素地) 赤 10R4/6	(釉) 黒褐 5YR3/1	〃
5	文字軒丸瓦	(瓦当径) 14.0	(長さ) 9.0		外面ナデ:内面ナデ 「吉」の上部分	灰 N41	灰 N41	密
6	染付け碗	10.6	3.9	5.5	外面ナデ:内面ナデ	(素地) 灰白 N81	(染付) 紺色	精良
7	白磁　皿	12.0	7.1	1.6	外面ナデ:内面ナデ	(素地) 灰白 N81		〃
8	〃　〃	11.0	6.6	2.4	外面ナデ:内面ナデ	(素地) 灰白 N81		〃
9	土師器		17.6	(10.6)	外面ナデ:内面板ナデ	にぶ褐 7.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	1mm 以下の長石角閃石を含む
10	三巴文軒丸瓦	(瓦当径) 14.4	(長さ) 1.8		外面ナデ:内面ナデ	灰 N41	灰 N41	密
11	平瓦	(巾) 12.5	(長さ) 5.7		外面タタキ痕:内面布目	灰 N61	灰 N51	1mm 以下の石英長石を含む
12	〃	(巾) 10.9	(長さ) 10.0		外面ナデ:内面ナデ	暗青灰 5PB4/1	暗灰 N31	密

第5表　C調査区客土層・SD06 出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	陶磁器　碗	8.5	2.9	4.3	外面 ナデ　内面 ナデ	(素地) 灰白 N81	(染付) 紺色	精良
2	白磁　碗	11.2	3.8	4.7	外面 ナデ　内面 ナデ	(素地) 灰白 N81		〃
3	陶器　片手鍋	17.4		(4.5)	外面 ナデ　内面 ナデ	(素地) 灰白 2.5Y8/1	(釉) 浅黄 5Y7/3	〃
4	備前焼　擂鉢	29.9		(10.0)	外面 ナデ 指頭圧痕、接合痕 内面 指頭圧痕、擂目	灰赤 2.5YR4/2	灰赤 10R4/2	〃
5	三巴文軒丸瓦	(瓦当径) 13.5	(長さ) 16.9		外面 ナデ　内面 ナデ	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	密

ＳＤ０６

Ｃ調査区トレンチの SD05 東西流の下層で確認された。SD05 の南辺に沿って重複する形で検出幅80cm,深さ約20cmを測る。両側掘り肩から斜面部にかけて拳大の川原石によって護岸が施されていたと見られるが,北岸は後世のSE01による攪乱で石材の残存はほとんど見られない。

段差状遺構

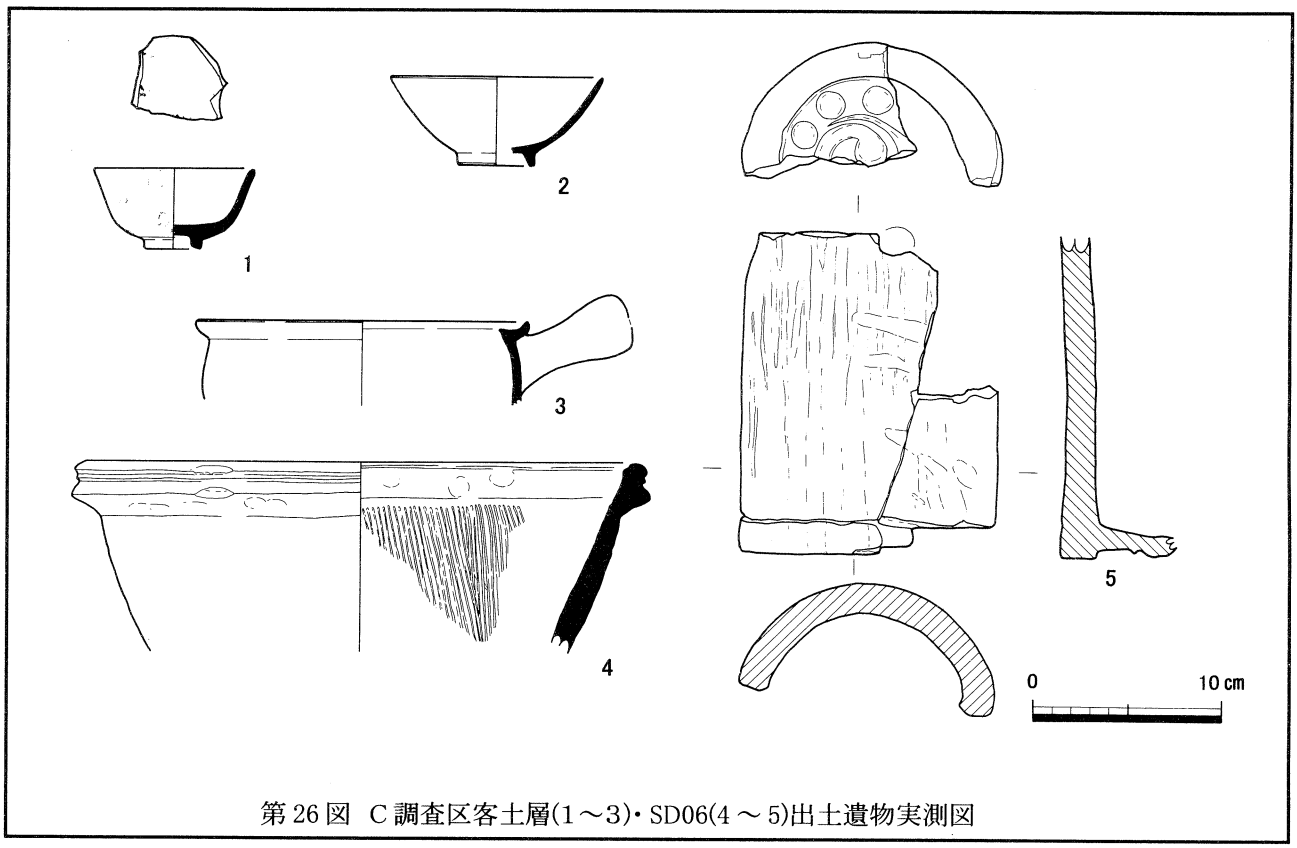
第5トレンチの東端の,現耕作土直下の黒褐色砂礫層（第26層）上面に段差状の遺構を確認した。

第26層は,微高地地山の灰黄色砂礫層（第29層）の上層に厚さ約10cmで人為的に盛られた客土層であると考えられる。段差は,約5cmの高低差を持って西側が高く,僅かに蛇行しながら南西から北東方向に延びている。

SD05東岸に土手状の盛土とともに確認した松の根株跡との直線距離は約30mを測り,これは順道図絵で見る岩田神社参道の幅員(松並木の並木幅を含めて約18m)とは10m近い開きがある。したがって,順道図絵の表現を距離的にもほぼ正確なものと仮定すれば,この段差は吉国寺域のなんらかの施設に伴う段差の痕跡と考えるべきものと思われる。

ＳＥ０１

SD05の北西角から西へ約5mに検出された素掘りの井戸跡である。検出面の直径2m×1.75mのやや南北に長い楕円形を呈し,深さは検出面から約50cmで地山の砂礫層に達する。SD05との切り合いは必ずしも明確ではなかったが,底付近から化学肥料のビニール袋等が出たことにより戦後の埋没と考えられる。SD05自体は昭和19年の軍用地接収から終戦直後の民間払い下げの過程で埋められたものであるから,遺構の変遷としてはSD06（1818～1991頃）→SD05（1991以降～1945年頃）→SE01（1945年以降)の順序をたどるものと思われる。



第26図　C調査区客土層(1～3)・SD06(4～5)出土遺物実測図

ＳＲ０１

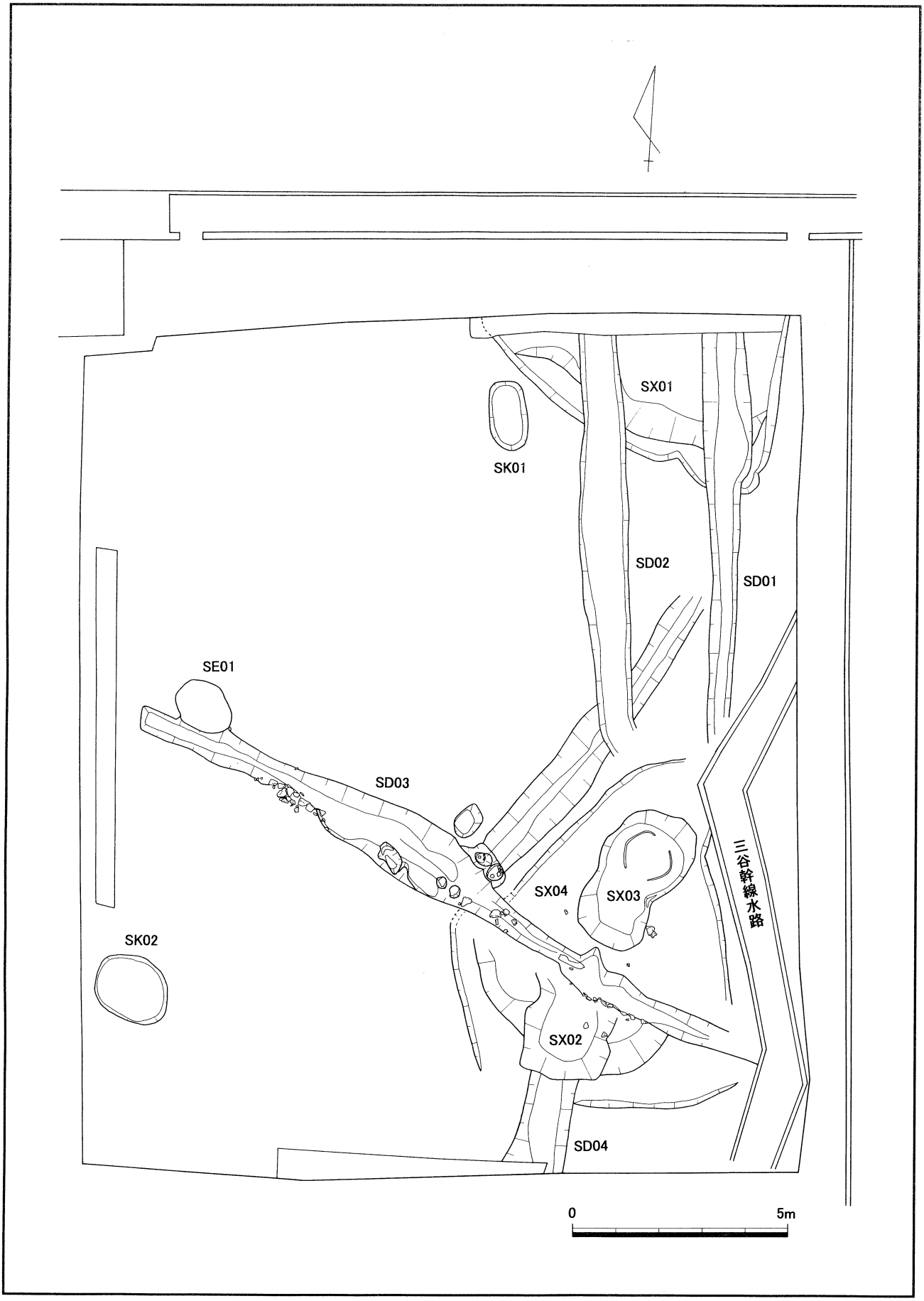
近世遺構の確認の後，側溝掘削によって自然河道（SR01）を確認した。第1トレンチ東端付近から第3トレンチ中程のSD05西肩付近までの東西約34mにおよんでいる。旧河道の想定流路方向は真北よりはやや東に振れていると考えられるため，トレンチで捕捉した延長はやや流路に斜行しており，正横断面の幅員はもう少し狭くなるものの，それでも20m超の規模は有していると思われる。

第20層，第21層といった黒褐色のシルト質埋土が河道の大部分を埋積し，さらに上層には水田耕作が営まれていたと見られる灰褐色から暗オリーブ褐色のシルト質極細砂層（第18，18'，19，24層）がそれぞれ10～15cm程度に堆積している。中でも第18層には水田畦畔の盛り上がりが断面で明確に確認できるが，出土遺物が希薄なため時期の決定には至らなかった。

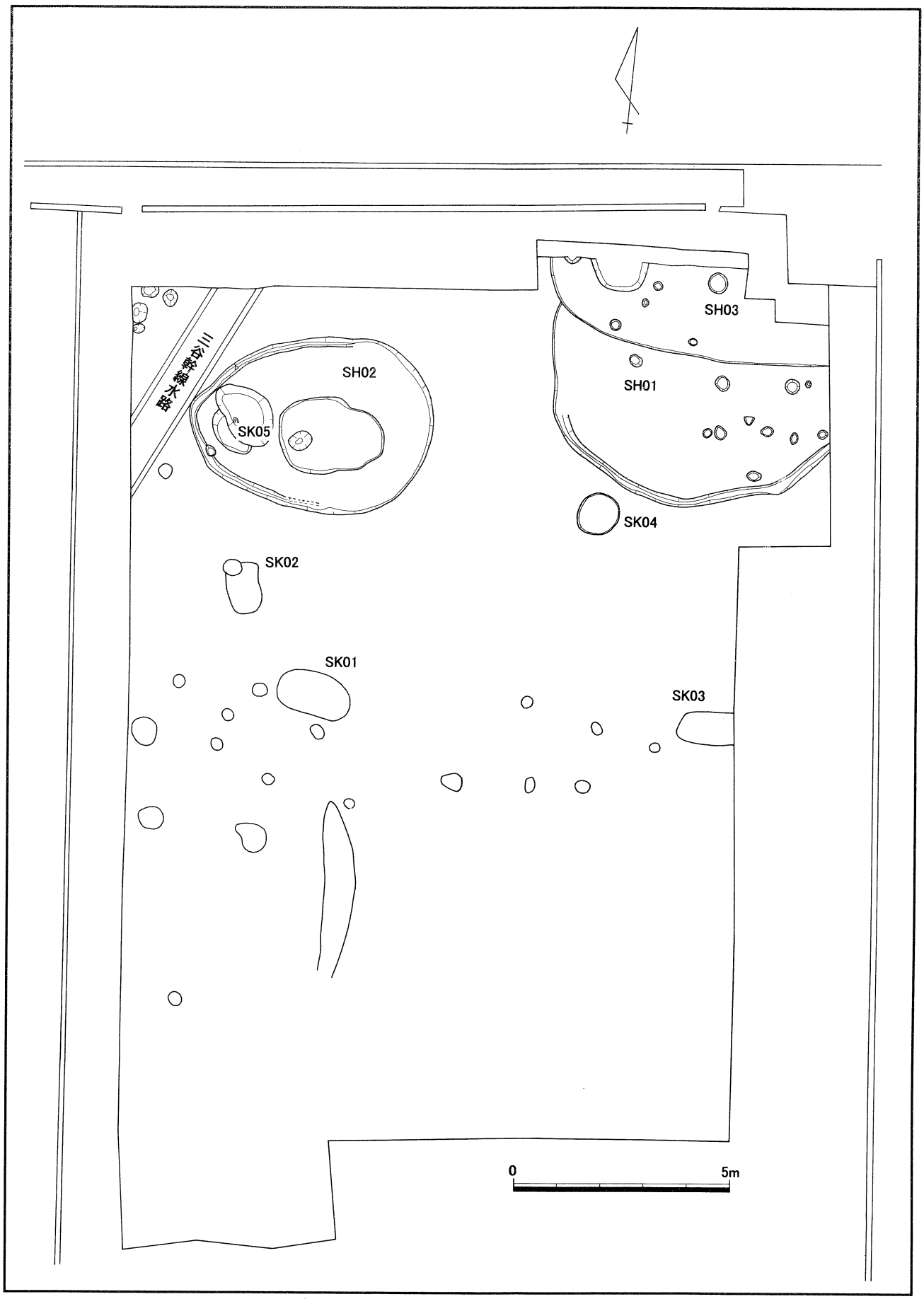
(2)　Ｂ調査区

東西両区画とも，現在の耕作土および近現代の遺物を包含する床土層１，２層を除去すると，現地表下約15～30cmで遺構面が出現する。遺構は，弥生時代前期の土坑６，弥生後期の竪穴住居３，弥生時代後期，古墳時代後期の須恵器などを包含する不明遺構２，中世石組み井戸１，近世条里区画溝１，近世から現代の不明遺構（水溜か）２，昭和初期の三谷幹線水路などが同一遺構面上に確認できる。

遺構面を形成する層は場所場所で多様であり，西へ寄るほど不安定な要素が強い。西区画では北西部の一角が洪水砂礫層で，上面からＳＥ０１が掘り込まれていることから，現在も地下に北東流する水脈が通っていると思われる。東西両区画の北半では，灰黄褐色系の細砂層が遺構面となっており，弥生時代前期末の土坑ならびに後期の竪穴住居の掘り込み層である。西区画の南半に広がる褐色細砂層は，ＳＸ０１，０４の弥生包含層と近似しており，あるいは包含層の一部かとも考えられる。東区画南半には和泉砂岩風化礫を主とする砂礫層が見られるが，これは飛行場造成または戦後の開墾により地山層下層の砂礫層が露出したものと考えられ，造成前の地形が北東に緩やかに傾斜していたことが分かる。戦前の地形を知る地権者の話では，遺構の現存の深さなどから判断して，30cm程度は削平を受けているのではないかとのことであった。



第27図　B調査区西区画遺構配置図



第28図　B調査区東区画遺構配置図

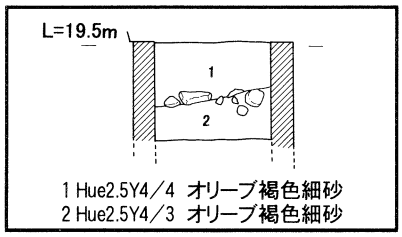
（ア） 近世・近現代の遺構

三谷幹線水路

東西区画の境界線に斜行して南南西から北北東に延びるコンクリート製の用水路を検出した。用水路は厚み15cmのコンクリート壁を箱形に立ち上げており，水路幅75cm，深さ60cmを測る。東西両区画の境付近からやや南寄りまではコンクリートの底打ちが見られるが，南半では底部のコンクリートが欠損していて側壁のみの構築となっている。廃棄の際の欠損か，建設当初からのものかは明らかでない。

遺構は，昭和初期の渇水時に三谷三郎池から通水した三谷幹線水路と考えられる。三谷幹線水路は，埋め立て前の池代池東堤を北へ延長した方向に延びており，池代池の北堤の北半町を東西の条里方向に延びる里道と交差する位置で北西へ35°屈曲し，さらに8mの地点で再び条里地割に方向を戻していて，総体的にはＮ15°Ｅ前後の方位を示している。これは，文化15（1818）年の『山田郡下林村順道図絵』，明治23(1990)頃の『山田郡下林村第弐号松生切り絵図』に見られる地境とほぼ一致しており，さらには後述するSX03を避ける形で築造されたためと考えられる。

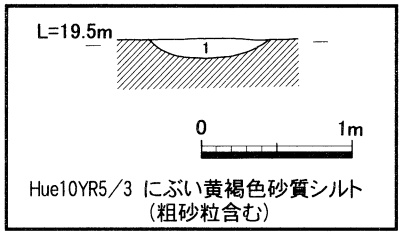
また，三谷幹線水路の埋土は，オリーブ褐色砂質の耕作土，地山砂礫層などの混交で，中位に砂岩質の河原石が多量に投棄されており，これから昭和19年の陸軍林飛行場造成の際に埋められたものと思われる。



第29図 三谷幹線水路土層断面図

ＳＤ０３

東区画南東隅から西北西方向Ｎ63°Ｗを示す東西流と，三谷幹線水路の西側で幹線と平行に北へ分岐する南北流からなり，全体としてＴ字状に検出された溝状遺構である。東西延長17.5mを測り，西端はSE01付近の砂礫層上で不明瞭に消滅，東端は三谷幹線水路の上部を掛け渡しで交差していたと思われ，このためのコンクリート承盤の基部のみがかろうじて残存している。三谷幹線水路を越えた東区画側については想定延長部分を拡張して確認したが，削平によるものか，延長部の確認はできなかった。

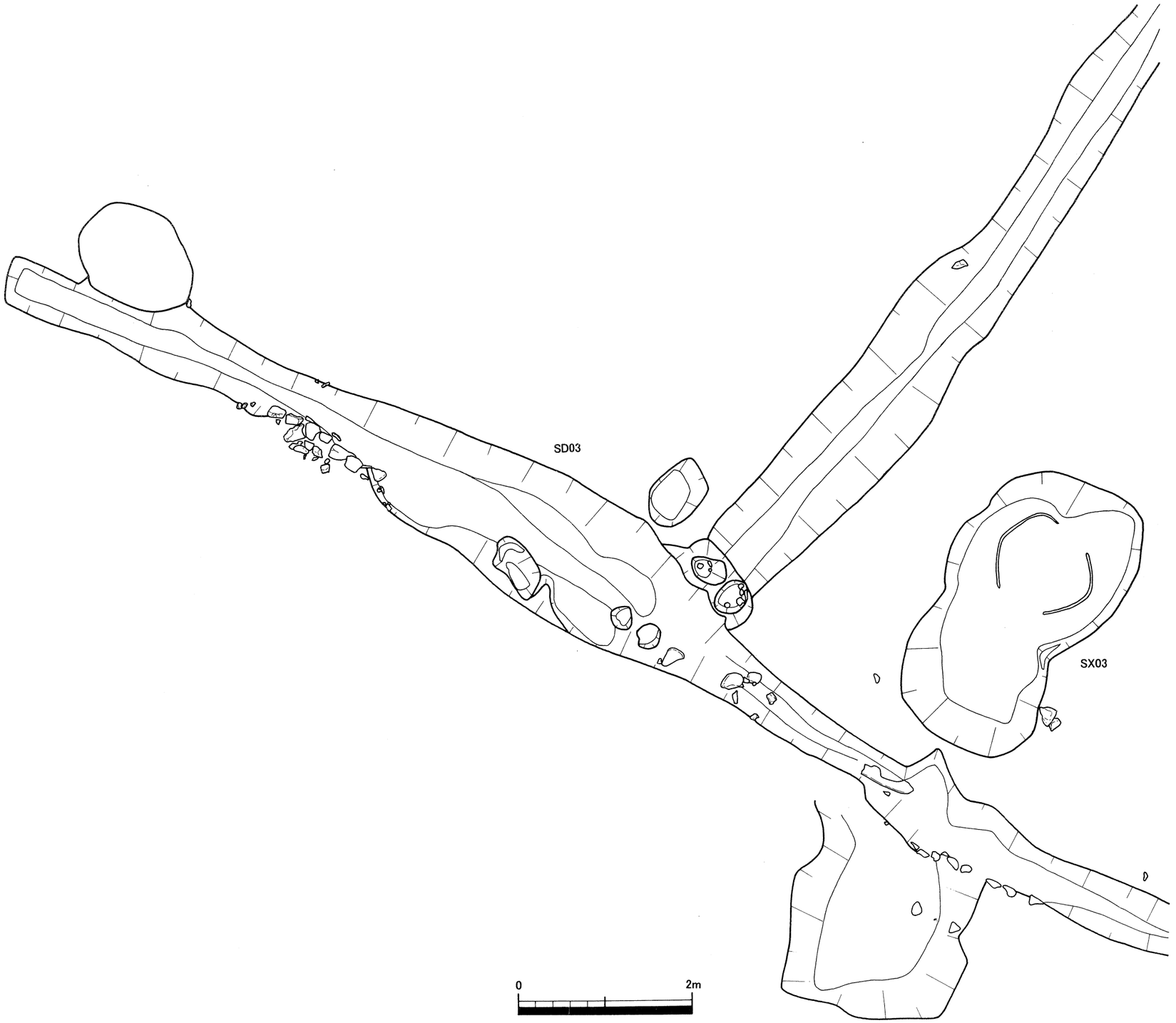


第30図 SD03土層断面図

SD03は，東西流の最大部で検出幅2m，深さ約20cmを測り，護岸のためか，南北流との合流点を中心に東西流の南側に河原石による積み石が断続的に見られる。南北流路は11.5mに及ぶ全体が素掘りになっており，河原石による護岸等は見られない。南北流最大部で検出幅1.1m，深さ約20cmを測る。東西流と南北流の接点に深さ約25cmのピットが2つ並んでおり，南北流への水流をせき止めるようなしきりをもっていた可能性もある。三谷幹線水路との交点西側に土管を用いた暗渠の基部が残存していることと，先述のコンクリート承盤等の存在から最終の埋没は昭和19年のことと考えられるが，『山田郡下林村順道図絵』から，少なくとも文化年間には成立していたと見られる。

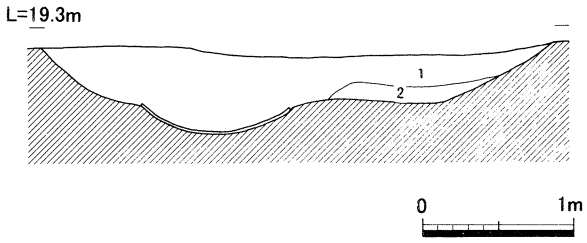
ＳＸ０３

SD03の分岐点の北西側隅に位置する。南北の条里方向に長軸をとる達磨状の平面形をもち，長径3.4m，短径は北側の最大部で2m，中程のくびれ部と南側の最大部でそれぞれ1.6m前後である。深さもくびれ部を隔てて南北それぞれにピークをもち，北側が55cm，南側が30cmを測る。埋土はくびれ部南側の一部に，にぶい黄色の砂質シルトによる厚さ10cmほどの，貼り土と見られる層がある他は，現在の耕作土層に近いオリーブ褐色の砂礫層によって充填されており，これも軍用林飛行場の造成にともなう埋め立てによるものと思われる。



第31図　SD03・SX03遺構図

地権者の話によると,戦前この付近に「ドンブリ」と呼ばれた水溜があったがもっと大きなものであった記憶があるとのことであった。先述の,調査区一帯には飛行場造成の際に,全体的に30～50cm程度の地下げがなされているのではないかといった談話と総合すると,本来鉢が開いた形状の土坑であったために,地表面の削平によって規模を縮小した状況で依存したものと考えれば,往事の記憶との整合性が図れるのではないだろうか。



1. Hue2.5Y4/4　オリーブ褐色砂礫
2. Hue2.5Y6/3　にぶい黄色砂質シルト

第32図　SX03土層断面図

(イ)　中世の遺構

ＳＥ０１

西区画の西寄り中程の,SD03の平面プランが砂礫層に乗り上げて不明瞭になる付近で,SD03の北側に接して検出された。平面プラン円形の石組み井戸で,検出面での直径90cm,底部の直径40cm,深さ1mを測る。

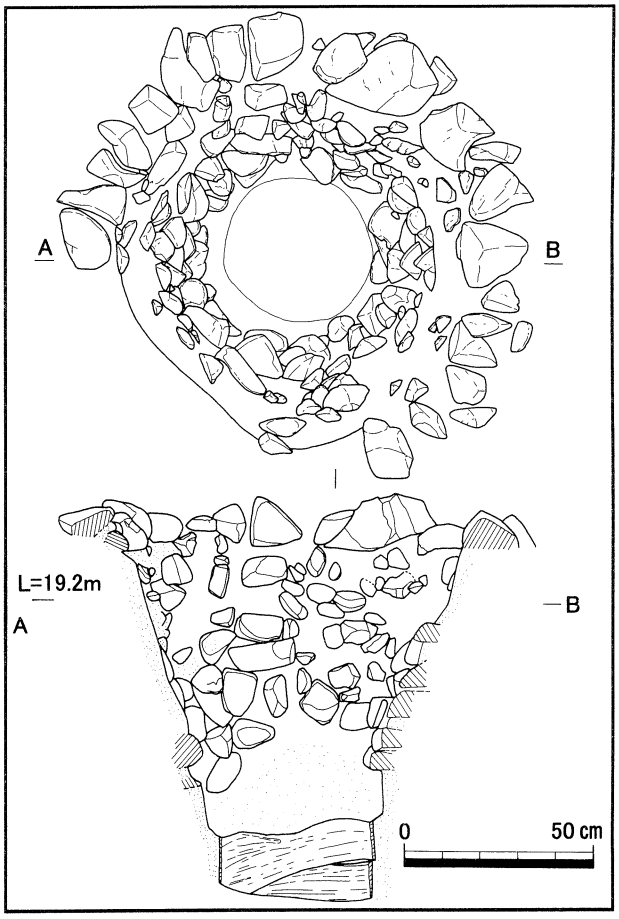
遺構検出面の石組みの状況は,30～50cm大の石材を井戸壁面に小口を向けるように放射状に配列しており,積石背後の栗石等の控え積みも明瞭には確認できないことから,元の掘り形も石組みに比してそれほど大がかりなものではなく最小限の掘削範囲にとどめているようである。一方,井戸内部の壁面を構成する石材は,長辺でも20cm未満と小振りなものが多く,石の方向も不規則,石の密度もまばらで,わずかに鉢に開く壁面の粘土層に埋め込まれるような形で組まれていた。そして,最深部の30cmほどは石材が殆ど見られず,底には幅20cm,直径40cmほどの曲げものによる井筒が2段に落とし込まれていた。

本遺構の出土遺物は,遺構検出面付近から底付近にかけて出土したもので,うち6点を図示した。

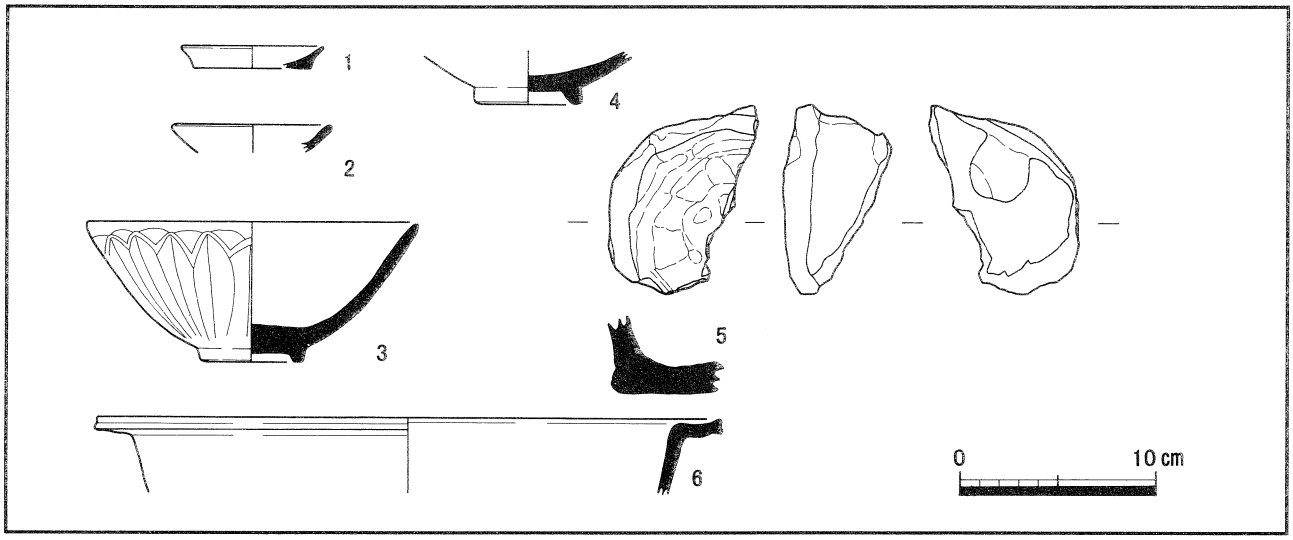
1,2は土師器小皿片である。いずれも口縁部付近の細片である。

3は,龍泉窯系の青磁碗片である。口縁部から底部までの各部位を含む三分の一ほどが4片に分かれて出土し,このうちの1片はSE01の検出精査の段階でごく浅い位置から出土している。口径16.8cm,器高7.1cm,底径5.2cmを測り,外面には21弁の鎬蓮弁を連続して巡らせる。底部を除く全面に施釉するが,高台の外面は器壁から滴下した釉薬によって斑状に地肌が露出している。

4は土師質の竈の鍔部片と考えられる。胎土は1mm前後の石英,長石粒を含み,淡黄色のややあまい焼き上がりとなっている。



第33図　SE01遺構図



第34図　SE01出土遺物実測図

第6表　SE01出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口底	底径	器高		外面	内面	
1	土師器皿	7.2	6.0	(1.1)	内外面ナデ	黄灰2.5Y6/1	灰黄2.5Y7/2	微砂粒を含む
2	土師器皿	7.8		(1.4)	内外面ナデ	橙7.5YR7/6	浅黄橙10YR8/4	石英・長石を含む、やや粗
3	青磁碗	16.8	5.2	7.1	外面に鎬蓮弁文	明緑灰10GY7/1 緑灰5G6/1	明緑灰10GY7/1	精良
4	白磁碗		5.4	(2.7)		灰白5Y8/1	灰白5Y8/2	精良
5	竈鍔		11.2	(5.0)	摩滅により不明	浅黄2.5Y7/3	浅黄色2.5Y8/3	石英・長石を含む、やや粗
6	土師器土堝	16.0		(3.8)	内外面ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい黄橙10YR7/4	石英・長石・角閃石を含む、やや密

5は,白磁碗の高台付近の破片である。内外面灰白色の器壁の内面には施釉,外面は腰部から高台にかけては無釉である。

6は土鍋の口縁部片である。

(ウ)　古墳時代の遺構

ＳＸ０１

西区画北東隅に検出された性格不明の落ち込み状の遺構である。平成7年度の市道林町47号線の事前調査の際に,本調査区の北側の一部で古墳時代後期から奈良時代の遺物が確認されており,この連続部分の確認を行うことが本調査区の目的のひとつであった。

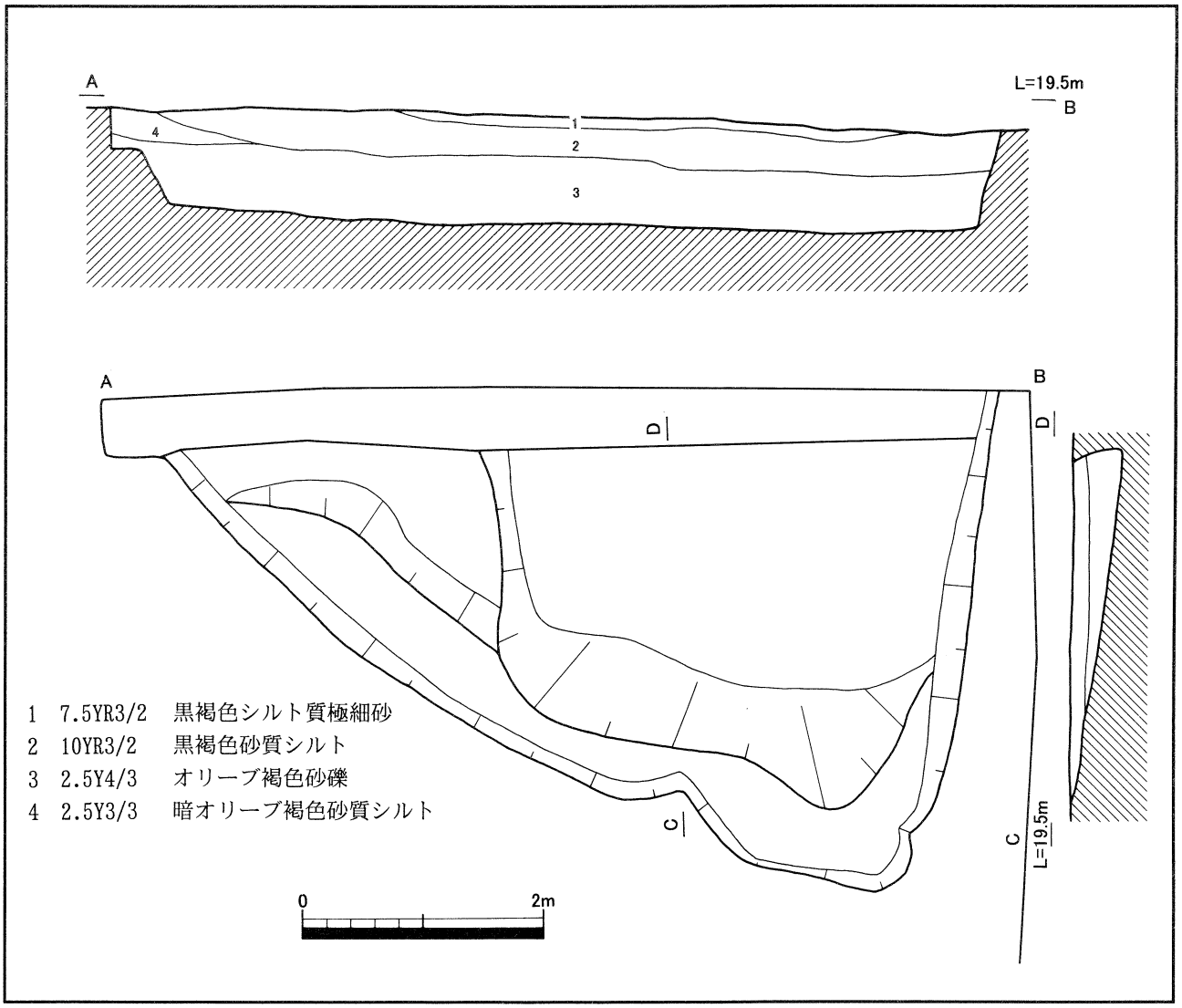
当初,遺構は南南西から北北東に方位をとる旧河道状を呈するものと予測していたが,調査区北縁から3.5m付近までで,平面直角三角形の浅いすり鉢状に収束した。三角形の辺長は,調査区北辺のセクション部分が直角三角形の斜辺にあたり,東西5.8m,他の二辺が西側5.6m,東側3.4mの長さであった。遺構の最深部は北辺セクションの中程で,遺構検出面から45cmを測る。

埋土は3層に分けられ，上層から，第1層黒褐色シルト質細砂，第2層黒褐色砂質シルト，第3層暗オリーブ褐色砂質シルトの順で，各層厚は5cm，12cm，28cmであった。このうち，第1，2層は古墳時代後期の須恵器片を包含し，第3層は後期の弥生土器片を含む。厳密には，検出面で確認できた平面プランは第1，2層に関わるもので，第3層は後述するSX04に向かってさらに延びていくものと考えられるが，今回の調査では完掘には至らなかった。また，今回の調査では，前年度に検出した8世紀の遺物は確認できなかった。

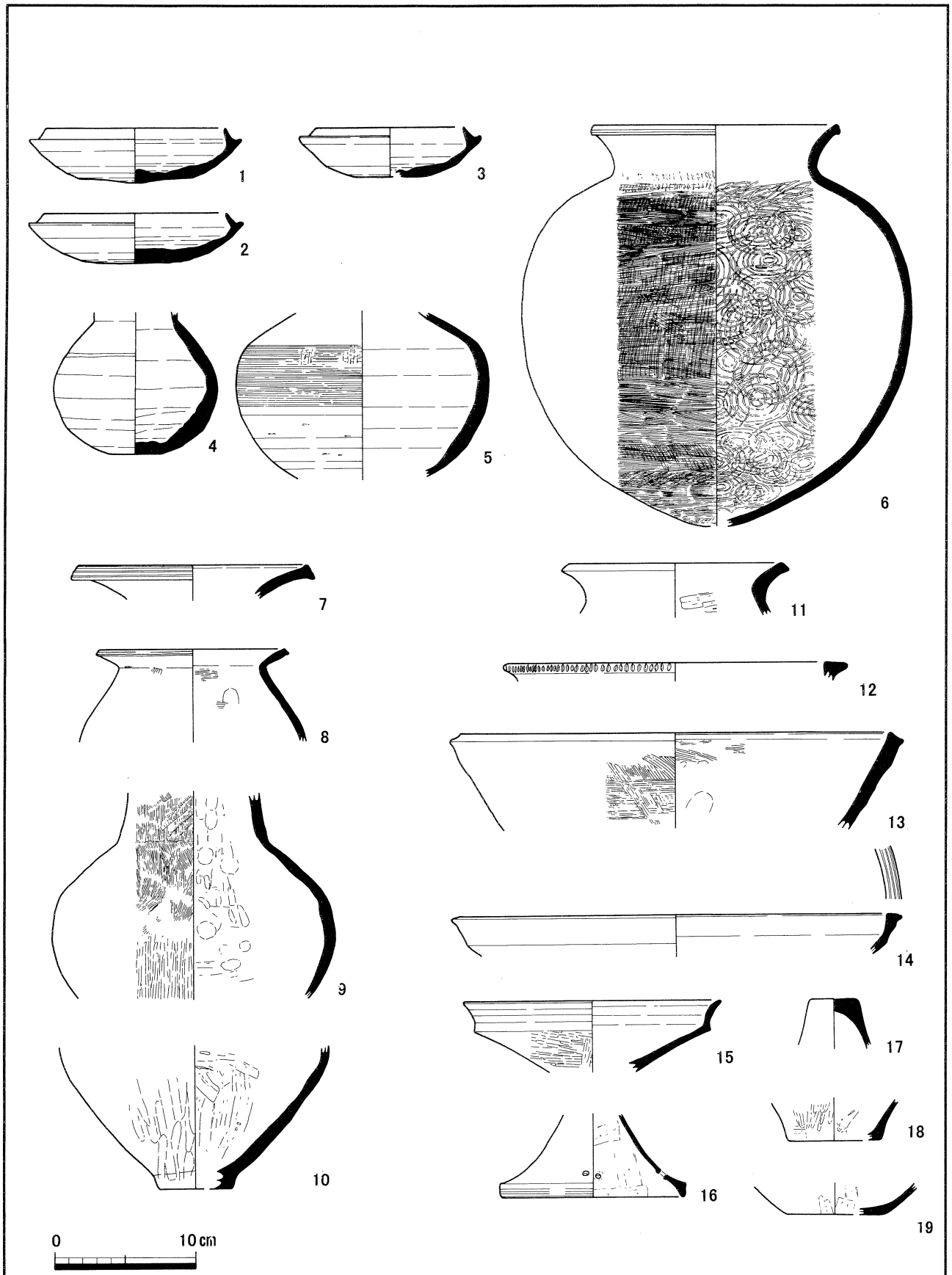
出土遺物のうち，須恵器は第1，2層から出土したものである。

1～3は須恵器杯身である。10～13cmの口径に4cm前後の器高を測り，扁平な形態に短い返りが内傾して取り付くものである。

4～6は壺である。4は底部から頸部に掛けての部分が残存し，胴部最大径11.2cm，器高は約10cmである。器表面上半部と内面にナデ，器表面下半部には回転ヘラケズリの痕跡が明瞭に残る。5は胴部の破片のみが残存し，最大径17.5cmを測る。器表面肩部と内面にナデ，器表面下半に回転ヘラケズリを施し，最大胴部の付近では叩きの後にカキメを巡らせている。6は，4，5よりも大型で球形の胴体を持つもので，口径17.2cm，器高28.2cm　胴部の最大径は27.2cmを測る。体部外面全体に叩きの後にカキメを施し，内面は同心円状の叩き痕が残る。後円端部は丸くまとめ，2条の沈線を巡らせている。



第35図　SX01遺構図・土層断面図



第36図　SX01出土遺物実測図

（エ） 弥生時代の遺構

SH01

東区画の北東隅で確認された竪穴住居である。

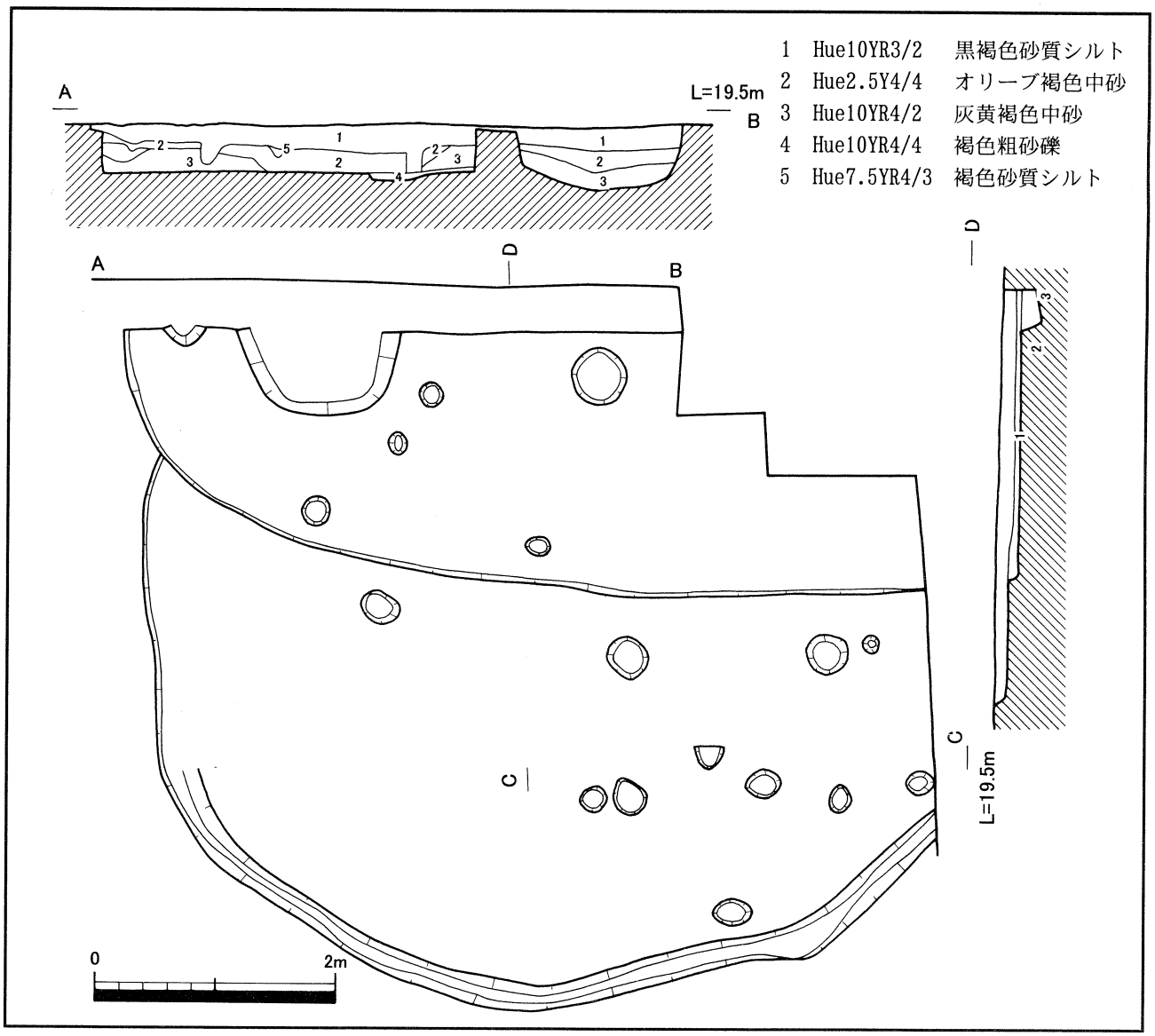
遺構の東端の一部が調査区外にはずれており，北側も側溝にかかる箇所や下層のSH03と交錯する部分が若干不明瞭になっているが，正円形というよりもやや不整な八角形の平面プランを呈し，推定の直径は9m前後を測る。

検出面から床面までの深さは約10cmが残存しており，壁溝は住居跡南縁の7.5m部分のみに，幅約20cm，深さ約4cmが検出できた。中央ピットは確認できておらず，10数個検出した柱穴はいずれも深さ5～10cmで位置的にも偏っているため，主柱穴の確定には至っていない。埋土は，住居跡，柱穴ともに黒褐色砂質シルトである。

出土遺物は埋土ならびに周辺側溝中等から弥生土器の細片が出土しており，そのうち4点を図示した。

1は，住居跡埋土中から出土した壺頸部片である。外面にタテ刷毛を施し，内面には指頭圧痕が残る。

2は，側溝掘削の際に出土した甕の口縁部片である。



第37図 SH01・SH03遺構図・土層断面図

第7表　SX01出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外面	内面	
1	須恵器杯身	12.8		3.8	外面場面ナデ、下面ヘラケズリ、内面ナデ	灰 N5/0	灰 6/0	密
2	須恵器杯身	13.0		3.5	外面上面ナデ、下面ヘラケズリ、内面ナデ	灰 N4/0	赤灰 2.5YR5/1	石英・長石・角閃石・砂粒を含む
3	須恵器杯身	11.6		3.5	外面上面ナデ、下面ヘラケズリ、内面ナデ	黄灰 2.5Y6/1	灰 N5/0	長石・角閃石微砂粒を含む
4	須恵器壷		3.4	(10.0)	外面体部上面ナデ、体部下面ヘラケズリ、内面ナデ	灰 N5/0	灰 N5/0	石英・長石・角閃石を含む
5	須恵器壷			(11.6)	外面体部上面タタキ後カキメ 体部下面ヘラケズリ、内面ナデ	灰 N5/0	灰 N5/0	石英・長石・角閃石を含む
6	須恵器壷	17.2		(28.2)	口縁端部凹線２条 外面口縁部ヨコナデ、体部タタキメカキメ、内面口縁部ヨコナデ体部タタキメ	灰 N4/0	灰 N5/0	石英・長石・角閃石を含む
7	弥生土器壷	16.2		(2.4)	内外面ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	橙 7.5YR6/6	石英・長石・角閃石・微砂粒を含む
8	弥生土器壷	13.2		(6.5)	口縁端部凹線１条 外面ナデ、ハケメ、内面ナデ、ハケメ、指頭圧痕	明赤褐 2.5YR5/6	褐 7.5YR4/3	石英を含む
9	弥生土器壷			(14.5)	頸部ハケ状工具による刺圧文 外面頸部体部ハケメ、体部下面ヘラミガキ、内面頸部シボリメ、指頭圧痕、体部板ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4	石英・長石・角閃石・微砂粒を含む
10	弥生土器壷		5.0	(10.1)	外面体部粗いヘラミガキ、底部ヨコナデ、内部ヘラケズリ	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	石英・長石・角閃石を含む
11	弥生土器甕	15.2		(3.7)	外面ヨコナデ、内面頸部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	石英・長石・角閃石を含む
12	弥生土器甕	24.0		(1.3)	外面ナデ、内面摩滅により不明	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	石英・長石を含む
13	弥生土器甕	30.4		(6.7)	外面ナデ、ハケメ、内面ナデ、ハケメ、指頭圧痕	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	石英・長石を含む
14	弥生土器高杯	30.0		(3.0)	内外面ヨコナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	長石を含む
15	弥生土器高杯	18.2		(5.0)	外面杯部ヘラミガキ、内面摩滅により不明	橙 7.5YR6/6	明褐 7.5YR5/6	石英・長石・角閃石・微砂粒を含む
16	弥生土器高杯		12.8	(5.9)	内孔１孔現存、外面ナデ、内面ヘラケズリ	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英を含む
17	弥生土器底部		3.0	(3.6)	内外面摩滅により不明	橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/2	石英・長石・角閃石を含む
18	弥生土器底部		6.4	(2.9)	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂粒を含む
19	弥生土器底部		6.6	(2.2)	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4	石英・長石・角閃石・微砂粒を含む

いずれの須恵器も焼成は堅緻で器表の磨耗等も見られないことから，出土地点付近での廃棄または埋納によるものと考えられる。時期的には6世紀半ばから後半の時期を示すものであろう。

7～19は弥生土器である。第1，2層から須恵器に混在して出土したものもあるが，第3層が純粋の弥生包含層である。

7～10は壷の破片である。7は，わずかに肥厚する口縁端部に3条の弱い凹線が見られる。8も口縁端部に1条の弱い凹線を巡らせている。9は長頸壷の頸部から胴部上半部にかけての破片で，頸部から肩部にかけては縦方向の刷毛目，最大胴部付近では足の短い斜め方向の刷毛目を，腰部から底部にかけては縦方向のヘラミガキを施しているものと思われる。内面は，胴部から頸部に移るくびれ部の裏に頸部成形の痕跡と見られる絞り痕が見られるほか，全面に指頭圧痕が残る。胴部の最大径約20cmを測る。10は壷の底部片と見られるが，器表面の磨耗が著しい。内面にわずかに縦方向のヘラケズリの痕跡が残っている。

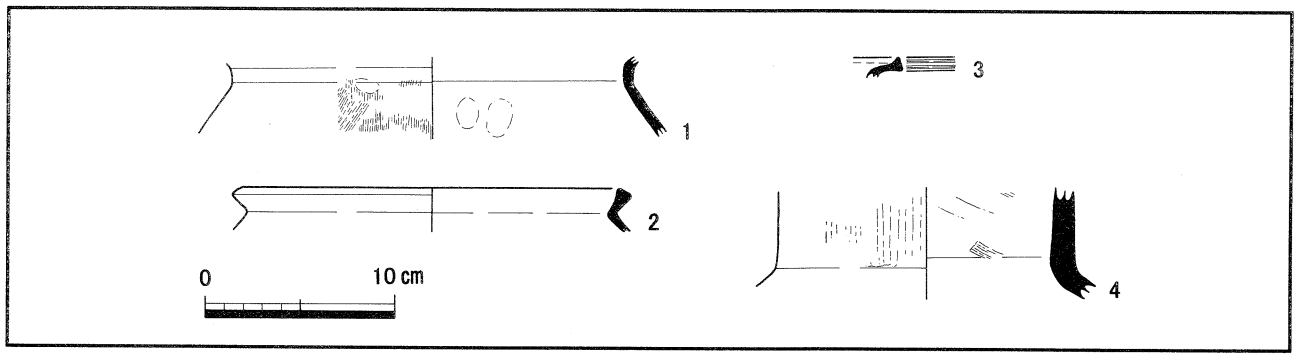
11，12は甕の口縁部片である。12は口唇部に刻みをもつ。

13は鉢である。内面口縁部付近に横方向，外面に横および斜め方向の刷毛による調整が見られる。

14，15は高杯杯部，16は同脚部片である。14は，緩やかに内湾しながら立ち上がる短い口縁の端部に2条の弱い凹線が見られる。15は，強く外反する口縁部が杯部から明確な稜をもって立ち上がっており，背部外面にヘラミガキが残る。16は，脚端部に2条の弱い凹線が見られる。

17～19は器種を明確にし得ないが，いずれも壷または甕の底部片である。

3は，住居跡埋土中から出土した壷口縁部片である。上方に肥厚する口縁端部に2条の弱い凹線を巡



第38図　SH01出土遺物実測図

第8表　SH01出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器甕			(4.2)	外面ハケメ、指頭圧痕、内面指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR5/4	明褐 7.5YR5/6	石英・角閃石を含む
2	弥生土器甕	20.0		(2.3)	内外面摩滅により不明	赤褐 2.5YR4/8	赤褐 2.5YR4/8	石英・角閃石を含む
3	弥生土器壷			(1.1)	内外面ヨコナデ	褐 7.5YR4/3	にぶい褐 7.5YR5/4	長石・角閃石・微砂粒を含む
4	弥生土器壷			(5.9)	外面粗いハケメ、内面ハケメ	明赤褐 5YR5/6	赤褐 5YR5/4	石英・角閃石を含む

らせている。

4は,側溝掘削の際に出土した壷の頸部片である。体部から垂直に立ち上がる頸部にかけての部分で,赤褐色かかった胎土中には1mm前後の角閃石,石英,長石等の砂粒を多く含む。外面にタテ刷毛,内面にはヘラケズリが残るが,いずれも器表の磨滅によって不明瞭である。

SH02

東区画の北西隅で三谷幹線水路のすぐ東側に確認された竪穴住居である。

ほぼ東西に長軸をおく卵形を呈し,長径7.2m,短径4.2mを測る。検出面から床面までの深さは,約8cm分が残存しており,西半分の壁際に幅約25cm,深さ約3cmの壁溝が確認できる。床面中央部の東西2.4m,南北1.8mの不整楕円形状の範囲の床面が周囲よりさらに5cmほど低くなっており,ベッド状の遺構と考えられる。中央ピットは住居床面の西隅に楕円形状に認められ,北西から南東に向かう長軸が1.7m,短径が1.1mを測る。柱穴は確認できなず,壁溝付近に垂木穴等の痕跡も見られなかった。住居跡埋土はにぶい黄褐色細砂,中央ピット埋土は暗褐色の細砂で中央ピット中に焦土層は確認できなかった。なお,中央ピット直下にはＳＨ０２以前に掘り込まれたと思われるＳＫ０４が検出されている。

出土遺物は5点を図示した。

1は住居跡埋土中から出土した壷口縁部片である。

2,3も同じく住居跡埋土中からのもので,それぞれ高杯の背部および脚部片である。53の脚端部には1条の凹線が施されている。

4,5はいずれも中央ピットからの出土で,壷または甕の底部片である。

SH03

SH01の床面検出中に発見された住居跡である。SH01の床面が検出された時点で平面プランを明確にし得たため,前後関係としてはSH01に先行するものと理解している。

SH01は,今回の調査に先立つ平成7年度に,本調査区北隣の市道改良工事の際に一部が調査されており,それによると一辺10m近くにおよぶ隅丸方形の住居跡と思われる。

今回検出したはこの南西隅にあたる東西6.5m，南北2.2mの部分である。床面は，ＳＨ０１の床面よりもさらに5cmほど低く，壁溝は確認できなかった。床面を被覆する埋土は灰黄褐色の中砂である。

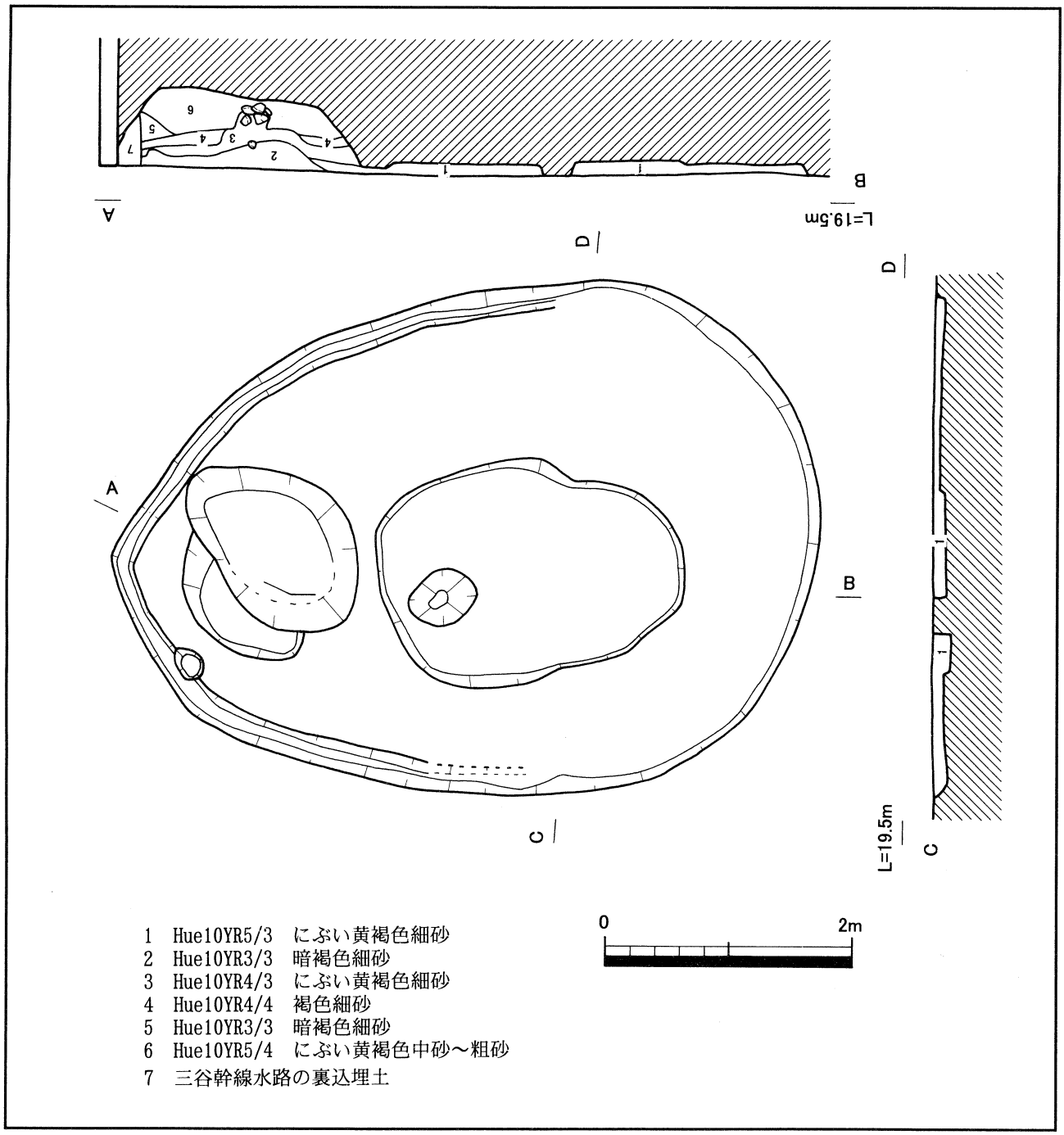
中央ピットは，床面南西角付近に検出されたが，側溝掘削と調査区外で半分ほどが欠損しており，検出部分の寸法は東西1.4m，南北70cmほどの台形状の部分で，床面からの深さは約10cmである。オリーブ褐色の中砂を埋土とし，底部には焦土層が確認できる。

出土遺物は，床面埋土から出土した土器片3点を図化した。

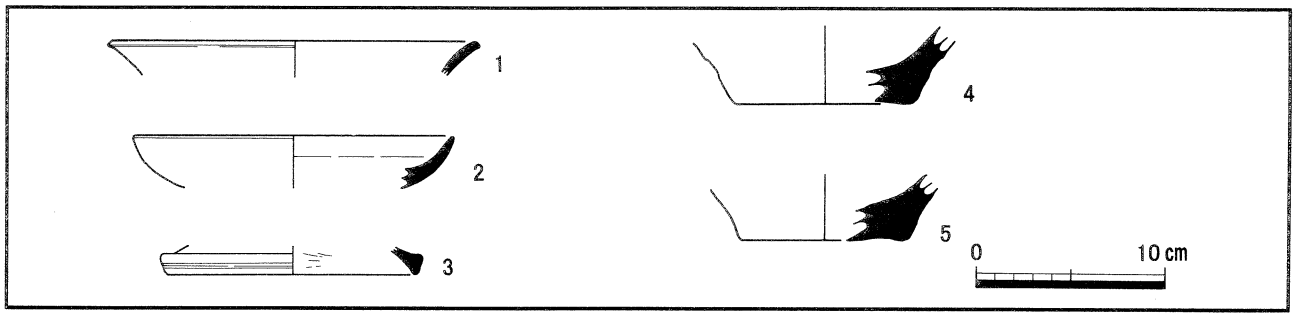
1，2は甕の口縁部片で，前者の口縁端部には2条の凹線が確認できる。

3は壺の体部である。外面にタテ刷毛，内面にヘラケズリを施す。

ＳＸ０４



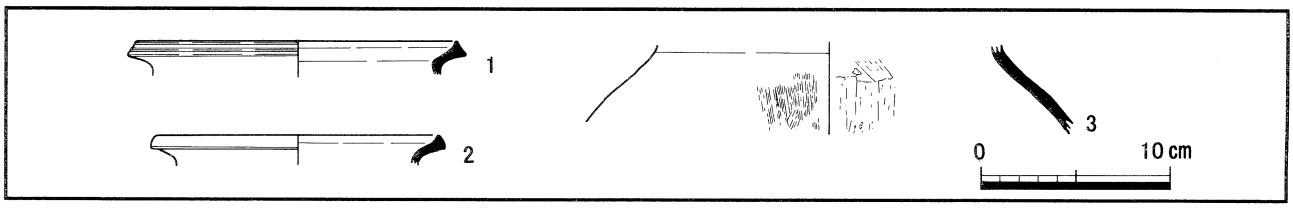
第39図　SH02遺構図・土層断面図



第40図　SH02出土遺物実測図

第9表　SH02出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器甕	19.7		(1.8)	内外面ナデ	にぶい黄橙 10YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/3	長石・角閃石を含む
2	弥生土器高杯	17.0			内外面ナデ	橙 2.5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/3	橙 2.5YR6/6 にぶい黄橙 10YR7/3	微砂粒を含む
3	弥生土器高杯		13.2	(1.5)	脚端部凹線1条、外面ナデ、内面ヘラケズリ	明褐 7.5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	微砂粒を含む
4	弥生土器底部		9.4	(4.1)	内外面摩滅により不明	黒褐 10YR3/2	黒褐 10YR3/2	石英・長石を含む
5	弥生土器底部		8.8	(3.4)	内外面摩滅により不明	にぶい橙 2.5YR6/3	灰白 2.5YR8/2	石英・長石を含む



第41図　SH03出土遺物実測図

第10表　SH03出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器甕	16.8		(1.9)	口縁端部凹線2条、内外面ヨコナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂粒を含む
2	弥生土器甕	14.8		(1.6)	内外面ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂粒を含む
3	弥生土器壷			(4.7)	外面体部細かいハケメ、頸部ヨコナデ、内面体部ヘラケズリ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英・長石・角閃石を含む

東区画の南寄り，SH03の直下に確認された遺構である。

平面形は，東側に長底辺をとる不整台形状を呈し，東辺6m，南辺4.8m，西辺3.4m，北辺6mを測る。

南，西辺と北隅が2段掘り込み状になっており，最深部での検出面からの深さは25cm，底面が広く浅い皿状を呈している。

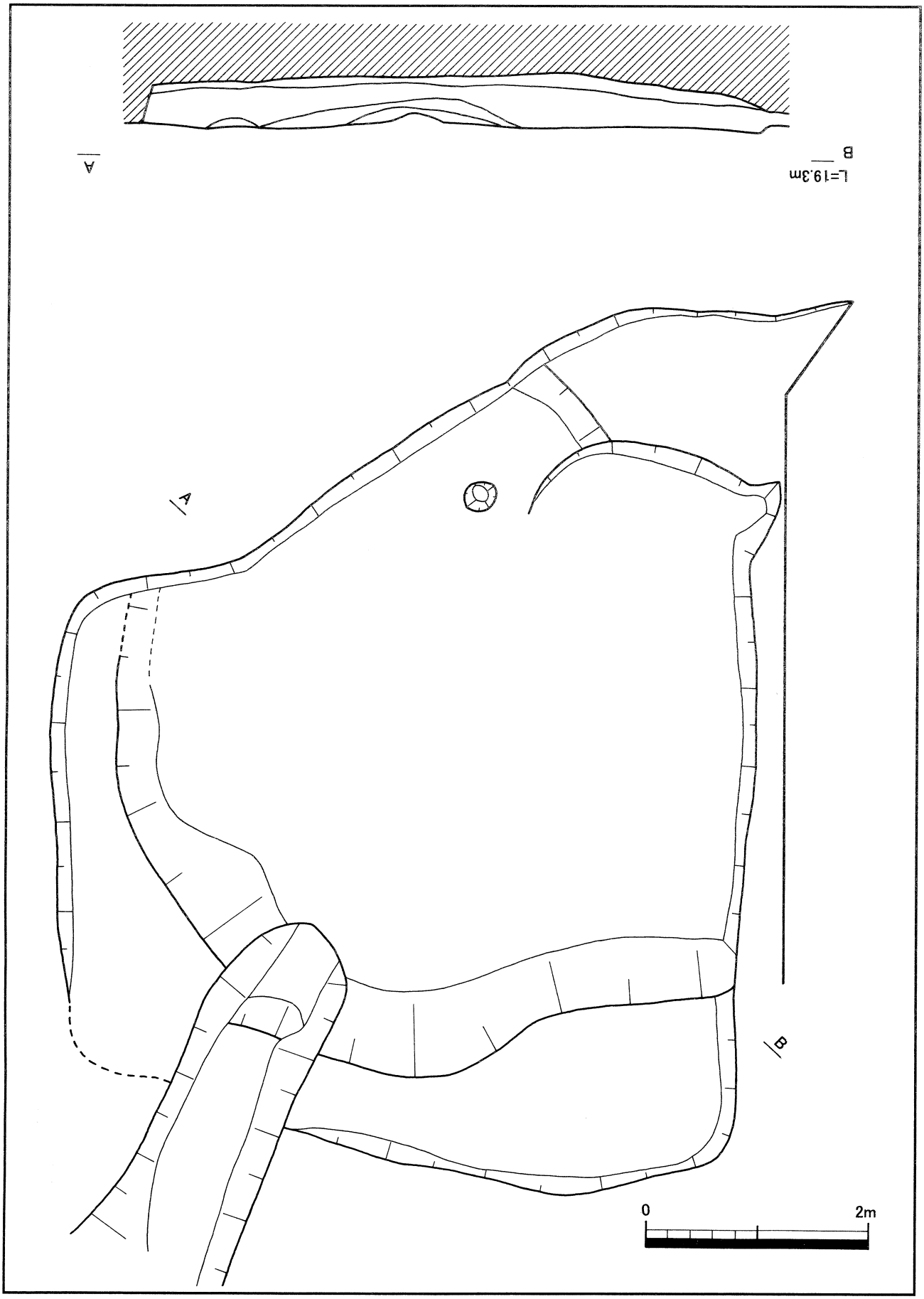
出土遺物は　埋土中に弥生土器の細片を濃密に包含しており，ここでは8点を図化した。

1～3は，甕の口縁部である。1は，強く外反する口縁の端部を上方につまみ上げ，体部外面にタテ刷毛を施す。2，3は，前期から見られる形態のもので，前者は外面口縁部直下に4条以上のヘラ描き沈線を，後者も4条以上のヘラ描き沈線に加えて，如意状に屈曲する口縁端部に刻目文を施している。

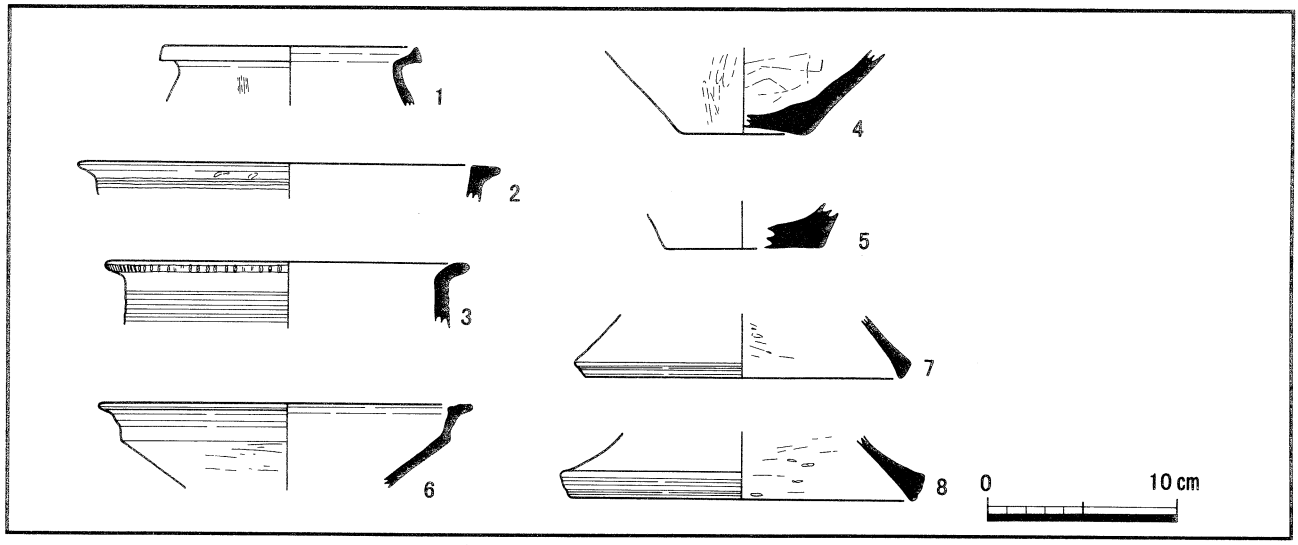
4，5は，壺または甕の底部片である。

6～8は，高杯片である。このうち6は，高杯杯部片で，口縁部外面と口縁端部にそれぞれ2条の凹線をもつ。7，8は高杯脚部片で，脚端部にそれぞれ1条，2条の凹線をもつ。

SX04は，形状などから遺構としての性格が明らかにできないが，埋土，遺物の状況からさらに北へ延びてSX01に連続して行くものと考えられる。



第42図　SX04遺構図



第43図　SX04出土遺物実測図

第11表　SX04出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器甕	11.4		(3.1)	外面ハケメ、内面ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂粒を含む
2	弥生土器甕	20.8		(1.9)	外面櫛描沈線4条(現状) 内外面ヨコナデ	にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR6/6	石英・長石・角閃石を含む
3	弥生土器甕	11.2		(3.4)	口縁端部刻目文、体部沈線4条(現状)、内外面ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	石英・長石・角閃石を含む
4	弥生土器底部		6.6	(4.5)	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ、底部外面黒斑有り	橙 5YR7/6	褐灰 10YR4/1	石英・長石・角閃石を含む
5	弥生土器底部		8.2	(2.4)	内外面ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	石英・長石・角閃石を含む
6	弥生土器高杯	19.8		(4.5)	口縁端部凹線2条 外面ヘラケズリ、内面ナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4	石英・長石・角閃石を含む
7	弥生土器高杯		16.8	(3.3)	脚端部凹線1条 外面ナデ、内面ヘラケズリ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	微砂粒を含む
8	弥生土器高杯		18.2	(3.4)	脚端部凹線2条、外面ヨコナデ、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	微砂粒を含む

ＳＫ０１（西）

西区画北寄りの，SX01の南西脇で確認された土坑である。

小判形の平面形を呈し，南北方向の長径1.3m，短径70cm，深さは約20cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトに，地山を形成する褐灰色粗砂が混淆している。

出土遺物は，弥生時代前期から中期にかかると思われる土器片が出土しており，うち4点を図化した。

1～3は，甕の口縁部片である。1，2は口縁部がシャープな稜をもって逆Ｌ字状に屈曲するのに対し，3は如意状に外反する。いずれも肩の部分に4条以上から8条の沈線を巡らせている。

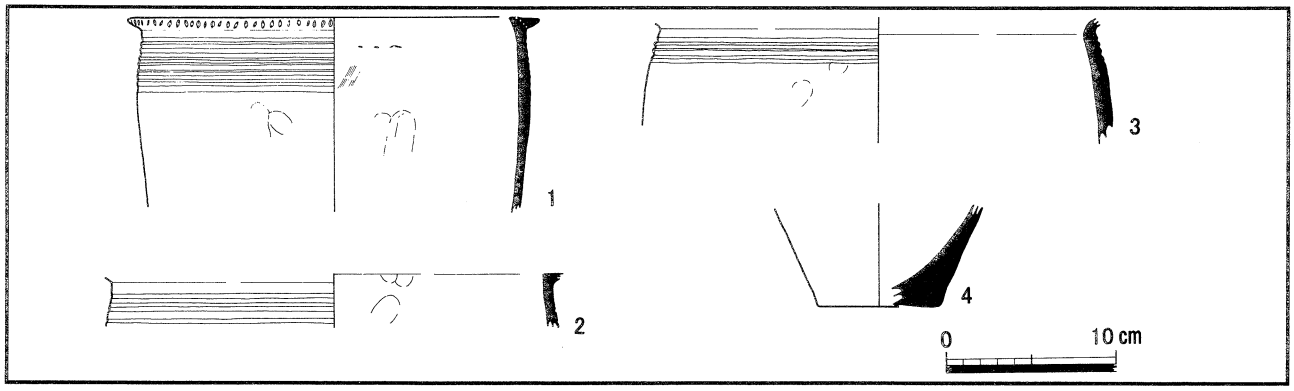
4は，壺または甕の底部片である。

ＳＫ０２（西）

西区画南西隅で確認した土坑である。

東西方向がわずかに長い楕円形で，長径1.4m，短径1.2mを測る。

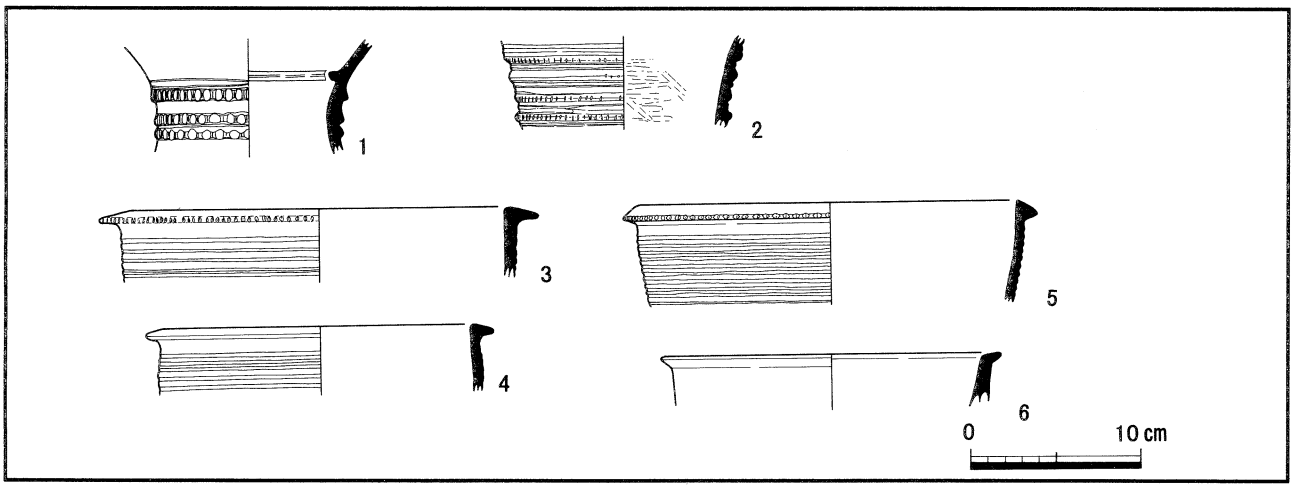
出土遺物は，弥生時代前期から中期にかかると思われる土器片が出土しており，うち4点を図化した。



第44図　SK01(西)出土遺物実測図

第12表　SK01(西)出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器甕	20.8		(11.5)	口縁端部刻目文、体部ヘラ描沈線8条、内外面ナデ、内面ハケメ	褐 7.5YR4/3	にぶい橙 7.5YR7/4	石英・長石を含む
2	弥生土器甕			(3.1)	外面体部櫛描沈線4条、内面指頭圧痕	橙 2.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	石英を多く含む
3	弥生土器甕			(7.4)	外面体部櫛描沈線4条、指頭圧痕、内面摩滅により不明	にぶい橙 5YR6/4	橙 2.5YR6/6	長石を多く含む
4	弥生土器底部		7.2	(6.0)	外面摩滅により不明、内面ナデ	橙 5YR6/6	にぶい褐	石英・長石を含む



第45図　SK02(西)出土遺物実測図

第13表　SK02(西)出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器壷			(6.5)	外面凹線2条押圧突帯文3条 内面棒状浮文、内外面ナデ	浅黄 2.5Y8/3	浅黄 2.5Y8/3	石英を多く含む
2	弥生土器壷			(4.5)	外面刻目突帯文4条、ヘラ描沈線10条、内面ヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石を含む
3	弥生土器甕	22.0		(4.2)	外面口縁端部刻目文、体部ヘラ描沈線5条、外面ナデ、内面摩滅により不明	灰白 5Y8/2	淡黄 2.5Y3/4	石英・長石を含む
4	弥生土器甕	18.4		(4.0)	外面体部ヘラ描沈線5条(現状)	にぶい橙 5YR7/4	橙 5YR7/6	石英・長石・角閃石を含む
5	弥生土器甕	22.0		(6.0)	外面口縁端部刻目文、体部櫛描直線文10条、内外面ナデ	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	石英・長石・角閃石を含む
6	弥生土器甕	19.8		(3.2)	内外面ヨコナデ	黒褐 10YR3/1	浅黄橙 7.5YR8/4	石英・長石・角閃石を含む

1，2は壺の頸部片である。1は頸部外面に3条以上の凹圧突帯，内面に1条の突帯を巡らせる。2は，頸部外面に3条以上の刻目突帯を巡らせている。

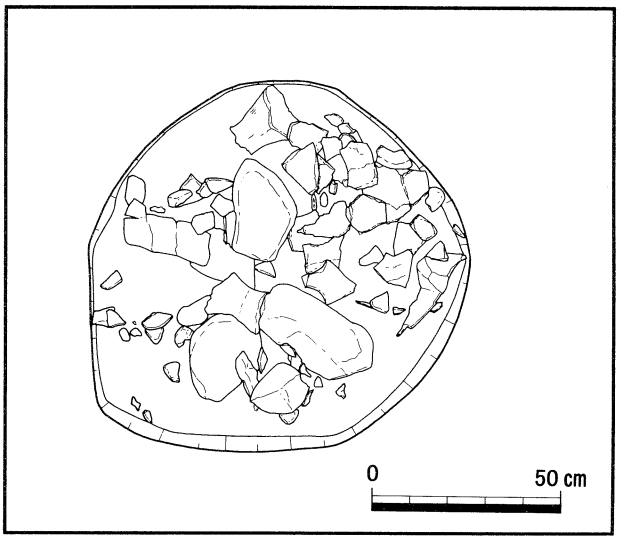
3～5は，甕の口縁部片である。うち，3～5は逆L字状の口縁部が水平よりもやや下向きに屈曲するのに対し，6は口縁部がやや上方に向かっている。また，3～5にはいずれも肩の部分に4条以上から8条の沈線を巡らせている。

ＳＫ０４（東）

東区画の北東寄り，SH01のすぐ南脇で確認した。

平面は，直径約1mの不整円形を呈し，深さは約10cmで底は平坦である。

SK04からは，弥生時代前期末から中期前半にかけての土器群が一括して埋納または廃棄されたとみられる状況で，数個体分の破片がまとまって検出された。ここではそのうちの7点を図化した。



第46図　SK04(東)出土遺物実測図

1は，壺の頸部である。形態はラッパ状に上方に開くもので，口径23cm，頸部の高さ20.5cm，体部から頸部に移るくびれ部の直径9cmを測り，外面には縦方向のヘラミガキ，口唇部には上下から方向を違えて綾杉状の刻目文を施している。

2は，壺の体部上半から頸部にかかる部分の破片である。内外面とも磨耗が著しく表面調整が明確でないが，くびれ部から体部にかけての外面に指頭圧痕がわずかに残っている。

3は，壺の底部片である。

4は，甕である。逆L字状の口縁部は水平よりもやや下方に屈曲する。外面は縦または斜め方向の刷毛目，内面は横方向のヘラ削りを施しているが，器壁の磨耗が激しくいずれも明瞭でない。底部中央に穿孔の痕跡を有するため甑として用いられたものと考えられる。

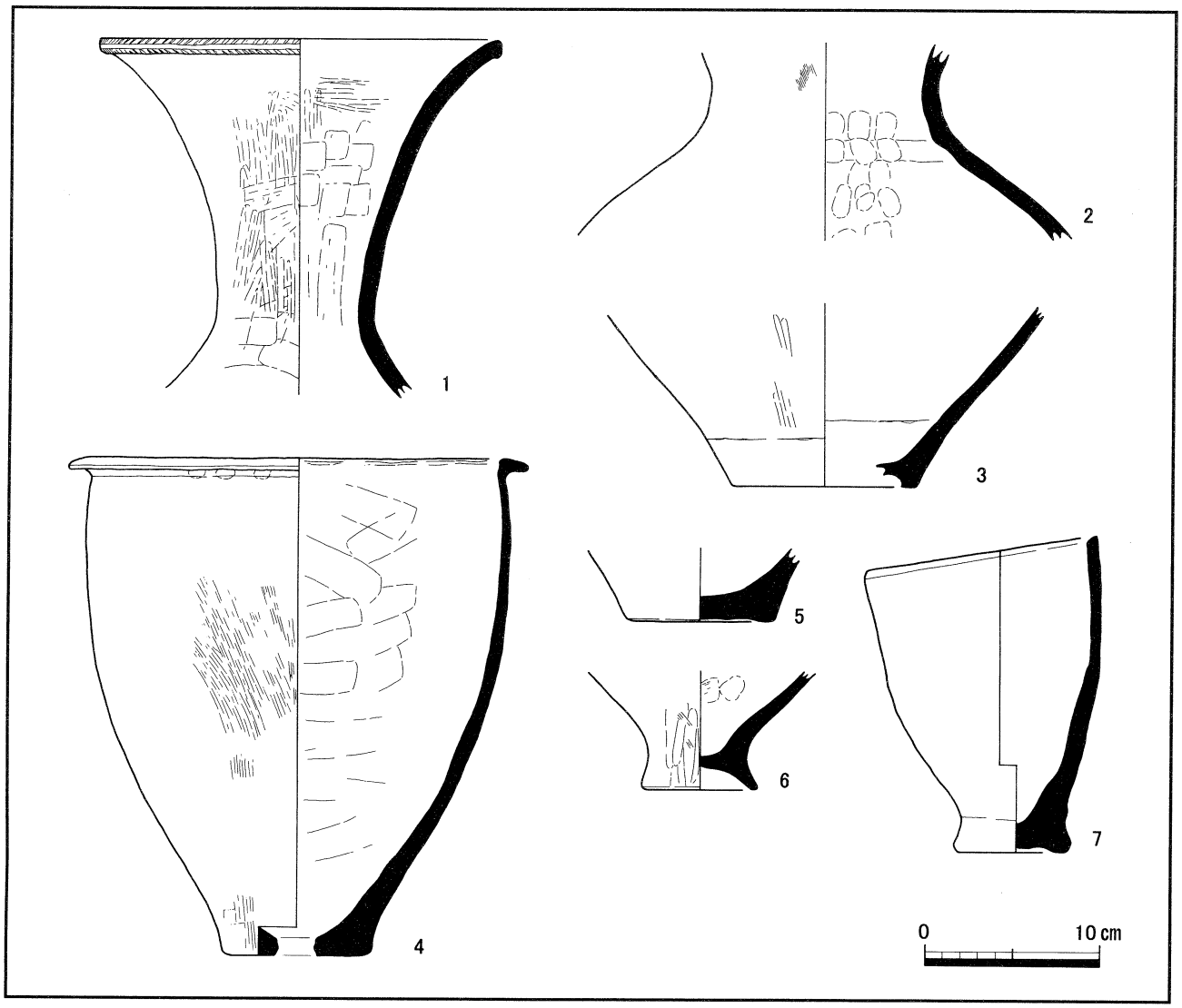
5，6は壺または甕の底部片である。

7は，製塩土器である。

(3)　D調査区

遺構としては，弥生時代後期の溝状遺構3，時期不明（近世か）の水田畦畔1が確認されており，溝状遺構中からは弥生後期の甕の細片等数点が出土しているが図化には至らなかった。水田畦畔には時期を確定する遺物は伴っていない。弥生時代の溝状遺構は調査区西寄りで1本，同東寄りで2本が確認できた。前者は，旧河道の西肩の地山黄褐色砂質シルトを掘り込むもので，検出幅3.5m，深さ40cmを測り，黒色シルト埋土を充填して東北に流路を取る。後者は，調査区南辺の側溝部で2本が二股に分岐している。東側のものは旧河道東肩に沿って北東へ向かい，検出幅2.5m，深さ40cm，西側のものはほぼ北へ向かっている。埋土はいずれも黒色シルトと灰色粗砂が2・3層の互層になっており，1・2回の洪水によって埋積したものと考えられる。東端のSD01の東肩がやや抉れてほぼ垂直な切り込みを見せているが，谷状地形が北東から北へと方向を点ずる変換点に当たっているため，岸へ当たる水流の作用によって形成されたものと見られ，人為的な掘削によるものではないと考えられる。

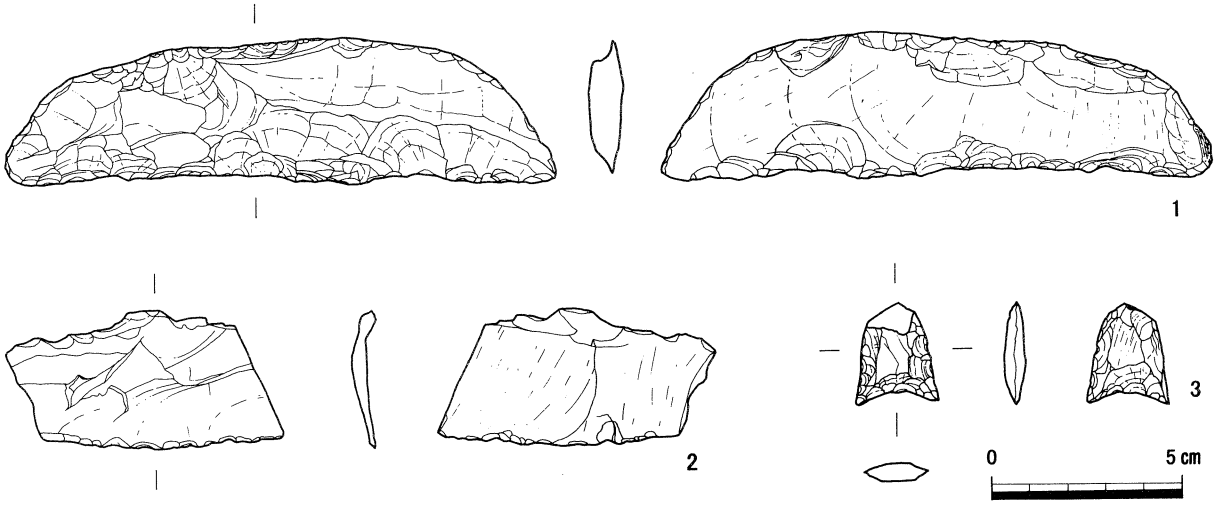
水田畦畔は現地表下約40cm，第7層黄灰色シルト質細砂層の上面で検出され，検出幅は1m弱，盛り



第47図　SK04(東)出土遺物実測図

第14表　SK04(東)出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器壷	22.8		(20.8)	口縁端部刻目文疑凹線 外面口縁部ヨコナデ、頸部ヘラミガキ、内面口縁部ヨコナデ、ヘラミガキ、頸部板ナデ	にぶい橙 7.5Y7/4	にぶい橙 7.5Y7/4	石英・長石・角閃石を少量含む
2	弥生土器壷			(11.2)	外面ハケメ、内面指頭圧痕	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	石英・長石・角閃石を含む
3	弥生土器底部		10.6	(10.4)	外面一部ヘラミガキが残る，内面摩滅により不明	にぶい黄橙 10YR7/4	淡黄 2.5Y8/3	石英・長石・角閃石・微砂粒を含む
4	弥生土器甕	23.2	7.4	28.3	外面体部粗いハケメ頸部指頭圧痕、内面体部板ナデ、黒斑	にぶい橙 7.5YR7/3 7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石・角閃石を含む
5	弥生土器底部		8.2	(4.2)	内外面摩滅により不明	浅黄橙 10YR8/3 橙 2.5YR7/6	灰白 2.5Y8/1	石英・長石・角閃石を多量含む
6	弥生土器底部(甕)	6.4		(6.7)	外面ヘラミガキ、ハケメ、内面ハケメ、指頭圧痕	浅黄 2.5Y7/3	淡黄 2.5Y8/3	石英・長石・角閃石を含む
7	弥生土器(製塩)	13.5	6.2	18.1	内外面摩滅により不明	赤褐 10YR5/3 にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい赤褐 5YR4/3	石英・長石・角閃石・微砂粒を多く含む



第48図　B調査区出土石器実測図(東区画SK04(1)、西区画SX04(2～3))

第15表　B調査区出土石器観察表

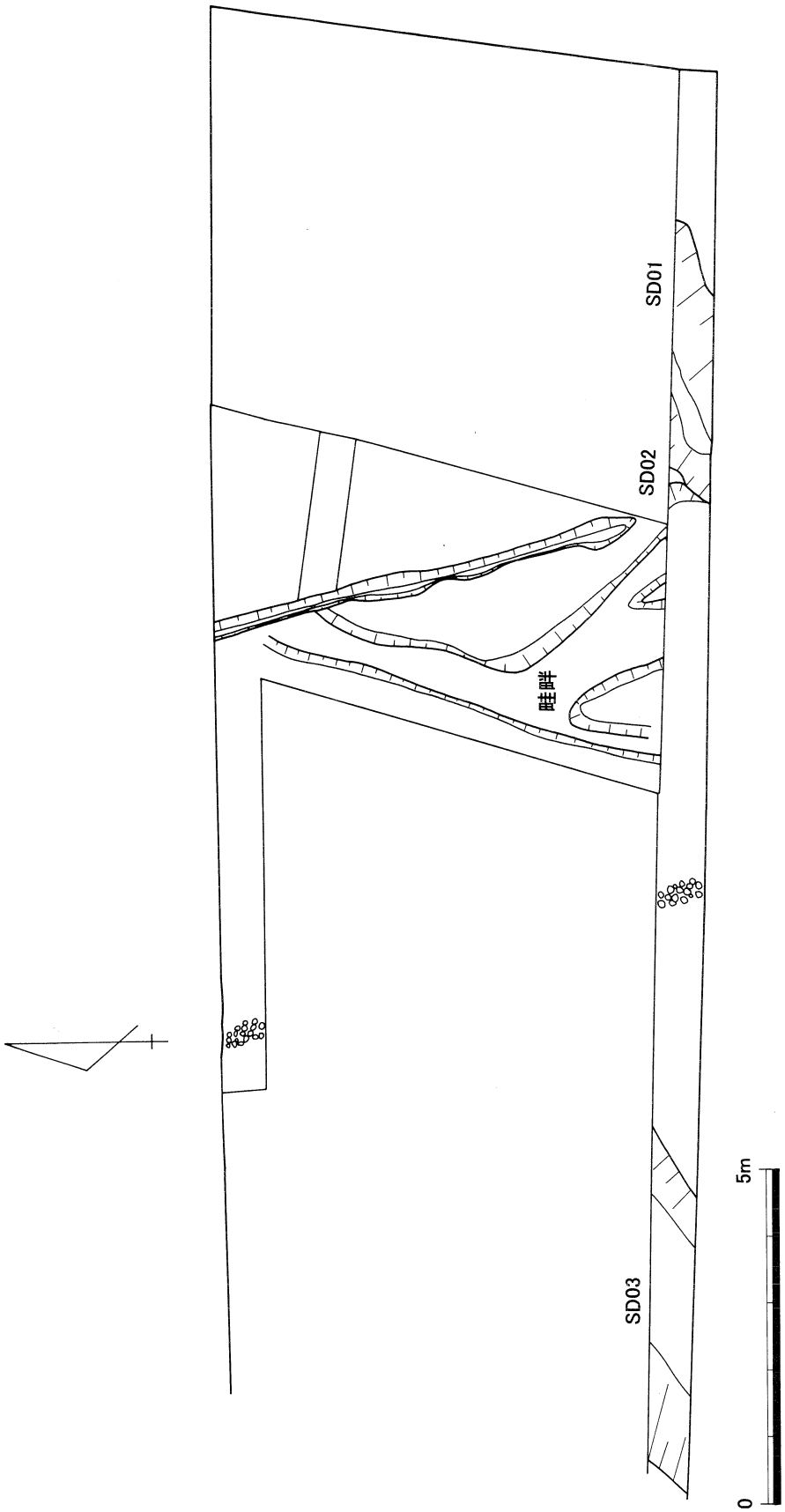
番号	器種	法量(cm) 現在長	最大幅	最大厚	重量(g)	材質	特徴
1	打製石庖丁	14.6	4.0	0.9		サヌカイト	定型、背部が湾曲し、刃部は直線的で半月状を呈する。刃部は、両面からの細かい打ち欠きによって刃をつけ背部は、両面からの大きな打ち欠きを行なった後、背部中央に敲打ニ依る背潰しを行う。
2	〃	7.2	3.7	0.4		〃	刃部を両面から打ち欠きを行う。
3	石鏃	2.7	2.2	0.6		〃	凹菱式。先端部を欠損。縁辺部は、両面からの細かい打ち欠きを行い調整する。

上がりは4cmほどである。平面的には調査区の東端近くを磁北から10°東に振った方向に直線的に伸び,トレンチ南側溝付近で熊手状に三つ又に分岐する。この地点で地形的に旧河道東岸にほぼ乗り上げるようになるため,その影響かとも考えられる。

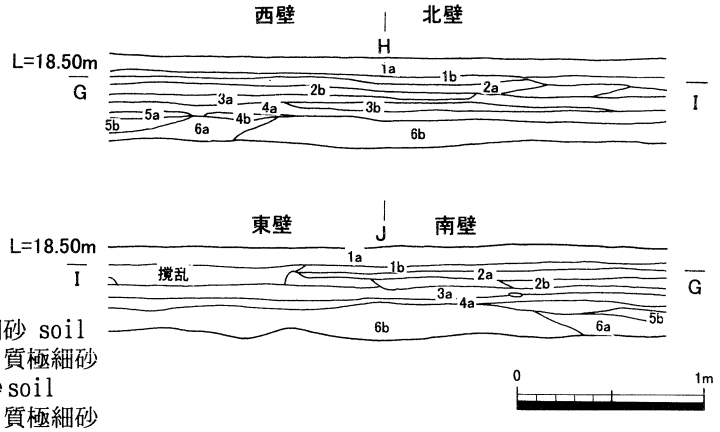
水田畦畔の方向を確認するため水田北側筆界近くにサブトレンチを設定した。この結果,南側溝の水田層と同じ第7層の広がりは確認できたが,畦畔状の盛り上がりはみられなかった。

しかし,水田畦畔の推定延長上で第7層の下層に若干の円礫の集積が帯状にみられたため,水田畦畔と関わる一連の遺構と推定した。

この調査区で確認した水田畦畔は,南側溝で調査区東端から西へ約10mの地点にあり,方向も磁北から10°東を示すことから位置的には山田香川郡界推定線にほぼ一致する。しかし,かつてこの水田では昭和62年度の事業の際にも3×3mの確認トレンチを設定しており,その際に検出された南北方向の水田畦畔は,郡界線に想定した位置よりも西に寄っている。このため,今回の畦畔検出のみでは郡界線の位置を確定したとはいいがたく,今後ランドマークとしての郡界線の実体といったものも含めてさらに検討が必要と思われる。



第 49 図　D 調査区遺構配置図



1a　褐灰色シルト質極細砂 soil
1b　にぶい黄橙色シルト質極細砂
2a　褐色シルト質極細砂soil
2b　にぶい黄橙色シルト質極細砂
3a　灰黄橙色シルト質極細砂soil
3b　灰白色シルト質極細砂(中礫まじり)
4a　褐灰色シルト質細砂 soil
4b　にぶい黄色中砂～粗砂
5a　褐灰色シルト質極細砂 soil
5b　明青灰色極細砂
6a　灰色シルト質細砂 soil
6b　巨礫～大礫・灰色砂～粗砂

第50図　弘福寺領田図比定地第Ⅲ地点土層図(昭和62年度調査概報より)

山田香川郡界線を分断できる位置を想定して,分が池北側の水田に東西42mにわたって4本のトレンチを設定した。いずれのトレンチも現地表下30cm前後に最終以降面が出現し,概して微高地の状況を呈する。

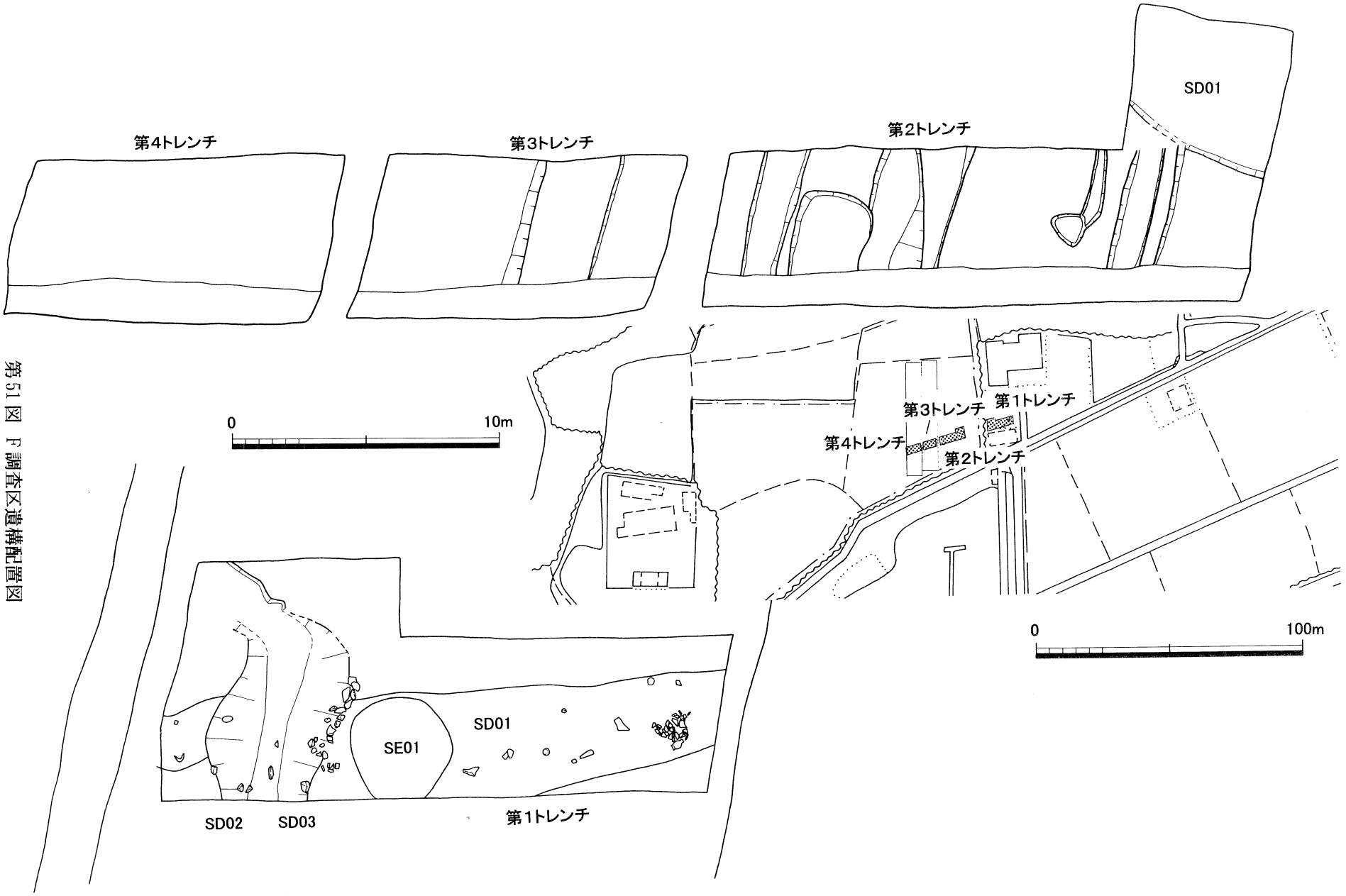
このうち第1トレンチでは,トレンチのほぼ全域を覆うように弥生時代前期末から中期の溝状遺構(SD01)が東西流しており,これに交差してトレンチの中程から西寄りで近世後半から明治時代の溝状遺構(SD02・03)が南北流している。

ＳＤ０１

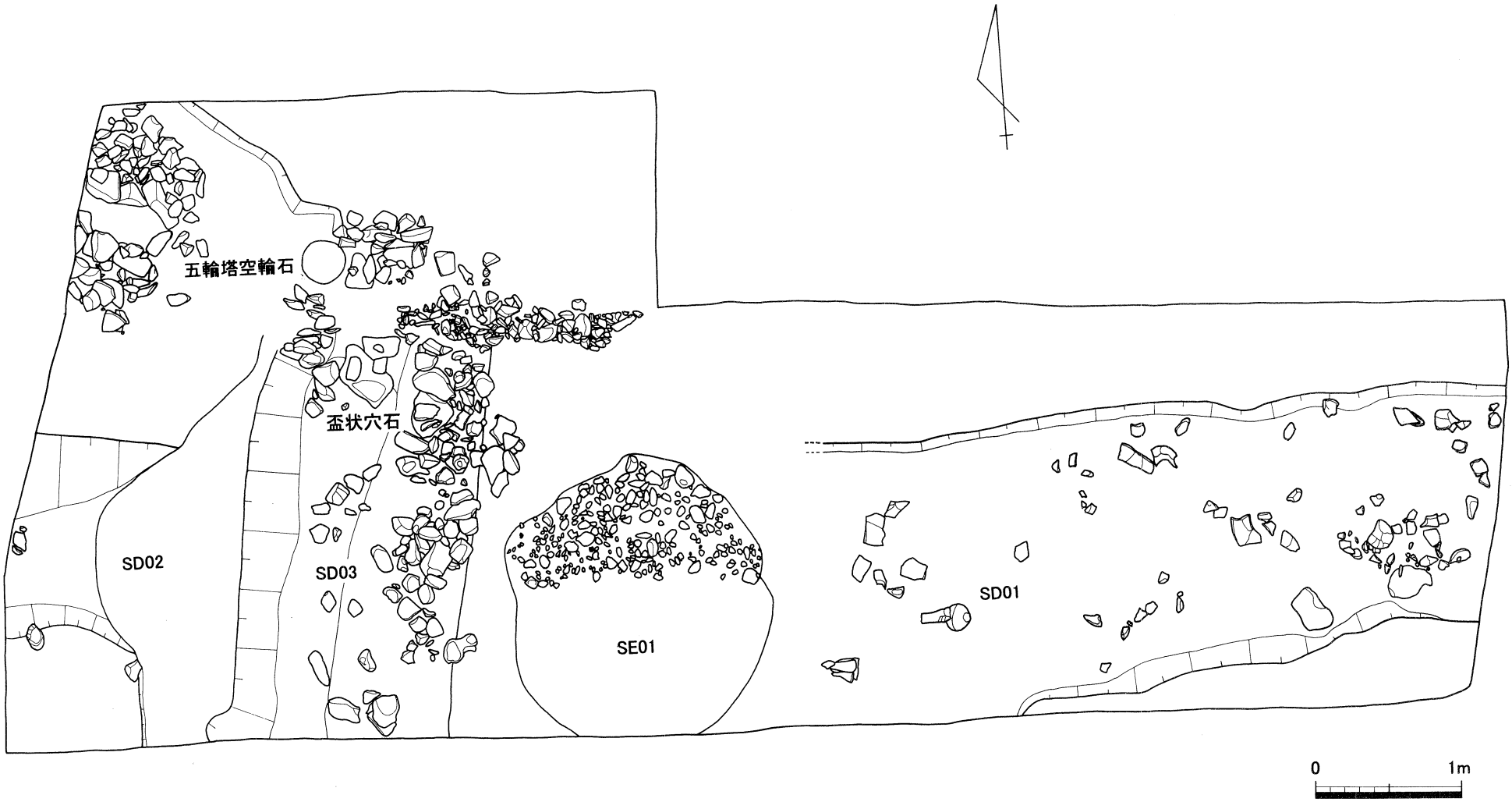
SD01は,最大検出幅約2m,深さ25cmほどの浅い溝で,第1トレンチではほぼ東西流し,西方では第2トレンチの北東角をかすめるようにやや北に方位を変じる。第1トレンチでの土層観察によって,本来の遺構検出面を15cmほど削り込んだ時点で遺構の存在を確認しているため,本来の残存深度としては40cm前後であった。北西側への延伸方向の確認のために第2トレンチの東端北側を2.5×3mの範囲で拡張したところ,N55°Wに方位を振った延伸部分が幅約2.8mの範囲で確認できた。こちらでは後世の耕作等による削平がかなりおよんでいたようで,現耕作土直下の検出面からの遺構深度は30cm強といったところである。出土遺物は第1,第2トレンチ双方から弥生時代前期末から中期初頭と思われる甕,壺などが比較的に良好に個体ごとのまとまりをもって検出されている。

ＳＤ０２・ＳＤ０３

SD02,SD03は第1トレンチの西辺近くを南北流し,その南への延長は分ヶ池の東堤防近くをに延びる。SD02はSD03の上層に位置し,紡錘形の平面プランを呈しており最大検出幅約1m,調査区南北双方に向かって次第に幅を減じ,北側は調査区北縁直前で消滅してしまう。南側は土層断面で幅85cm,深さ12cmまで規模を減じて調査区外に逃げる。埋土は灰黄褐色細砂質で出土遺物が希薄なため時期決定には至らなかった。SD03も含めた北への延伸方向の確認のために第1トレンチの西端を北側に,南北1m,東西4.5mの範囲で確認したところ,SD02の埋土自体は確認できなかったものの下層に重複する



第51図　F調査区遺構配置図



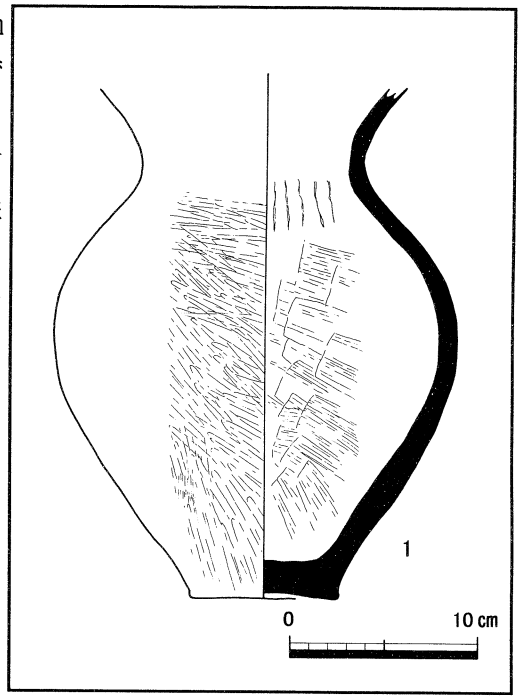
第52図　F調査区第1トレンチ遺構図

第53図　F調査区第2トレンチ遺構図

SD03を一部破壊している痕跡から，SD02は底付近で幅25cm程度の規模で西南西へ急激に方位を転じていることが推定できた。

SD03は，検出幅1.5m，底面幅40cm，調査区南壁土層断面付近で深さ30cm，調査区北辺付近では40cm強を測る。遺構斜面は逆台形状に立ち上がり，急峻な印象を受ける。ただし，東側斜面には人頭大から拳大の石材によって護岸が施されていた。護岸石材の中には五輪塔の空輪石と見られる角礫凝灰岩製の石材や，SD03開削の際に下層のSD01を破壊して出土したと思われる，同じく角礫凝灰岩製の盃状穴をもった石材等も転用していたが，その他陶磁器等の出土遺物から明治時代の埋没と考えられる。

検出の時点で郡界線との関連を考えたが，その後の調査区拡張の結果，トレンチのすぐ北でほぼ直角に東へ方向を転じていることが確認され，トレンチ南側の納屋が建つ以前に井戸が存在した等の情報が得られたため，この井戸の排水用の水路とも考えられる。



第54図　F調査区SD01第1トレンチ出土遺物実測図①

ＳＥ０１

正円の平面形を呈し，南側調査区外に南端が僅かに逃げている。深さは検出面から約50cmを測り，埋土は拳大以下の円礫を主体とする暗灰黄色砂礫層である。また検出面から30～40cmまでの深さには，暗灰黄色砂礫層の外周をにぶい黄褐色または灰黄褐色の細砂層がすり鉢状に巡っていると思われ，前者砂礫層を廃棄時の人為的な埋め土，後者細砂層を掘削時の控えの埋め土と見て井戸跡と考えたい。出土遺物は僅かな土器細片に限られ，時期を確定するには至らなかったが，近世以降の比較的新しいものと思われる。

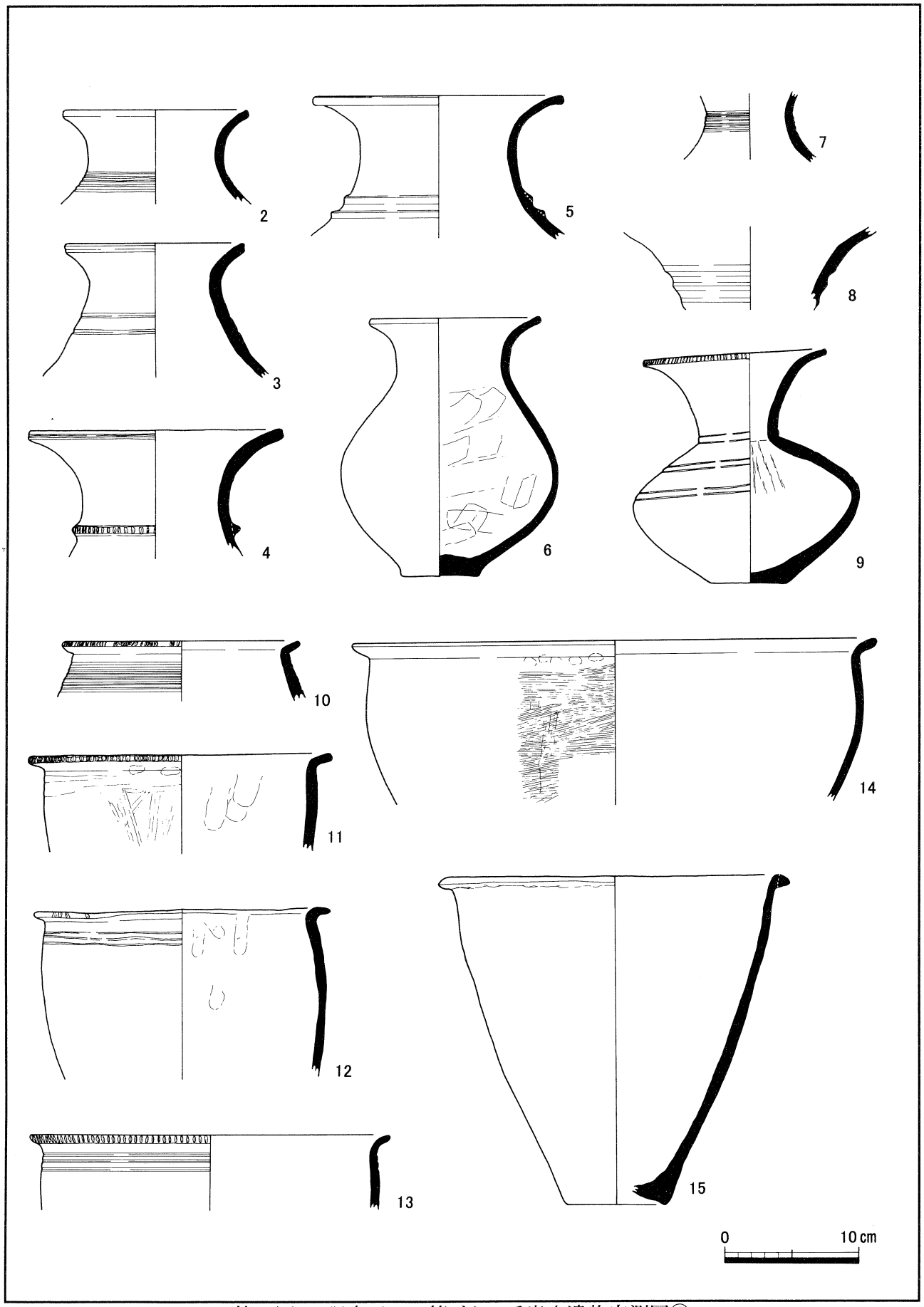
その他の遺構

第2～4トレンチについては現耕作土近くの浅い部分に近世以降の耕土層または撹乱が見られるのみで，その他の遺構は確認できなかった。

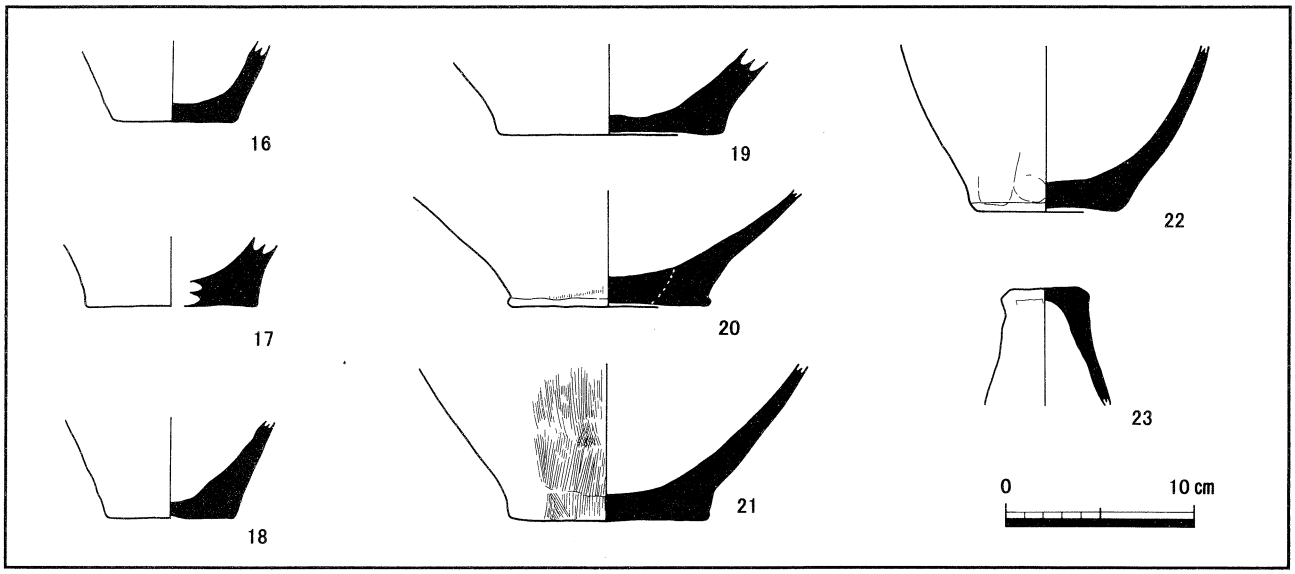
第2トレンチでは6本の溝状遺構と土坑，ピット各1を検出した。

溝状遺構は検出幅0.3～2.2m，深さ5～10cmを測り，いずれも北側をやや東に振った南北方向に直線状に延びる。トレンチ東端で遺構の一部が調査区外に逃げるSD01は，遺構幅としては第2トレンチ最大であるが，あるいは地境等の段差の痕跡になるのかもしれない。いずれも埋土は黄灰色シルト質極細砂で，近世以降の埋没と考えられる。

第3トレンチではトレンチ中央やや東寄りの検出幅1.4mほどの畦状に削り残された地山を境として２本の溝状遺構を確認した。２本とも一方の掘り肩が調査区外に逃げているため，溝としての認定が不確定で中間部を畦状の削り出しに見なすこともできるが，東側の落ち際の幅80cmほどの浅いU字状の断面から溝状遺構と判断した。遺構の深さは東側では10cm強，西側では５cm前後を測り，双方とも方位は概ね条里の方向に沿っていると考えられる。埋土はいずれも暗灰黄色シルト質極細砂質で，現耕表土の床土となる近世以降の堆積と考えられる。



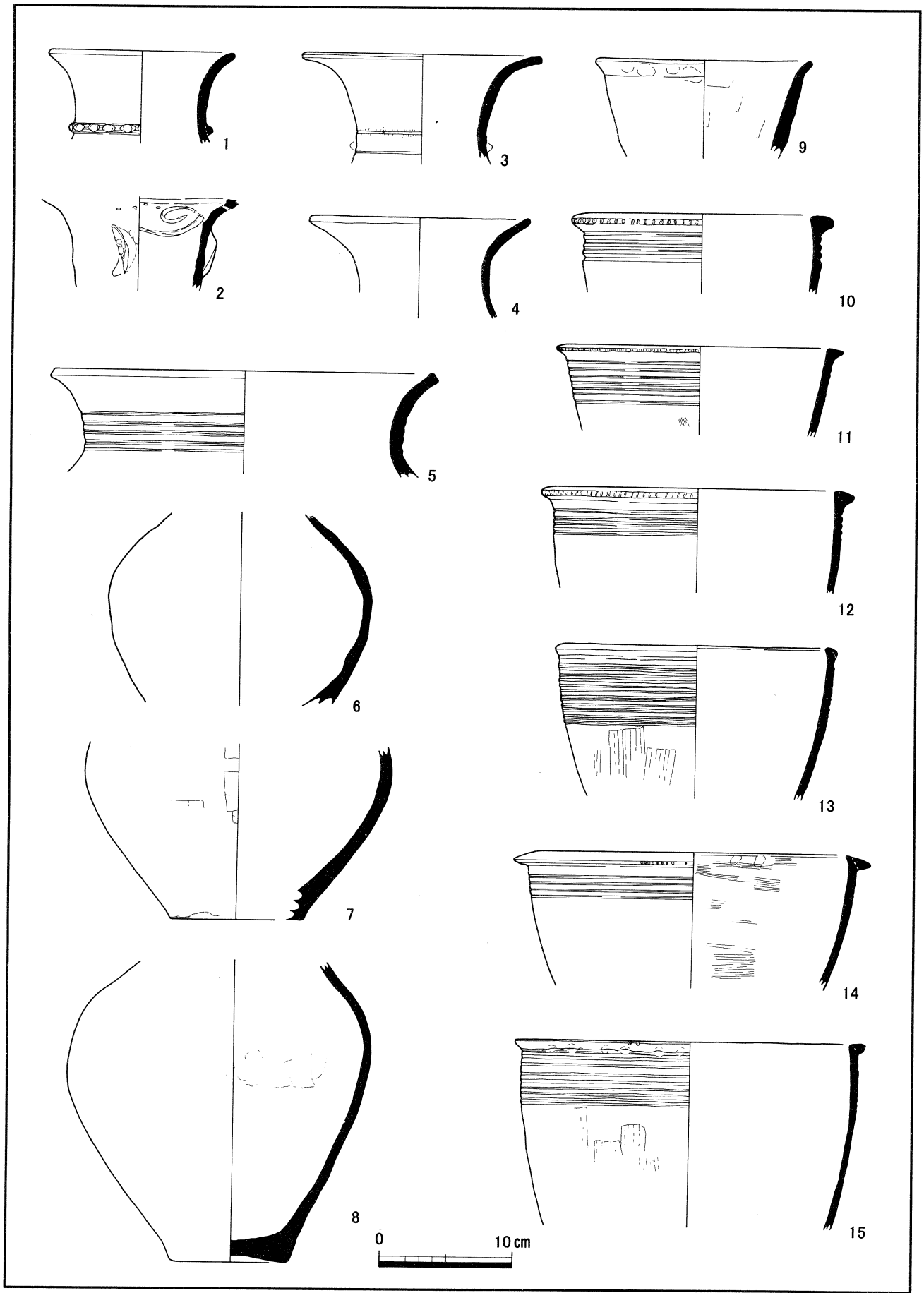
第55図　F調査区SD01第1トレンチ出土遺物実測図②



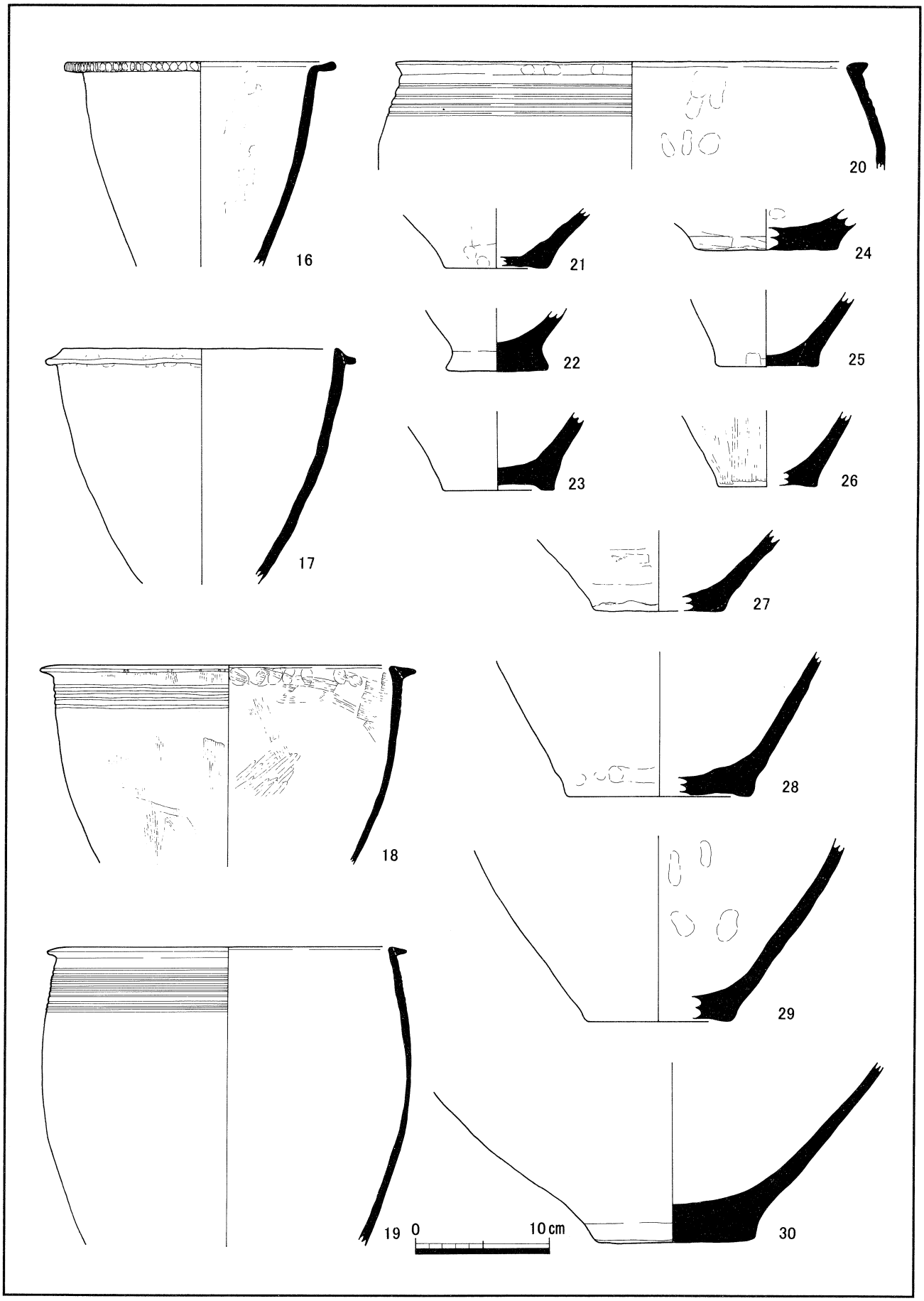
第56図　F調査区SD01第1トレンチ出土遺物実測図③

第16表　F調査区SD01第1トレンチ出土遺物観察表

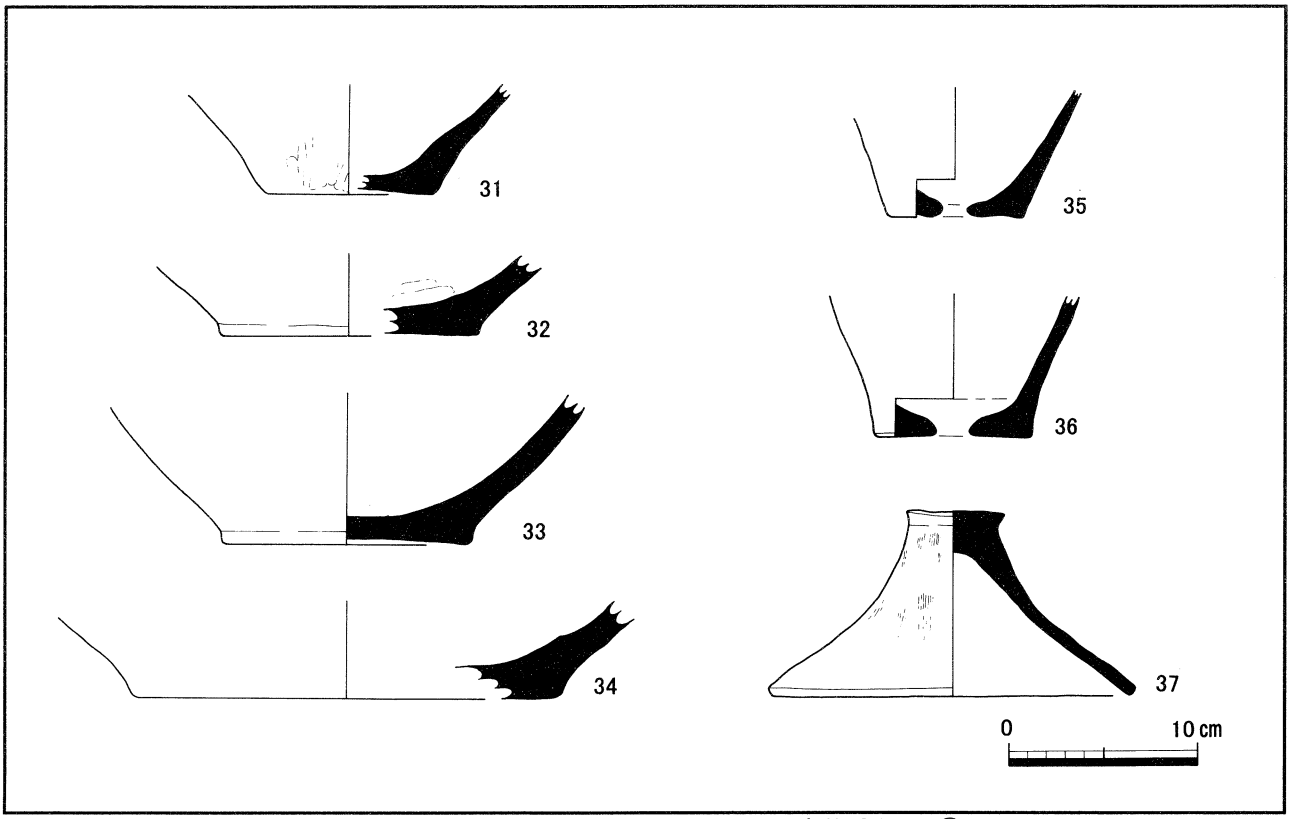
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器　壷		7.6	(27.0)	体部外面～底部 ハケ目の後ヘラミガキ 頸部内面 シボリ目 体部内面 ハケメ	淡黄 2.5Y8/3	灰白 2.5Y8/2	1mm～5mm の石英、長石、角閃石を含む
2	〃　〃	13.6		(7.0)	口縁部外面 摩滅のため調整不明 頸部外面 ナデ 頸部内面 摩滅のため調整不明 頸部外面 ヘラ描沈線５条	にぶい黄橙 10YR6/3	褐灰 10YR5/1	5mm 以下の石英、長石を含む
3	〃　〃	13.0		(10.0)	口縁部外面～頸部 ナデ 口縁部内面 ナデ 頸部内面 摩滅のため調整不明 頸部外面 条溝２条	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	3mm 以下の石英、長石を含む
4	〃　〃	18.6		(9.4)	頸部外面 摩滅のため調整不明 頸部内面 摩滅のため調整不明 口縁端部 凹線１条 頸部外面 刻目凸帯文１条	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm～5mm の石英、長石、角閃石を含む
5	〃　〃	18.0		(10.6)	頸部外面 摩滅のため調整不明 頸部内面 摩滅のため調整不明 頸部外面 凹帯文２条	にぶい黄橙 10YR7/4	灰白 2.5Y8/2	1mm～5mm の石英、長石を多量に含む
6	〃　〃	12.5	5.7	19.2	体部外面 摩滅のため調整不明 体部上半内面 ナデ 体部下半内面 板ナデ	浅黄橙 10YR8/3	淡黄 2.5Y8/3	1mm～2mm の石英、長石を含む
7	〃　〃			(4.8)	頸部外面 ナデ 頸部内面 摩滅のため調整不明	橙 5YR6/6	灰白 2.5Y8/2	1mm～3mm の石英、長石を含む
8	〃　〃			(6.1)	頸部外面 摩滅のため調整不明 頸部内面 摩滅のため調整不明 頸部外面 突帯文３条	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 2.5Y8/2	3mm 以下の石英、長石を含む
9	〃　〃	13.4	6.4	17.1	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ 体部内面上半シボリ目 口縁端部 刻目文 体部外面上半 ヘラ描沈線２本組３組	にぶい赤褐 5YR5/3	褐灰 10YR6/1,4/1	1mm～5mm の石英、長石を含む
10	弥生土器　甕	17.2		(4.5)	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ 口縁端部 刻目文 体部外面 ヘラ描沈線８条	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4	1mm～5mm の石英、長石、角閃石を含む
11	〃　〃	22.0		(7.3)	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 ヘラミガキ 体部内面 ヨコナデ、指ナデ 口縁端部 刻目文	灰褐 7.5YR4/2	にぶい褐 7.5YR6/3	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
12	〃　〃	21.7		(12.7)	体部外面 摩滅のため調整不明 頸部内面～体部上半 指頭圧痕、ナデ 体部内面 ナデ 口縁端部 刻目 体部外面 沈線３条	灰黄 2.5Y7/2	明赤褐 2.5YR5/6	4mm 以下の石英、長石を多く含む
13	〃　〃	26.4		(5.5)	体部外面 摩滅のため調整不明 体部内面 摩滅のため調整不明 口縁端部 刻目文 体部外面 凹線３条	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
14	〃　〃	38.6		(12.0)	体部外面 ハケメ 体部内面 摩滅のため調整不明	灰黄褐 10YR5/2	灰白 2.5Y8/1	1mm～5mm の石英、長石、角閃石を多量に含む
15	〃　〃	24.2	7.2	24.3	体部外面 ナデ 体部内面 摩滅のため調整不明	灰褐 7.5YR4/2	灰黄 2.5Y6/2	3mm 以下の石英、長石を含む
16	〃　底部		5.3	(4.3)	底部外面 摩滅のため調整不明 底部内面 摩滅のため調整不明	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/2	4mm 以下の石英、長石を含む
17	〃　〃		9.0	(3.7)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ	赤 10R	にぶい赤褐 5YR5/4	3mm 以下の石英、長石を含む
18	〃　〃		6.6	(5.3)	底部外面 摩滅のため調整不明 底部内面 摩滅のため調整不明	浅黄橙 10YR8/4	にぶい黄橙 10YR6/4	3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
19	〃　〃		5.8	(4.6)	底部外面 摩滅のため調整不明 底部内面 摩滅のため調整不明	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 10YR7/1	5mm 以下の石英、長石を含む
20	〃　〃		10.4	(6.1)	底部外面 ハケメ後ナデ 接合痕 底部内面 摩滅のため調整不明	浅黄橙 10YR8/3	灰白 2.5Y8/2	4mm 以下の石英、長石を含む
21	〃　〃		10.4	(8.3)	底部外面 ハケメ	にぶい橙 7.5YR7/4	灰白 10YR8/2	1mm～3mm の石英、長石、角閃石を含む
22	〃　壷　底部		7.2	(8.8)	底部外面 指ナデ 摩滅のため調整不明 底部内面 摩滅のため調整不明	灰黄褐 10YR6/2	灰白 2.5Y8/2	4mm 以下の石英、長石を含む
23	〃　蓋	上部径 3.6		(6.2)	外面 ナデ 内面 ナデ	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	5mm 以下の石英、長石を含む



第57図　F調査区SD01第2トレンチ出土遺物実測図①



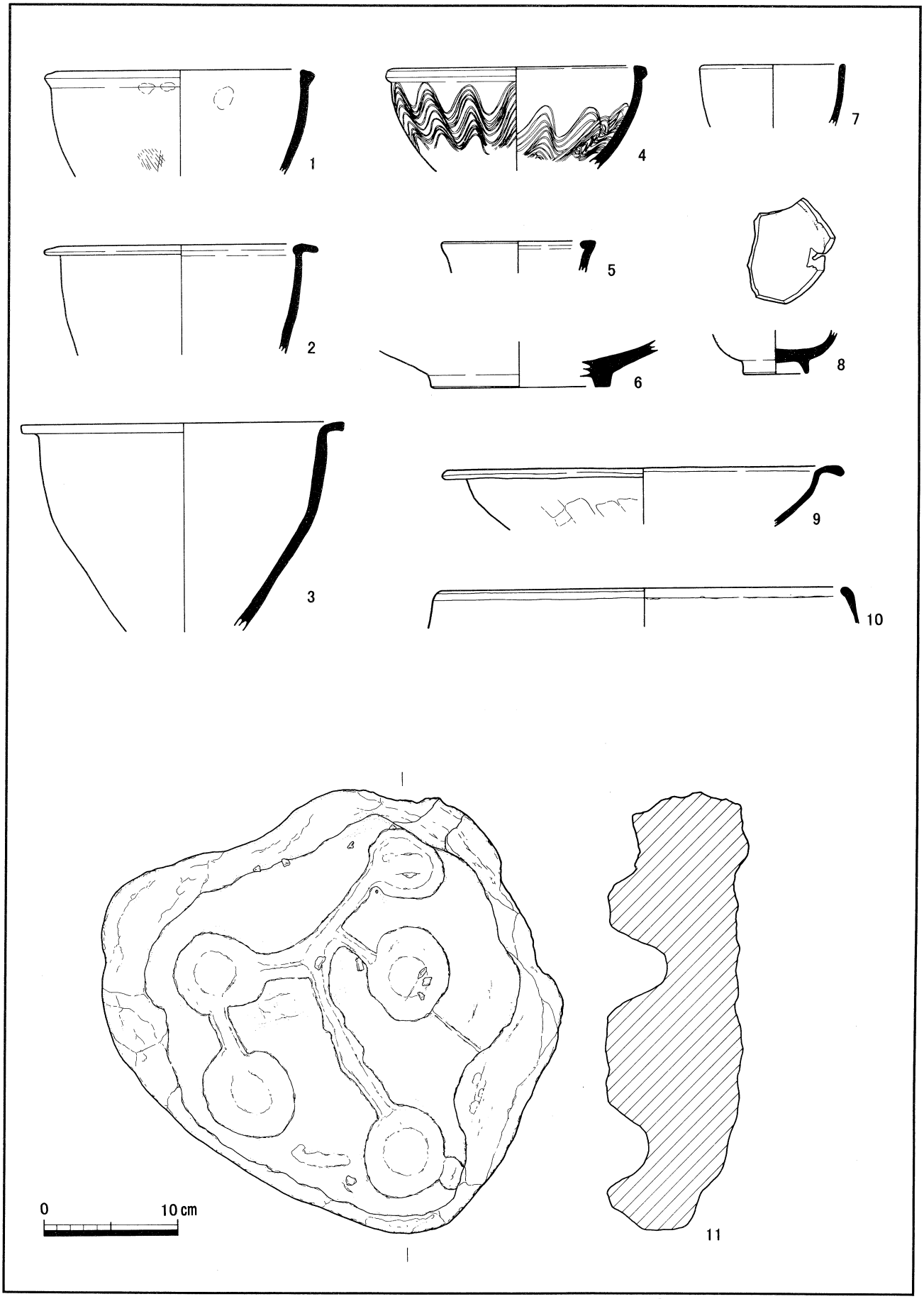
第58図　F調査区SD01第2トレンチ出土遺物実測図②



第59図　F調査区SD01第2トレンチ出土遺物実測図③

第17表　F調査区SD01第2トレンチ出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外面	内面	
1	弥生土器　壷	13.6		(6.8)	頸部外面 摩滅の為調整不明 内面 摩滅の為調整不明 頸部外面 押圧凸帯文	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/1	2mm 以下の石英、長石を含む
2	〃　〃			(7.0)	頸部外面 摩滅の為調整不明 頸部内面 摩滅の為調整不明 頸部外面 つまみ頸部内面棒状浮	明褐 7.5YR5/8	灰白 10YR8/1	5mm 以下の石英、長石を含む
3	〃　〃	17.4		(8.2)	頸部外面 摩滅の為調整不明 頸部内面 摩滅の為調整不明 頸部外面 四線２条	にぶい褐 7.5YR6/3	橙 7.5YR7/6	5mm 以下の石英、長石を含む
4	〃　〃	16.1		(7.6)	頸部外面 摩滅の為調整不明 頸部内面 摩滅の為調整不明	橙 5YR6/8	橙 5YR6/8	3mm 以下の石英、長石を含む
5	〃　〃	28.4		(7.8)	頸部外面 摩滅の為調整不明 頸部内面 摩滅の為調整不明	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/1	3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
6	〃　〃			(14.5)	体部外面 ナデ 体部内面 摩滅の為調整不明	浅黄 2.5YR7/3	黄灰 2.5YR4/1	5mm 以下の石英、長石を含む
7	〃　〃		10.0	(13.1)	体部外面 板ナデ:ナデ 体部内面 ナデ 底部外面 接合痕	褐灰 10YR5/1	褐灰 10YR4/1	3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
8	〃　〃		8.3	(22.5)	体部外面 摩滅の為調整不明 体部内面 摩滅の為調整不明 一部ヘラケズリ	灰白 7.5YR8/1	灰白 7.5YR8/1	3mm 以下の石英、長石、角閃石を多量に含む
9	弥生土器　甕	15.8		(7.3)	口縁部外面 指頭圧痕 ナデ 口縁部内面 ナデ 板ナデ	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/2	2mm 以下の石英、長石を含む
10	〃　〃	17.6		(5.8)	体部内面 摩滅の為調整不明 口縁端部 刻目文 体部外面 凹線４条	灰白 10YR8/2	灰白 2.5YR8/1	3mm 以下の石英、長石を若干含む
11	〃　〃	19.4		(6.7)	体部外面ハケメ 口縁部内面ナデ 口縁端部外面 刻目文 体部外面 凹線４条	にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR6/1	2mm 以下の石英、長石、角閃石含む
12	〃　〃	21.6		(7.7)	外面ナデ 内面摩滅の為調整不明 口縁端部外面 刻目文 接合痕 体部外面 凹線４条	にぶい橙 7.5YR7/4	灰白 2.5YR8/2	3mm 以下の石英、長石を若干含む
13	〃　〃	20.0		(11.4)	体部外面 あらいハケメ.内面 ナデ 口縁端部 接合痕 体部外面 凹線 14 条	黒褐 10YR3/2	灰白 10YR8/2	3mm 以下の石英、長石を若干含む



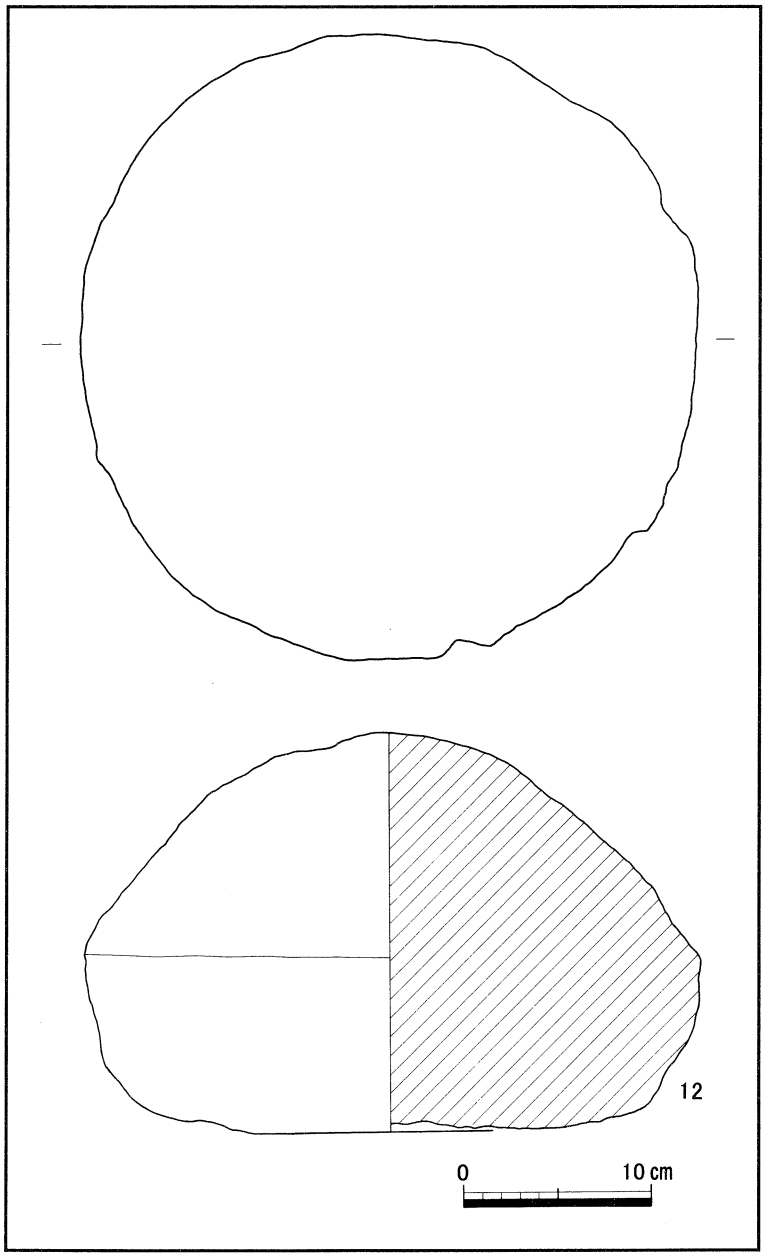
第60図　F調査区SD03石組中出土遺物実測図①

第17表—2

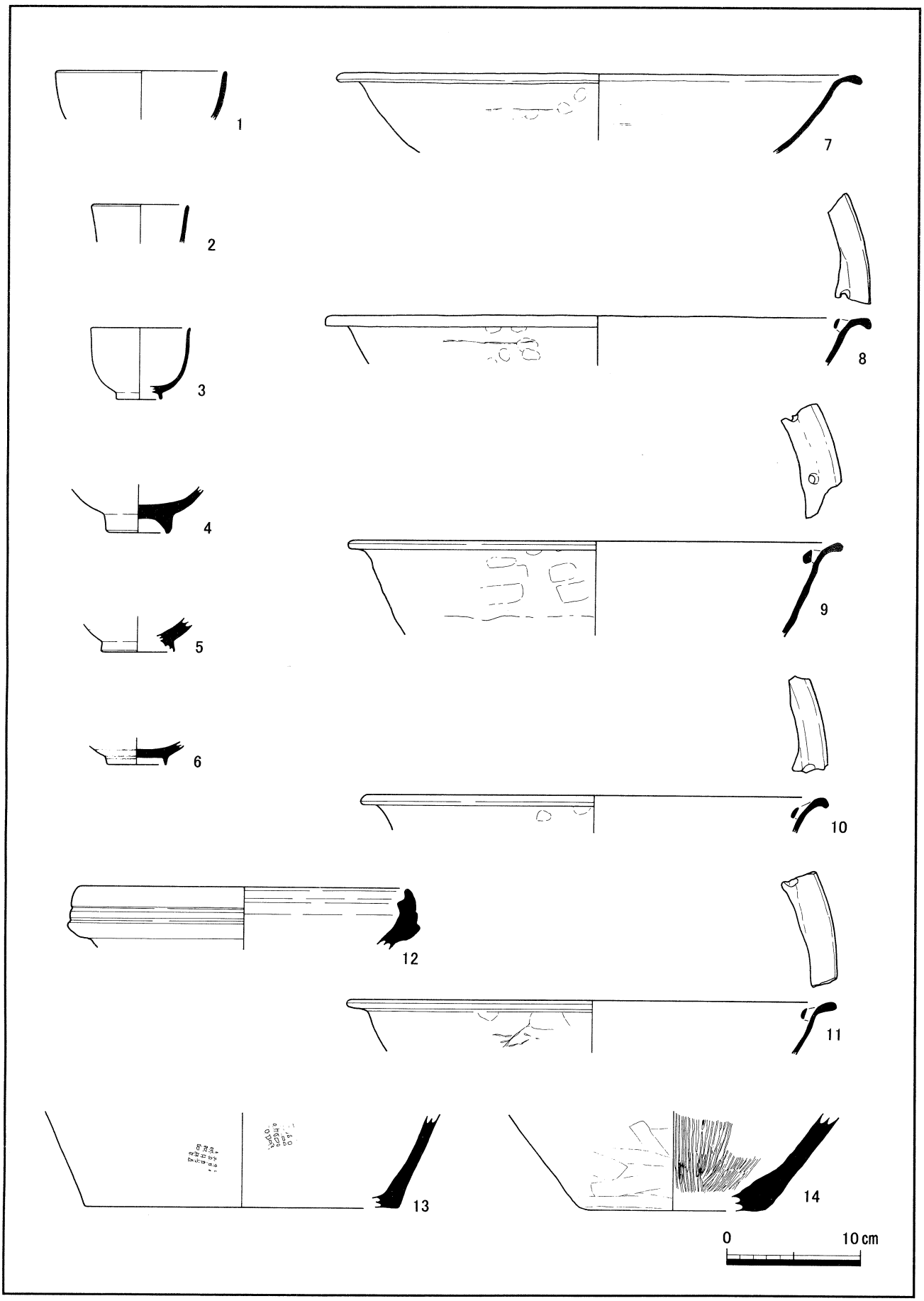
番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外面	内面	
14	弥生土器 甕	23.2		(10.2)	外面 摩滅の為調整不明 口縁部内面 指頭圧痕 体部内面 ヨコハケメ 口縁端部 刻目文接合痕 体部外面 凹線4条	灰褐 7.5YR6/2	橙 5YR6/6	3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
15	〃 〃	26.0		(13.9)	口縁端部外面 指頭圧痕, 体部外面 あらいハケメ 内面 摩滅の為調整不明 口縁端部 刻目文接合痕 体部外面 沈線9条	灰褐 7.5YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/2	5mm 以下の石英、長石を多く含む
16	〃 〃	19.8		(15.2)	外面 ナデ 体部内面 指頭圧痕 ナデ 口縁端部 刻目文	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 5YR6/3	2mm 以下の石英、長石を含む
17	〃 〃	20.2		(17.5)	口縁端部 指頭圧痕 接合痕 体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	灰褐 7.5YR4/2	浅黄 2.5Y7/3	4mm 以下の石英、長石を若干含む
18	〃 〃	24.4		(14.9)	口縁部外面 ナデ 体部外面 ハケメ 口縁部内面 指頭圧痕ハケメ接合痕 体部内面 ナデ ヘラミガキ 口縁端部 刻目文 体部外面 沈線4条	褐灰 5YR4/1	にぶい赤褐 5YR5/4	3mm 以下の石英、長石を若干含む
19	〃 〃	24.4		(22.1)	外面 摩滅の為調整不明 内面 摩滅の為調整不明 体部外面 ヘラ描き沈線10条 口縁端部 接合痕	暗赤灰 2.5YR3/1	明赤褐 2.5YR5/6	5mm 以下の石英、長石を多く含む
20	〃 〃	34.2		(8.0)	頸部外面 指頭圧痕 体部内面 指ナデ 体部外面 凹線4条	灰白 2.5Y8/1	浅黄橙 10YR8/3	3mm 以下の石英、長石、角閃石を多量に含む
21	弥生土器 底部		7.6	(4.4)	底部外面 あらいハケメ,指頭圧痕 底部内面 ナデ	灰白 7.5YR8/1	黒 5YR1.7/1	5mm 以下の石英、長石を若干含む
22	〃 〃		7.2	(4.2)	底部外面 摩滅の為調整不明 底部内面 摩滅の為調整不明	にぶい橙 2.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	5mm 以下の石英、長石を含む
23	〃 〃		8.2	(5.8)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ	橙 5YR7/6	褐灰 10YR4/1	3mm 以下の石英、長石を多量に含む
24	〃 〃		10.6	(3.1)	底部外面 板ナデ 接合痕 底部内面 ナデ 指頭圧痕	灰白 2.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	2mm 以下の石英、長石、を含む
25	〃 〃		7.6	(5.5)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ 接合痕	橙 5YR6/6	褐灰 5YR5/1	4mm 以下の石英、長石、角閃石を多量に含む
26	〃 〃		7.2	(5.5)	底部外面 あらいハケメ 底部内面 摩滅の為調整不明	にぶい橙 7.5YR7/4	明赤褐 2.5YR5/6	5mm 以下の石英、長石を多く含む
27	〃 〃		9.5	(6.0)	底部外面 板ケズリ ナデ 接合痕 底部内面 摩滅の為調整不明	灰黄 2.5Y7/2	灰白 2.5Y8/2	3mm 以下の石英、長石を若干含む
28	〃 〃		13.6	(10.8)	底部外面 指頭圧痕 指ナデ 底部内面 摩滅の為調整不明	にぶい赤橙 10R6/4	淡赤橙 2.5YR7/4	3mm 以下の石英、長石を多く含む
29	〃 〃		10.6	(13.7)	底部外面 摩滅の為調整不明 底部内面 ナデ 指頭圧痕	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/1	3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
30	〃 〃		9.6	(13.2)	頸部外面 摩滅の為調整不明 頸部内面 摩滅の為調整不明	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	5mm 以下の石英、長石を多く含む
第図 31	〃 〃		9.0	(5.8)	底部外面 ヘラミガキ 底部内面 摩滅の為調整不明	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 2.5Y8/2	5mm 以下の石英、長石を若干含む
32	〃 〃		13.6	(4.2)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/2	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
33	〃 〃		12.8	(8.0)	底部外面 摩滅の為調整不明 底部内面 ナデ	灰白 2.5Y7/1	褐灰 10YR6/1	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
34	〃 〃		22	(5.2)	底部外面 ナデ 底部内面 剥離摩滅の為調整不明	灰白 10YR8/1	灰白 2.5Y8/1	4mm 以下の石英、長石を多く含む
35	弥生土器 甑		7.0	(6.7)	底部外面 摩滅の為調整不明 底部内面 摩滅の為調整不明 底部円孔 1孔	にぶい橙 7.5YR6/3	黒褐 7.5YR3/1	5mm 以下の石英、長石を多く含む
36	〃 〃		8.2	(7.5)	底部外面 摩滅の為調整不明 底部内面 摩滅の為調整不明 底部円孔 1孔	にぶい橙 7.5YR7/4	暗褐 10YR3/3	3mm 以下の石英、長石を若干含む
37	弥生土器 蓋	18.8		9.8	外面 あらいハケメ・ナデ 内面 摩滅の為調整不明	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR5/3	4mm 以下の石英、長石を多く含む

第18表　F調査区SD03石組中出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器　甕	18.4		(7.8)	体部外面 ナデ、ハケメ指頭圧痕 体部内面 ナデ、指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/4	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
2	〃　〃	20.4		(8.1)	外面 摩滅のため調整不明 内面 摩滅のため調整不明	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	1～3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
3	〃　〃	23.8		(15.4)	外面 摩滅のため調整不明 内面 摩滅のため調整不明	明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR7/2	3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
4	肥前式雄系　鉢	17.4		(7.7)	体部外面 ナデ 刷毛目唐津 体部内面 ナデ 刷毛目唐津	(素地) 赤褐 2.5YR4/6	(釉) 灰白 5Y8/1	精　良
5	青磁	11.2		(2.3)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	明緑灰 7.5GY7/1	灰黄 2.5Y7/2	精　良
6	底部		6.4	(3.4)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ	灰褐 7.5YT4/2	暗褐 7.5YT3/3	密
7	波佐見焼碗	10.4		(4.6)	体部外面 ナデ 草花文 底部内面 ナデ	(素地) 褐灰 10YR5/1	(釉) 灰 10Y6/1	精　良
8	陶器　碗		4.8	(3.2)	底部外面 ナデ 刷毛目唐津 底部内面 ナデ 刷毛目唐津	(素地)　(釉) 灰 N51　暗緑灰	文様 7.5GY4/1 灰白 N81	密
9	土師器　土鍋	28.8		(4.5)	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR6/2	1mm 以下の長石、角閃石を含む
10	〃　〃	30.0		(2.8)	口縁外面 摩滅のため調整不明 口縁内面 摩滅のため調整不明	灰黄 2.5Y7/2	灰白 5Y7/1	3mm 以下の石英、長石を含む
11	盃状穴	長さ 30.7	幅 34.6	厚さ 11.3	角礫凝灰岩			
12	五輪塔				角礫凝灰岩			



第61図　F調査区SD03石組中出土遺物実測図②



第62図　F調査区SD03出土遺物実測図

第19表　F調査区SD03出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調		胎土
		口径	底径	器高		外面	内面	
1	陶器(瀬戸)碗	12.4		(3.6)	体部内面 ナデ 体部外面 ナデ	(素地) 灰白 2.5Y8/2		密
2	白磁　碗	2.0		(2.8)	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	(素地) 灰白 7.5Y8/1 灰白		精良
3	陶器　碗	7.2	3.4	5.3	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	(素地) 灰白 N81	(釉) 淡青	密
4	陶器(瀬戸)碗		4.4	(3.5)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ	(素地) 灰黄 2.5Y7/2	(釉) 浅黄 5Y7/3	精良
5	陶器　碗		5.4	(2.6)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ	(素地) 灰白 N81	(釉) 淡青灰 5B7/1	密
6	〃　〃		4.4	(1.8)	底部外面 ナデ 底部内面 ナデ	(素地) 灰白 N81	(釉) 淡青灰	精良
7	土師器　土鍋	38.0		6.0	体部外面 ナデ 体部外面 指頭圧痕 体部内面 ハケが摩滅している	褐灰 10YR6/1	灰黄褐 10YR6/2	石英、長石、角閃石を含む
8	〃　〃	39.8		3.6	体部外面 ナデ 体部外面 指頭圧痕	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR6/2	石英、長石、角閃石を含む
9	〃　〃	36.0		7.0	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	褐灰 10YR4/1	灰黄褐 10YR5/2	長石、角閃石を含む
10	〃　〃	34.0		2.7	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ 体部外面 指頭圧痕	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2	長石、角閃石を含む
11	〃　〃	36.0		3.9	体部外面 ナデ 体部内面 ヨコナデ	黄灰 2.5Y4/1	灰黄 2.5Y6/2	石英、長石、角閃石を含む
12	備前焼　すり鉢	24.4		4.5	体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	赤褐 2.5YR5/3	赤褐 10R5/4	石英、長石、角閃石を含む
13	〃　甕		23.2	7.0	底部外面 ナデ 格子目タタキ 底部内面 ナデ 格子目タタキ	灰黄褐 10YR4/2	灰褐 5YR4/2	精良
14	備前焼　すり鉢		12.2	7.3	底部外面 板ナデ 底部内面 すり目	にぶい赤褐 5YR4/3	灰褐 7.5YR4/2	1mm 以下の長石、角閃石を含む

第２節　　南海道推定地の調査

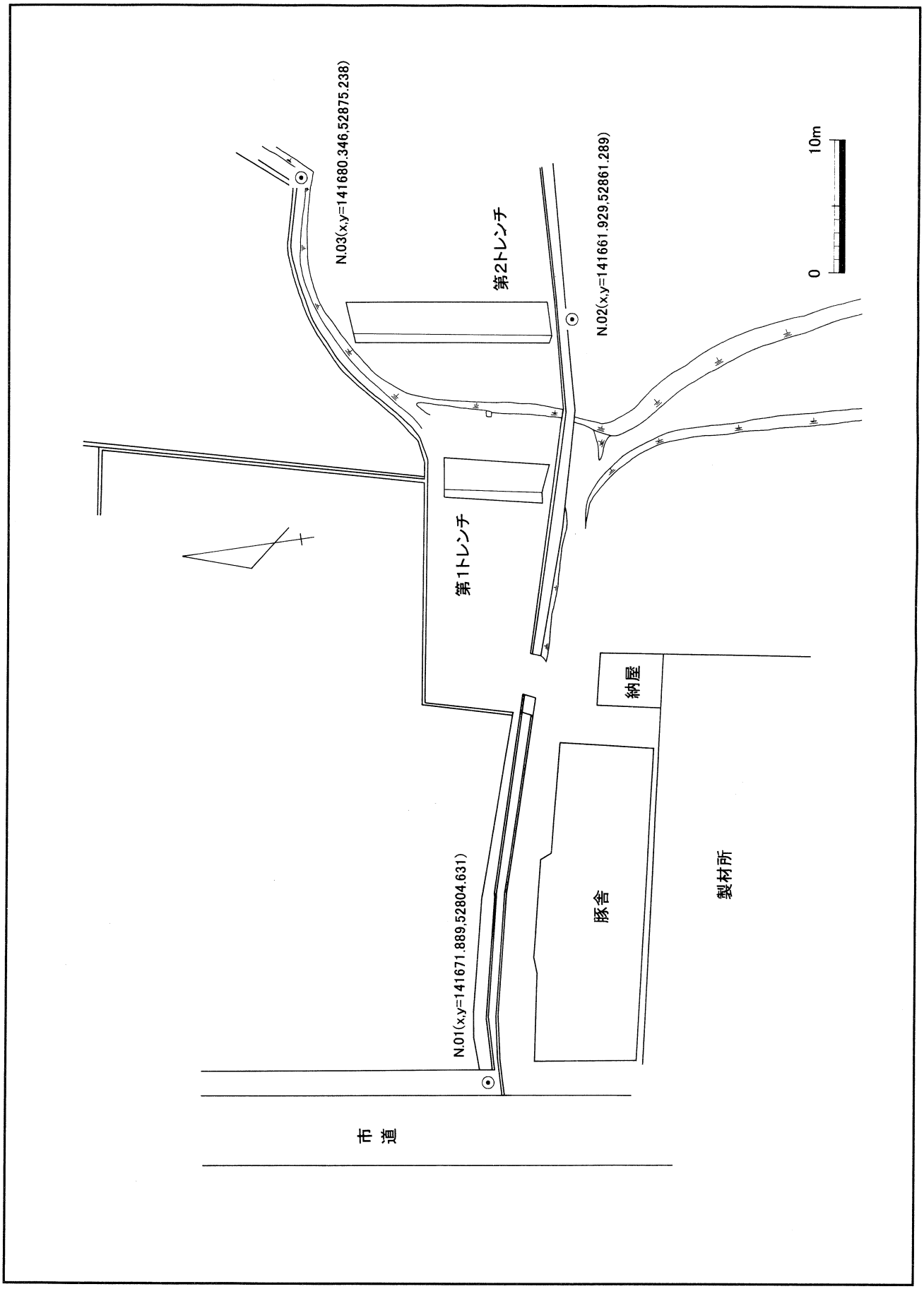
1　調査区の位置

南海道推定地として調査地点に選定した三谷町1060番地,1071番地は,三木町白山南麓と高松市加藍山北麓を結ぶ現地表面での南海道推定線上に当たる。調査地が位置する三谷町から川島町西部にかけては,南から日山,上佐山などの山襞が北へ向けて支脈状に派生しており,古代南海道は,これらを横切って東西に敷設されていたと考えられている。ちょうど現在の県道12号線(三木国分寺線)から北へ約100mの距離で県道とほぼ並行する位置関係になる。南海道推定線上の,特に微高地上には道路の痕跡と考えられるような,幅10～15mの東西に長い帯状の地割が,断続的に確認できる。同様の地割は南海道推定線上で三谷町西三谷,川島本町など数カ所にも断続的に認められる。

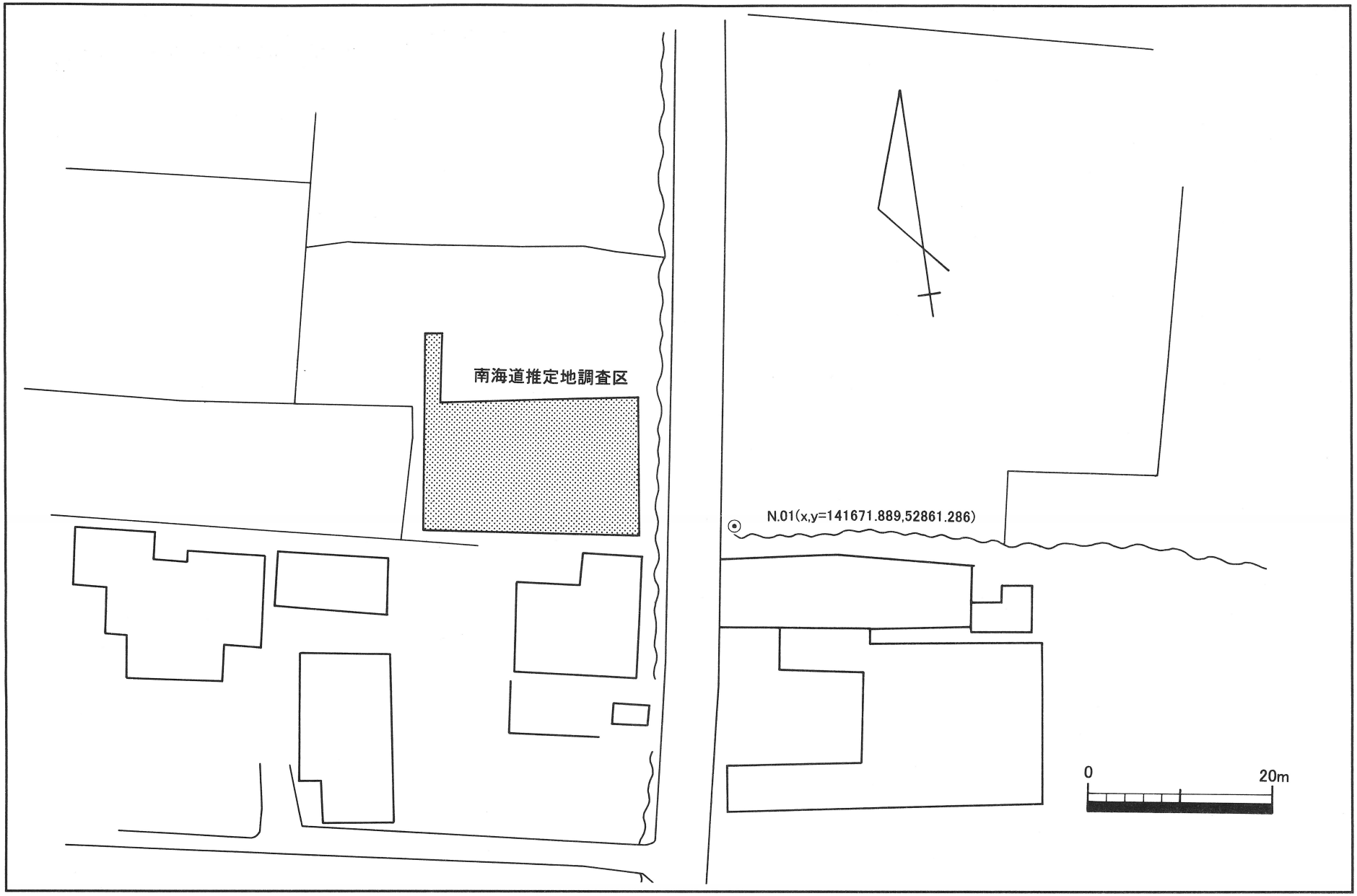
平成7年度の調査地点である三谷町1060番地は,春日川の支流である古川のさらに支流の小作川から西へ約30mの地点で,旧小作川が形成した高低差1mの段丘部分である。段丘上(西側)は,南北約10m,東西約20mの畑となっており,南海道余剰帯として認められる。畑のさらに西側も公道までの約30mが同様な幅員の畦道および用水路として伸びており,公道を隔てた東側にも幅員15m,東西約60mの帯状の水田区画が連続して認められる。調査区は,段丘上の畑に南北に長く3×10m(第1トレンチ),段丘下の水田に同じく南北長に3×15m(第2トレンチ)の2本を設定した。

一方,平成8年度の調査地点は,高松市三谷町1071番地の水田で,平成7年度の調査区から西に約50m離れた地点である。前年度と同様に南海道余剰帯の帯状地割の延長線を裁断できるように,当該調査地の境界南縁に沿った位置に南北20m,東西23mの方形に調査区を設定した。本報告では前年度の調査と併せて報告する便宜上平成7年度のトレンチ番号と通して第3調査区と呼ぶことにした。基準点,標高値は平成7年度調査時に設定した基準点を利用した。座標値はN.01(X:141671.889, Y:52861.286),標高値は22.932mであった。

第63図　三谷南海道推定地周辺地形図



第64図　南海道推定地調査区第1・第2トレンチ配置図



第65図　南海道推定地第3調査区配置図

2　基本土層

土層は第1・2トレンチでは西側の断面を，第3調査区では東側断面を図化した。

第1トレンチでは，上層から，第1層現在の水田層，第2層花崗土客土層，第3～5層現代攪乱層（隣接の畦道並びにコンクリート畦畔改修の際の埋土とみられる），第6層現代客土，第7層灰色シルト質極細砂，第8層黄褐色シルト質細砂層（土壌化が未進行の洪水層），第9層暗青灰色シルト層（水田層），第10層（第10'層）風化花崗岩層（地山層），第11層にぶい黄褐色砂質シルト，第12層明黄褐色細砂，第13層灰褐色粗砂混じりシルトの層序を示す。

第2～6層は，地権者によると昭和40年以降の小作川護岸工事や畦畔改修の際に盛り土嵩上げをしたということで，それ以前は段丘下位に近いレベルで帯状に湾入していたようである。

第7層は，現在の水田層に近い土質で客土嵩上げ前の耕作層と思われる。

第9層水田層は時期が不明確ながら上面に踏み込みによるような地表面の乱れが観察され，水田として利用のさなかに上層の第8層洪水砂によって被覆されたものと思われる。

第11～13層は洪水作用による不安定な堆積層と考えられる。

一方，第2トレンチは段丘下で小作川旧河道の氾濫原に含まれているため，第1トレンチとは全く違った層相を示し，洪水による影響を強く受けている様子が窺える。このため土層注記は第1トレンチとは別個に採番している。

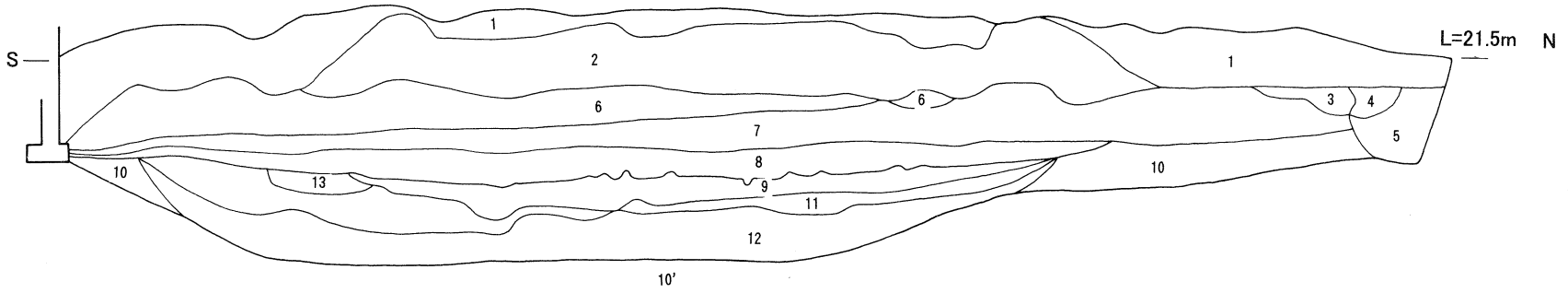
基本土層としては上層から順に，第1層現耕水田層，第2層現耕水田層床土，第3層黄灰色シルト質極細砂，第4層暗灰黄色シルト質極細砂，第5層黄褐色シルト質極細砂，第6層黄褐色シルト質極細砂，第7層黄褐色シルト質極細砂，第8層灰黄褐色シルト質極細砂，第9層黄褐色粗砂混じりシルト，第10層暗灰黄色シルト，第9'層は第9層と第10層の中間的特徴を示し，第11層褐灰色シルト，第12層暗灰黄色細砂，第13層明黄褐色粗砂，第14層灰黄色シルト，第15層浅黄色地山花崗土である。

第2～8層は中近世の耕作土層と考えられる。第9層は水田耕作層である。9'層とともに第1トレンチの第9層に対応するものと思われる。第10・11層の灰色シルト層は9層水田層と類似しているが，土壌化が進行していない洪水堆積層である。以下，12～14層は旧河道の影響が大きい洪水堆積層で，15層が最終基盤の風化花崗岩層である。なお，16層は褐色の粗砂礫を充填する中世の溝状遺構の埋土であった。以上2ヶ所のトレンチで共通するのは，双方第9層の暗青灰色（褐灰色）水田層と，第1トレンチ10層および第2トレンチ14層の風化花崗岩基盤層の2層である。

次に第3調査区全体の状況を概観すると，現耕作土直下で最終遺構面であるにぶい黄橙色粘土層となり，南東部の一角のみがやや地山面が落ち込んでいて数層の砂層の堆積が見られる。南海道の道路敷きとして認められるのはこの部分で，基本土層図として図化した調査区東辺の部分がもっとも深く，西へ向かうにしたがって次第に落ち込みの深度を減じ10m余り進んで全く平坦化する。一方，調査区西辺に沿っても排水を兼ねて側溝掘削を行い，さらに北へ向けた側溝の延長掘削によって土層を確認したが，現耕作土直下に地山の平坦面が見られるのみであった。これにより，地山面が浅いのは後世の削平によるものと考えられる。土層の状況は次のとおりである。

第3調査区東辺の南から6m前後までの間が南海道にあたると考えられ，セクション付近で最大50cmの地山面の落ち込みが見られる。

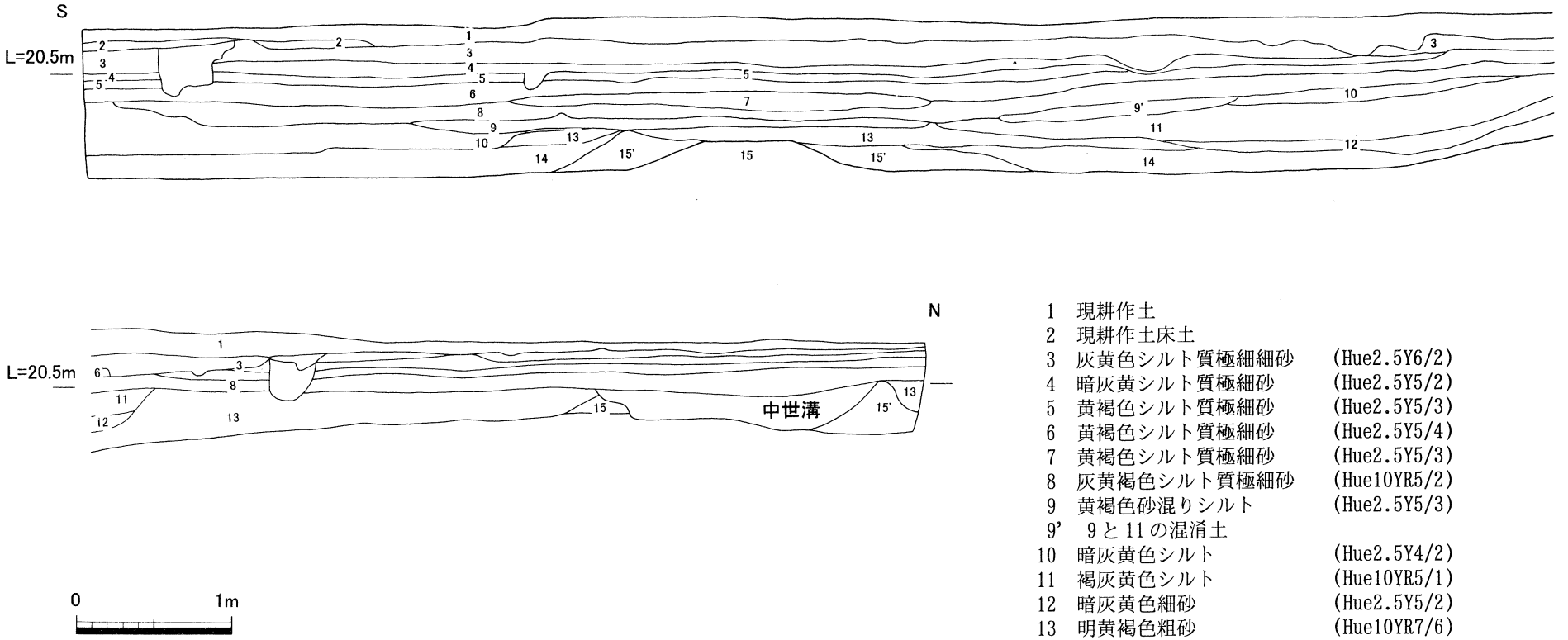
この部分では現耕作土下に，第2層にぶい黄褐色粗砂が層厚20cm弱でやや安定的に堆積しており，さらに下層には上から順に，第3層黄褐色粗砂，第4層明黄褐色中砂，第5層褐灰色シルト層，第9層明黄褐色粗砂が断続的なレンズ状の堆積を示している。そしてその下層には，これらを受けるように第6層にぶい黄褐色粗砂混じりシルト層が10～15cmのやや安定したあり方で存在する。第7層はにぶ



土層注記

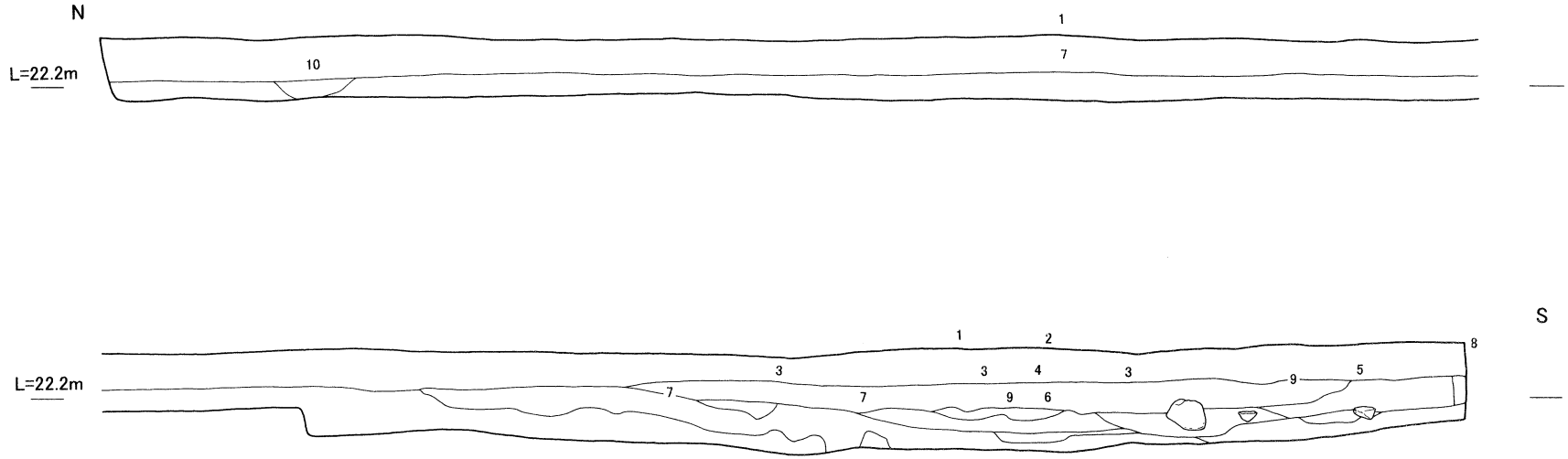
1	現耕作土		
2	花崗土		
3	撹乱	(道路改良裏込)	
4	〃	(〃)	
5	〃	(〃)	
6	〃	(現代客土)	
7	灰色シルト質極細砂		(Hue5Y5/1)
8	黄灰色シルト質極細砂		(Hue2.5Y4/1)
9	暗青灰色シルト		(Hue5PB4/2)
10	灰白色アルコース	(地山花崗土)	(Hue7.5Y8/1)
10'	〃	(僅かに粘質を帯びる)	
11	にぶい黄色細砂～シルト		(Hue2.5Y6/3)
12	明黄褐色細砂		(Hue2.5Y6/6)
13	灰褐色粗砂混シルト		(Hue7.5YR5/2)

第66図　南海道推定地調査区第1トレンチ土層図



1　現耕作土
2　現耕作土床土
3　灰黄色シルト質極細細砂　(Hue2.5Y6/2)
4　暗灰黄シルト質極細砂　(Hue2.5Y5/2)
5　黄褐色シルト質極細砂　(Hue2.5Y5/3)
6　黄褐色シルト質極細砂　(Hue2.5Y5/4)
7　黄褐色シルト質極細砂　(Hue2.5Y5/3)
8　灰黄褐色シルト質極細砂　(Hue10YR5/2)
9　黄褐色砂混りシルト　(Hue2.5Y5/3)
9'　9と11の混淆土
10　暗灰黄色シルト　(Hue2.5Y4/2)
11　褐灰黄色シルト　(Hue10YR5/1)
12　暗灰黄色細砂　(Hue2.5Y5/2)
13　明黄褐色粗砂　(Hue10YR7/6)
14　灰黄色シルト　(Hue2.5Y7/2)
15　浅黄色地山花崗土　(Hue2.5Y7/3)
15'　15よりさらに風化が進んだ地山花崗土

第67図　南海道推定地調査区第2トレンチ土層図



1	（現耕作土）	
2	にぶい黄褐色粗砂	Hue10YR5/4
3	黄褐色粗砂	Hue10YR5/6（マンガン沈着強い）
4	明黄褐色中砂	Hue10YR6/6
5	褐灰色シルト	Hue10YR5/1
6	にぶい黄褐色粗砂混シルト	Hue10YR5/4（表層にマンガン沈着，層中に和泉砂岩風化状の粗砂ブロック）
7	にぶい黄橙色粘土	Hue10YR7/2（地山）
8	（コンクリート用水路築造時の攪乱）	
9	明黄褐色粗砂	Hue10YR6/6
10	黄灰色砂質シルト	Hue10YR4/1（ＳＤ０１埋土）

第68図　南海道推定地第3調査区土層図

い黄橙色粘土質の地山層，第10層は弥生後期の土器片を包含する黄灰色砂質シルト層で，ＳＤ01の埋土である。

これらのうち第2～4，第9層は，調査区南端から約3mの範囲に小規模なレンズ状の堆積が鱗状に重なり合って存在しており，各層の層境にはマンガンの堅い沈着層が認められた。また，第3層黄褐色粗砂層中と地山粘土層上面には，拳から人頭大の砂岩礫が置かれており，前者は第2層にぶい黄褐色粗砂層に，後者は第6層にぶい黄褐色粗砂混じりシルト層にそれぞれ砂岩礫の上半を埋め隠されたような状態になっていた。このような砂岩礫を含む落ち込みは，調査区南辺に沿った浅い溝状落ち込みの中でもセクション付近とさらに6mほど西に寄った2ヶ所で部分的に認められ，砂岩礫は洪水等による自然の流れ込みというよりもむしろ据え置かれたように見受けられた。西側の集石部分では，遺構の残存自体が全体的に浅くなっており，この部分で砂岩礫を被覆するのは第6層にぶい黄褐色粗砂混じりシルト層と考えられる。

3　遺構と遺物

(1)　第１トレンチ，第２トレンチの遺構と遺物

調査の結果，遺構としては第1トレンチで第(10')層風化花崗岩地山層が逆台形状に掘り割られた痕跡が確認できた。

掘り割りは，トレンチ西セクションによると，南肩（左）で第8層下面，北肩で第7層下面を検出面として第10（10'）層花崗土地山層を切り込み，検出幅5.4m，基底幅約3m，深さ60cmの逆台形を呈する。第8層は，土壌化が未進行の洪水砂層で遺物を包含しないため時期が明確でないが，第9層地表面の乱れを被覆していることから，第7層よりも第9層との時期関係が密接な堆積層であると判断される。

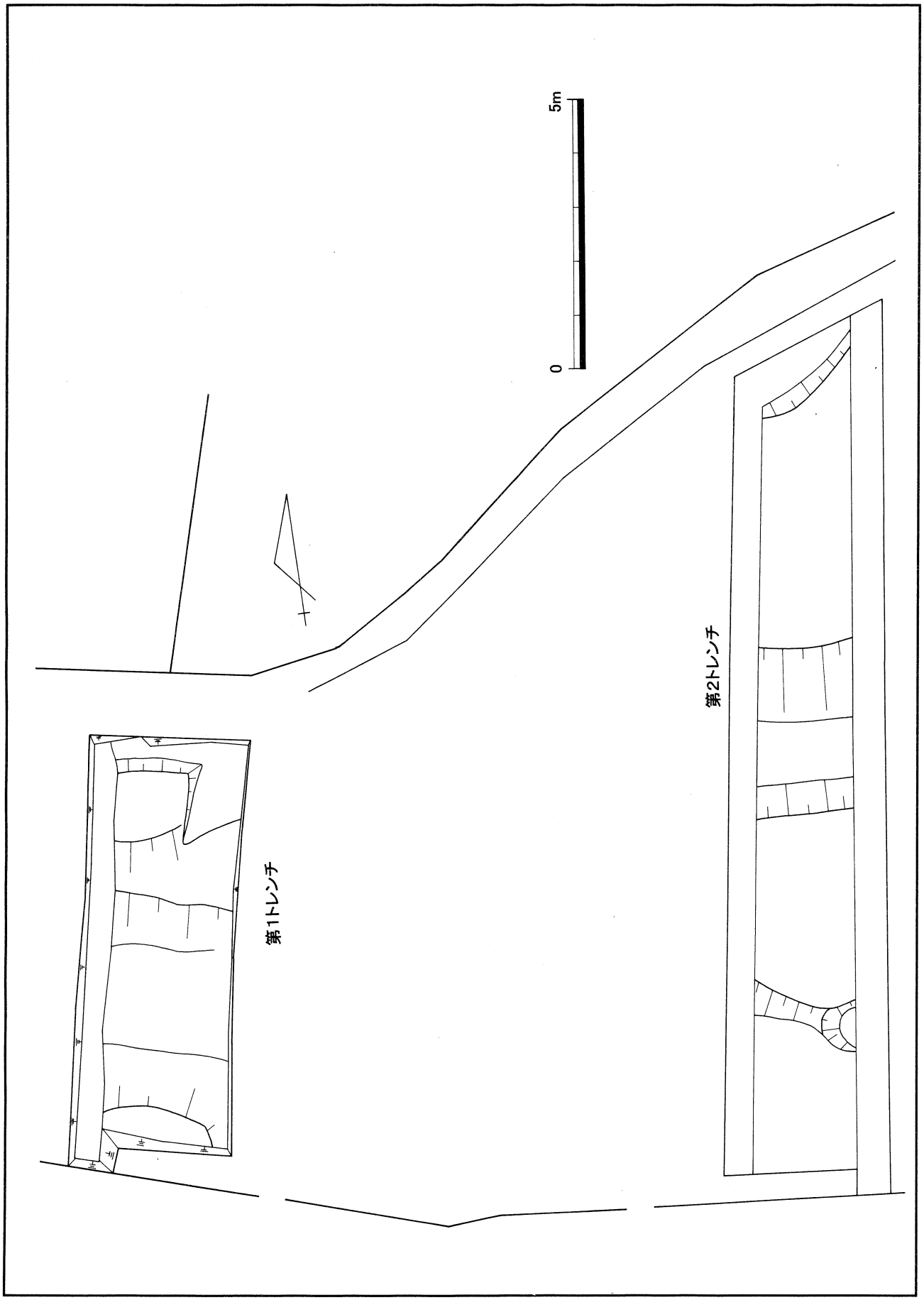
掘り割りの内部には第9，11，12層の3面の堆積が認められる。第9層は掘り割り内部の上面付近の南肩付近を除く幅約4.5mに最大で20cm近くの厚さに堆積しており，両肩付近では層厚を減じて断面レンズ状を呈する。性格としては水田層とみられ，上面に幅，高さ（深さ）ともに5cm程度の凹凸が8カ所認められる。上面精査によって帯状の広がりは確認できなかったため畦畔や溝のようなものではなく踏み込み等による表層の攪乱と思われる。須恵器甕口縁部片1点が出土しているが，小片のため時期の確定には至らなかった。

第11，12層は第10層地山風化花崗岩層に近い性格を持っており，基本的には洪水堆積層と考えられる。洪水等によって斜面または上流の地山層が崩壊堆積したものか。いずれも土壌化の進行は顕著にはみられず遺物の包含もなかった。なお，第11層上面の南肩付近に浅くレンズ状に堆積する第13層が断面で確認されたが，面的な広がりについては明確にとらえられなかった。

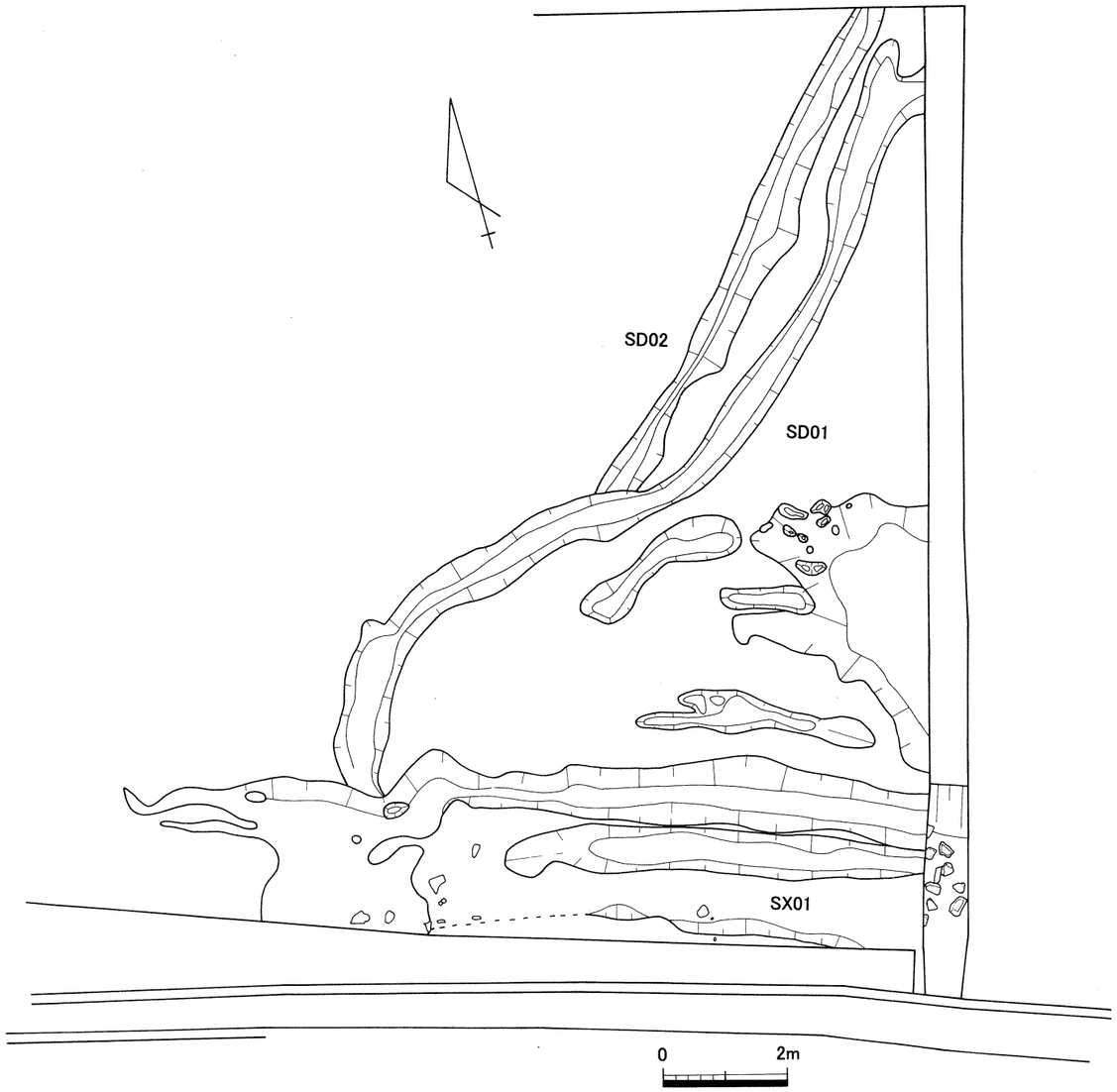
第9層青灰色水田層を取り除いた段階で掘り割りの平面的な広がりを確認したところ，北側の落ち肩はトレンチにほぼ直交するＥ9°Ｓ方向で直線的に傾斜しており，南落ち肩もほぼ同方向を示すが，トレンチ東端でやや南東に転じて調査区外に逃げている。地山掘り割りの高低差は南肩で20cm前後，北肩は途中で若干傾斜の変換を持って30cm前後を有していた。掘り割り床面の高低差はトレンチ東西端で部分的に2～5cmの差はあるものの概して水平であった。これらトレンチの状況から，当該の掘り割り状の遺構は東西に切り通し状に連続するものと推定された。

一方，段丘崖の低位に位置する第2トレンチでは，中世並びに現代の溝跡各1条と第1トレンチ同様に地山を浅く掘り割った段差が確認された。

第2トレンチで地山と判断できる風化花崗岩層は，土層観察のための側溝でトレンチ中程で現地



第69図　南海道推定地調査区第1・第2トレンチ遺構図



第70図　南海道推定地第3調査区遺構図(上層)

表下1m，トレンチ北端5mの部分では50cmの深さで確認できた。さらに南側では，幅3mのトレンチの西側崖寄りでは第1トレンチとよく似た地山層がほぼ水平に南へ伸びるのに対し，東側では地山層は次第に深く落ちてゆき，それも軟部が除かれて人頭大の花崗岩礫が累積しているような状況であった。地山岩礫層の上部は，西セクションでは土層図で第13・14層の洪水砂礫層が現地表下60～70cm（トレンチ北端では30cm前後）まで，東セクションでは同様な砂礫層がさらに複雑な布状の堆積層を形成しており，この上面が最終遺構面と確認できる状況であった。

第1トレンチの地山切り通しと対応すると考えられるのは，第2トレンチ北端から約5m部分にみられた第13層洪水砂礫層上面の段差である。

第14層上面は第2トレンチ北端で中世溝の掘り込み面となっており直上を近世耕作層に被覆されているが，西セクションでトレンチ北端から5mの地点で1.4mの間で深さ40cmの浅い斜面状の段差になっている。段差の下位は，段差直下がやや溝状に浅くえぐれ，約10cmの緩い高低差をもつもののほぼ平坦を保つ。特にトレンチ北端から7.8～12.1mの間は第14層上面に第13層の薄いレンズ状堆積がみられるためやや高まりとなっており，その南端は第13層分の厚みだけで10cm足らずの明確な段差をなしている。

第14（13）層の上面は灰色シルトが10～20cm堆積している。段差部分の堆積がレンズ状にもっとも厚く，全体を見通して5層（第9～12層）に細分できる。灰色シルト中もっとも上層の第9層は段差下段のほぼ中央部に厚さ10cm，幅2.7mにわたってレンズ状に水平堆積し，第1トレンチの第9層と同質の水田層と考えられる。第9層のすぐ北側には第9層よりやや土壌化が未発達な第9'層が1.5mの幅で段差の傾斜に影響されるようにやや北に高くレンズ状の堆積をなす。第10層は第9'層の北に続く部分に段差の傾斜面にかぶるように幅1.8m，厚さ約10cmにみられる箇所と，トレンチ南端からやや厚みを持って伸びてきて第13層の出現と置き換わってとぎれる部分の2カ所に認めることができる。第11層は段差際の浅い凹部を埋めるように厚いレンズ状に堆積し，ほとんど土壌化が進行していないと考えられる。第12層は同色の細砂層で第11層の下層に薄く堆積している。

(2) 第3調査区の遺構と遺物

A 弥生時代の遺構

第3調査区では現地表面下20cmの浅い部分に第7層の地山層（最終遺構面）が存在しており，この同一面上に弥生時代から古代までの遺構が掘り込まれていた。

調査区中央部から北東流して調査区の北東角に至る溝状遺構2条（SD01・SD02）を確認した。SD01は，調査区の中央部やや東寄りから緩いS字状に蛇行しながら調査区北東角に至る。調査区南半は，南海道の路肩と見られる浅い落ち込みの部分で途切れていることから，これによって切られたものと判断できる。検出幅50～70cm，検出面からの深さは10～14cmで，黄灰色砂質シルトの埋土中に弥生土器の細片が見られる。

出土遺物は3点を図化した。

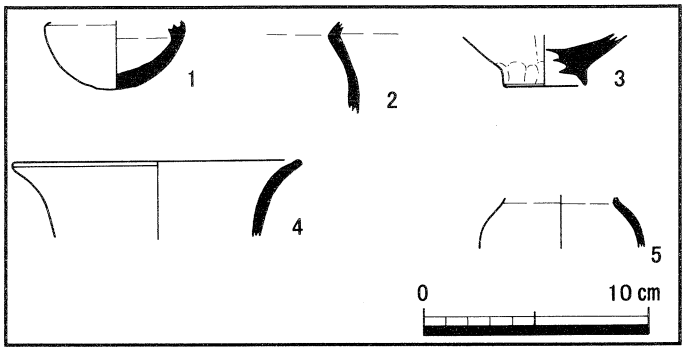
1は，小型丸底壺の底部と見られる。2は，甕の頸部から体部上半にかけて，3は，壺の底部付近でつまみ出しによる高台が見られる。

いずれも器表の摩耗が進んだ細片であるが，弥生時代末から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。

SD02は，SD01のすぐ西側に接するように検出された。南端はSD01の，緩やかに東へ蛇行して再度北西へ向きを戻す付近でSD01に切られている。検出幅は約60cm，底部に凹凸が著しく，深さは場

所によって14cm～5cmとばらばらである。にぶい黄褐色粗砂質の埋土中に土器細片を包含しており，ここでは2点を図化した。

4は，壺口縁部片である。上方にラッパ状に開く細片で内外面ともナデ調整が残るのみで端部も丸く収めている。5は，ミニチュアの壺の体部と見られるが器表の摩耗が著しい。SD01と近接した時期に相前後して掘削された遺構であろう。



第71図　SD01・SD02出土遺物実測図

第20表　SD01・SD02出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	小型丸底壷			(3.0)	内外面摩滅により不明	灰白7.5Y8/2	灰白7.5Y8/1	石英・長石を含む
2	甕			(4.0)	内外面摩滅により不明	淡黄2.5Y8/3	にぶい黄褐 10YR5/4	石英・長石を含む
3	底部		3.6	(2.3)	外面板ナデ 内面摩滅により不明	灰白2.5Y8/2	灰白5Y8/2	石英・長石を含む
4	甕	12.8		(3.4)	内外面ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	石英・長石・角閃石を多量含む
5	ミニチュア土器			(2.3)	内外面ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	微砂粒を含む

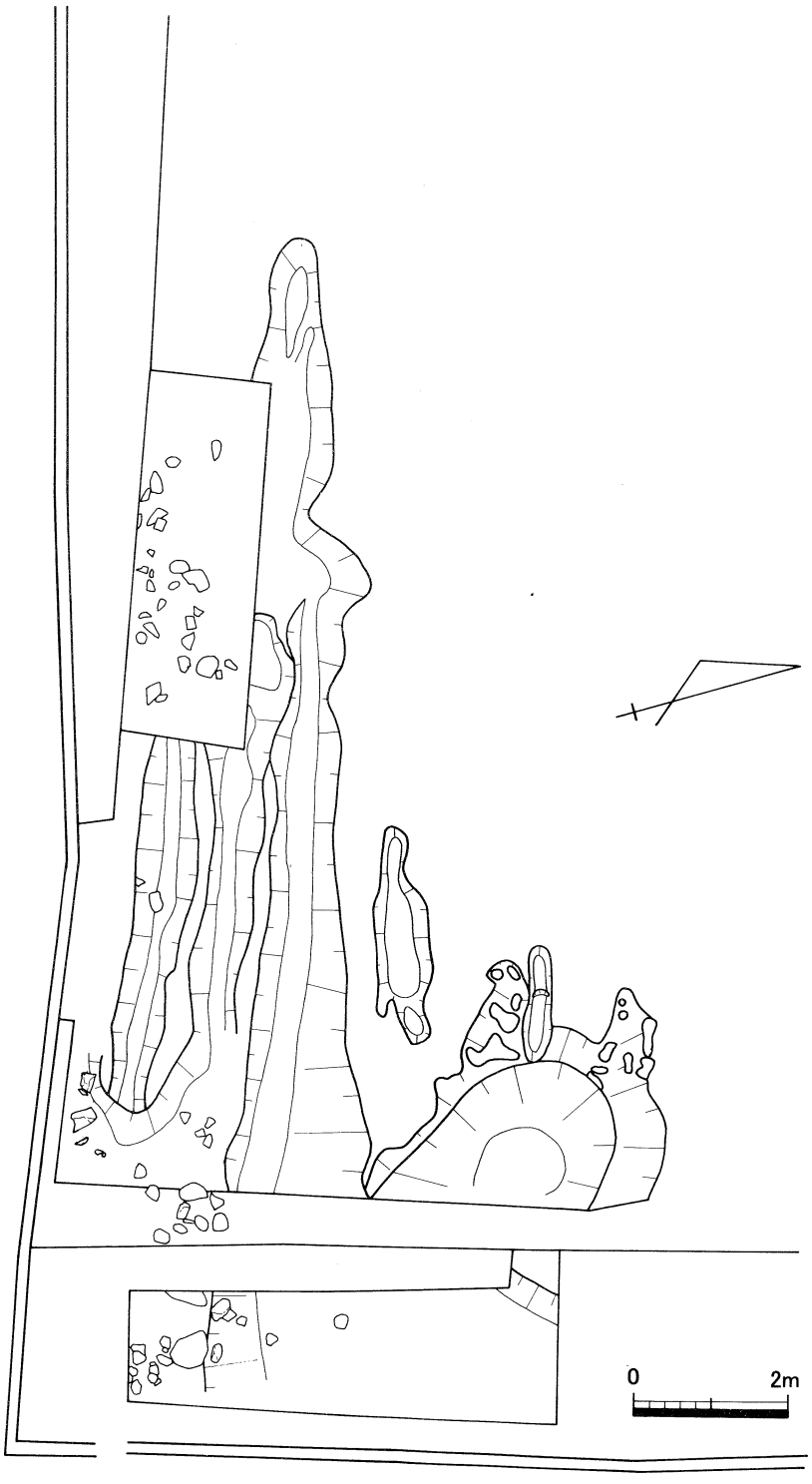
(3)　古代の遺構

調査区南辺に沿って，幅約3mの浅い溝状の落ち込み（SX01）が東西方向に確認できた。

SX01は，基本土層図第3層黄褐色粗砂層の上面付近で検出幅2.7～3mを測り，調査区東セクション付近から西へ向かって徐々に深さを減じながら14m付近まで続いていた。落ち込みの南肩は，調査区南辺際の浅い段差に認められ，最も残りがよい部分で6cmの高低差を測るが，東セクションから6m付近で消滅してしまう。一方北側は，浅い溝が2本並行して延びる形になっているが，これをＳＸ01一部と見ると，ちょうど幅員の中ほどに馬背状の脊梁が通っているような形になり，北側溝の北肩を落ち込みの肩と見ると，調査区東辺際で12cmの高低差を測ることとなる。

さらに，第3層以下を地山まで掘り下げると，2条の溝のさらに南側にもう一条が新たに確認され，この東西両端部，すなわち調査区東セクション付近と，西へ約6m離れた箇所で浅いすり鉢状の窪みとなっていた。窪みの大きさは，東側が東西4m以上，南北2.5m以上の楕円形の平面形を呈し，最深部が検出面からで30cm，西側のものは，東西4～4.5m，南北2m程度の同じく楕円形の平面形に，深さは周囲の地山面から10cm程度であった。東側の窪みにはこの内部に，下層から順に第6層にぶい黄褐色粗砂混じりシルト層，第9層明黄褐色粗砂層，第4層明黄褐色中砂層，第3層黄褐色粗砂層，第2層にぶい黄褐色粗砂層が堆積していた。このうち，第2層は窪みの中央付近で15～10cm前後と比較的安定的な堆積を示し，第6層も中央部付近では10cm足らずで厚みもところによって一定せず不安定に見えるものの，北側の上がり肩付近では20cm近くの安定した堆積を見せている。

また，この内部の堆積中には，拳大から人頭大の砂岩礫（和泉砂岩礫）が含まれている。東側の窪みでは，砂岩砂は地山第7層直上と第3層下面に接した2層に分かれており，いずれも砂岩礫の頂部はちょうど氷山が海面に頭をのぞかせるように上層の堆積中にまでくい込んでいた。さらにはどちらの砂岩礫も洪水などによって流れ込んだというよりはむしろ意図的に置かれたような状態にあり，何らかの人為的な意図によって置かれたものと考えられた。この状況は西側についても同様であるが，西



第72図　南海道推定地第3調査区遺構図（下層）

側は窪みの深さそのものが浅かったためか，砂岩礫は地山直上のもののみが確認でき窪み内部の堆積層も第6層にぶい黄褐色粗砂混じりシルト層以外は明確には認められなかった。

調査区東セクション付近では，ＳＸ01の北側にもすり鉢状の地山面の落ち込みが確認できている（ＳＸ02）。ＳＸ02は，長軸を北西から南東にとる長円形状の平面形を呈し，南東側は調査区外に逃げているものの東側に拡張したトレンチの状況から，短径2.5m，長径3.0～3.5m程度に推定でき，深さは中央の最深部で27cmを測る。ＳＸ02には，西側から溝状の流れ込みが3ヶ所ほど認められるが，いずれも1mにも満たない小規模なものであるため，ＳＸ02との関連は明確でない。なお，土層との対照からＳＸ02を埋めているのは，第6層にぶい黄褐色粗砂混じりシルト層と考えられる。

出土遺物は15点を図化した。

１～10は，第6層を中心に出土したものである。

1は，須恵器杯蓋の口縁部片である。受け部上面の基部と先端付近に2条の沈線状の凹線を巡らせる。

２は，須恵器杯蓋片と思われる。受け部は外へ向かって肥厚し，口縁の端部に1条の凹線が施されている。

３は，須恵器杯の口縁部である。杯部は比較的浅く扁平で，器壁はわずかに内湾しているため，高杯の可能性が考えられる。

４は，土師器杯である。

５は，土鍋の口縁の部分の破片である。

６は，須恵器椀の底部から体部にかけての破片である。やや内湾しながら開き気味に上方に立ち上がる。底径7.4cm，器高は残存高で3.1cmを測り，深みのある器である。

７は，弥生土器の底部片である。

８は，須恵器杯の底部片である。

９，10は，須恵器の高台付き壺の底部片である。

11～15は，ＳＸ01の内部から出土したものであるが詳細な層位を明確にしていない。

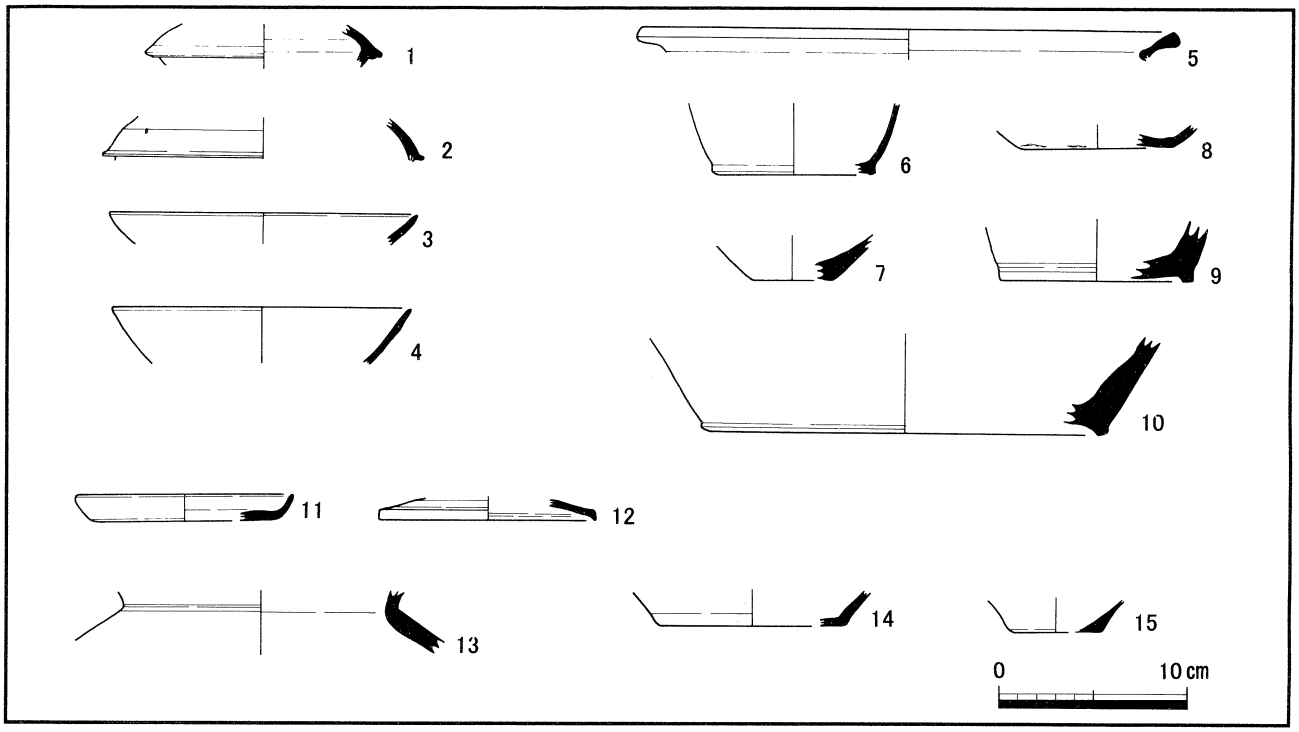
11は，土師器小皿片である。全体的に肉厚で底部から杯部にかけては内外面ともに明確な稜をもたずに立ち上がっている。

12は，須恵器杯蓋の口縁部片である。

13は，須恵器壺の肩くびれ部付近の破片である。

14は，須恵器皿の底部片である。

15は，弥生土器底部片である。



第73図　南海道推定地第3調査区出土遺物実測図

第21表　南海道推定地第3調査区出土遺物観察表

1	杯蓋(須恵器)			(2.3)	内外面ナデ	灰白 N7/0	灰白 N7/0	微砂粒を含む
2	杯蓋(須恵器)			(2.7)	外面ヘラケズリ、内面ナデ	明青灰 5PB7/1	青灰 5PB6/1	密
3	高杯(須恵器)	16.4		(1.6)		明青灰 5B7/1	明青灰 5B7/1	密
4	椀(須恵器)	15.8		(3.0)	内外面摩滅により不明	褐 7.5YR4/6	褐 10YR4/6	1mm以下の角閃石を含む
5	口縁	28.0		(1.6)	内外面ナデ	灰 N5/0	灰 N5/0	密
6	椀(須恵器)		7.4	(3.1)	内面ナデ、外面に火襷	灰白 N6/0	灰白 N6/0	微砂粒を含む
7	底部		4.2	(2.4)	内外面摩滅により不明	淡黄 2.5Y8/3	灰白 2.5Y8/2	3mm以下の石英長石を含む
8	皿(底部)		7.8	(1.2)	内外面ナデ	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y6/1	密
9	底部		10.4	(3.3)	内外面ナデ	暗青灰 5B4/1	灰白 N8/0	密
10	底部		20.6	(5.2)	内外面ナデ	灰 N5/0	灰白 N7/0	密
11	皿(土師器)	11.6	9.2	1.4	内外面ナデ	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	微砂粒を含む
12	蓋(須恵器)	11.6		(1.2)	内外面ヘラケズリ、内面ナデ	灰 N5/0	灰 N6/0	密
13	蓋(須恵器)			(3.3)	内外面ナデ	灰白 N7/0	灰 N6/0	1mm以下の石英長石を含む
14	皿(須恵器)		9.8	(1.9)	内外面ナデ、外面火襷	灰白 N7/0	灰白 N7/0	密
15	底部		4.4	(1.7)	内外面摩滅により不明	黄褐 10YR5/6	明褐 7.5YR5/6	微砂粒を含む

第３節　　田図北地区の調査

1　調査区の位置

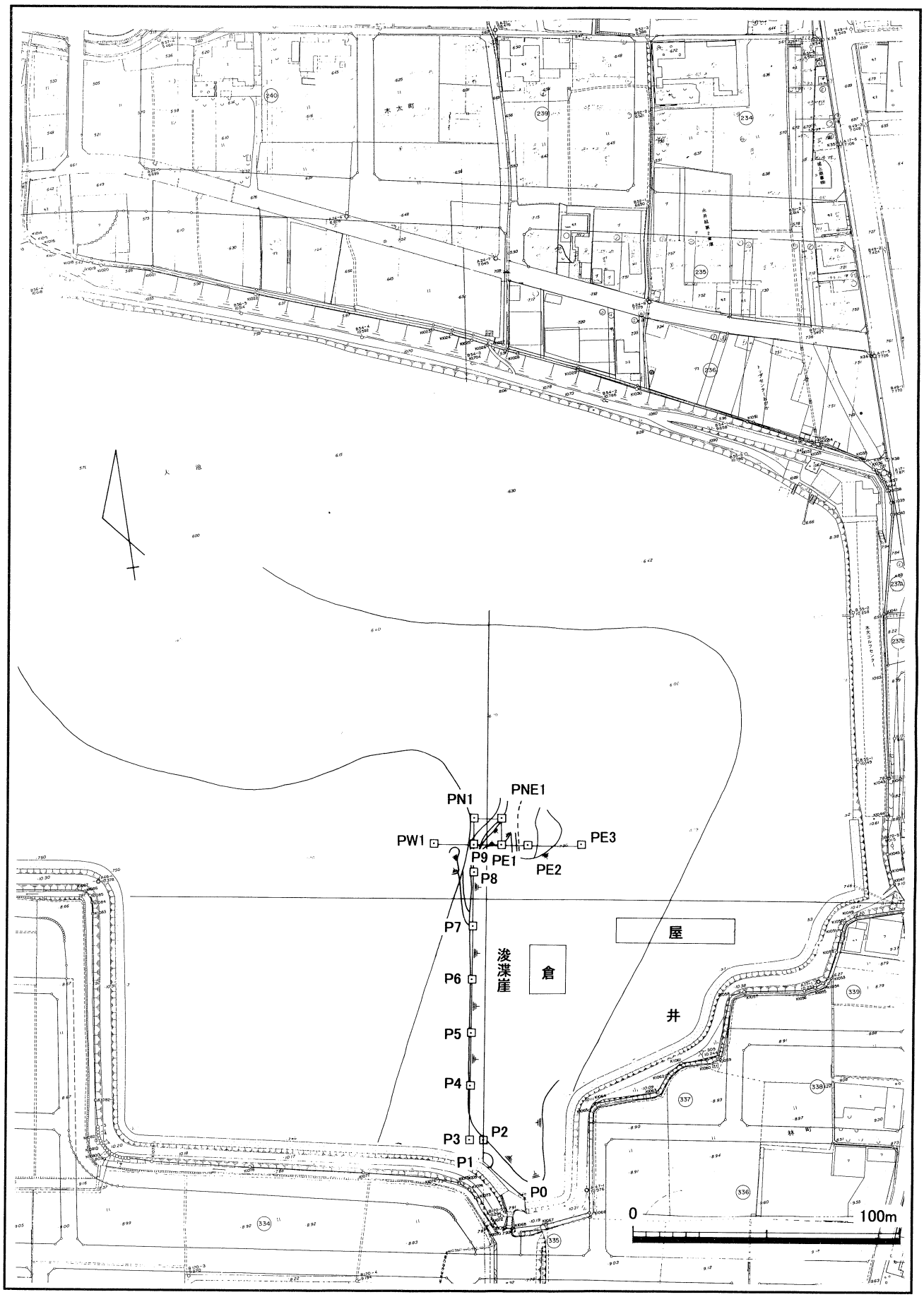
弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地北地区は，高松市木太町南端の通称大池（木太新池）南東半から同池南側（林町域）にかかる一帯と考えられている。高松市教育委員会では，昭和62年度から5ヶ年をかけて比定地確認のための発掘調査を実施してきたが，考古学的な確証を得るまでには至らなかった。この際に集中的に調査区を設定した大池南東部の地点は，条里呼称に従うと山田郡8条12里34坪に相当し，絵図では当該坪南半に「佐布田」と記された旧河道様の地形と「畠」の地目，「直米一石五斗」等の収穫高の記載が，北半には「倉」，「屋」，「井戸」といった荘園施設の建物群とおぼしき記載が見られる。しかし後者については，現在では大池に取り込まれていると考えられており，通常の池水が湛水した状態では調査の手段を講じることができなかった。

ところが，平成9年末から10年の初めにかけて，木太，林，太田，多肥地区にかけて施行が進められている太田第2土地区画整理の事業サイドから大池周辺の放水路および街路の改修のために池水を排出するとの情報が得られたため，平成9年度の発掘調査候補地として検討する対象に加えることとなった。急遽北地区に調査地を振り向けることについては，事業の年次計画を損ねるおそれも考えられたが，池底という土地利用の条件上，現実的な発掘調査の機会は極端に制約されているため今回についてはこれを利用するということで調査の実施が決定した。

発掘調査地点は，大池南東隅の山田郡8条12里34坪に限定して実施する予定であったが，ほぼこの範囲に重なる形で行われている池底の浚渫が予想以上に大規模と考えられ，そのためにヘドロ状の底水の排水が悪く重機等の投入も不可能なことから，当該坪の周辺部で条里遺構の検出を目的とした調査に変更した。すなわち，ほぼ当該坪の西および北辺坪界と一致していると見られる浚渫崖に沿って幅5m程度のトレンチを逆Ｌ字状に設定した。とはいえ，大池池底部分ではどういった理由からか，池底地表面に弥生から古墳時代の遺構面がほとんど露出した状態で存在しており，精査をかけるだけで遺構の平面プランが確認できた。その一方で，前記の浚渫とは別に昭和30～40年代にかけて盛んに行われたという瓦粘土の採掘による攪乱坑が至る所に見られ，34坪周辺の可掘範囲は今回の設定部分にほぼ限られていたというのが実状であった。

一方，池底浚渫によって形成された崖の内部はヘドロの堆積によって遺構面の存否の状況は表面的観察では判断できなかったため，調査工程の中で一旦はヘドロ層の除去を試みた。しかし，地面が重機の重量を支え得るに十分な強度を持っていないことから，人力作業に頼ることとなり，十分な成果を上げることができなかった。

調査地点の位置決めについては，大池取水口水門のコンクリート基礎の北東角を基点（Ｐ０）として，これから北西方向20mの堤体護岸ブロック基礎部にＰ１，Ｐ１から北8mの地点にＰ２を設定した。Ｐ０－Ｐ１－Ｐ２によって作られる角度は130°を測る。さらにＰ２から西90°方向5mにＰ３，Ｐ３から北90°方向に20m間隔で5本の基準点（Ｐ４～Ｐ８）を一列に配置し，北端Ｐ８から西，北，東の各方向に90°単位で枝線を張りそれぞれＰＷ，ＰＮ，ＰＥとしてポイント番号を付した。西へはＰ８から15m地点にＰＷ１，北へは同じく10m地点にＰＮ１，東へは同じくＰ８から近い方から順に10m，10m，20mの間隔でＰＥ１～ＰＥ３の各点である。またＰ８，ＰＮ１，ＰＥ１の3点を用いて成立する正方形の第4点にＰＮＥ１を置いた。なお，基準標高は近傍の工事用レベルから引用し，基本的にはレベル眼高8.00mを標準設定としてこれから数値を読み下した。



第74図　田図北地区調査区設定図

2　基本土層

北側浚渫崖に沿った東西延長31.1mの側溝北側壁面を基本土層とした。

基本土層断面の西端は山田郡8条12里34坪の西北コーナーにほぼ相当すると考えられる。東側は同坪北界の中程を中心として20～30mの幅で底水排水のための素掘りの水路が設けられており，ヘドロが厚く堆積していたため以東への側溝延長は不可能であった。

基本層序は，第6層褐色砂質シルトまたは第6層の下層に位置する第22層灰色粘土を地山層（最終遺構面）とし，この上面から，側溝西端に黒色シルトを埋土の主体とする自然河川（SR02），側溝中程から東寄りに灰色から灰黄色のシルトを埋土の主体とする河道状の落ち込み(SR01)が掘り込まれ，そのほかに溝状遺構2，水田畦畔なども確認した。

SR02は，検出幅4.5m，検出面からの深さ1mを測る。埋土は第25層から第33層が相当し，黒色から黒褐色のシルトまたは砂質を呈する。これらの層は10～30cmの厚さで互層に堆積しており，河川性のものと考えられる。埋土中に遺物は混在しないものの，弥生後期の遺物を濃密に包含するSD02が，基本土層断面の北8mの地点でSR02の肩を僅かに切っていることから弥生後期以前の自然河川と判断できる。

一方SR01は，第22層灰色粘土上面から掘り込む検出幅9.5m，深さ1mの落ち込みである。埋土は第8層黄灰色シルトから第20層灰色細砂までの灰黄色から黒褐色系のシルト層が該当し，各層10cm前後の層厚で布状の堆積を見せる。部分的に拳大の礫を集中して包含する箇所があるものの，遺物の包含は皆無に近い。しかしながら，調査終了直前に表層近くで瓦片，耐火煉瓦片を確認したことにより現代の堆積と認められた。おそらくは，通水路の浚渫または瓦粘土採掘坑にたまったヘドロが形成した堆積かと推測される。なお，SD01についても同様な埋土で同時期の所産とすることができる。

3　遺構と遺物

前述のとおり自然河川（または河川状の掘削跡）2，溝状遺構2に加えて水田畦畔1，その他粘土採掘坑数ヶ所を検出した。

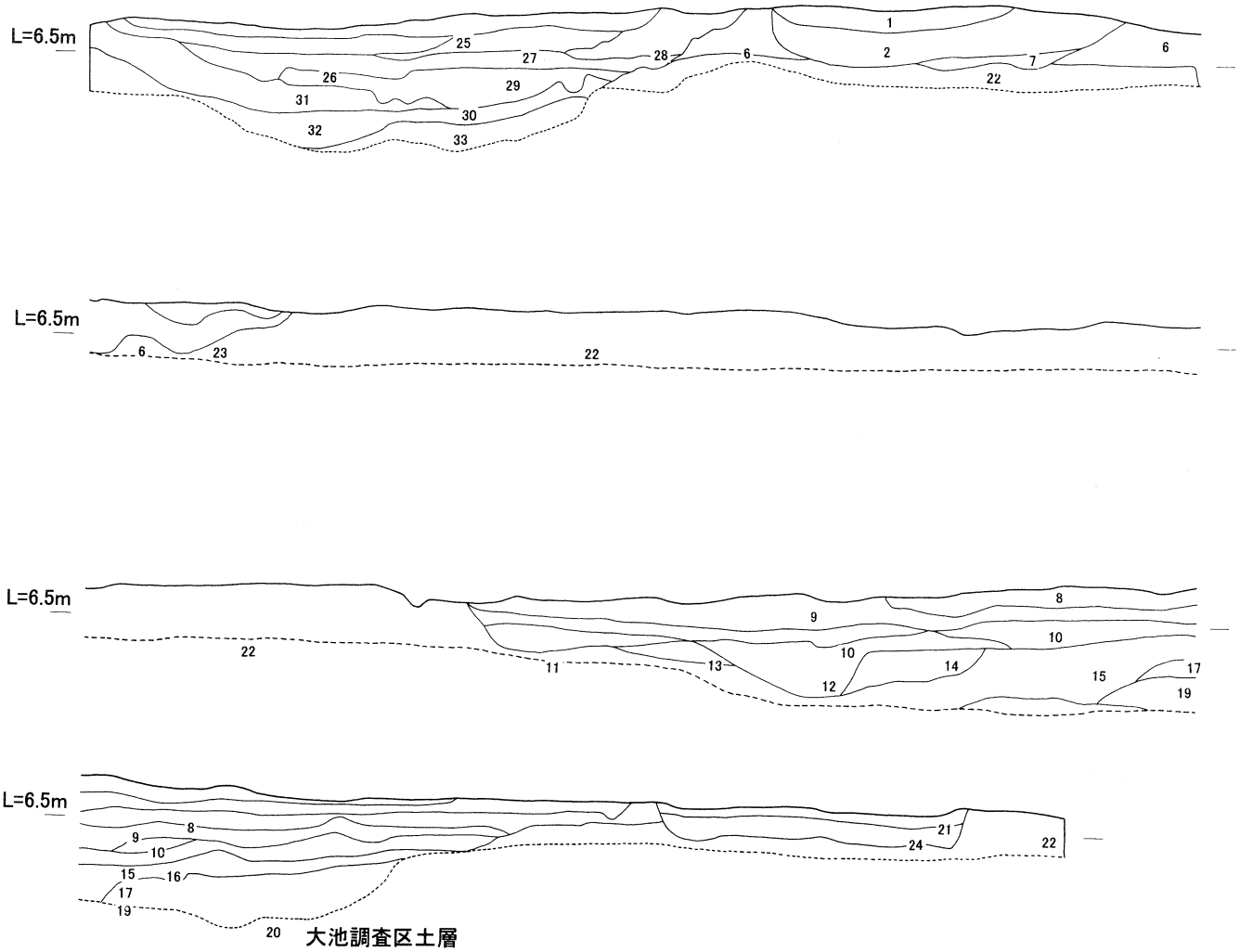
ＳＤ０２

浚渫崖の北西コーナーからＳ字状に蛇行しながら北西に延びる弥生時代後期初頭の溝状遺構である。崖線以南は浚渫の際に大部分が削平を受けている。検出幅約2.5m，深さ約60cmを測り，延長は約10m分を検出した。遺構の東側は瓦粘土採掘坑によって遺構肩付近まで大きく攪乱を受けており，西側は3mまででSR02の東肩に達するため周辺部に残余の遺構は確認していない。

黒色の細砂からシルト質の埋土（基本土層第１～５層，第７層）は，大きくは1，2層からなる上層と第3層以下の下層に分類でき，双方に弥生後期を主体とする土器類が濃密に包含されていた。総量は遺物コンテナ27箱分に達する。上下層の土器群の間には大きな時期差はないと考えられ，いずれも弥生時代後期を中心とするものであろう。また，これらとは別にSD02遺構検出面付近で古墳時代後期の須恵器片および土師器片10数片を表面採集の状態で確認している。土器表面の摩耗等も進行していないことから出土地付近の包含遺物と考えられ，周辺に当該時期の遺構が存在している(していた)可能性が指摘できるが，今回の調査では当該時期の遺構は確認できなかった。

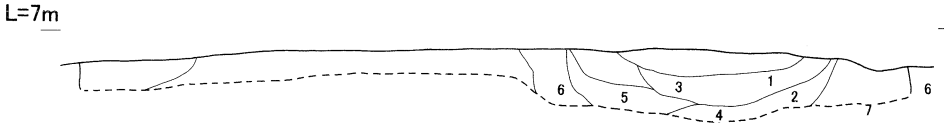
水田畦畔

東側浚渫崖に沿って確認した。南は基準杭P7北側で東に振って浚渫崖内に逃げ，北はP8の西1.5m西で粘土採掘坑によって切断されており，検出延長9.5mを測る。検出幅は50cm前後で北半では畦畔が二股に分岐しているために幅20～40cmとやや細くなっている。立ち上がりは西側では6cm前後である



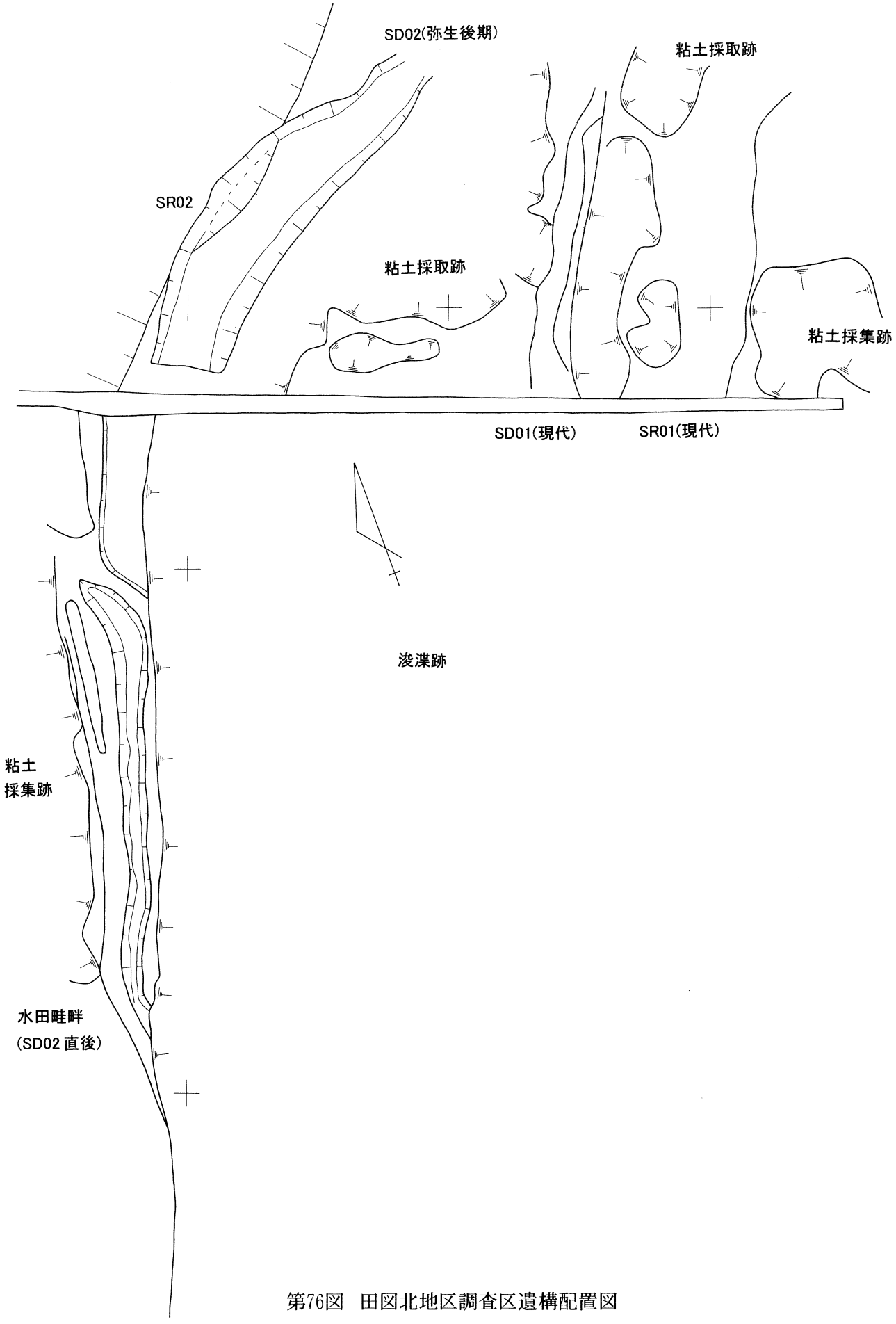
大池調査区土層

1	黒色砂質シルト	
2	黒色褐色細砂	
3	黒色褐色シルト	
4	黒色シルト	
5	黒褐色砂質シルト	
6	褐色砂質シルト	
7	黒色褐色粗砂	
8	黄灰色シルト	
9	暗灰黄色シルト	Hue2.5Y4/2
10	黄灰色シルト	Hue2.5Y4/1
11	黒褐色粘質シルト	Hue2.5Y3/1
12	灰色砂質シルト	Hue5Y4/1
13	灰色粘質シルト	Hue7.5Y4/1
14	黒褐色細砂	Hue7.5YR3/1
15	灰色中砂	Hue7.5Y4/1
16	暗灰黄色細砂	Hue2.5Y4/2
17	灰黄褐色砂質シルト	Hue10YR4/2
18	灰色細砂	Hue7.5Y4/1
19	黄灰色シルト	Hue2.5Y4/1
20	灰色細砂	Hue5Y4/1
21	褐灰色シルト質極細砂	Hue10YR4/1
22	灰色粘土	Hue7.5Y5/1
23	褐灰色シルト質極細砂	Hue10YR4/1
24	黒色粘土シルト	Hue N 2/1
25	黒色シルト	
26	黒色シルト	
27	黒褐色中砂	
28	黒褐色シルト	
29	黒色砂混シルト	
30	黒褐色シルト	
31	黒色砂混シルト	
32	オリーブ黒粗砂	
33	オリーブ黒粗砂	

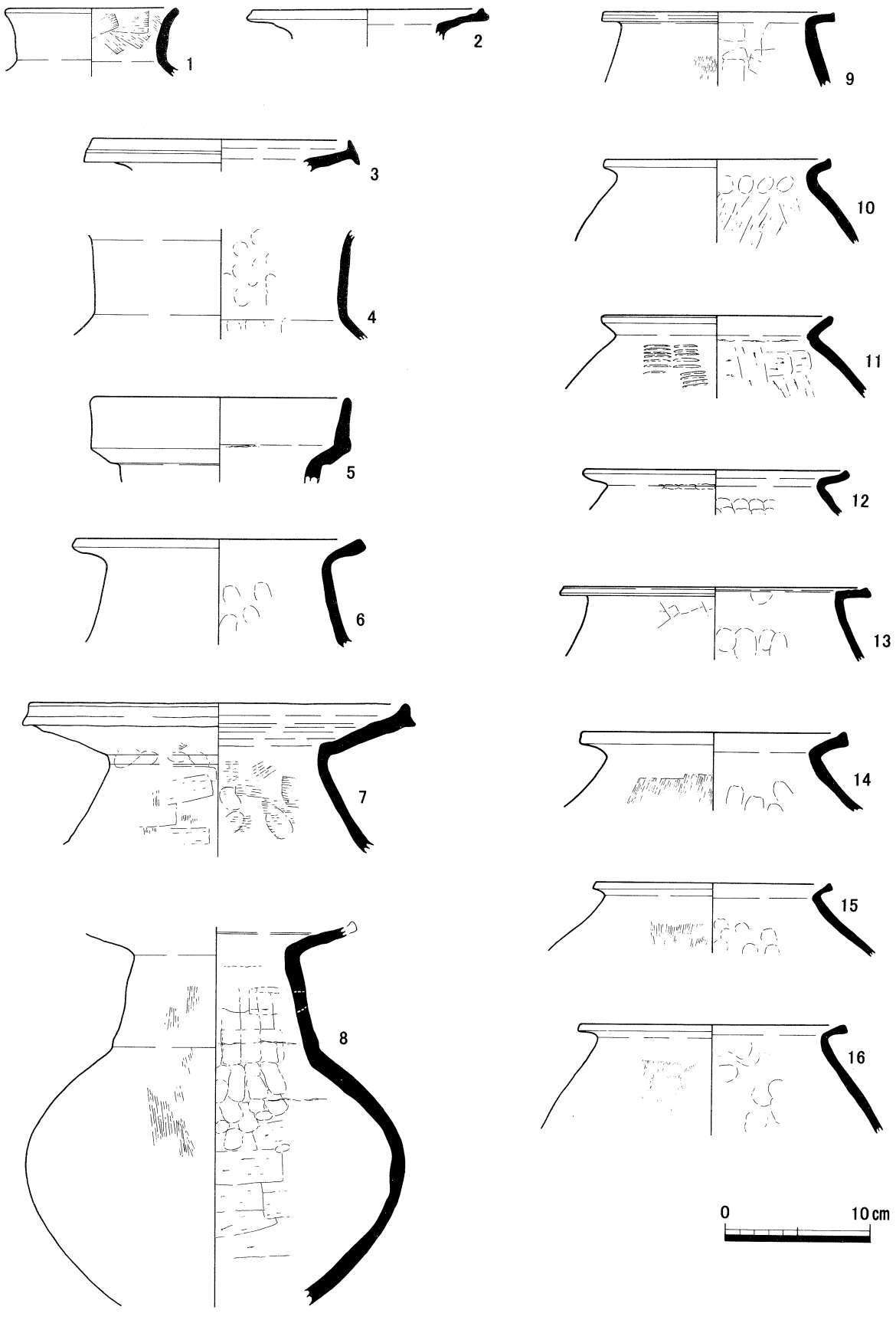


1	黒色砂質シルト	Hue7.5YR2/1	SD02 上層埋土	
2	黒褐色細砂	Hue10YR3/1		
3	黒褐色シルト	Hue7.5Y3/1		
4	黒色シルト	Hue7.5Y2/1	(中砂含む)	SD02 下層埋土
5	黒褐色砂質シルト	Hue7.5YR3/1		
6	褐色砂質シルト	Hue10YR2/6	(地山)	
7	黒褐色粗砂	Hue10YR3/1		SD02 下層埋土

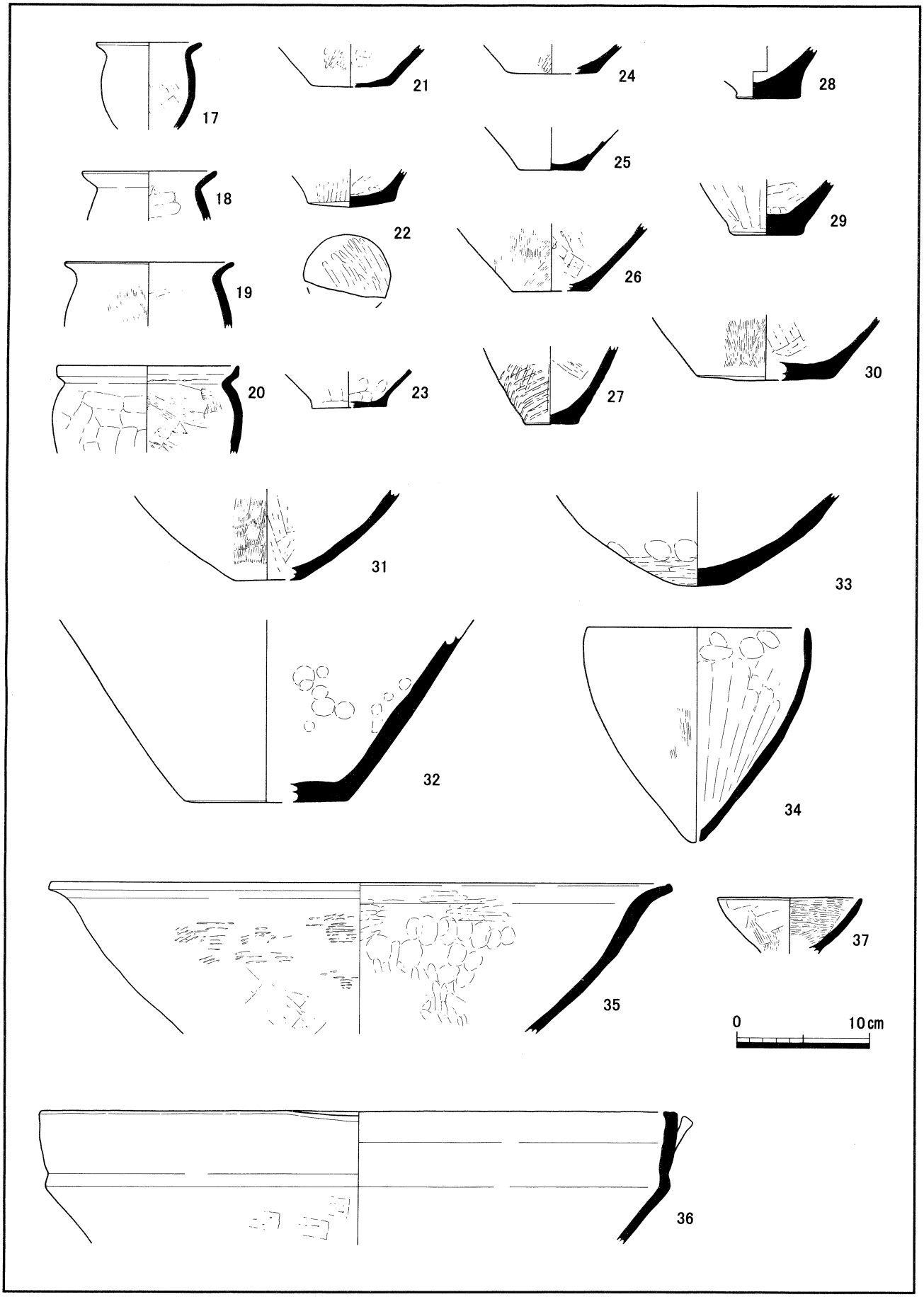
第75図　田図北地区調査区基本土層図



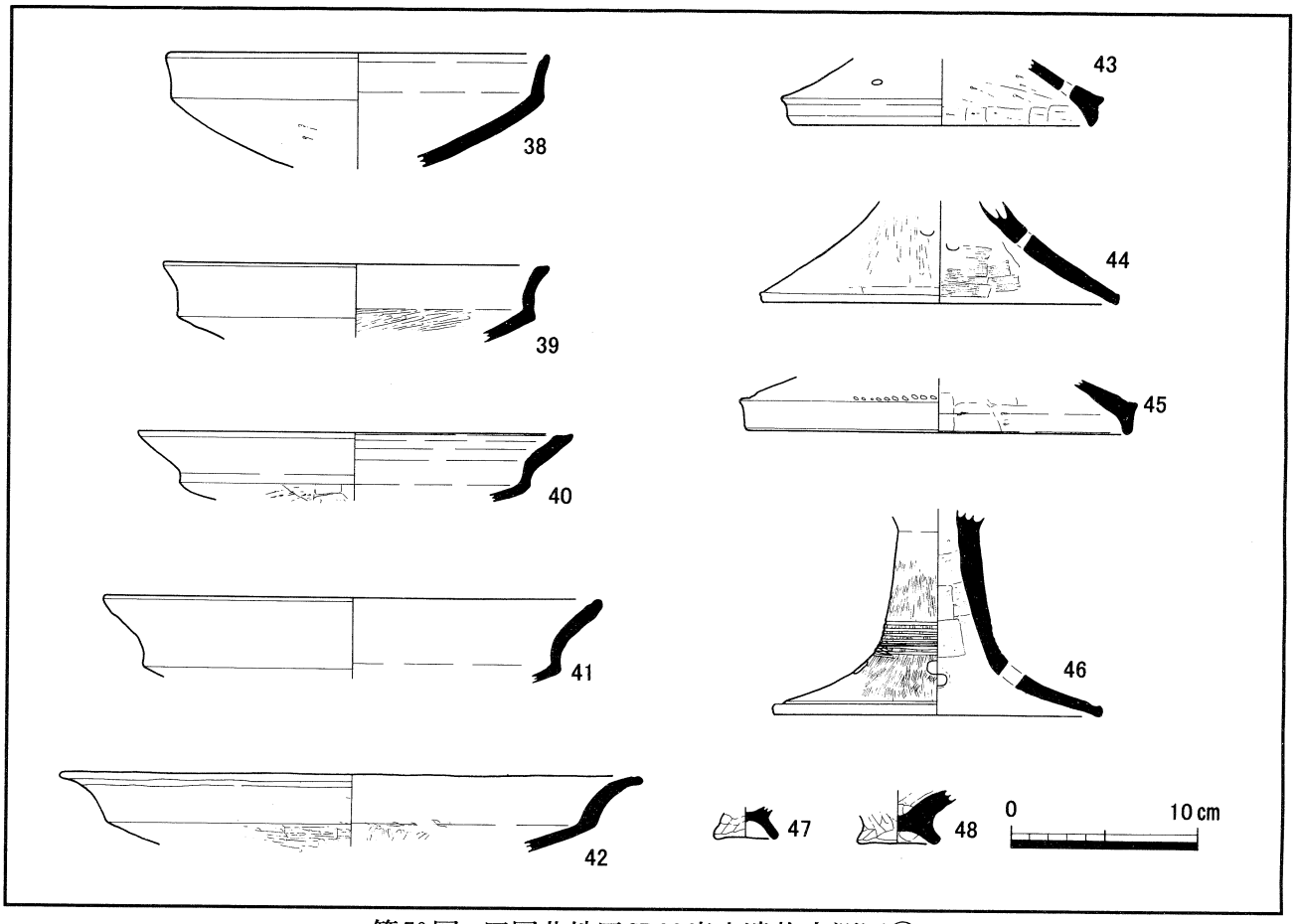
第76図　田図北地区調査区遺構配置図



第77図　田図北地区SD02出土遺物実測図①



第78図　田図北地区SD02出土遺物実測図②



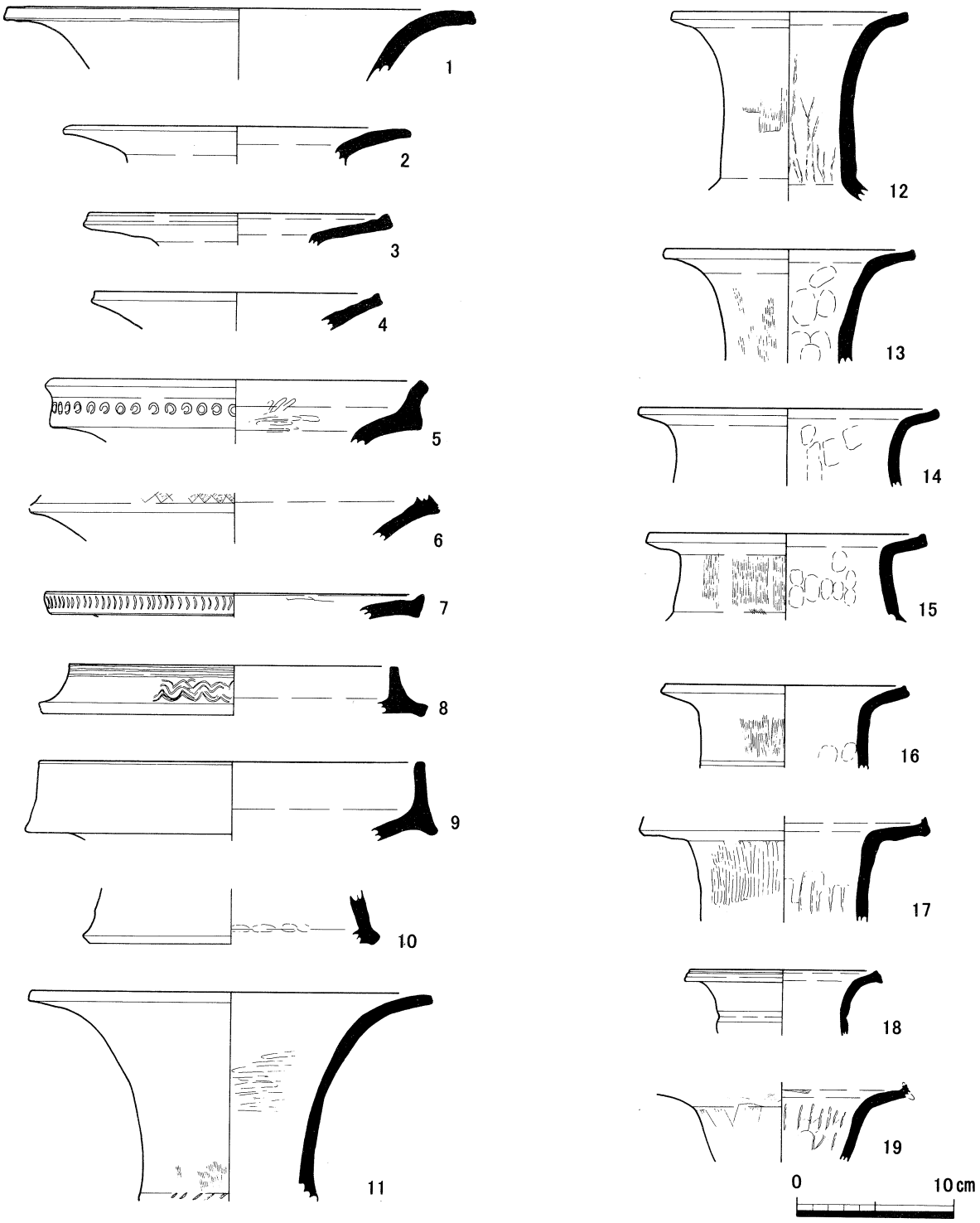
第79図　田図北地区SD02出土遺物実測図③

第22表-1　田図北地区SD02出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
1	弥生土器　壷	11.4		(4.7)	口縁部外面ナデ 口縁部内面ナデ、ハケメ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	4mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
2	〃　〃	16.6		(2.0)	口縁部外面ナデ 口縁部内面ナデ	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
3	〃　〃	17.6		(2.2)	口縁部外面ナデ 口縁部内面ナデ	橙 7.5YR7/6	灰白 10YR8/2	3mm 以下の石英、長石を含む
4	〃　〃			(7.5)	頸部外面摩滅のため不明 頸部内面ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/3	5mm 以下の石英、長石、角閃石を多く含む
5	古式土師器　壷	17.4		(5.8)	口縁部外面ナデ、接合痕 口縁部内面ナデ	灰白 2.5Y8/2	灰白 10YR8/2	密
6	弥生土器　〃	19.4		(7.3)	頸部外面ナデ 頸部内面指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄 2.5Y7/2	1～2mm 以下の石英、長石、雲母を含む
7	〃　〃	25.6		(10.4)	頸部外面ヘラ削り、ハケメ、指頭圧痕 頸部内面ハケメ、指頭圧痕	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	5mm 以下の石英、長石を少量含む
8	〃　〃	17.4		(26.0)	頸部外面ハケメ、体部外面ハケメ 頸部内面ナデ、指頭圧痕、接合痕 体部内面上半指頭圧痕、下半ヘラ削り	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
9	弥生土器　甕	15.7		(5.05)	頸部外面ナデ、ヘラミガキ 頸部内面ナデ	淡黄 2.5Y8/3	灰白 2.5Y8/2	3mm 以下の長石、角閃石を含む
10	〃　〃	15.6		(5.7)	体部外面ナデ 体部内面ナデ、指頭圧痕、ヘラケズリ	にぶい黄橙 10YR7/4	黒 7.5YR2/1	1～5mm 以下の石英、長石を含む
11	〃　〃	13.4		(5.6)	体部外面タタキメ 体部内面ヘラケズリ、接合痕	にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3	5mm 以下の石英、長石を含む
12	〃　〃	17.7		(3.0)	頸部外面指頭圧痕 体部内面指頭圧痕	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
13	〃　〃	20.6		(5.0)	体部外面ナデ 体部内面ナデ、指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR6/3	灰黄褐 10YR6/2	5mm 以下の長石、1mm 以下の角閃石、雲母を含む
14	弥生土器　甕	18.0		(5.4)	体部外面ナデ、ハケメ 体部内面ナデ、指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR7/3	1～2mm の石英、長石を含む
15	〃　〃	16.0		(5.0)	体部外面ナデ、ハケメ 体部内面ナデ、指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	1～2mm 以下の石英、長石、雲母を含む

第22表-1　田図北地区SD02出土遺物観察表

16	弥生土器　甕	18		(7.8)	体部外面ナデ、ハケメ 体部内面ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄 2.5Y7/3	微～粗砂、石英、長石の砂粒を多く含む
17	〃　〃	7.8		(6.4)	体部外面ナデ 体部内面ナデ、ヘラケズリ	灰白 2.5Y8/2	にぶい黄橙 10YR7/2	1～3mm 以下の石英、長石を含む
18	〃　〃	9.8		(3.65)	体部外面ナデ 体部内面ナデ	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	2mm 以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む
19	〃　〃	12.4		(4.9)	体部外面ナデ、ハケメ 体部内面ハケメ	浅黄橙 10YR8/3	灰白 2.5Y8/2	1mm 以下の石英、長石を含む
20	〃　〃	13.3		(6.5)	体部外面ナデ 体部内面板ナデ、ヘラケズリ 口縁端部内面接合痕	オリーブ黒 5Y3/1	灰 5Y4/1	3mm 以下の石英、長石を含む
21	弥生土器　底部		5.9	(3.1)	底部外面ヘラミガキ 底部内面ヘラケズリ	黒 10YR2/1	灰黄褐 10YR6/2	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
22	〃　〃		6.5	(2.8)	底部外面ヘラミガキ 底部底面ヘラミガキ 底部内面ナデ、ヘラケズリ	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	1mm 以下の長石、雲母を含む
23	〃　〃		5.6	(2.7)	底部外面板ナデ 底部内面指頭圧痕	にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR6/2	1mm 以下の長石、角閃石を含む
24	〃　〃		6.8	(2.2)	底部外面ヘラミガキ	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
25	〃　〃		4.8	(3.1)	底部外面ナデ	黒 10YR2/1	にぶい褐 7.5YR5/4	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
26	〃　〃		5.8	(5.1)	底部外面ハケメ、ナデ 底部内面板ケズリ、ナデ	にぶい黄 2.5Y6/3	淡黄 2.5Y8/3	5mm 以下の石英、長石を含む
27	弥生土器　底部		3.8	(5.8)	底部外面タタキメ 底部内面ナデ、ヘラケズリ、ヘラミガキ	褐灰 10YR5/1	浅黄橙 10YR8/4	6mm 以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む
28	〃　〃		4.6	(3.9)	底部外面ナデ 底部内面ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
29	〃　〃		4.8	(4.15)	底部外面板ナデ、ハケメ 底部内面板ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/2	黄灰 2.5Y5/1	3mm 以下の長石を含む
30	〃　〃		10.0	(4.6)	底部外面ハケメ 底部内面ヘラケズリ	暗灰黄 2.5Y5/2	にぶい黄橙 10YR6/3	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
31	〃　〃		4.8	(6.4)	底部外面ハケメ 底部内面ヘラケズリ	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR6/3	3mm 以下の石英、長石を含む
32	〃　〃		12	(13.5)	底部外面ナデ 底部内面ナデ、指頭圧痕	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	5mm 以下の石英、長石、角閃石を含む 7mm の小石を含む
33	〃　〃		3.5	(6.8)	底部外面指頭圧痕、ヘラケズリ、接合痕	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	1～5mm 以下の石英、長石を多量に含む
34	〃　甑	16.4		15.9	体部外面ハケメ 口縁部内面指頭圧痕 体部内面ナデ、ミガキ	灰白 2.5Y8/2	灰 N6/1	1～5mm 以下の石英、長石を多量に含む
35	〃　鉢	46.0		(11.1)	体部外面ナデ、タタキ、ヘラケズリ 口縁部～体部内面ヘラミガキ 体部内面ナデ、指頭圧痕	灰白 2.5Y8/2	灰白 10YR8/2	3mm 以下の石英、長石、雲母を含む
36	〃　〃	47.0		(9.8)	体部外面ナデ、ヘラケズリ 口縁～体部内面ナデ	黄灰 2.5Y6/1	黄灰 2.5Y6/1	1～2mm 以下の石英、長石、雲母を含む
37	〃　〃	10.8		(4.1)	口縁～体部外面ナデ、ハケメ 口縁～体部内面ハケメ	灰 5Y4/1	黄灰 2.5Y5/1	1mm 以下の長石、角閃石を含む
38	〃　高杯	20.0		(5.95)	杯部外面ナデ、ケズリ 杯部内面ナデ	黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 1YR6/3	4mm 以下の石英、長石、雲母を含む
39	〃　〃	20.4		(4.1)	杯部外面ナデ 杯部内面ナデ、ヘラミガキ	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	1～2mm 以下の石英、長石を含む
40	〃　〃	23.0		(3.55)	杯部外面ナデ、ヘラケズリ 口縁～杯部内面ナデ	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	3mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
41	〃　〃	26.0		(4.4)	口縁部内外面ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	1～3mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
42	〃　〃	30.6		(3.8)	口縁端部内面凹線１条 杯部外面ナデ、ヘラケズリのちヘラミガキ 杯部内面ナデ、ヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/3	5mm 以下の石英、長石を含む
43	〃　〃		15.8	(2.5)	脚部内面ヘラケズリ、指頭圧痕 円孔３個（２個残存）	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄褐 10YR6/4	4mm 以下の石英、長石を含む
44	〃　〃		18.6	(5.4)	脚裾部外面ナデ 脚裾部外面凹線１条 脚裾部内面ナデ、ハケメ	褐 7.5YR4/4	灰白 10YR8/2	石英、長石の微砂を含む
45	〃　〃		20.0	(2.85)	脚裾部外面ナデ、押圧文 脚裾部内面ヘラケズリ	浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4	4mm 以下の石英、長石を含む
46	〃　〃		17.4	(11.0)	脚部外面ハケメ、沈線７条 脚部内面ナデ、ヘラケズリ 脚裾部円形透孔４ヶ所	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	微～細砂 石英、長石、角閃石を含む
47	〃　製塩土器		3.5	(1.8)	脚部外面ナデ、ヘラケズリ 脚部内面ナデ	灰褐 7.5YR6/2	にぶい褐 7.5YR6/3	1mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
48	〃　〃		4.2	(2.8)	脚部外面指頭圧痕 脚部内面ナデ、指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR6/3	黄褐 10YR6/2	7mm 以下の石英、長石を含む



第80図　田図北地区SD02下層出土遺物実測図①

が，東側は浅い溝状遺構と抱き合わせになっているため最大で15cm前後と西側の2倍以上の高低差を示している。

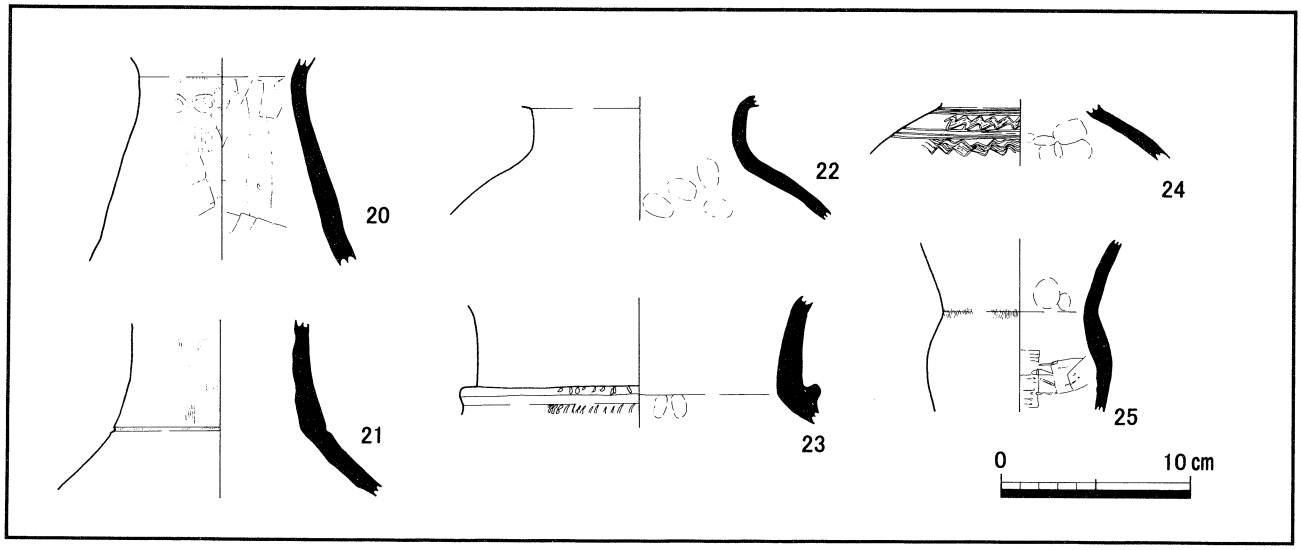
畦畔を形成する水田層は基本土層の第25層黒色シルト層と考えられ，SR02埋積後に営まれた水田であることがわかる。畦畔上面には洪水性と見られる褐色細砂層が薄くかぶっており，畦畔東側の溝状遺構も同様の砂で埋積されていた。褐色砂層の上面で須恵器片等の表採が見られたものの，基本土層断面の北側で第25層を含むSR02の埋土がSD02に切られていることから弥生時代後期以前の水田と考えられる。

ＳＤ０１，ＳＲ０１

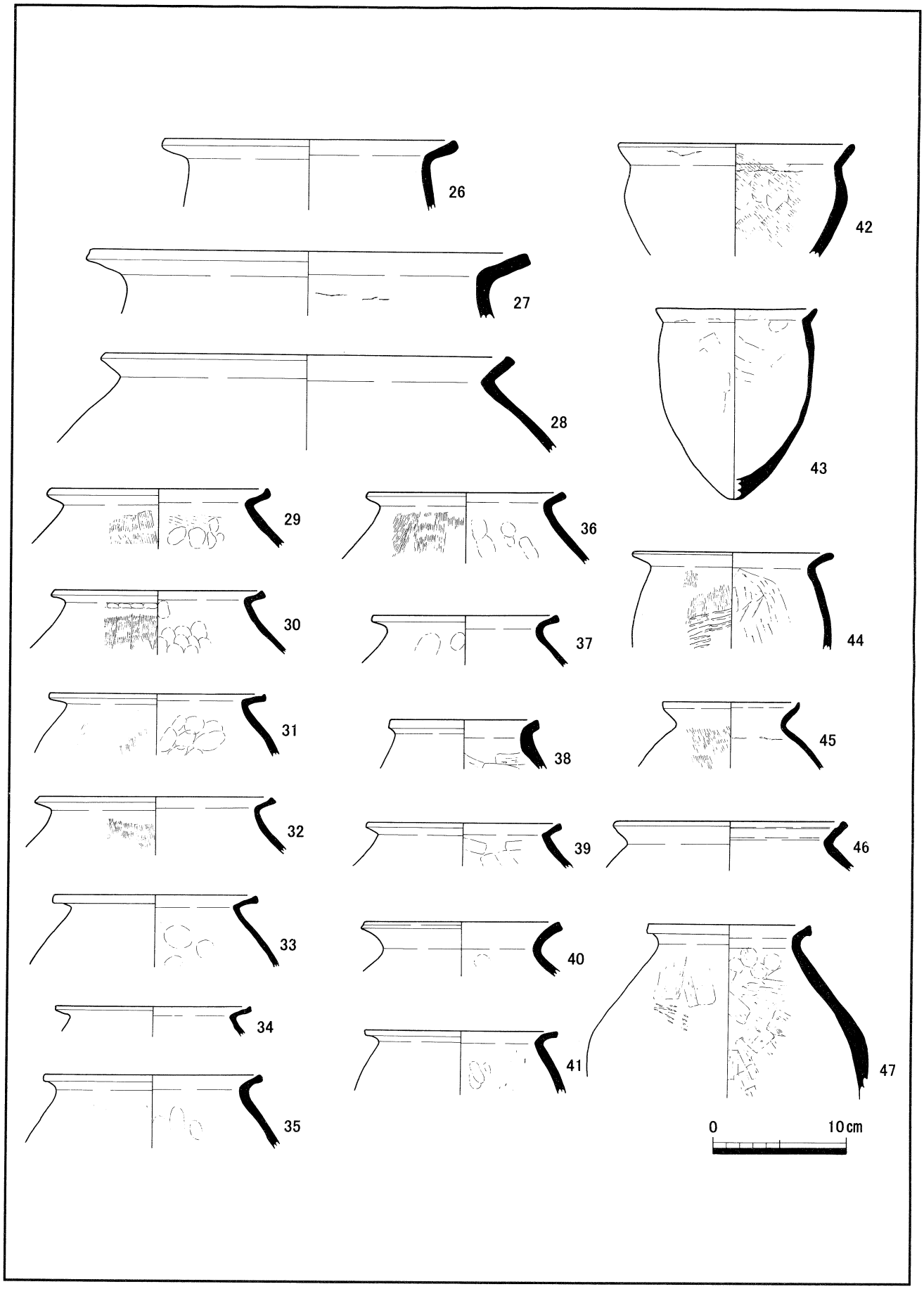
基本土層断面の中程から東半にかかって南北流する遺構である。SD01が西側，SR01が東側で双方隣接しており，北をやや東に振って南北流する。SD01は検出幅約50cm，深さ15cm，SR01は検出幅9.5m，深さ1mを測り，検出延長はいずれも6.5m前後である。SR01の西肩は粘土採掘坑による攪乱でプランが不明瞭になっている。

SD01の埋土は暗灰褐色シルト層の単層，SR01も同系統の13層の埋土によって埋積しており，同時代の埋没とすることができる。いずれ土質からもそう古い堆積とは見られず，それでも北方やや東に振って延伸方向を示すことからの条里界線に関わると遺構の近世以降の埋没も可能性に含めて調査を進めたが，最終段階で遺構検出面付近の層位から瓦片，耐火煉瓦等の検出を見たため，現代のものと判断した。それでも調査地点周辺に点在する瓦粘土採掘坑には遺構の一部を切られていることから，昭和20年代以前のものではあろう。

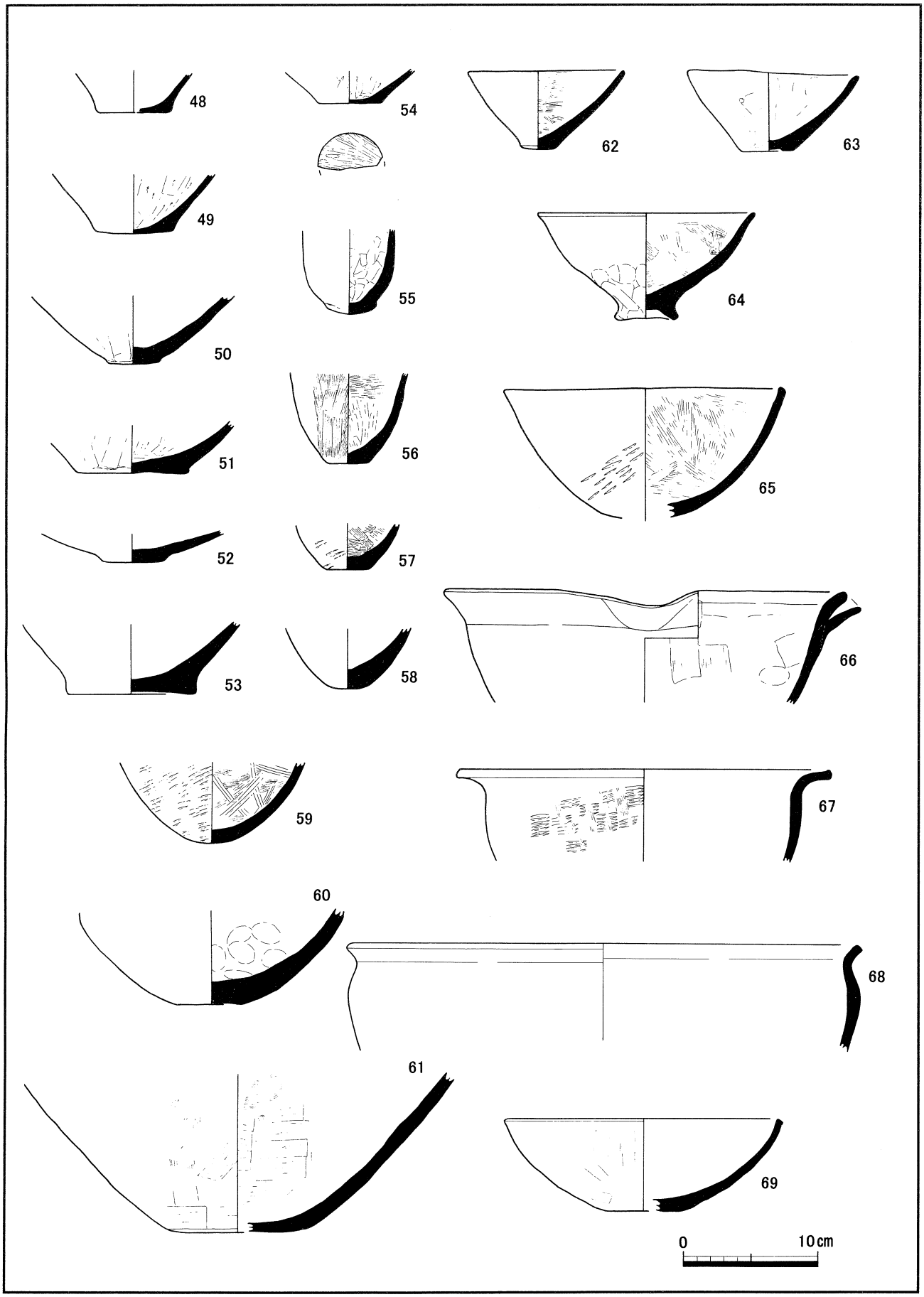
これらの他，調査地周辺には瓦粘土の採取坑が虫食い状に掘られており，遺構の検出に困難をともなった。この瓦粘土採取は，昭和30年代から40年代半ばにかけて行われたとのことで，当時業者として粘土採取に関わった地元の方も確認できたが，今回の報告とりまとめまでに改めての聞き取り調査にまで至らなかった。また，今回の調査では池底の地表付近に弥生時代前後の遺構面が殆ど露出して確認され，以降の時代の地層が見られないことが特徴として挙げられる。一方，大池の築造は古代まで遡ることはないであろうから，古代から大池築造までの間に相当する地層の不在については改めて検討する必要があるが，瓦粘土採取の際の表土層の除去なども原因のひとつとして考えられ，今後事実関係の確認が必要と考えられる。



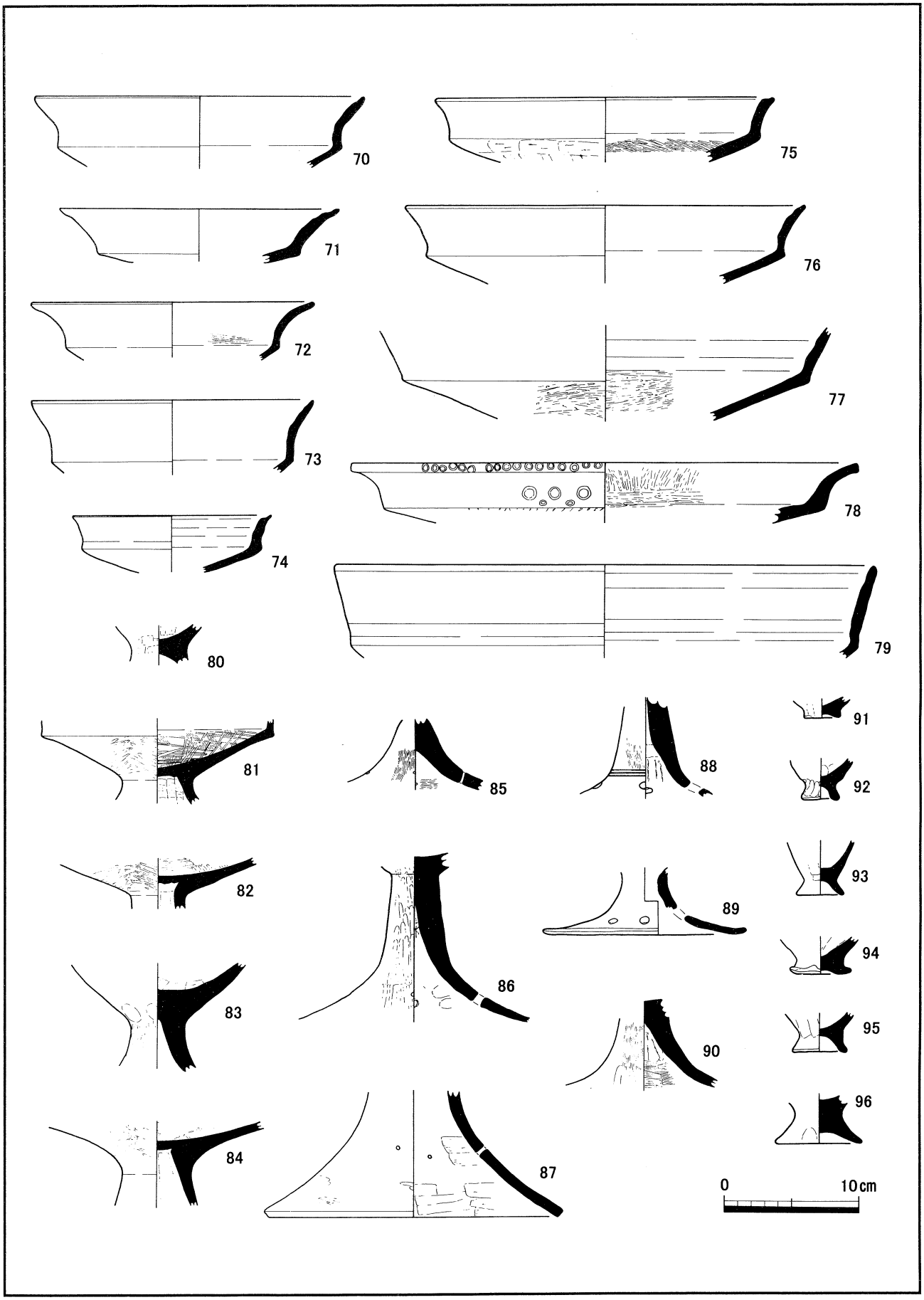
第81図　田図北地区SD02下層出土遺物実測図②



第82図　田図北地区SD02下層出土遺物実測図③



第83図　田図北地区SD02下層出土遺物実測図④



第84図　田図北地区SD02下層出土遺物実測図⑤

第23表-1　田図北地区SD02下層出土遺物観察表

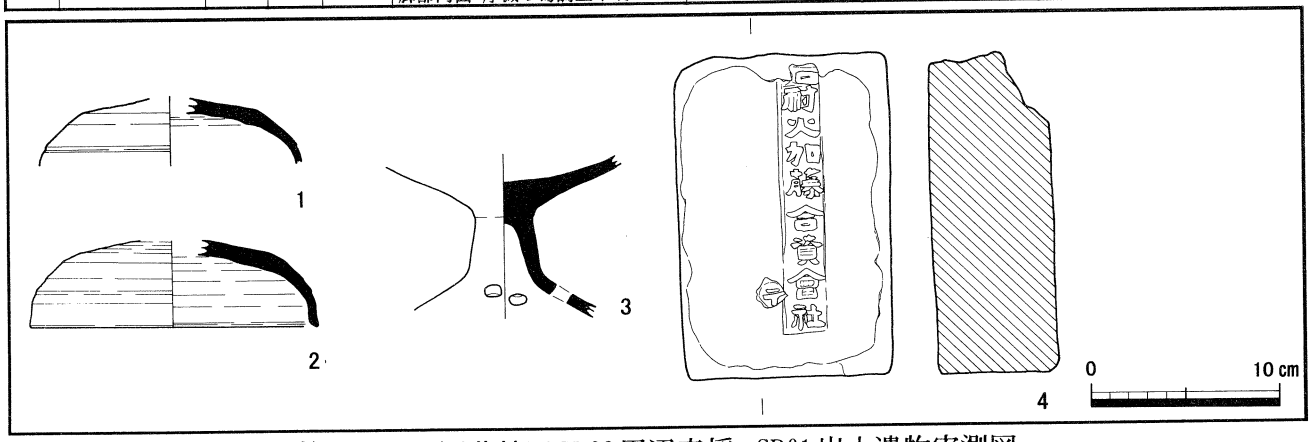
番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土
1	弥生土器　壷	29.6		(4.5)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y6/2	7mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
2	〃　〃	22.0		(2.35)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	5mm 以下の長石、石英、を含む
3	〃　〃	19.0		(2.0)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	3mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
4	〃　〃	18.0		(2.3)	口縁端部 凹線１条	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	1mm 以下の石英、長石、雲母を含む
5	〃　〃	23.2		(4.05)	口縁端部 竹智文 口縁部外面 ﾅﾃﾞ 口縁部内面 ヘラミガキ ヘラケズリ	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	5mm 以下の石英、長石を含む
6	〃　〃			(3.0)	口縁端部 変形鉛歯文 口縁部外面 ﾖｺﾅﾃﾞ 口縁部内面 ﾖｺﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/2	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
7	〃　〃	23.9		(1.55)	口縁端部 刺突文 口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR5/2	3mm 以下の長石、角閃石雲母を含む
8	〃　〃	20.8		(3.1)	口縁端部 沈線５本 波状文 口縁部外面 ﾅﾃﾞ 口縁部内面 ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
9	〃　〃	24.4		(5.0)	口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	2mm 以下の石英、長石を含む
10	〃　〃			(3.5)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4	4mm 以下の石英、長石をやや多く含む
11	〃　〃	25.2		(13.2)	頸部外面 ハケ原体による押圧文 頸部外面 ハケメ 頸部内面 ヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	1mm 以下の石英、長石を含む
12	〃　〃	14.8		(11.9)	頸部外面 ハケメ 頸部内面 シボリ目 頸部外面 ナデ 頸部内面 ナデ	浅黄 2.5Y8/3	浅黄 2.5Y8/3	4mm 以下の長石、石英を含む
13	〃　〃	15.6		(7.2)	頸部外面 ハケメ 頸部内面 指頭圧痕	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	5mm 以下の石英、長石を含む
14	弥生土器　壷	18.6		(4.8)	口縁部内面 指頭圧痕 口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
15	〃　〃	17.4		(5.6)	口縁部外面 ハケメ 口縁部内面 指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm 以下の長石、石英、角閃石を含む
16	〃　〃	15.2		(5.3)	口縁部外面 ハケメ 口縁部内面 指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	1mm 以下の長石、石英、雲母を含む
17	〃　〃	17.7		(6.6)	口縁部外面 ヘラミガキ 口縁部内面 シボリ目	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	2mm 以下の長石、石英を含む
18	〃　〃	11.8		(4.1)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/6	1mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
19	〃　〃	15.7		(4.75)	口縁部外面 ハケメ 口縁部内面 シボリ目 口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	浅黄 2.5Y7/2	浅黄 2.5Y7/2	2mm 以下の長石、石英を含む
20	〃　〃			(10.95)	頸部外面 ハケメ 頸部内面 ヘラケズリ 頸部外面 ナデ 頸部内面 ナデ	浅黄 2.5Y7/3	浅黄 2.5Y7/3	2mm 以下の長石、石英、角閃石を含む
21	〃　〃	16.4		(9.25)	頸部外面 ハケメ	灰白 2.5YR8/2	灰白 2.5Y8/2	5mm 以下の長石、石英、雲母を含む
22	〃　〃			(6.5)	体部内面 指頭圧痕 体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	黄灰 2.5Y6/1	灰黄 2.5Y6/2	1～2mm 以下の石英、長石を含む
23	〃　〃			(6.7)	頸部外面 刻目文 頸部外面 ナデ 頸部内面 ナデ	にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 10YR5/1	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
24	〃　〃			(3.0)	体部外面 櫛描直線文４条２回 〃　〃 波状文４条２回 体部外面 摩滅の為調整不明 体部内面 指頭圧痕	にぶい橙 7.5YR6/4	黒褐 10YR3/1	1mm 以下の長石、角閃石を含む
25	〃　〃			(9.0)	頸部内面 指頭圧痕 体部内面 ヘラケズリ 頸部外面 ハケメ 体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	4mm 以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む
26	弥生土器　甕	21.6		(5.2)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/2	2mm 以下の長石、角閃石を含む
27	〃　〃	32.2		(4.8)	口縁部外面 接合痕 口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄 2.5Y6/3	浅黄 2.5Y7/3	8mm 以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む
28	〃　〃	30.0		(7.1)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	浅黄 2.5Y8/4	4mm 以下の石英、長石を多量に含む
29	〃　〃	16.2		(4.5)	体部外面 ハケメ 体部内面 指頭圧痕 体部外面 ヨコナデ 体部内面 ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
30	〃　〃	15.4		(4.8)	口縁部外面 指頭圧痕 体部外面 ハケメ 口縁部内面 ナデ 体部内面 指頭圧痕	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
31	〃　〃	16.0		(4.65)	体部外面 ハケメ 体部内面 指頭圧痕	にぶい黄褐 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR6/4	4mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
32	〃　〃	17.2		(4.2)	口縁部外面 ヨコナデ 体部外面 細いハケメ 体部内面 摩滅の為調整不明	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	1mm 以下を含む
33	〃　〃	15.2		(5.3)	口縁部外面 ナデ 体部内面 指頭圧痕	灰褐 7.5YR5/2	にぶい褐 7.5YR5/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
34	〃　〃	11.4		(2.3)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
35	〃　〃	16.0		(5.5)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ 体部内面 指頭圧痕	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm 以下の長石を少量含む
36	〃　〃	14.5		(5.3)	体部外面 ハケメ 体部内面 指頭圧痕 口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 ヨコナデ	にぶい橙 10YR6/4	にぶい橙 10YR6/4	1mm 以下の長石、角閃石を含む
37	〃　〃	13.88		(3.8)	体部外面 指頭圧痕	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	1mm 以下の長石、石英、雲母を含む

第23表－2　田図北地区SD02下層出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	内面	胎土
38	〃　〃	11.0		(3.6)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	浅黄 2.5Y7/3	灰白 2.5Y8/2	1mm 以下の長石を含む
39	〃　〃	14.4		(3.2)	体部内面 ヘラナデ 口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	黄橙 10YR6/4	黄橙 10YR6/4	2mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
40	弥生土器　甕	15.0		(4.05)	口縁端部 凹線一条 口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	2mm 以下の角閃石を長石を含む
41	〃　〃	14.4		(4.6)	体部外面 摩滅の為調整不明 体部内面 ヘラケズリ 指頭圧痕	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
42	〃　〃	17.4		(8.4)	口縁部外面 接合痕 口縁部内面 接合痕 ハケ目 指頭圧痕	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
43	〃　〃	12.0	1.0	14.3	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ 体部外面 板削り 体部内面 板削り	灰白 2.5Y8/2	浅黄橙 7.5YR8/3	3mm 以下の石英、長石を含む
44	〃　〃	14.6		(7.2)	体部外面 タタキ目 ハケ目 体部内面 ヘラケズリ	灰黄 2.5Y7/2	灰白 2.5Y8/2	2mm 以下の石英、長石を含む
45	〃　〃	10.2		(5.0)	体部外面 ハケメ 体部内面 接合痕 体部外面 ナデ 体部内面 ナデ	灰黄 2.5Y6/2	灰白 2.5Y7/1	1～3mm 以下の石英、長石を含む
46	〃　〃	17.0		(3.7)	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	1mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
47	〃　〃	12.0		(13.0)	体部外面 ハケメ タタキ目 体部内面 指頭圧痕 ヘラケズリのちヘラミガキ 口縁部外面ナデ 口縁部内面 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	2mm 以下の長石、石英を含む
48	弥生土器　底部		5.0	(2.9)	底部外面 摩滅の為調整不明 底部内面 摩滅の為調整不明	にぶい赤褐 5YR4/3	にぶい黄褐 10YR5/4	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
49	〃　〃		5.6	(4.4)	底部内面 ヘラケズリ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい褐 7.5YR5/4	2mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
50	〃　〃		3.6	(5.0)	底部外面 板ナデ 底部内面 ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙	1mm 以下の石英、角閃石を含む
51	〃　〃		7.6	(4.0)	底部外面 板ナデ 底部内面 ヘラケズリ	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	3mm 以下の長石、石英、角
52	〃　〃		4.6	(2.1)	底部内面 摩滅の為調整不明	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	1～3mm の長石、石英を含む
53	〃　〃		9.2	(5.2)	底部外面 摩滅の為調整不明	灰白 2.5YR8/1	灰白 7.5YR8/2	1～3mm の長石、石英を多量に含む
54	〃　〃		4.7	(2.5)	底部外面 ヘラケズリ、ナデ 底部内面 ナデ 底部底面 ヘラミガキ	黒 7.5YR1.7/1	にぶい褐 7.5YR5/3	1～2mm 以下の石英、長石を含む
55	〃　〃		6.8	(6.3)	底部外面 接合痕 ナデ 底部内面 ヘラケズリ ナデ	灰白 2.5Y8/2	灰 10Y4/1	2mm 以下の長石、石英を含む
56	〃　〃		3.0	(6.8)	底部外面 ハケメ ナデ 底部内面 ハケメ ヘラケズリ	にぶい黄褐 10YR7/2	褐灰 5YR4/1	1mm 以下の長石、石英を含む
57	弥生土器　底部		3.0	(3.4)	底部外面 タタキ 底部内面 ハケメ	浅黄橙 8/3	浅黄橙 8/3	1mm 以下の長石を含む
58	〃　〃		1.6	(4.5)	底部外面 ナデ 底部内面 摩滅の為調整不明	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/4	2mm 以下の長石、角閃石を少量に含む
59	〃　〃			(5.9)	底部外面 タタキ目 底部内面 ハケメ	暗灰黄 2.5Y5/3	にぶい黄橙 10YR6/3	4mm 以下の長石、石英含む
60	〃　〃		5.3	(6.9)	底部外面 ナデ 底部内面 指頭圧痕	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	1～5mm 以下の石英、長石を多量に含む
61	〃　〃		8.0	(11.8)	底部外面 あらいハケ目 ヘラケズリ 底部内面 ハケメ ヘラケズリ ナデ	灰黄褐 10YR6/2	にぶい褐 7.5YT5/4	3mm 以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む
62	弥生土器　鉢	11.5	2.5	5.8	底部外面 摩滅の為調整不明 口縁～体部内面 ヨコハケメ	灰白 2.5Y8/2 灰白	浅黄 2.5Y7/3	1mm 以下の石英、長石を含む
63	〃　〃	12.7	3.7	5.8	体部外面 板削り ナデ 口縁部内面 指頭圧痕 ナデ	灰白 10YR8/1	浅黄橙 10YR8/3	2mm 以下の石英、長石を少量含む
64	〃　〃	15.8	4.2	7.95	底部外面 ヘラケズリ 指頭圧痕 口縁～体部内面 ハケメ ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい褐 10YR7/2	4mm 以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む
65	〃　〃		20.8	(9.8)	体部外面 タタキ 口縁～体部内面 ハケメ	灰黄 2.5Y7/2	にぶい黄橙 10YR6/3	1～3mm の石英、長石を含む
66	〃　〃	29.4		8.3	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ 接合痕 体部内面 ハケメ	灰白 2.5Y8/2	灰白 10YR8/2	密
67	〃　〃	27.8		6.7	口縁部外面 ナデ 口縁～体部外面 タタキ 口縁部内面 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	灰白 5Y8/1	1～3mm の長石、石英を含む
68	〃　〃	37.4		7.1	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2	4mm 以下の長石、石英、角閃石を含む
69	〃　〃	19.6		6.8	口縁～体部外面 ヘラケズリ 口縁部内面 ナデ	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR6/3	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
70	弥生土器　高杯	24.2		5.3	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	1mm 以下の長石、石英を含む
71	〃　〃	20.6		4.0	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	灰白 10YR7/1	灰黄褐 10YR6/2	1～2mm 以下の長石、石英を含む
72	〃　〃	20.8		4.3	口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	褐灰 10YR4/1	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
73	〃　〃	20.8		5.4	口縁部外面 摩滅の為調整不明 口縁部内面 ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3	1mm 以下の長石、石英、角閃石を含む
74	〃　〃	14.6		4.15	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	3mm 以下の長石、角閃石を含む

第23表-3　田図北地区SD02下層出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土
75	弥生土器　高杯	24.8		4.7	杯部外面 ヘラミガキ ヘラケズリ 杯部内面 ハケメ ヘラミガキ	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4	4mm 以下の石英、長石、角閃石、雲母を含む
76	〃　〃	29.4		5.8	口縁部外面 ヨコナデ 口縁部内面 ヨコナデ 体部外面 摩滅の為調整不明	にぶい黄褐 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR6/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
77	〃　〃			7.0	杯部外面 ヘラ削り後ヘラミガキ 杯部内面 ヘラミガキ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい褐 7.5YR6/3	1mm 以下の長石、角閃石を含む
78	〃　〃	37.4		4.4	口縁部外面 ナデ 口縁部内面 ヘラミガキ 口縁部外面 竹管文 杯部外面 刻目文	にぶい褐 7.5YR6/3	褐白 10YR4/1	2mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
79	〃　〃	40.2		(6.8)	口縁部外面 摩滅の為調整不明 口縁部内面 摩滅の為調整不明	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
80	〃　〃			(2.8)	外面 ヘラケズリ ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	1mm 以下の石英、長石を含む
81	〃　〃			(6.3)	杯部外面 分割ヘラミガキ 背部内面 ヘラミガキ ハケメ 脚部内面 ヘラケズリ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4	1mm 以下の長石、角閃石を含む
82	〃　〃			(3.7)	背部外面 ナデ 背部内面 ナデ 背部外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 背部内面 ヘラミガキ	にぶい褐 7.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4	2mm 以下の長石、石英、角閃石を含む
83	〃　〃			(8.0)	口縁部内面 ナデ 脚部外面 ハケメ 指頭圧痕 杯部内面 ケズリ	灰白 2.5Y8/2	灰白 10YR8/1	1mm 以下の石英、長石を含む
84	〃　〃			(5.8)	杯部外面 ナデ 杯部内面 ナデ 杯部外面 ﾍﾗﾐｶﾞｷ 杯部内面 ﾍﾗﾐｶﾞｷ 脚部内面 ケズリ	にぶい黄褐 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	5mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含む
85	〃　〃			(5.2)	脚部外面 ナデ 脚部内面 ナデ 脚部外面 ハケメ 脚部内面 ナデ 脚部円孔 4個	灰白 7.5YR8/2	灰白 7.5YR8/2	1～2mm 以下の長石、石英を含む
86	〃　〃			(12.3)	脚部外面 ナデ 脚部内面 ナデ 脚部外面 ヘラミガキ 脚部内面 シボリ目 指ナデ 脚部円孔 3個	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	石英、長石、角閃石の微砂を少量含む
87	〃　〃	21.2		(9.4)	脚部外面 ナデ 脚部内面 ナデ 脚部外面 ヘラミガキ 脚部内面 ヘラケズリ 脚部円孔 1個残存	浅黄 2.5Y7/3	にぶい黄 2.5Y6/3	3mm 以下の長石、石英、角閃石、雲母を含む
88	〃　〃			(7.2)	脚部外面 摩滅の為調整不明 脚部内面 ナデ シボリ目 脚部円孔 4孔	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい橙 5YR6/4	1mm 以下の長石、角閃石を含む
89	〃　〃	14.0		(4.8)	脚部外面 摩滅の為調整不明 脚部内面 摩滅の為調整不明 脚部円孔 5孔	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR7/4	1mm 以下の石英、長石を少量含む
90	〃　〃			(6.5)	脚部外面 ハケメ 脚部内面 ハケメ	灰白 10YR8/2	灰白 10YR8/2	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
91	〃　製塩土器		2.6	(1.5)		にぶい橙 5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	1mm 以下の石英、長石を含む
92	〃　〃		2.4	(2.9)	脚部外面 ヘラケズリ 脚部内面 指頭圧痕	にぶい橙 5YR6/3	にぶい橙 7.5YR7/3	3mm 以下の長石、角閃石、雲母を含む
93	〃　〃		3.2	(4.0)	脚部外面 板ナデ 脚部内面 摩滅の為調整不明	灰黄褐 10YR6/2	灰黄褐 10YR6/2	1mm 以下の石英、長石、角閃石を含む
94	〃　〃		3.4	(2.8)	脚部外面 ナデ 脚部内面 ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	黒褐 5YR2/1	5mm 以下の石英、長石を多く含む
95	〃　〃		3.8	(3.0)	脚部外面 ヘラケズリ 脚部内面 ナデ	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい橙 7.5YR5/3	6mm 以下の石英、長石、雲母を含む
96	〃　〃		6.4	(3.7)	脚部外面 指頭圧痕 脚部内面 摩滅の為調整不明	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	1mm 以下の長石、石英を含む



第85図　田図北地区SD02周辺表採・SR01出土遺物実測図

第24表　田図北地区SD02周辺表採・SR01出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調 外面	色調 内面	胎土
1	須恵器　蓋	13.8		(3.6)	外面 回転 ヘラケズリ ナデ 内面 ナデ	灰 N61	灰白 N71	密
2	〃　〃	15.0		(4.6)	外面 回転 ヘラケズリ ナデ 内面 ナデ	灰 N61	灰白 N71	密
3	弥生土器　高杯			(8.4)	脚部外面 摩滅のため調整不明 約部内面 摩滅のため調整不明 脚部円孔 1個	にぶい橙 5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/3	密
4	耐火レンガ	長さ 17.0	幅 11.1	厚さ 6.3	耐火加藤合資会社 印あり 角礫 凝灰岩 〒			

第４節　　調査のまとめ

第2次弘福寺領田図調査事業では，田図南地区比定地および山田香川郡界線推定地，古代南海道推定地，田図北地区比定地の3ヶ所が発掘調査の対象地となったが，南海道推定地で道路敷の痕跡を確認できたほかは田図の比定地を考古学的に直接に証明する資料は得られなかった。

田図南地区比定地周辺では，終戦直前の陸軍飛行場の接収造成と戦後の民間払い下げによる区画整理で，高松平野に広く認められる条里地割とは別編成の土地区画が施行されている。このために本来であれば現用の道路や用水路下に重複して発掘調査が叶わないような条里遺構についても確認することができ，これら遺構，特に溝状遺構の多くは近世以降の順道絵図，古地籍図の記載との対照が可能で，現地表の条里地割は少なくとも近世までは遡れることが確認できた。しかし一方で，陸軍飛行場接収を契機とする一連の土地造成によって削平または攪乱を受けた遺構も少なからずあったもようで，当該調査地点の多くでは古代から中世の遺構（遺構面）がほとんど欠落しており，Ｂ地点の石組み井戸（14世紀），Ｅ地点の水田層（遺物の包含はないがおそらくは古代末から中世）が見られるにすぎない。一方，南地区周辺部の開発前調査の遺跡に目を転じてみると，中世については宮西・一角遺跡の条里方向の溝状遺構3条，土壙墓1基，空港跡地遺跡で方格地割の館跡および集落跡等がまとまってみられるものの，古代では空港跡地遺跡の9世紀頃の出水状遺構と出水状遺構を起点とするものほか数条の条里方向の溝状遺構，宮西・一角遺跡の古代水田層（一部に畦畔状の盛り上がりを確認）が確認されているのみにとどまる。これは，本来の西高東低の地勢が昭和19年の陸軍飛行場造成によって切り盛りされたことによって高位の西半部に特段の削平がおよんだためと考えられ，ある意味では当該区域の考古学調査の限界を示しているものともいえる。しかしながら，関連遺構の直接的な確認にいたらなかった反面，発掘調査で得られた旧地形や土地利用の情報を弘福寺領田図はじめ現存の古地図等とも対照させながら弘福寺領比定の妥当性を検討することは可能であろうと考えられる。

田図南地区比定地付近の地形を見ると，戦前に池台池が存在していた９条４里36坪，８条９里31・32坪付近では空港跡地遺跡の調査等から，ほぼ旧池台池の南縁に沿って北西流する旧河道が確認されており，この河道は現分ヶ池の南縁から東縁に沿って北北西へ逃げている（多肥宮尻遺跡）。また，田図東境の8条10里4・9坪でも坪半ばから東側で北東流する旧河道の存在がＡ調査区の調査によって知られており，おそらくはこの河道の支流が8条10里4坪の北東隅付近で東へ分岐して一角遺跡に延びてゆくと考えられる。さらに，南地区比定地の北西部では平井出水から下池へ延びる谷地形が微高地を隔していることから，弘福寺領田図南地区比定地は南・西・東の三方を旧河道で遮られた微高地上に立地していることになる。南地区比定地内の微高地のピークは，Ａ調査区第1トレンチからＢ調査区付近と考えられる。これは，現耕作土下に現代の客土層を介して直に砂礫層をベースとした弥生時代の遺構面が広がっていることから，終戦前後の造成によって最も削平を受けた地点として推定したものである。一方，8条10里4・9坪を縦断する旧河道は，一角遺跡方向へ分岐する支流の方向性などから，弘福寺領讃岐国山田郡田図8条10里4坪に表現された「壟」の西側から北側へ回り込んで流下しているものと考えられるため，Ａ調査区第1トレンチからＢ調査区の場所は，旧河道を挟んで「壟」と対峙する位置関係にあることが推測され，旧河道の両岸に自然堤防状の砂礫堆が位置するような地形環境が想像される。このことは，積極的な論拠とはいえないまでも現時点での山田郡田図の位置比定に大きな矛盾がないことを示しているといえる。今後当該地区の調査に関しては，開発等の事前調査としてできるだけ多くの調査データを蓄積するとともに，現在整理が進められている関連遺跡調査報告書の作成作業等の動向も見据えながら地形環境や土地利用の変遷により詳細な検討を加えていく必要があるものと考えられる。

古代南海道推定地の発掘調査においては,復原条里地割から推定される南海道の想定路線上に調査区を設定し,砂岩塊石を心材とした5層の砂層堆積とそれに包含される遺物細片を確認したものである。このことは,南海道そのものの存在と位置推定を証明した意義はさることながら,南海道が郡界線とともに高松平野の条里地割の縦横の基線となっていることから,条里地割そのものが古代以来大きな設計変更なしに現代にまで受け継がれてきた可能性が高いことを示したものであるといえる。

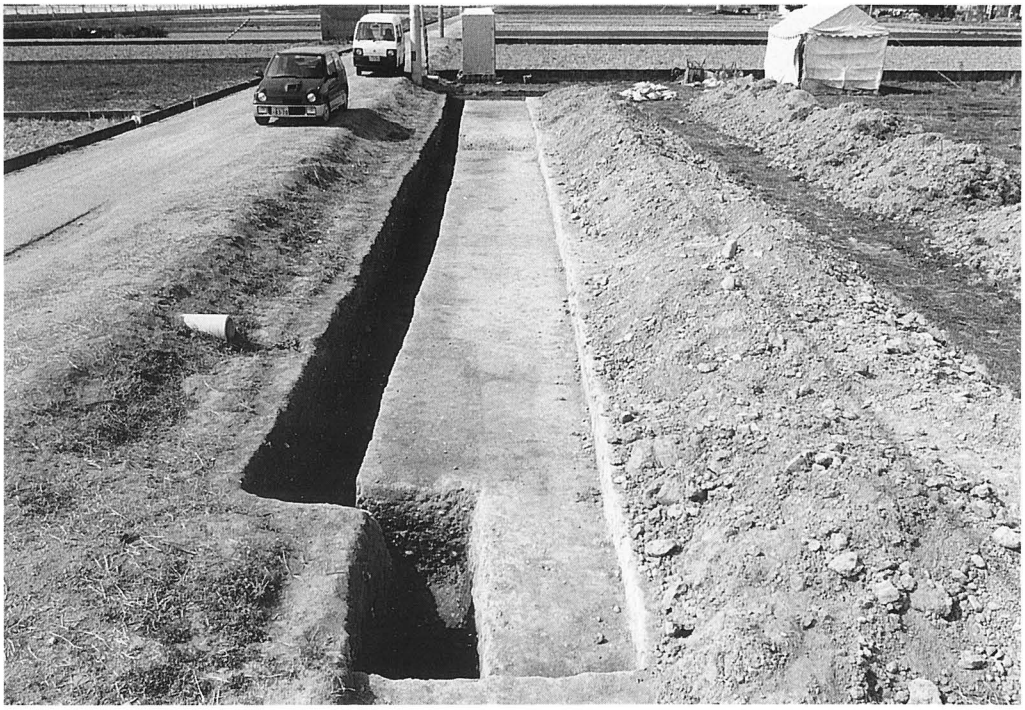
近年全国的に増加しつつある古代官道の確認例としては,直線道路で幅員6～13mの路面の両側に素堀の側溝を伴い,路床は土質の状況に応じて土壌の抜き換えや敷き込みを行っているというのが典型的な形態であるとされる。これらと比較すれば今回の発掘例は側溝の存在も不明瞭で決して道路遺構として一目瞭然とは言えないが,復原条里地割上での推定と計3ヶ所の調査結果を総合して考えるとわずかながらこの付近の南海道の状況が浮かび上がってくる。

第1・第2トレンチでは,小作川西岸の段差1mほどの段丘を検出幅6mで断面逆台形状に切り通した痕跡が確認できた。道路路線に直交した幅3mほどのトレンチ調査であったため推定の部分も多いものの,崖面の段差を斜路に切り通した遺構と判断した。一方,第3調査区において推定した道路遺構は,調査区の南端に遺構の一部が現存幅3mで検出されているが,第1・第2トレンチの遺構から推定される南海道の中軸線は第3調査区の南辺にほぼ相当するものと思われる。このことから,第1・第2トレンチの遺構の西延長が次第に微高地上に乗り上げてゆく一方で周辺微高地上に後世の削平が及んだ結果,最終的に路側の段差が不明瞭な道路遺構が残存したものと思われ,これらのことから3ヶ所の調査区を結ぶ幅員6mの道路敷が復原できる。路床の認定は踏み固めによる硬化面や足跡,轍跡等の痕跡が見られずその意味では推定によるほかないが,いずれも地山層の上面を路床として想定した。第1・第2トレンチでは地山風化花崗岩層,第3調査区ではにぶい黄橙色粘土層であるが,後者の粘土層の窪みに堆積した(または充填された)塊石と砂層は土砂自体が周辺の土壌堆積から洪水等によって自然に供給されるべきものではなく,石の配置等にも人為的様相がうかがえるため土壌改良または路面補修等によって外部から人為的に供給されたものと考えられ,堆積砂層中からの須恵器細片等の出土もその裏付けとなると思われる。ＳＸ01の北側に隣接するＳＸ02は,埋土がＳＸ01下層の黄褐色砂混じりシルト層と一致していることからＳＸ01とともに道路敷を形成するとも考えたが,調査区南辺を対称線として折り返した場合推定幅員が18mにもなることから適当ではないと思われる。いずれにせよ道路側溝に該当する直線溝が存在しないために道路範囲の確定が困難となっている。道路側溝不在の理由としては後世の削平による消滅も考えられるが,それよりもむしろ当該箇所が河岸段丘の高低差を相殺する斜面状の路面構造であったために,排水を目的とする側溝の付設を必要としなかった事情によるのではなかろうか。それであれば,路面を形成する風化花崗岩質の地山は洪水浸食にはきわめてもろい土質であることから,大雨等の後にはかなりの規模の路面流出の事態が想像され,これに伴う路面の補修も相当規模に及んだことは十分に考えられる。

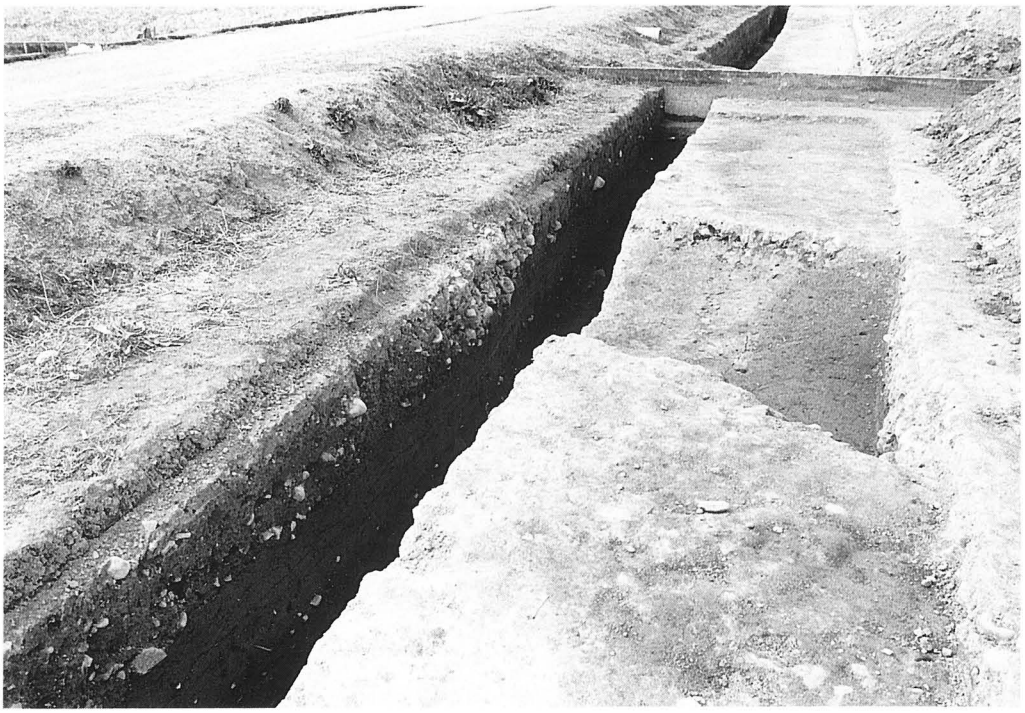
第2次弘福寺領田図調査事業において垣間見ることができた南海道の遺構は,高松平野南部を高い計画性をもって横断した古代南海道の全体像と比べるとごく一部の確認にとどまりはしたものの,高松平野の条里プランの確定作業の上では大きな契機となった成果と考えられる。今後とも,弘福寺領田図比定地同様,当該遺構が展開してゆく区域を念頭におきながら,調査データの蓄積につとめることで高松平野の土地開発との関わりがより詳細に検討されてゆくものとなろう。

写 真 図 版

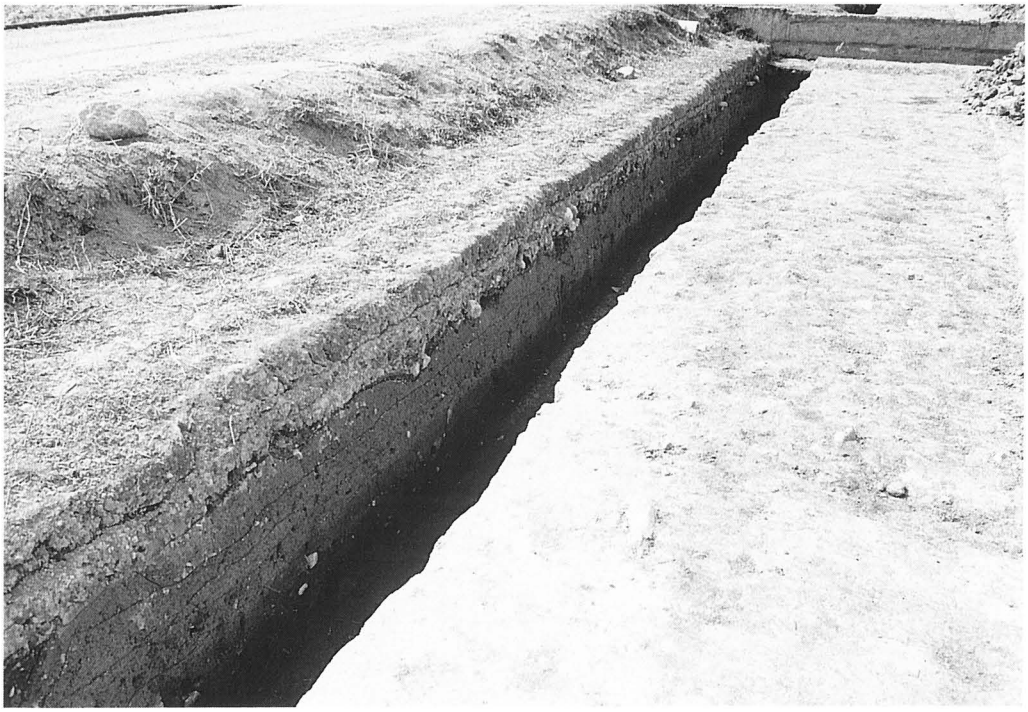
図版1



1　田図南地区A調査区第1トレンチ全景



2　田図南地区A調査区第2トレンチ全景



1　田図南地区A調査区第3トレンチ全景

2　田図南地区A調査区第4トレンチ全景

図版3

1　田図南地区A調査区第5トレンチ全景

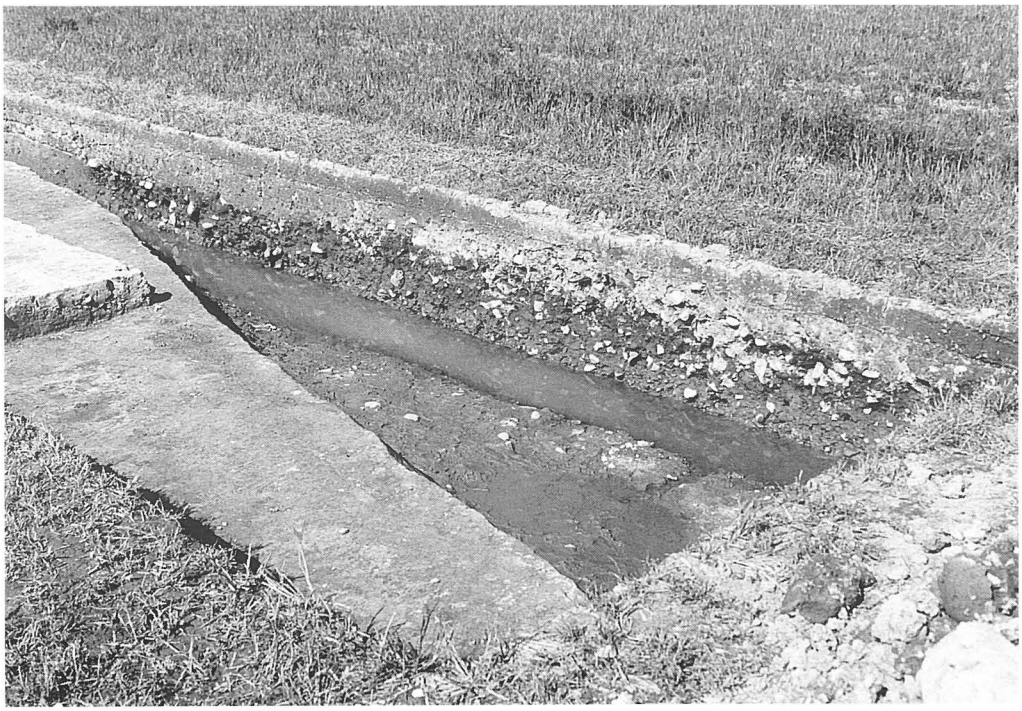
2　田図南地区A調査区第3トレンチ SD05 及び松根株列

1　田図南地区A調査区第5トレンチ段差状遺構

2　田図南地区C調査区全景

図版5

1　田図南地区C調査区 SD05・06・SE01 全景



2　田図南地区C調査区 SD05 完掘及び土層状況

1　田図南地区B調査区調査前全景（北西より）

2　田図南地区B調査区西区画北壁土層

図版7

1　田図南地区B調査区東区画北壁土層

2　田図南地区B調査区西区画南壁土層